
僕、バナナで転生

ナカモト工事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕、バナナで転生

【Nコード】

N1781S

【作者名】

ナカモト工事

【あらすじ】

こんにちは、僕の名前は仲良金魚なかよしぎんぎょと申します。小さい頃から異世界モノのお話が大好きだった僕が最近乱立する異世界テンプレ話にお腹いっぱいになってきた頃、現れたのは僕をオカズにバナナを貪る変態な美形の男でした。これは、僕の僕による僕の為のほんのり皮肉をおり交ぜた異世界テンプレ物語。どこかで見たような設定を盛り沢山にしております。馬鹿みたいな話のまま終わらせるつもりが何故か途中からシリアス入ってきてしまいました。

1 プレイ目『僕のお尻の穴がエマーゼンシー』

それは学校から帰ってる途中での出来事でした。

「もぐもぐ」

道の真ん中で白人の男がこっちを見ながらバナナを食べていました。

「もぐもぐ」

僕の顔をオカズにしてバナナを食べているような感じがします。

ここはバナナを見ながら「すごく…大きいです…」と言ってあげるべきでしょうか。

しかし、そんな事よりもお昼から歯にはさまったままのささ身が気になるので素通りする事にしました。お尻を手でガードしながら

「仲良金魚君」
なかよしきんぎょ

ギョっとなりました。見知らぬ男。しかも金髪碧眼のイケメンが何故僕の名前を知っているのでしょうか。ストーリーカーさんでしょうか。いよいよ僕のお尻の穴がエマーゼンシーです。

「キミが言いたい事は分かります。何故こんな所にいるのか、自分は死んだはずじゃないのか、とね…それはね、私の手違いでキミを殺してしまったので、キミを魔法世界に転生させてあげよう…」

「人違いです。僕は生きています」

「あつ、そうですね。それはすいません」

「いいえ、お気になさらず」

では、と去って行く僕の後ろでは男が「あれ？でも金魚君だよね？あれ？おかしいな…」とぶつぶつ言っています。それよりも僕は早く家に帰ってつま楊枝を手にしたのです。

迂闊でした。その時の僕は焦るあまり視野が狭くなっていたようです。男が放ったバナナの皮が辺り一面に広がっているとは気付かなかったのです。

勿論、僕は踏みました。バナナの皮を。そして僕はバナナの皮のオーシャンへとダイブしたのです。

仲良金魚。享年十七歳。死因、バナナの皮に埋もれて窒息死。

気づいた時、僕は真っ白な空間にいました。

「キミが言いたい事は分かります。何故こんな所にいるのか、自分は死んだはずじゃないのか、とね…それはね、私の手違いでキミを殺してしまったので、お詫びにキミを魔法世界に転生させてあげよう…」

何やら先ほど聞いた台詞と全く同じものが聞こえてきました。気のせいでしょうか。気のせいじゃありませんでした。

僕の目の前に、先ほどのイケメンがいます。しかも、白い羽根がついています。

「あなたは天使だったのですか」

「いいえ、私は神です」

ふむふむ、僕は神様の手違い（？）で死んでしまったようです。とりあえず、羽根をむしつときますか。

「ひー、何をするのですかー」

「それはですね、いわゆるテンプレ実行ってやつです」

「それなら仕方ありません。では、転生の準備をしましょう。キミはどんな能力を望みますか？」

「では、神様と同じスペックを望みます」

「なんと強欲なんでしょう。それもテンプレというやつですか？」

「はい、そうです。神様スペック、もしくはとりあえず最強って感じの能力をいただいて、更に美形にしてもらって、ハーレムをつくるのです。その際、主人公はわざとらしい程鈍感で、ハーレムを作ってるとは思っていないので、僕も例に漏れず鈍感を装おうと思います」

「ふむ、キミは破壊神にならないと思うので、まあいいでしょう。そのテンプレでいきましょう」

神様が手に持っていた白銀に輝く錫杖を掲げました。僕の体を暖かい光が包みだします。

「それでは、良いテンプレ人生を」

錫杖に付いていた鈴がリンッと鳴ったと同時に僕の意識はそこから旅立ちました。

第二の人生の舞台、魔法世界センダミツツオへ………

2 プレイ目『僕、誕生』

「おんぎゃー」

僕は泣いてみました。何故なら、それが生まれたての赤ん坊の仕事だと思ったからです。おや、出産に立ち会った方々が複雑そうな顔をしていますね。そんなに僕の泣く演技は下手だったのでしょうか。そうですね、赤ん坊プレイなんて初めての事ですから、泣き声が棒読みになってしまった事は否定しません。これからはプロの仕事ができるように精進します。それよりも…

「おい、そこな女。早う我を湯に入れぬか」

僕を抱いている助産婦さんがビクッとしました。それもそうでしょう。生まれたての赤ん坊がいきなり目を見開いて威圧してくるのですから。ふふふ、一度こういうプレイを試してみたかったです。それよりも早く産湯に入れて欲しいものです。なにせ生まれたてですから色々な液にまみれて気持ち悪いのです。

湯で綺麗になった後、震える助産婦さんの手からぐったりとしている女の人の腕へと移動しました。どうやら今世の我が母のようです。銀色の髪の毛のそれはお美しい女性です。こんな人にこれからオムツを替えてもらったり、お風呂入れてもらったり、母乳を飲ませてもらったりしてもらおうと思うと男冥利に尽きると言うものです。

「あなたの名前はワピコよ。よろしくね私の可愛い娘」

…………… あーはん？娘？

「何やら爆弾発言を聞いた気がしますますが気のせいでしょうか…」

「本当、お可愛らしいお嬢様ですわ」

「ええ、ええ、このお美しい銀色の髪もお母様譲りで、きっとお美しいお嬢様になられますわ」

出産に立ち会っていた方々がよってたかつて僕を可愛い、可愛い、『お嬢様』ともて囃しています……

僕は震える手をこつそりデリケートゾーンに持っていくと、そこにはあると思っていたはずのジヨニーがいませんでした。

なんという事でしょう。これでは右手（恋人）と左手（愛人）がジヨニーを取り合って、結果三人（？）で乱れた行為をするというお気に入り妄想プレイができないではないですか。

これは僕にとっては死活問題です。さすがの僕も心頭滅却すれば火もまた涼しという訳にはいきません。神様スペックを持ってして神様を呪うという事はできるのでしょうか。

『できませんが、それはやめてください』

神様の声が頭に直接響いてくるように聞こえてきました。

おい、このビッチ野郎、これはどういう事だ？事と次第によつちやあ、俺はお前のケツを掘るぜ。

『お願いですからそれだけは勘弁してください。大丈夫です。一度に二度美味しい両生具有にただけですから。慣れれば、ジヨニーの出し入れも簡単にできるようになります』

それなら安心しました。最近、血と涙を流しながらやっと皮が剥けた新生ジヨニーを失うという事は、即ち僕の存在意義を失うとい

う事です。

安心したと同時に未知なる世界に期待も膨らみます。なにせ女性のほうが男性よりも数倍快楽を感じられると聞きました。百合の世界にも興味があったのです。今後のめくるめく世界を想像したら何やら色々ともみなぎってくる思いです。

僕、誕生から一週間ほど経ちました。未だに父という存在を確認できていません。父は有名な鍛冶屋らしく、隣の国へ国交の為に父の持つ鍛冶技術を少しだけ教えに行っているそうです。

という訳で今母は僕が一人じめって訳で、母乳がとても美味しいです。いや、現実的な事を言えばけして味が美味しいという訳ではありません。しかし！しかし！！夢にまで見た桃源郷が目の前にあって、あまつさえ吸いつけるのです！！これを美味しいと言わずになんと言えましよう！！嗚呼、感無量…

「俺、帰宅！！」

ガチムチ男が侵入してきました。この至福の時を邪魔するなんて無粋なガチムチですね。

「ああ！！俺の乳が奪われている！！何だ誰だ俺の乳を奪う奴は！？名を名乗れ！！」

母が指をパチンと鳴らしました。するとトゲトゲがついた鳶がガチムチを拘束しました。とても痛そうです。

「この脳筋が何を仰ってるのかしら？あなたの娘に決まっているでしょう？」

聖母のような微笑みでガチムチを縛る母。特に怒った様子も無い事から、罰ではなく日常の「コマだと思われれます。なんという女王様。僕の潜在ジヨニーが反応してしまいそうです。

それよりもこのガチムチが僕の父ですか…ニメートルあるのではないだろうかと思われる背にモリモリとついた筋肉…まさにビースト。僕にビーストの遺伝子が混ざってしまいました。あまり筋トレはしないでおきましょう。

「はふうん…ひと月ぶりのリリーの茨にエクスタシ…イン…」

父はM男のようです。なんておぞましいのでしょうか。

「それよりもソレが俺の娘だと？おかしいな。俺の第六感が男だと言っていたのだが」

なんとという野生の勘。さすがビースト…侮れませんか…

「ふふ、こんな可愛らしい子が男ですって？こっちに来てよくご覧になって」

茨をブチブチと引きちぎってのしのと歩み寄ってくるビースト。僕の背筋が冷やりとしました。マズいですね。このビーストには僕には理解できないような動物的本能が備わっているようですから、下手をすると僕の正体がバレてしまうかもしれません。

いいでしょう。その勝負受けて立ちます。この一週間で培った僕の演技の前に跪かせてやりましょう！

近づくビースト。

僕を差し出す母。

ビーストの腕の中へ渡される僕。
今だ！！

「あー」

今の僕はまさしく天使の笑みをしている事でしょう。ついでにキヤッキヤツと言いながらビーストの顔を丸々とした小さな手でぺちぺちしてみます。

……………？なぜでしょう？なぜビーストは白目をむいているのです
ようか？

「あら、この人ったらワピコあまりにも可愛さに気絶しちゃってるわ。ふふふ」

なんと、立ちながら気絶とは器用な人ですね。まあ、いいです。
この勝負は僕の勝ちです。

2プレイ目『僕、誕生』（後書き）

ワピコとは、某少女雑誌に連載されていた漫画からいただきました。
気になる方はググってみてください。金魚 意報ってやつです。

3 プレイ目 『僕は風船です』

「魔力量………0だと………?」

両親が複雑そうな顔で僕の顔を見ています。

今日は生後三ヶ月目に行われる魔力測定の日で、お役所に家族でおでかけしています。そして行われた魔力測定。僕には魔力が無いらしいです。

これは、落ちこぼれから世界を救う程までに最強になるという設定でしょうか。しかし、捨てられるパターンは嫌ですね。まあ、異世界転生モノは周囲の人間に溺愛されるのが常ですから大丈夫でしょう。

「じゃあ、どうしてこの子飛んでるのかしら……?」

それは僕がタボ君だからですお母さん。嘘です。これは魔力で飛んでいるのではなく、神力で飛んでいるのです。だって僕、神様スペックですから。

そう、今僕はDrがスランプしている漫画に出てくるエスパー赤ちゃんのごとく宙を浮いています。だって、生まれたてって筋肉が未発達で立つ事すらままならないんです。そりゃあ、飛んで移動するしかないでしょう。

しかし、両親をこんなに困惑させる事になるなんて、少し悪い事しましたね。

「まあ、いい！魔力が無くともこの愛らしさで小悪魔力は世界一だろうからな！王子様だろうが、竜王だろうが、魔王だろうが、イチコロだろうー!」

うむ、否定はしません。だって僕心は男ですから、男がどうすれば悦ぶとか知っていますし。ですが、どうせなら女の子のハーレムを作りたいですお父さん。

「そうね、女は度胸と鞭さえあればどうとでもなるし、今日はこれから予定通りお買い物を楽しみましょう」

あはは、うふふ、きゃっきゃつ、と僕達はお役所を後にしたのでした。

リードフ王国の王都ブータカギ。それが僕達家族が住んでいる所です。道行く人々の服装は中世ヨーロッパに近代ファッションが入り交じったような感じ。

機械科学は発展していないようですが、魔法科学はとても発展しているようで、生活水準は二十一世紀の地球より二、三歩程進んでいるようです。

空飛ぶ車（のような乗り物）は当たり前。公共のどこでもドア（と言っても行き先は指定固定 有料）もあり、街頭巨大広告は立体投影機で僕達の頭上で話題の歌姫がくるくと歌い踊っています。

すっげー！魔法世界すっげー！！と興奮して飛び回った結果、今僕はお母さんに紐をお腹に巻きつけられ風船のように浮いています。贅沢を言うならば、もっと亀の甲のようによくくい縛って欲しいです。

「あら、リレイさんじゃありませんか」

お母さんの名前を呼んだのは、冷たい感じの金髪美女でした。ほほう、これまた鞭が似合いそうな人です。胸元がレースになって透

金髪美女は訝しげにしています。お気持ちお察しいたします。

「そういえば、ピカルツ夫人もうちの娘が生まれるひと月前にご出産なされましたよね？魔力はどれ程おありでしたの？五大貴族の一つ、光のご嫡男ですものね、それは巨大な魔力を…」

「申し訳ございません、わたくし急いでおりますの。そろそろ失礼いたしますわ」

不自然な切り上げ方をして、金髪美女はそそくさと去って行った。あんなに急ぐとは……きつとお便所でしょう。なんて薄ら寒い冗談は置いといて、きつと彼女の息子さんに何か問題があるのでしよう。

やれやれ、落ちこぼれ 最強のテンプレは奪われそうですね。

それから、僕達能天気一家は何事も無かったのごとくお買い物（主に僕の服。時々両親用の怪しいプレイグッズ）をして帰ったのでした。

4プレイ目『いざ、桃源郷へ』

僕は満一歳になりました。ほんの気持ち程度だけだった髪の毛も、ようやくシヨートカット並になりました。今はお気に入りの小さい天使の羽付きのお洋服を着て、空中散歩中です。

え？赤ちゃん時代の話が長い？知った事ではありません。僕はもつと赤ちゃんでいたいんです。はい、ばーぶー、と言うだけで可愛いと持て囃される今が凄く楽なのです。

だいたい、転生モノのお話はいつも赤ちゃん時代が早く終わり過ぎなんです。もつとオムツを替えられてふきふきされる恥辱プレイや、赤ちゃんという立場を利用した覗きシーンとかが見たいのです。

という訳で、今僕は一人で公共浴場へと向かっています。え？両親が心配しなかったって？大丈夫です。いくら言っても聞かないし、いつも必ず陽の暮れる前に帰っていますから、今はもう諦めて僕を放牧してくれています。

さあ！着きました！魔法世界のスーパー銭湯です！！はああん、ドキドキわくわくムラムラします！！いざ行かん！桃源郷へ！！

「あら？おじょうちゃん、一人？」

「あい！！」

フロントで僕が自動券売機で買った子供入浴券一枚を差し出すと、フロントのお姉さんが困ったように言いました。

「それはちよつと…ごめんなさいね…今度はお母さんかお父さんと一緒に来て？」

問題発生です。一歳児は一人で入ってはいけないと言っているのですか。なんとという差別でしょう。せつかくこの日の為にアヒル隊長入浴セツトも購入したというのに。人生に絶望しました。

僕が人生をどうやって終わらせようか考えていると、僕に声をかけてくるがなり声が聞こえました。

「こりゃ可愛い嬢ちゃんだな！おっちゃんと一緒に入るか!？」

アッパー、ボディブロー、トドメの右回し蹴り。

沈む脂ぎった小汚いおっさん。

「はい、ばーぶー（戯れ言を。我はうぬが指一本触れて良い存在では無いわ！この豚が!）」

何故わざわざ男湯に小汚いモノを見に行かなければいけないのでしょうか。うっかり霸王口調になってしまったではありませんか。

霸王口調と言っても、まだ歯が生え揃っていないので上手く喋れません。生まれたての時は気合で喋りました。

ピクピクしているおっさん。一歳児がおっさんを沈めたという現実を受け入れられず固まっている民衆。やりすぎたでしょうか?…

……僕、悪くないもん。

「おいたが過ぎますね。キンギョ君?」

おっと、その名前を呼ばれるのは一年ぶりですね。僕の正体を知っているのは何者でしょうか。

見上げるとそこには、程よい大きさのおっはい、引き締まったくびれから流れる魅惑的な腰のライン、白く透き通ったしなやかな手足、太陽の輝きのような黄金の髪が腰まで流れて、そして……

神様の顔をした女の人がありました。

僕の複雑そうな顔を見て、神様と同じ顔の人は僕の耳元で囁きま
す。

「キミが両生具有で、私がそうではないっていう話も可笑しい話で
しょう?。」

つまりはそういう事だ、と言う感じでにっこりと微笑む神様（女
ばーじょん）。そうですね。僕のスペックは元々あなたのモノです
ものね。ただ、体つきまで変わると思ってたので少しビツク
リしたのと、僕のトキメキを返して下さいとだけ言っておきましょ
う。

「この子は私と一緒に入ります。それでいいでしょう?。」

神様がフロントのお姉さんにニッコリ微笑むと、お姉さんは神様
の美貌にほうっとなって「はい……」と小さく頷きました。

……………!?!おお!!神よ!!

素晴らしい!今なら本当に神様って凄いと思えます!

さあ今度こそ!!神様をお供に女体パラダイスへ行ってきました!!

「あー……(……………神様、これは悪夢でしょうか……)」

「いいえ、これは現実です」

アヒル隊長が、かーん、と音をたてて転げ落ちました。その音
さえも僕を嘲笑っているかのように聞こえます。

今、目の前にある現実。

浴場の中心には滝のごとく流れ落ちる薔薇色のお湯。魔法科学を駆使して浴場の至る所に咲き誇る枯れない花。花の甘い香りと、石鹸の良い匂いが混じって、浴場だけ見ればまさに楽園。しかし、その楽園を占領しているのは天女ではなく、魑魅魍魎でした。

花の頃をとつくにすぎた元・乙女達。

つまりは、おばさま、おばあさま達でございました。

右を向けば、たぶたぶと揺れる腹肉。左を向けば、だるんだるんと垂れ下がった胸とお尻。あつちを見ても、こつちを見ても、シミ、シワだらけの肌。

おお……………神よ……………

「はい、なんでしょう?」

「ああ、ばーぶー?」ああ、そういえば神様はここにいました。呪っていいですか?」

「いいですかと聞かれれば、ダメですと答えるしかありません」

「あい。ばぶばぶ…」(そうですか。ちなみに神様、何故うら若き乙女がいないのでしょ?」

「平日の昼間などこんなものです。若い方々は皆学校やお仕事に行っていますからね」

目からうるこんぶ長。まさかそんな落とし罠があったとは。それではまた晩にでも出直し…いや、さすがに晩の一人歩きは怒られますね。母は公共浴場があまり好きなようではありませんし…

「そんなに悩まなくても、大きくなれば一人で夜歩いてもさして問題ではなくなるでしょう?」

「あー。ぶーぶぶ、『キャツキャツ』ばぶー(分かっていますね。幼児の時にしか味わえないものがあるのですよ。『きゃー、この子可愛いー、こつちおいでー、キャツキャ、キャツキャ』と言われながら裸体で抱っこされるのが良いのです)」

「ふむ…人間とは複雑な生き物ですね…」

「そうですね。この複雑なジョニー心は自制がきかないから困ったものです。」

むむう、と難しい顔をしている僕を神様が「仕方ないですね」と言いながらヒョイッと抱き上げました。そして一緒に薔薇色のお湯に入り、僕を後ろ向き抱っこしてくれました。後ろ向き抱っことは、僕が神様を背にしている状態です。つまり、神様の女体ばーじよんの胸がちょうど僕の頭に当たっている状態です。

おお、これはなかなか…

「今日は特別ですよ」

これで神様でなければ最高だったのですが…背に腹は変えられません。今日はこれで許しておいてあげましょう。

はあく、極楽、極楽。

「はい、ちゃん(そういえば神様。今日は何しに来たのですか?)」

「ああ、そうそう。すっかり忘れる所でした。これをあげましょう」

神様はそう言って、前振りもなく僕の耳に穴を空けました。痛い
です。

「今付けたピアスは擬似魔力を出してくれるものです。人前で力を使
う時は付けておくように。何故魔力が無いのに力を使えるのか、
となった時、最悪研究所送りの解剖ですからね」

「あー。ばつぶばぶーん（それは怖いです。まあ、簡単に逃げら
れると思いますが、追われる立場と言うのは嫌ですからね。気をつ
けます）」

神様は僕の返事に満足したように頷きました。その際、おっは
いが少し揺れて頭に柔らかい衝撃がきた時は、生まれて良かったと
感動したのは秘密です。

そして、僕と神様は魑魅魍魎蠢く中、湯をたっぷり堪能したので
した。

5 プレイ目『そうだ、死闘をしよう』

今日も今日とて、一人で空中散歩です。

まだまだ赤ちゃん時代引つ張りますよ。文字数にして、後五万字程引つ張るつもりです。しつこいのが僕の前世でのチャームポイントでしたから。

あの日、神様と別れて帰ったら、ピアスを付けた僕を見て「ワピコが不良になった」と父と母は大騒ぎ。それから一週間、大人しく家で幼児プレイをしていたら、二人はピアスの事などすっかり忘れて元に戻りました。切り替えの早い両親で助かります。

という訳で今日は久しぶりの空中散歩です。今日は猫耳付きフリーの上着を着ているので、ボス猫にでも挑戦してぶいぶい言わせましょうか。

猫。猫の集会所と言ったら路地裏でしようか？

そびえ立つビルの隙間を抜けて、路地に入ります。そこはきらびやかな本通りとは違い、ひび割れや汚れを隠そうともしない道と壁新聞や汚い布に寝そべっている垢だらけのポロポロの人間。生ゴミの臭いがそこかしこから僕の鼻に流れてくる、光が遮られた薄暗い場所です。

世界は違えど、都市部の裏側は同じなんですね。繁栄の裏側にはドロドロした汚いものがある。光が強ければ、影もまたその分濃くなる…といった感じでしょうか。

おっ、今僕ちよつといい事言いましたね。僕名言集に記しておきましょう。

さて、猫はどこでしょう？

にゃんにゃーにゃにゃー、と口ずさみながらウロウロしていると、

ビルとビルの合間の少し広い場所に出ました。

おっ、おおー。猫がわんさかいます。僕の予感的中です。おあえつらえ向きにドラム缶に乗っている隻眼の黒猫がきつとボス猫です。そくに違いありません。

少し興奮していると、隻眼の黒猫がゆらり、と動きました。

「にゃ〜ご（おい、ここはお前のような人間が来るような場所じゃないぜ。とつとと帰ってママのおっぱいでも吸っときな）」

凄い威圧感です。たかが猫と思って甘く見すぎていたようです。この黒猫からは、そんじょそらの人間よりも強大な魔力を感じます。

「うにゃ〜お（どつやら、手加減はしなくて良いようですね…勝負です…!）」

「う”にゃっ!う”にゃーお！（小賢しい人間の餓鬼め！痛い目みせてやるわ!）」

そして、僕と黒猫の死闘が始まったのでした。

黒猫がまず先制をとります。鋭い爪が黒猫の体躯の倍まで伸びたかと思つと、瞬時に僕の喉元へ向かってきました。

不意をつかれたので危なかったのですが、マトリックスをして避けました。と言っても、足やら胴やら短いのでブリッジなどでできずに、ぼてん、と転げちゃったのは秘密です。

黒猫の爪が通りすぎた後に、凄まじい風圧と音がやってきます。音より早いとは…やはり侮れませぬ。

「しるにゃ〜ご（俺様の爪を避けるなんざ、なかなかやるな人間）」

黒猫がニヒルに笑いました。僕もお返しにいやらしい笑みをします。

「にゃっにゃにゃ〜（あなたもなかなかやりますね…次は僕の番です！）」

僕は両手を腰の横に持っていつて構えをとり、神力…いや、今は『気』と呼びましょう。気を掌に集中させます。そして、じつちゃんに教わったアノ技を放出です。

かめ め 波 ー ！！

おお、出ちゃいました。さすが僕チート。やってやれない事はなからこそこのチートです。僕の両手から出た怪光線が黒猫めがけて一直線。黒猫は光に呑み込まれ、塵になったのでした。南無。

………おや、どうやらまだ生きています。僕のかめめ波を受けて生きているとは、本当に凄いですね。

何やら魔法障壁で防いだようですが、それに魔力の大半を持っていかれたらしく、千鳥足です。

しかし、それでも最後の力を振り絞って魔力を練り始めました。おお、まだこんなにも魔力が残っていたのですか。人間に負けたまるかという気迫がビンビン伝わってきます。

いいでしょう、その気高き誇りを真正面から受け止めてあげましょう。

さあ！来なさい！！

に”やあ”あ”あ” あああ！！

大きく開いた口から膨大な魔力が噴き出してきました。
それは何も属性が付いていない純粹な魔力。しかし、純粹だからこそ、持ち主の魂を強く反映させて、想いや意思の強さにより純粹で凶悪な暴力になるのです。

これはマズいですね。僕は大丈夫ですが、周りの罪の無い猫達まで巻き添えになってしまいます。

受け止めてあげると言いましたが、すみません、それはできそうになくなりました。

あなたの誇りより、罪無き生命の方が大事なのです。

「うにゃっほにゃにゃにゃー！（全てを赦せ！全能なる光よ！）」

僕の愛らしい小さい手から、神様が持っていたのと同じような白銀に輝く錫杖が現れ、光を放ちました。

それは、辺り一面を埋め尽くし、全ての生けとし生けるものに安らぎを与え、そして力はあるべき場所へ、世界へと還る…

つまり、光が届いた全ての場所で魔力が無効化されるというチート技です。僕、神様スペックですから。

ありったけの魔力を使い果たして、どさり、と倒れこむ黒猫。

「うにゃ〜お？（大丈夫？）」

黒猫を優しく抱き上げ、魔力が早く回復するように体内を調整してあげる僕。

「にゃ…にゃ〜お…（あ、ああ、大丈夫だ…それよりすまないな…ついカツとなっちまって全力を出しすぎた…お前が力を散らしてくれなかったら、手下達が酷い目に合うところだったぜ…感謝する…）」

「うにゃっごるにゃ〜お（気にしないで下さい。僕だって、彼らが傷つくところは見たくありませんから）」

「ふにゃっ（ふふっ可笑しな人間だぜ）」

「にゃにゃん（ふふっあなたこそ）」

僕と黒猫をビルの隙間から差したオレンジ色の光が照らします。柔らかな微笑み合っている僕達に、先程まで死闘を繰り広げていた秀困気など微塵も感じさせません。

そして、僕に新しい心友ができたのでした。

6 プレイ目『僕と王子様、時々ガチムチ』

黒猫ジャックとの死闘の次の日。王都は騒然としていました。

昨日、正体不明の光が王都の中心部で溢れたそうです。そして光に当たった魔法器具は全て動かなくなり、それは今朝方まで続きました。それが原因で大規模な交通混乱が起こり、飲食店や企業は結構な負債ができてしまったらしいです。

すみませんでした。心の中で謝ったからこの話は終了です。

「ふひいゝ疲れたゝ飯ゝ風呂ゝ乳ゝ寝るゝ」

「あなた、お疲れ様でした」

父、帰宅。鍛冶師とは、魔法科学も専門的に習得している職業の為、昨日の事件から次の日の朝：つまりは今まで徹夜で、魔法器具専門家のサポートのお仕事をしていたのです。

「それで、原因は分かりましたの？」

「それがなあゝ、全く分からんのだよ。テロの仕業かと魔法師団が動いて光の出所を探ろうとしたんだが、出所どころか、どこにも光の力と思わしき魔力を感じられなかったらしくてな…」

「魔力が…感じられない…？」

母がそう言うと、父がハツとして、二人してこちらをガン見してきました。

何ですか？その話は僕の中では終わったのですから、放っておいて下さい。

「ばぶー」

「おー、よしよし。可愛いでちゅねー」

抱っこしてー、という仕草を父にすれば、コロツと忘れてくれました。持つべきは脳筋の父です。

しかし、頬ずりはなんとか我慢できますが、無精ひげが痛いのですお父さん。僕の玉のようなお肌が傷ついてしまうのではないですか。

お父さんに必殺赤ちゃんびんたを喰らわせ沈むのを見届けた後、お散歩に出かけたのでした。

「ごろにゃあーご（そりゃあ、仕方ねえな。道具に頼りすぎている怠慢な現代のツケってヤツだ）」

心の友に昨日の光のせいで起きた人間社会での混乱を聞かせたら、何やら悟ったお言葉を頂きました。

「にゃんにゃん（じゃあ僕は別に悪くありませんね）」

うん。悩みが解決しました。さすがは心友です。しかし、今度から疑われないようにちゃんと神様から貰ったピアスを付け忘れないように気をつけましょう。

さて、もうこの話は本当に終わりにしてお昼寝をしましょうか。四次元ポシエット（自作）に入れていたほわほわ毛布を取り出し、

地面に轢いてジャックとその手下達とその上に寝転がりました。猫達は毛布のほわほわ加減に上機嫌です。ジャックまでもゴロゴロ喉を鳴らしていて和みます。これからはお天気の良い日はここでお昼寝しましょう。

がごーん　ごろごろ

何かが何かにぶつかつた？そんな音が聞こえたのは、猫達の温かい体温でうとうととしていた時でした。

何だろう？と眠い目を擦りながら起き上がって見てみれば、そこには置いてあつたドラム缶に足をぶつけて痛がつている男と、それを見て呆れた顔をしている大きな荷物を肩に担いだ男の二人組がいました。

二人共、ガチムチな体をしてはいますが顔は特徴がなく、あえて言うなら「大人しくていい子だったのにねえ」とニユースのインタビューで言われる犯人のような顔をしています。

「ん？何でこんな所にガキがいるんだ？」

「知らねーよ。それより早く行こうぜ追手が来ちまう」

立ち去ろうとする男二人。しかし、僕は見てしまいました。男が担いでいる荷物が生き物のように動くのを。

赤ちゃん時代にテンプレイベントが来てしまった気がします。

耳にピアスが付いているのを確認して、短い指をパチンッと鳴らします。

すると、お母さんが出したようなトゲトゲの鳶が現れて男を縛り、肩に乗っていたものが地面に勢いよく落ちました。もし、あれに人が入っていたらごめんなさい。

「な、なんだこれ！？おいつお前早く助けるよ！」

芋虫のようにウゴウゴしている男は仲間の男に助けを求めますが、しかしそちらももうジャックが気絶させた後でした。さすが心友、仕事が早い。

何やら喚いている芋虫を無視して、袋の中身を確認します。ビンゴです。五歳くらい？の男の子が入られていました。

まず見えたのは白。穢れの無い真っ白な髪の毛でした。そして目隠しを取ってあげると、燃えるような真紅の瞳が僕を射抜きます。やめてください、睨まないでください、僕はただの幼気な一歳児です。

この子を拐った男ではなく、小さな女の子だと確認すると、眼差しが柔らかくなりました。ふふ、危うくオムツ交換しなければいけなくなる所でした。

それから猿轡、手足を縛っている縄を取って男の子を自由にさせてあげます。

「あ、ありがとう…えーっと…僕を助けてくれたのは君？…な訳無いよね、はは」

普通の赤子を装おうと上目遣いで首をこてん、と倒すと、男の子は僕の小悪魔的可愛らしさに頬を赤らめました。うむ、苦しゅうない。抱っこさせてやっても良いぞ。

「殿下！」

男の子を『殿下』と呼び（な、なんだってー）空から現れたのは、灰色の乱雑に切られた髪に無精髭の、いかにも手練れ冒険者ですつて感じのガチムチでした。

うちのお父さんよりは獣臭はしませんが、ガチムチです。

「え…っと、あなたは？」

知り合いでは無かったようです。いきなり現れたビースト2に少し引いています。

「私はギルドランクSSの通称”蒼い稲妻”と申します。殿下搜索の依頼を受けて参りました」

ほーのおっ かーらだっ やーきーつうくうすうー げっちゅ！
中々テンションの上がる二つ名をお持ちですね。

しかし、やはりギルドとかあるんですね。SSと言ったら上から二、三番目くらいでしょうか？

「殿下、この男達が殿下を拐ったのですか？」

「はい。しかし、僕が助けられた時にはこの男達と、この子しかいませんでした…」

「どうしてこんな赤子がこんな所に…？不自然ですな…」

はっ。注目されています。とつとと逃げたおけば良かったですね。

あー、あー、と無邪気に笑ってみましよう。

王子様はボソっと「可愛い…」と言ってくれたのですが、ビースト2はやはり動物的本能を發揮しているのか、訝しんでいます。

む！？殺気！？

「おおおおおー!!」

あれはトゲトゲで拘束していた男です。自力で脱出したのでしょうか、全身傷だらけです。手には短剣を持っていて、ヤケクソな感じで王子様に突っ込んできました。

「殿下!!」

恐怖で動けない王子様を庇おうと手を伸ばすビーストですが、僅かながら手遅れ感が否めません。仕方ありませんね。

音を超える速さのジャックよりも速く動けるこの身体。一瞬にして男の前に現れて、ぽんぽこお腹を捻って手を振りかぶり、遠心力を利用した渾身の一撃を放ちます。

「はいばーぶー（必殺赤ちゃんびんたー!!）」

体を捻らせぐるんぐるんと飛んでいく男。

声を失う王子様とビースト2。

ビルの壁に突っ込み穴を空けるがそれでもまだ勢いは止まらずどこかへ行く男。

昇天する前の霸王のポーズをする僕。

「あい（正義は勝つのです）」

「……や、やっぱり僕を助けてくれたのはキミ?」

王子様が震える声で聞いてきました。是と言ったら、何だかややこしい事になりそうなのでごまかして逃げましょう。

くるりと振り返り、二人がビクつとするのも構わずに無垢な赤子の笑みをします。そして、ばいばい、と手を振った後、一目散に飛んで逃げました。

「僕の天使……」

と、王子様が頬を赤らめながら呟いた事は、逃げた僕には知る由もありませんでした。

『プレイ目』『美しさは罪ですね』

王子様誘拐事件の後、大人しくお家で息を潜めていたのですが、結局両親にバレてしまいました。

お父さんが王城に納品に行った時、たまたまハイパー赤ちゃんの噂を聞いてガクブルしたらしいです。ふう、いつの時代もこの世界も人の口に戸はたてられないものですね。

バレはしたものの、両親は僕に普通の女の子として育て欲しいらしく、王子様がいくら僕に会いたがっつていようと黙っている事になりました。ありがたい事です。

これ以上両親にいらぬ心配をかけるのは親不孝というもので、あの事件以降は力を使うのはお家だけにしようになり、一人でお散歩も自粛し（ジャックはうちの飼い猫になった）、平穩無事に五年の月日が流れました。

僕、六歳。今日から僕は王立チョースケ学院初等部一年生になります。

襟元がセーラーな感じの白いワンピース型の制服はとても可愛らしく、僕はご機嫌にくるくる回ります。

「いーよ、いーよ、可愛いね〜！ほら、もっといい顔してごらん！」

校門の前で鼻息荒く僕の写真を撮りまくっているのはお父さんです。僕もその気になってあ〜んなポーズやこ〜んなポーズをしてお父さんを喜ばせてあげていると、よそのお父さんまで僕を撮り始めて大撮影会になってきました。

ああ、美しさは罪です。

「はいはい！！そろそろ移動して下さいねー！！もうすぐ入学式が始まりますよー！！」

先生らしき人が校門前の人ばかりを散らしていきます。やりすぎでお母さんに折檻され中の（しかし悦んでいる）お父さんに声をかけて、僕は新入生が集まる場所へ向かいました。

「みなさーん！今から六年生のお兄さんお姉さんが一人ずつ付きまーす！お兄さんお姉さんと手を繋いで一緒に入場してくださいねー！！」

先生がそう説明すると、大人ぶった子供達が初々しい一年生達によつてきました。一年生からすれば六年生は大人です。羨望の眼差しで見つめ、緊張しながら手を繋いでいます。さて、僕のお相手はどなたでしょう？

「キミと手を繋ぐのは僕だよ。よろしくね」

来ました来ました、よろしく……って、この子は……

穢れの無い真っ白な髪。燃えるような真紅の瞳。あの男の子の面影が残る少し大人になった顔の王子様。

あーのー日 あーのー時ー あーの場ー所でー

脳内でバブル時代のメロドラマの主題歌が脳内再生されます。まさに運命の出会い。やはりあの事件はフラグだったんですね。

王子様もこちらをガン見しています。これは、僕の磨きがかかっ

た小悪魔的可愛さにやられたという事で無視しましょう。

「あの…？よろしく願います」

頭をこてん、と傾けて挨拶します。まんまと王子様は頬を赤らめて怯みました。よし、このまま勢いで手を繋いで話をさせないで…

「ねえ、キミ昔会った事ない？」

おっと、先手を打たれたようです。もう面倒臭いのでバラしてしましましょうか？いや、もう少し引っ張って王子様をやキモキさせるのもまたオツですね。

「え…？どこかでお会いしましたか…？」

「そう…そうだよね…キミは赤ちゃんだったもんね…覚えてないよね…」

僕と会った事はどうやら決定事項のようです。確信が持てるような何かがあるのか、思い込みが激しいのか…どちらにせよ知らぬ存ぜぬでいきましょう。

『新人生入場！』

そうこうしているうちに行進が始まったようです。まごまごしている王子様に僕から手を繋いであげると、そこら辺の一年生より緊張してしまいました。愛い奴よのう。

入場すると、大人達の視線を僕達ペアが独占してしまいます。それはそうでしょう。神様から戴いた外見なので他人事で言っちゃいますが、シヤレ抜きで僕は可愛いのです。

枝毛、絡みなど知らない腰までキラキラと伸びた銀髪。アーモンド型の目力イッパイの瞳は夜の神秘を宿した紫。整った鼻に、口角が上がっている可愛らしいジューシーなお口。貪りつきたくような白い肌、しかし頬にさす淡い桃色が健康的な美貌を現しています。

そんな絶世の美少女が、この国の王子様（しかも美少年）とお手を繋いで現れたのです。今度はお母さま方までもを巻き込んだの大撮影会になりました。

通路まで占拠しだした保護者の方々に、オロオロとしている演技をしている僕を見て、王子様は凜とした声で言いました。

「道を開けなさい。今は式中です。大人としての節度を弁えるように」

王子様と言えど年端もいかぬ子供に叱られてしよぼしよぼと席に帰っていく保護者達。ああ、これもこれも僕が美しすぎたせいですね。すいません、保護者の皆様。

そして王子様はこちらを見て、優しい瞳で微笑みました。「もう大丈夫。キミは僕が守ってあげるよ」って感じの眼差しです。ああ、それもこれも僕が…以下省略

そんなこんなで無事入学式は終了し、教室に移動する事になりました。

「みなさん始めましてえー今日からみなさんを教える事になりますうーりリアンヌ・パンでえす」

緑色の髪を二つに分けて緩く三つ編みをしているメガネっ娘が登場しました。黒板に名前を書こうとチョークを持った時、手を滑らせて床に落とし、拾おうとしたのに何故か踏んずけて転んで黒板に

頭をぶつけて痛がっています。

皆は笑っていますが僕は一人興奮しています。これからどうやって虐めようかと僕の潜在ジョニーがワクワクしているのです。

え？僕はMじゃないのかって？両刀です。だって僕両生具有です。関係ないとかの苦情・批判は受け付けません。

あ、そうそう、両生具有で思い出したのですが、皆様には是非ご報告したい事があったのです！血が滲むような修行の結果、ジョニーの出し入れが自由自在にできるようになりました！わっほい！

勿論、既に皮からの卒業はいたしました。早くはありません。外国では赤ん坊の頃に皮をちょんぎってしまう所もありますし、日本でも甥が生まれた際、姉がむきむきしていました。お医者さまに保育園にあげる前に剥いておいた方が良いと言われたそうです。それからなし崩しのに僕のジョニーがまだ引き籠っている事がバレ、姉にそれがいかに不潔で、男側にしても女側にしても病気の原因になるという事を懇懇と説教されたのです。

そういう訳で憂いの元を早々に断ったのでした。

「次はあゝコーさん、お願いしますう〜」

はっ。切ない思ひ出にぼろぼろしていたら、いつの間にか自己紹介タイムになっていたようです。

「ワピコ・コーです。お友達いっぱい作りたいと思っています。よろしく願います」

小悪魔的天使スマイル発動。老いも若きも男も女も僕にメロメロになっています。よし、これでストーカーが出没しなければ僕の学院生活は安泰です。

一通り自己紹介が終わった後、明日からの予定を先生が説明して

今日は解散になりました。

「ワピコく立派だったぞくさすが俺の娘だく」

お父さんがすりすりしてきます。最近、外では攻撃されないと学習して、ストレスを発散するかのように外ですりすりばかりしてきます。後で悦ばない程度のお仕置きをしましょう。

「ご機嫌ようコー男爵夫妻」

「あら、ご機嫌ようピカルツ夫人」

おお、光の大貴族の金髪美女ではありませんか。お母さんと美女はお母さん会議に華を咲かせています。僕はまだすりすりされていきます。

心を無にしていると、美女の影に隠れるように金髪のショートカットの子が目に映りました。なかなか可愛い子です。あれが問題の光の嫡男ですか。

おや？何が問題なのでしょう？六歳児の平均的な魔力量よりは随分と高い魔力を持っているようですが…

「あなたもご挨拶なさい、ペコ」

「…ペコです」

ペコちゃんがペコリとしました。僕もまだお父さんにすりすりされながら挨拶をします。

「ワピコです。これからよろしくお願いします」

ペコちゃんはツーンとそっぽを向きました。おお？僕の小悪魔的
天使スマイルが効いていません。ただのツンデレでしょうか？いや、
それにしても敵意をビシバシ感じます。フォイ的役割？の割にと
ても優秀そうですね、可愛いです。

これは、テンプレキャラでは無いのでしょうか？
んんん？？？

8 プレイ目『鬼さんといっしょ』

入学式の翌日、つまり今日。僕は校門の前で校舎を感心しながら眺めていました。昨日は撮影会に夢中になっていたのでじっくり見るのは初めてです。

中心にずっしりそびえ立つのは白い塔のような建物。てっぺんは丸く、丸い部分の周りを魔方阵のような輪っかがゆっくりぐるぐる回っています。その塔の両側から横に無機質な四角い建物が広がっているのですが、それがやたら長い。中心に立って、やっと両端が見える程度です。どでーん、とそんな建物が建っているのだから向こう側が視認できないのですが、四角い建物の上から幾つかの魔法陣が見えているので、これぞ魔法学校！！という雰囲気は満々で感動しています。

贅沢を言うならば、ハリーホッターのような古城的建物が好ましかったのですが、この都心部にそのような断崖絶壁の上に建つものを望んではいけませんね。

入り口に設置されている一年生校舎行きどこでもドアを抜け、そこから階段で二階に上がった右側が我が『バラ組』です。

ちなみに組の名前は学年主任の趣味で決まり、一年生はお花の名前です。

「おはようございまーす」

友達百人計画の為に愛想よく教室に入る僕。しーんとなって、僕に視線が集中します。そんなに見ちゃいやん。僕のジョニーが露出されたいと騒いでしまっじゃありませんか。

「おう！おはようー！」

そこにKYな感じの赤い髪をツンツンさせた男の子が近寄ってきました。

「オレ、メラ・ボーボ！よろしくな！」

にかつと笑って手を差し出すメラ君。これはこれは、真冬でも半袖短パンで青っぱなを垂らしながら走り回ってそんな子ですね。こういうタイプは五大貴族の火とかってオチですよ。

「よろしくね」

可憐で清楚なお花を背負っているような微笑みで手をふんわり握ってあげました。瞬く間に顔を真っ赤にさせるメラ君。今日から君も僕ハーレムの一員です。

「早く離れた方がいいですよ。メラに触るとバカがうつりますから」

「そうよ！メラ早く離れてあげなさいよ！その子が可哀想でしょ！」

「そ、そんなに言っちゃメラ君可哀想だよ…？」

しめし合せたように黄緑色のちよつと髪の長いクールそうな男の子に、うねうねロングの茶色い髪の勝気そうな女の子に、大人しそうなセミロングの水色の髪の女の子が寄ってきました。

ふむ、風、土、水の大貴族ですかね。

昨日しましたが、あらためて自己紹介。だって僕聞いてなかったし。

クールな男の子がヒュー・ソヨン。

勝気な女の子がハニー・ワトソン。

大人しそうな女の子がミズホ・チャッピー。

やはり、メラ君含め五大貴族だと言う事です。さすが異世界転生テンプレ展開です。四人と親睦を深めているのですから、そろそろ水をさす傲慢貴族が出てくるはずです。

「皆、そんな平民と仲良くしていると品が落ちるぞ」

その役は五大貴族の光、ペコちゃんでした。相変わらず敵意剥き出しです。僕何か悪い事したでしょうか？

「僕、平民ではなく一応男爵家です」

「はっ女のくせに『僕』だなんて、やはり品の欠片も無いな。男爵など、成り上がりの元平民ばかりじゃないか」

いいじゃないか、ボクっ子。僕はボクっ子が好物です。それに身分は高くなるとも、お父さんは売れっ子鍛冶師なのでそんじよこちらの貴族よりはお金持ちです。

「おい！やめろよペコ！」

「ごめんね、ワピコ。あの子いつもはいい子なのよ」

メラ君が熱い勢いで庇ってくれて、ハニーちゃんが僕を気遣いながらペコちゃんのフォローも忘れないいい女っぷりを披露しました。彼女達の気遣いを無駄にしない為に、決闘の後にお互いを認めあうという良き好敵手展開に持っていくべきでしょうか。

回りくどいですね、やっぱりハーレム入りさせましょう。

「ねえ、仲良くしよ？」

ペコちゃんに近づき、上目&うる目遣いで見つめます。ペコちゃんは嫌そうな顔の後にまたそっぽを向いてしまいました。

シヨックです。これで落ちない男はなかないと言っのに、自信喪失です。いやいや、これで落ちないと言っのはもはや男失格レベルです！そうです！男じゃないんです！男じゃ……ん？
ぴーん、とききました。

召喚！いでよジヨニー！

「ねえ、こっち向いて？」

ペコちゃんが嫌そうにこちらを見たのを見計らって、イケメンスマイル！

「……っ！？」

ビンゴです！ペコちゃんは僕のイケメンスマイルに見惚れています！この子は男装をした女の子です！

説明しよう！ジヨニーを起動させる事によって、僕は身体付きは変わらないけども男性フェロモンがムンムンになり、僕の微笑みが効きにくい女性でもメロメロにしてしまえるのだ！

ふむ、ピカルツ家は女の子が生まれたのに、男の子が生まれたと言っちゃったのが問題だったのかな？それとも…

「ねえ、ペコちゃん。もしかして、兄弟がいます？」

「いえ、ペコ君は一人っ子ですよ？」

答えてくれたのはペコちゃんではなく、右斜め向きになりながら腕を組んでいるヒュー君でした。他の三人も何言ってるのー、とか変なやつー、とか子供らしく笑っています。

しかし、ペコちゃんだけは大きな目をさらに大きく見開いて青ざめています。またしてもビンゴのようです。

魔力無しの兄に変わって、跡継ぎとして男として育てられた双子の妹…と言った所でしようか。さすが異世界、ハズしませんね。

はてさて、お兄さん（決めつけ）の方はどうしているのでしょうか？理不尽に監禁されて、虐待されているのでしょうか？それとも、もう捨てられた後でしょうか？今夜あたりにも確認してみましよう。

「みなさあ〜ん、席に着いてくださ〜い。授業を始めますよ〜」

メガネドジっ娘先生が登場。ペコちゃんは助かったとばかりにそそくさと席に着き、その他はまだお喋りしたりなそうにタラタラと席に着きました。

「記念すべき初授業は親睦会を兼ねた鬼ごっこです！」

先生が手に持っていた教鞭を振るって「しゃらんら」と言いました。

するとどうでしょう。教室や机などがぐにぐにと歪みだし、机や椅子は木に変わり、こじんまりとした教室は広大な森へと姿を変えます。

皆は何が起こったのか訳が分からず、キョドったり、固まったり、飛び跳ねてはしゃいだりしています。勿論僕には分かっているのだからって冷静です。

空間を広げる魔法と、物質変化を使ったのです。言うだけなら簡単なんですが、両方とも一步間違えば大惨事のとても高度な魔法です。ドジっ娘と言えどさすが教師。いや、五大貴族が不自然に集まっているから有能な人間を臨時教員として雇ったんでしょう。

「みなさ〜ん、ちょっと広くはしましたが、迷子にならないように周りを川が囲んでいま〜す。間違えて溺れないようにい〜」

分かりました、僕が見事に溺れてみせましょう。

「じゃあ、先生が最初の鬼で〜す。さあ、みんな逃げなさ〜い」

きゃー、わらわら。

皆が蜘蛛の子を散らすように逃げ出しました。僕も逃げましょう。言っておきますが、本気です。

シュンッ

と、影が横切りました。見ると、0.0001秒前に僕がいた場所に先生の細い手があります。おお、先生六歳児相手に手加減がありませんね。僕が本気を出して移動してなかったら見事に僕が鬼にされていた事でしょう。

目と目が合う僕と先生。何かを通じ合った僕達はお互いにやり、と笑い合い、そして大人げ無い争いが始まったのでした。

木と木の合間を縫い、普通の六歳児には視認さえできない速さで追いつ追われつを続けます。クラスメート達は凄い風が吹いたとしか感じていないでしょう。あ、ヒュー君だけは僕達に気づいたようですね。さすがです。

しかし、先生もなかなか執念深いですね。かれこれ十分は追いかけてっこしているのに諦めません。僕のスピードについて来れるのはさすがですが、所詮は神様スペックの僕に追いつけるはずがありません。このままでは他の子の出番が回って来ない気がします。

ここは生け贄を差し出してみますか……おっと、さすがメラ君、オイシイ所に現れました。

鼻くそほじり中のメラ君の両脇を掴み、隣にいたヒュー君に「あっ」とした顔をされたのは無視して、迫りくる悪鬼（先生）に投げつけます。

しかし、反射的に避けてしまった先生。憐れメラ君は顔から地面にご挨拶してしまいました。

あゝあ、と冷たい視線を先生に投げかける僕とヒュー君。先生はオロオロとしています。

「だ、大丈夫？ボロボボ君」

そう言っつて先生はメラ君を起き上がらせました。

「あ、次はメラ君が鬼ですね」

「そうですね、頑張れメラ」

無邪気に笑う僕に相槌を打つヒュー君。なかなか話の分かる子で僕は嬉しいです。うって変って、先生とメラ君は何が起きたか分からないように「え？え？」と僕とヒュー君を見比べています。今のうちです。

「逃げる」

さあ、捕まえてごらんなさーい、うふふ、あはは。

本気を出して逃げたのですぐに川にぶち当たってしまいました。仕方ありません、しばらく木の影に隠れていきましょう。木に近づくと、金色の頭が見えました。ペコちゃんではありませんか、奇遇ですね。

僕に気が付いたペコちゃんは僕に気づくと気まずそうにしました。そうですね、一家がペコちゃんを男装させてまで隠している兄弟の存在を僕がアツサリ気づいてしまったんですものね。ペコちゃんも救われませんかよ。

「そんな顔しなくても大丈夫ですよ。ペコちゃんを困らせるような事はしませんし、誰にも言いませんから」

裏の無さそうな顔で微笑んであげると、ペコちゃんは少しホッとした表情をしました。が、すぐにツーンとそっぽを向いてしまいます。

「ふ、ふん！何の事だか…」

そんなツンツンしても、耳が赤くなってデレているのでジヨニニさんがみなぎってきてしまいますよペコちゃん。

「ワピコー！見つけたー！」

おお、メラ君見つけるのが早いですね。もしかして、ビースト予備軍ですか？そんな親の仇を見るような目で見られたら、怯えたフリして泣いた拳句に、イジメっ子ポジションに追いやってしまいたくなります。

にじり、にじり、と迫りくる鬼。後ずさる僕。しかし、後ろには川。あっチャンスですね。

わざとらしくないように、わざと足を踏み外し、「きゃっ」と可愛らしい声を出して落ちてみました。メラ君のみならず、ペコちゃんまでオロオロしています。ハニーちゃんの言う通り、いつもは優しい子なのでしょう。

「た、助け…」

あつぷ、あつぷ。どうです、この庇護欲をそえられる溺れかたは！今年のベスト溺れたふりー賞大賞はこの僕がいただきですね！

メラ君は急いで先生を呼びに行きました。ペコちゃんも一生懸命手を伸ばして僕を助けようとしてくれています。うん、いい子です。本当は足がつく深さですいません。

そろそろ這い出してみようかな、と思っていた時、何か白いものがサツと現れて、サツと僕を助け出してくれました。

「キミ、大丈夫かい？」

王子様です。王子様が優しい瞳で僕を見つめています。「もう大丈夫。キミは僕が…以下略」といった感じの眼差しです。

呼んでもいないのに空間を越えて来るなんて、便利ですがちょっと気持ち悪いです。なので「ありがとうございます」と言った時の僕の頬が少しひきつったのは僕のせいではありません。

それから、王子様は颯爽と去って行き、後は普通に鬼ごっこをして記念すべき初授業は終わったのでした。

9 プレイ目『とても暗い場所』（前書き）

今回はふざけたら不謹慎かな、と思うキーワードが出てくるので、シリアスです。

暗いお話が苦手な方ご注意ください。

9 プレイ目』とても暗い場所』

「お父さん、工房借りてもいいですか？」

夜、いつもは家族みんなで居間でごろごろしている時間。僕はやる事ができてしまったので、お父さんに許可を貰おうと尋ねました。

「お、いいぞ。何作るんだ？」

「新しくできたお友達にペンダントでも作ろうかなって思って」

まだ見ぬお友達ですがね。

先程、黒猫ジャックに光の大貴族邸に密偵に行つて貰ったところ、まだ息子はお家にいるみたいなので、いつか来るであろう日の為にお約束通りに身を護る道具を作りたいと思います。

「いいぞ、友というのは大切だからな！ついでにお父さんの分も…」

よし、許可は貰いました。別棟にある工房に向かいますよ。ん？お父さんの鳴き声など聞こえませんか？

「さて、どんな性能を付けましょう？」

僕は目の前のハイテクな魔法器具の前で頭を傾げます。

昨今の武器防具の作成方法は、火がごうごうしている部屋の中、暑苦しい男達が叩く、という作業ではなく、キーボードをパチパチ叩いて設定を入力していくというあまり夢の無い作業のできるの

す。

しかし、一定の魔法科学、鉱石知識を修得して、さらにデザイン性も求められる、なるには相当の努力と才能が必要な職業なのです。だからお父さんはただの脳筋ではなく、実はスゴイ脳筋なのです。

「ごろにゃあ〜ご（飲食は死活問題だぞ）」

さすが心友。だてに野良をやっていただけありますね。それは確かに死活問題です。捨てられて、誰かに拾われるとしても、一人になつてどれくらいの時間を彷徨つか分かりませんもんね。

「では、危険が迫った時に一回だけ発動する絶対防御の魔法と、自動回復効果と、逃げる為に脚力上昇効果も付けておきましょうか？ それと、四次元ポケット性能も付けて、二週間分の水と簡易食料とついでに毛布も入れておきましょう。こんなもので大丈夫ですかね？」

「にゃーご（充分すぎるだろう。それでも死ぬようなら、それまでの人間だつたつて事だ）」

いつものようにありがたいお言葉ありがとうございます。

さて、性能も決まった事だし適当な鉱石を選びましょう。倉庫から掌に納まる程度の大きさの一番安い鉱石を持ちます。それを両手で包み、呪文を唱えます。

おっぺけ〜

すると、あら不思議。子供のお小遣いで買える石がオリハルコンになつちやいました〜。神様って楽しんでお金儲けできますね。

『私にはお金など必要ありません』

顔を忘れかけた神様の声が聞こえました。うん、きっと幻聴です。

神様の声を無かった事にして、作成に取り掛かりましょう。一応工房に来ましたが、実は作成に使用する魔法器具は僕には必要ありません。気分を出す為だけに来ました。

おっぺけへ〜

はい、できました。後はコピー人形を身代わりに置いて、ペンダントを届けに行きましょう。

僕は今、自分の軽薄な考えに自分を責めています。

工房から直接転移して出たのは、一筋の光も差さない暗い、暗い地下室。いや、地下牢です。

光を出して部屋を照らしてみれば、汚い不潔な石畳。あちらこちらに変色してこびり付いている血の痕。寝具や排泄場所すら無い異臭漂う場所に、彼はいました。

汚い石畳にピクリとも動かない彼の瞳には絶望を通り越した空虚。その目は何も映しておらず、底の見えない暗闇に僕の身体は小さく震えてきます。

下着さえも付けずに露出している身体は、見るのも痛々しい程にガリガリに痩せ細っていて、黒ずんだ肌は全身古い傷とまだ新しい傷で埋め尽くされていました。

虐待。地球にいた頃はニューズや小説などでよく目について、さほど珍しい単語では無かった。特にネット小説のコメディメインの異世界モノでは、虐待の言葉をサラリと流し、虐待されていたキャラ

ラもすぐに元気になっていたので、こんな悲惨と言つ言葉ですら足りないと感じさせる状態だとは思っていませんでした。

可哀想に、虐待する奴みんな氏ね！とは思っていましたが、やっぱり他人事の遠い世界の話だと思つていたのでしよう。ましてや、ここは異世界。人外の力を貰つて、のほほんと暮らしていた僕はゲームの中にいるかのような気分でした。

少し考えれば分かる事なのに、今日も一つのイベントを見に来ただけの気分だった自分に吐き気がしました。

震える手で、まだ名前も知らない彼を抱くように起こし、傷を治します。古い傷一つすら残らないように丁寧に、念入りに。

彼が、自我を取り戻した時に、忌まわしい記憶を呼び起してしまわないように。

「にゃ〜…泣くな。お前のせいじゃない」

ジャックに言われて気づきました。僕は泣いていたようです。僕なんかがこの子の為に泣くなんて烏滸おこがましいですね。なので、自分の馬鹿さ加減に泣いている事にしましょう。

彼の身体から傷が消え去った後、僕は作ってきたペンダントを首にかけてあげました。

すると、今まで反応しなかった身体が、ぴくり、と動きました。驚いて彼の顔を見てみると、瞳に僅かな光が灯り、口が動いています。「あ、あー」としか言わない彼。ここから出た事が無いとすれば、話相手もおらず、学習もさせてもらえず、言葉が分からないのかも知れません。

神様の力で意思を読み取ってみました。

「……つつつ！！」

僕の事を、キレイ、だと思っていました。

とても、キレイな、宝石を見るような、宝物を見つけたような、そんな風に感じていたのです。

ごめんなさい、キレイなのは神様から貰ったこの外見だけで、僕の心はとてもドロドロして汚いのです。君にキレイだと言って貰える資格など無いのです。

彼は、自分に付けられたペンダントに気づき、しばらく見つめた後、微かに微笑みました。

ああ、良かった。この子にはまだ感情が残っている。良かった。まだ助けられる。一刻も早くこの子を違う場所に移さないと。

がたん、と上の方で音がしました。

「誰かいるのか!？」

男の怒鳴り声が聞こえました。すると、腕の中の彼がガタガタと身を震わせ始めます。僕の中でぞわり、とドロドロしたナニかが沸いてきました。

アイツか…アイツがやったのか!!

「うにゃー!!!(ダメだ!殺すな!!!)」

ジャックの声で我に返りました。そうですね、今はこの子を逃すのが先です。ありがとうジャック……

しかし、どこにしよう。考えている時間はありません。足音はこ

こちらへ向かって来ています。どうしよう。足音はもつとすぐそこです。どうしよう。どうしよう……!!

ああ！とにかく何処かへ！！この子が心を委ねられる人のいる所へ連れてって！！

神様！！

『いいですよ』

そして僕達は光に包まれました。

100プレイ目』ある日森の中、獣さんと出会った』

僕はとてもビックリしています。どれくらいの衝撃だったかと言うと、稲妻が僕を責めたてたほどです。

そう、今僕の目の前にいるのは、ビースト2こと“蒼い稲妻”でした。

神様に転移して貰って出たのは深い森の中。骨付き肉をぽとり、と落とした彼の前には、パチパチと音を鳴らしている焚き火。焚き火の上にはモハン肉焼きセットがクルクル回っていないバージヨンで設置されています。遠くで夜行性の鳥のギャーギャーと鳴く声がなんとなく気まずさを際立たせます。

そうですよね、涙で顔をぐちゃぐちゃにしている女の子と、裸体の男の子が急にこんな所に現れたらビックリしますよね。謝ります。

「お、お前…その髪…その目…まさか、あの時の赤ん坊か…？」

おっと、問題はそこでしたか。まさかそこから突っ込まれるとは思っていなかったので驚きです。

「それより！この子を助けて下さい！」

そうです、そんな過ぎた事の話をしている場合では無いのです。この子の保護者になってくれる人を探さなければ。男の子に気づいた彼は眉間に皺を寄せ、男の子の健康状態を点検し始めました。

「外傷は無いみたいだが…栄養失調が酷いな…一体どうしたんだ？」

僕は話すのを少し躊躇いました。神様の導きでここに出たとは言え、この子は光の大貴族の子供です。事情を全部話したとしたら、大人の事情とかでもしかしたら連れ戻されるかもしれません。

どこから連れて来たのかだけ伏せて話そうか：いや、野生の勘は戦慄を覚えるほどに鋭い（お父さんとか、お父さんとか、後お父さんとか）。戸惑っているのが分かったのでしょうか、彼は僕の頭に優しく手を置き、僕の目線まで屈んで微笑みました。

「大丈夫、俺はいつでも泣いてる子供の味方だ。」

その声は底抜けに優しく、細められた瞳は全てを受け入れ包んでくれそうな深い色をしていました。

卑怯です！情緒不安定な状態の子供に向かってその態度と優しい声色！僕の涙腺が決壊してしまっただじゃないですか！！

うわあああん、と泣き喚く僕を男臭い胸板に押し付け、よしよししてくれる蒼い稲妻。

「えぐつえぐつ、ちよつと汗臭いよおお！うわあああん！」

「それは俺のフェロモンだ！！よく嗅いで脳裏に刻みつけとけよ！はははは！」

脳裏に刻み付けるのは遠慮しておきますが、彼の獣臭はやはりお父さんに似たものがあって、少し安心してしまったのは秘密です。

僕が泣き収まるのを確認すると、蒼い稲妻は自己紹介をしてくれました。

「俺はビー・ストロング。ギルドランクZの通称“蒼い稲妻”だ」

おお、ランクアップしています。その最高つばい響きは、やはり彼に男の子を預けると神様の導きでしょうか？今回は神様を信用してみてください。

「僕はワピコ・コーと言います。その子は……名前は知りません……知っているのは、光の大貴族のご嫡男という事と、邸の地下室に閉じ込められ虐待されていたという事です……」

サラリとんでもない事を聞かされ、啞然とするビーさん。御愁傷様です、この話を聞いたからには巻き込まれて下さい。

お父さんと違い、本当に脳筋なようで「むむ……」と唸りながら悩んでいます。その隙に男の子のペンダントから毛布と水を取り出し、毛布で包んであげてから抱き上げて水をゆっくりと飲ませました。

一体いつから水さえも口にしていなかったのでしょうか。水を一口飲むのだけでも苦しそうです。ああ、本当に間に合って良かった。

ごめんね、存在は気づいていたのに、ただのイベントだなんて思っていてごめん。

生きていてくれてありがとう。そしてこれからも生きて、僕と友達になるろ。

だから、苦しいかもしれないけど、頑張つて水を飲んで、栄養も摂つて、元気になってね。

元気になったら、一緒に遊びに行こう。これからは楽しい事、いっぱいしようね。

ジャックが僕の肩に飛び乗ってきて、ペろり、と僕の頬を舐めました。

どうやらまた泣いていたみたいです。今日の僕は本当に情緒不安定でお恥ずかしい限りです。

一緒にいてくれてありがとう、ジャック。

「おお、おおおおお…」

ビーさんが獣のように、むしろ獣らしく泣いています。一体何がそうさせたのでしょうか。

「ぶにゃっ（気づいてなかったみてえだが、お前の考え口に出てたぜ。それを泣きながら言ってるもんだから、貰い泣きでもしたんだろっ）」

おお、情に厚い漢ですね。これならこの子を安心して預けられそうです。

「ビーさん、この子をお願いできますか？僕はまだ子供なので、大人が必要なのです」

「ああ！ああ！！いいとも！！光の大貴族だろうが、なんだろうが、この子を絶対に守ってみせるとも！！！」

とてもありがたいお言葉なのですが、おつゆ飛ばしながら近づかないで下さい。えんがちよです。

「ありがとうございます。一応、ちよこちよこ様子は見に来るので、もしこの子が光の大貴族の元に連れ戻されていたり、理不尽な目に合っていたら、ビーさんのビー（自主規制）を握り潰しますからね？」

青ざめながら股間を押さえるビーさん。動物的本能で冗談ではない事が分かっているのでしょうか。うん、これで本当に安心になりました。

「それでは、僕はそろそろ帰りますね。本当にありがとうございました。どうかよろしくお願いします」

ぺこっとお礼をする僕に、深く頷くビーさん。それを見て、僕は少し微笑んでから転移をしました。

お家に帰って来て時計を見れば、もう日付が変わってしまった真夜中でした。

服を来たまま、ふかふかのベッドにどさりと倒れ込みます。そのふかふかさにほっと安心する僕。同時に思い浮かぶのは、あの寝具さえ無かった不潔な地下牢。

全部僕のせいだと思ひ込むほど烏滸がましくはないけれど、気づきながら今まで放置していたのだから、彼をあんな状態にしてしまったのは僕の罪でもある。

まだ身体も心も子供な僕には彼にしてあげれる事なんて思いつかないけれど、彼が困った時にはすぐに駆け付けよう。僕の事なんかいらぬと言われたら、潔く彼の前から消えよう。後、僕にできるのは祈る事だけ。

僕の事は恨んでもいい。だけど。

どうか、彼が世界を恨みませんように……

11 プレイ目『お花が咲きました』

「ワピコさん、授業中におねむはダメよ〜?」

先っぽにピンクの星がついた教鞭でぺしつと叩かれました。

許して下さい。昨夜は色々あって、思考の海の中へ自分探しの旅に出ている眠れなかったのです。

「じゃあ、ワピコさん。教科書の6ページ目を読んで下さい」

「…んん。『これはペンですか?』『いいえ、これは漫 画太郎でむにゃほにゃ…』」

「はいはい、読みながら寝ないの〜。仕方ありませんね〜今日は特別にお昼まで寝ていていいですから、保健室へ行ってらっしゃ〜い」

おお、女神様がご降臨なされた! 村の衆! 宴じゃ! 宴の用意をせいで〜!

おお! あんな所にデカイ獲物があるわ! この儂のゴッドフィンガーで葬り去ってくれようぞ〜!

「ワピコさん! そっちは窓です〜危ないです〜! あ、ペコさん、ワピコさんを保健室に連れてってあげて〜!」

「な、なんで僕が!?!」

んん!? 不 家のマスコットキャラクターじゃないですか!?

おい! べろんべろん! お前の片割れは僕が預かっている! 命が惜しくば……んん? 顔色が悪いですねえ? ほら、いつものようにペロ

ツとベロを出してアホ面してごらんなさい？

あ、あああ。誘拐されました！僕、不家のマスコットキャラクタ―に誘拐されました！

あ、あああ。

…はっ。

ここは何処でしょう？白いです。お部屋が白いです。やだ、怖い。

「やっと起きたか？」

「あっペコちゃん、ここは何処ですか？」

「ここは保健室だ。廊下で眠りこけたお前を僕が背負ってきてやったんだぞ！ありがたく思え！」

「それはそれは、粗相をいたしましたすみませんでした。ありがとうございます」

ペコちゃんにペコリと謝る僕。寒いなんて言わないで下さい、僕のハートがブローケンします。

「それはそうとお前…」

やめて下さい、睨まないで下さい、もうオムツはしてないのでお漏らししたら大惨事です。

「人前で『お前の片割れ』とか言うなんてどういっつもりだよ！？僕の困るような事はしないんじゃないかなかったのか！？」

おっと、夢だと思っていた事が半分現実だったら嬉しいです。

「ご、ごめんね…？夢を見てね、ペコちゃんって人形が出てきて、その人形の片割れがポコちゃんって言うんだけど…」

「っ！？お前…！兄の名前まで知っているなんて…！？」

Oh！まさかのポコちゃん！

お名前ゲットだぜ！後でビーさんに教えてあげましょう。

それよりもまずは今日の前にある危機です。ペコちゃんが僕を射殺さんばかりに睨んでいます。

「仕方ありません、何故僕がポコ君の存在を知っているのか教えましょう。あれは、ある日の晩でした…」

ペコちゃんは話を聞く態勢になって真剣な目をしています。

「彼が僕の夢枕に立ったのです」

「……は？夢枕……？」

「ぼかーん、としていますね。夢枕という単語の意味が分からないんですかね？」

「夢枕とは、主に神様や幽霊が夢に出てくる現象の事です。そう、だから最初僕はこの男の子は幽霊だと思ったんです。しかし、夢の中で一緒に遊んでいるうちに気付きました。この子は現実で生きているのだと」

「……兄は…兄は元気だったか…？」

んん？ペコちゃんは最近ポコ君に会っていなかったのでしょうか？

「……残念ながら、とても憔悴しきっていました」

それを聞いた彼女の瞳がとても傷ついた色になりました。

「なんだって…？お母様は別邸で健やかに暮らしていると…」

どうやら、ペコちゃんはお兄ちゃん思いの良い子のようです。そしてそんな彼女を両親が騙しているという事ですね。

「大丈夫です。なんとか持ちこたえましたから、きつとこれから元気になるます。そしたら二人で一緒に遊びに行きましょう？」

ペコちゃんの手を握って安心させる為に優しく微笑みます。

出会った経緯には嘘、大げさがありますが、彼女への誠意の心は本当です。

今会つとシヨックを受けるでしょうから、元気になったら会わせてあげましょう。

そしてペコちゃんは初めて女の子らしいお花が咲いたような笑顔を僕に見せてくれたのでした。

「たのもー！」

ノックも無しに飛び込んだのは”蒼い稲妻”ことビーさんのお部

屋。

うわあ、とても汚ないです。あそこに転がっている靴下なんて、一体いつ脱いだモノでしょう？黄色い空気が漂っています。

ビーさんと言うと、灰色のおヒゲを剃っていたところ僕が飛び込んで来たので、驚いて肌を切ってしまったようです。とても痛がっています。

「お、お前…現れる時はいつも突然だな…？どうやってここが分かった？」

「ジャツ君に探って貰いました」

「じゃ〜」

どうだ僕の心友はスゴイだろ！えっへん！

「それよりも彼の名前が分かったんです。ポコ君という名前みたいです」

「そりゃ良かった。コイツをなんて呼ぶか悩んでたんだ」

そう言っつて彼は野性味溢れる手で寝ているポコ君の頭を優しく撫でました。

うんうん、もうイッパシの親子に見えますね。良きかな良きかな。

「ところでビーさん、ポコ君を理不尽な目に合わせたらどうなるか…言いましたよね？」

「な、何だ…？俺が一体何したと言っただ…？」

威圧する僕に青い顔をして股間を守りながら後退るビーさん。今日は初犯という事でソレは見逃してあげますが、言いたい事は言わせてもらいます。

「この部屋の汚なさが理不尽です！免疫力の下がっているポコ君をこんな不衛生な部屋で寝かせているなんてどんな病気になるか分かったもんじゃありません！ビースト病に感染したらどう責任とってくれるんですか！今すぐ専用の家政婦と、医者を雇いなさい！ズラंकなんですからお金はあるでしょう？分かりました？分かったなら返事をしなさいこの脳筋が！」

まだ股間を押さえながら、ウンウン、と涙目で頷く二十代後半の男。それに凄まじい勢いで説教している美少女という微笑ましい光景は、差し入れに来たギルドの方が来るまで続きましたとさ。

12 プレイ目『養殖です』

僕、九歳になりました。初等部四年生です。三年生までは特にこれといった出来事は無かったので飛ばしました。

今年の四年生の組のテーマは『バナナ』です。バナナなんて黄色くらいしか思いつかないだろうと思った方。これが意外とあるんですよ。

『甘い』とか、『果物』とか、『モンキー』とか、もう連想ゲーム的ですけどね。僕は無難に『黄色』組です。『黒斑点』組になった子達は本当に可哀想だと思います。

「なあなあワピコ！例の授業今日からだな！」

ホームルーム前、青っぱな垂らしてそんなメラ君が、ツンツンとした赤い髪をゆらゆらさせながら言います。

「例の授業？」

こてん、と首を傾げると、周囲の人間が頬を赤く染めて僕に見とれます。成長と共に僕の小悪魔的可愛さもレベルアップしました。

「このバカは初歩魔法の授業の事言ってるんじゃないの？」

ハニーちゃんは、ふわふわと柔らかかそうな茶色い髪を掻き上げて辛口な事を言います。

「なんでそんなに興奮してるんですかね？僕達五大貴族は物心つく

前から習っていたでしょう」

男の子にしては少し長い黄緑色の髪の毛をサラリと靡かせ、右斜めに構えて腕を組んでいるヒュー君がクールに言いました。

「ばっか！お前ばか！できても、見せびらかすところが無いんじゃない意味ねーだろ！？」

「馬鹿はお前だ馬鹿が」

相変わらず男装しているので、キラキラしている金色の髪を伸ばしたら綺麗だろうな、と思うショートカットのペコちゃんが上から目線で言い捨てました。

「みんな、言い過ぎだよ？バカにバカって言っちゃダメなんだよ？」

トドメを刺したのは大人しそうな顔して実は爆弾発言が多いミズホちゃんです。こてん、と首を傾げると、セミロングの水色の髪の毛がサラサラと流れます。

僕達だけでなく、クラス中今日の授業の話題で持ちきりです。

それもそのはず、三年生までは魔力をコントロールする練習しかさせてもらえなかったのです。

初歩魔法とは、魔力に地水火風光の属性のどれかを付加させて具現化させるものです。初歩と言っても、下手をすれば大事故に繋がるものなので、三年生までは固く使用が禁じられています。

この世界に身を置いて実感する事は、魔法はとても危ないと言う事です。世界中で初歩魔法だけで起こる殺人事件は山ほどあるのです。

それを物事の善し悪しをまだ理解しきれていない子供が使つのはとても危険です。四年生でも僕はまだ早いんじゃないかと思うくらいです。

「みんな、席について下さい。ホームルームを始めます」

緑色の髪の毛を緩いおさげにしたメガネドジっ娘のリリアン又先生が現れました。今年も先生が担任です。恐らく初等部いっぱい担任が変わる事は無いでしょう。

「今日のお知らせは、初歩魔法の授業は合同魔力測定になるので、四時間目が始まる前に体育館に集合できる心構えをしておいてくださいね」

えー！えー！？

ぶー！ぶー！

おお、ブーイングの嵐です。先生、学級崩壊のピンチです。しかし、先生がピンクの星がついた教鞭をサツと構えると、皆青ざめて静かになりました。

先生の「しゃらんら」で泣かされた生徒は数知れず。先生の「あっちゃっちゃった」で壊された学院の備品も数知れずです。

三時間目が終わった後、体育館へと移動する皆は（メラ君を筆頭に）とても不満そうです。

「なんでそんなに不満なんですかねえ？」

「しょうがないよ、みんな本やゲームのやりすぎで夢見ちゃってる

んだよ」

僕の問いに答えてくれたねはミズホちゃんでした。彼女には悪気は無いんです。むしろフォローしてるつもりなんです。だから泣かないで男子。

「あっ」

「どうしたのワピコちゃん」

「しまったー！体育館シューズを忘れてしまったー！」

僕がどこか遠くに聞かせるように大声を出せば、どこからともなく白い影が現れます。

「もう大丈夫だよ。ほら、これを使いなよ」

王子様です。優しげな目の彼の手には、サイドに可愛らしい天使の羽根がついている真新しい靴。

「いつもありがとうございます」

本当にわざわざ高等部からご苦労様です。お礼は僕の微笑みです。うっとりとした彼に手を振り、体育館に向かうのです。

「ワピコはいいわよねー。将来安泰ねー」

魔力測定のための列に並んでいると、ハニーちゃんが羨ましそうな目で僕を見てきました。ああ、さっきのアレの流れですね。

「王子様とはそんなんじゃないですよー。いつもたまたま僕が困った時に助けてくれるだけです。ただの優しさですよー」

「……ねえ、いつも思うんだけど、それ本気？」

いいえ、養殖です。

しかし、何が？と本気でキョトンとしてる（風な）僕を見て、ハニーちゃんはため息をつき「分からないならいいわ」と手を振ります。

まだ子供と言えど、そこまでされて気づかないならただの無神経だと思うのは、僕がひねくれてるからでしょうか？

「見てみてー、私魔力結構上がったんだよー」

ほんわかした笑顔でミスホちゃんが測定結果の紙を見せてくれました。どれどれ、580。ほほー、四年生の平均値が250ですから倍ですねー。さすが水の大貴族。

「凄いじゃないミスホ！私も行ってくるわ！」

ハニーちゃんのすぐ後ろだったので、直接覗きこみます。ほほー、492。ミスホちゃんよりやや劣り気味ですが、それでも平均値の倍近くです。

メラ君とヒュー君とペコちゃんもやって来て測定結果を見せてくれました。メラ君が512で、ヒュー君が624で、ペコちゃんはなんとダントツの931でした。さすが大貴族達です。

さて、僕はどれくらいでしょう？神様にピアスを貰ってから、魔力測定するのは密かに初めてなので楽しみです。

僕の周りに五人が集まって覗きこんでいます。学院で力を使った事は無いのですが、注目株ですね。ああ、そう言えば鬼ごっここの時はヒュー君に視認されていましたね。ですが、彼はムツツリだから一人でこっさり楽しむ派でしょうから他の四人にはバレていないでしょう。ただの好奇心ですかね？

血圧計みたいな器具に手を突っ込みました。見た目は何も起こっていないのに、ぐいぐい締め付けられてる感じがします。

横にある数字が僕の（疑似）魔力量を数字化していきます。

0…いきなり500…またいきなり飛んで1200…

その数字だけでも五人のみならず測っている先生でさえも驚いているのですが、まだまだ止まりそうにありません。

5000…38000…113000…99999

9…

……エラー

ピー！ピー！ピー！

と警告音がした後、魔力測定器はバネやらネジやらを飛ばして壊れました。

これまたテンプレ展開ですが、実際壊れるとなんか切なくなりますね。

「え…っと、元々壊れてたみたいですね？」

てへりんこ と首を傾げると、啞然としていた五人は納得して教室に戻って行き、僕は測定係をしていた先生に連れられて学院長室へ向かうのでした。

給食の前で帰してアホいなね...？

133 プレイ目『ふわふわって、もふもふって、すごいんだよ』

学院長室に来ました。僕はそこから見える展望に感嘆の声を上げながら窓(?)にへばりついています。

「こ、こらっコーさん！学院長の前ですよ！」

えー！だって、だって、凄いだもん！校門から見える塔のてっぺんがまさか学院長室だなんて思ってたんだもん！しかも白い壁にしか見えなかったのに、180度のパノラマだなんて凄いだもん！

絶景かな絶景かな！

「やっぱりナントカとアレは高い所が好きなんですよね！」

振り向いて問いかけた先には、豊満なバストを惜しみなく強調している美貌の人がいました。

「ふふ、じゃあ、私がナントカね」

「じゃあ、僕がアレですね！」

優しそうなおっぱい…いや、学院長に僕のテンション、もしくはジヨニーがみなぎります！

「こほん、宜しいですか？」

僕を連れてきた熟女手前の先生が威圧してきました。きっと、規律をこの上なく愛する人ですね。

「ええ、そうね。ワピコ・コーさん、もう一度魔力量を測りますからこちらへ来て下さい」

近寄ると、学院長も僕に近づくように屈みました。淡い紫色の髪の毛がサラリと僕の顔にあたって、ふわり、と甘い香りがしました。更には甘い香りに痺れているところに漢達の桃源郷、胸の谷間がどでーん！と現れました。

ダメです！僕の今は潜在しているはずのジョニーがGo！Go！Go！と叫んでいます！

「あっ」

誘惑に負けてしまいました。躓いたフリをして、豊満な胸の谷間に顔を突っ込ませてみました。

ミッシェンコンプリート！俺はやったぜジョニー！やり遂げたんだ！！

ジョニーが「よくやったぜ相棒！」と涙ぐんでいる気がします。

「う、ごめんなさい！」

僕は顔を赤くして慌てて離れました。今回は演技じゃありません。あまりの心地良さにのぼせてしまって、昇天しかけたので慌てて離れたのです。

「ふふ、気にしないで」

おお、天女様……

天女様は僕の手をその細く長い美しい指で持ち、そしてお美し

い口へ…………え？

がぶり

に”や”————つっつ！？

痛いです！それは八重歯ですか！？いいえ、それは牙です！！ああ！快感！！

「…………！？この魔力の質は…………」

魔力の質？？あ、もしかして学院長は人魔力測定器なんですかね？そもそも人なんですか？

「先生、ご苦労様でした。私はこの子とまだお話があるので先に戻ってらして下さい」

さようなら、ちょい役先生。もう貴女と会う事は無いでしょう。

「さて、さつきはビックリさせてしまつてごめんなさいね？私はヴァンパイア族でね、血を舐める事でおおよその魔力量と質が分かる」

なんと便利な。

「で、分かったのが、貴女の持つ力は魔力では無いという事。その力は私達などではとても想像すら及ばない至高の力であるという事」

おお、なんかそういう風に言われたら僕がとてつもなく神々しい存在な気分になってきます。

「貴女は……何？」

「僕は人間です」

「ぼかーん、としてますね。これはポケじゃありませんよ。ちょっと凄い力を神様からいただいたただの両性具有の人間です。」

「それなら、貴女の持つ力は何かしら？」

「からかわれてると勘違いしちゃったのでしょうか？学院長の目が険しくなっちゃいました。美女に睨まれると興奮しちゃいます。しかし、僕の力は魔力じゃないとバレちゃってますし、本当の事を言ってしまうって良いのでしょうか？研究所送りはイヤです。」

「神様ー、へるぶ、みー」

『いいですよ』

「コール音が鳴る前に電話に出るくらいの早さですね神様。さすがです。」

『ただし、彼女には、です。あまり知らない人には話しちゃダメですからねー』

「はい。」

「許可が降りたのでお話ししますね」

「誰からの？」

「神様です」

「ぼかーん、としてますね。ふう、テンプレ展開もたまに疲れます。

「僕は元々違う世界の人間で、訳あって神様のバナナで死んでしま
い、神様はお詫びとして僕を神様能力付きについでに両性具有でこ
の世界に転生させてくれたのです」

つまりは、僕男の子にもなれるんだよってアピール。

「……なんだか…嘘みたいなお話ね」

「なんなら僕のジヨニー見てみます?」

「そうね、見てみるわ」

秘密の花園中

「どつです?」

「すごく…立派だったわ…」

「いばる僕。憧れだった女性前露出デビューを果たし満足している
ジヨニー。頬を赤らめ、うっとりしている学院長。」

「あっそうそう、このお話は他言無用でお願いしますね?」

僕のイケメンスマイルに学院長はメロメロになって頷くのです。

放課後、みんなで鬼ごっこをして（主にメラ君に鬼を押しつけて）遊んでからお家に向かっている道の途中。

バナナを貪りながらこちらをガン見している黄色い服を着た金髪碧眼のイケメンがいました。

どこの世界にも似たような変態がいるんですね。うっかり皮を踏んずけないようにしないと。

「ヒンヒョ…んぐんぐ…君」

「人違いです、僕はキンギョではなくてワピコです」

「今回は騙されません。何故なら、今のキミには私と同じ熱く滾る血潮のごとくな力があるのですから。つまりはキミは私の直系の娘的存在なのです。さあ、お父さんの胸に飛び込んでおんぐんぐ」

話の途中で食べ始めるなんて、そんなにバナナが好きなんですね。

「では、お父さん神様、今日はわざわざどうしたんですか？」

「今日はこれです」

テレレッテレー

神様が効果音付き（実際にドコかから聞こえてくる）でお腹に付いているチェック模様の半楕円ポケットから月型ピアスを取り出してきました。神様はドミちゃん派のようです。よく見たら、お尻にお花を無理矢理押し込むように付けています。

「そろそろ、キミのイメージを固定させようと思ひまして。ちょうど黒猫も侍らせている事ですし、制服もセーラー服っぽいですし、前世が月の王女の美少女戦士とかどうかないと思ひ作りました。ついでに、擬似魔力が数値にして1000くらいに表示される効果付きです」

「なるほど、月にかわってお仕置きする訳ですね。しかし、僕はお仕置きされる方が好きです。ですが受け取っておきましょう」

「これから毎年調整に来ますので、魔力測定の前には呼んで下さいね」

むむ、これから毎年僕はバナナのオカズにされるのですか。しかし、背に腹は変えられません。大人しく頷いて、何故か神様と一緒に帰り、夕御飯まで一緒に食べたのでした。

14 プレイ目『どんなに可愛かろうがストーカーはストーカーです』

今、僕達黄色組は魔法実技室3へ来ています。実技室と言っても、別段教室と変わった感じはありません。壁には魔法障壁が張られ、一人一人の机の間隔が少し開いているくらいでしょうか。これから皆が待ち望んだ初歩魔法が始まるものだから、皆そわそわと落ち着きがありません。

ドアが開き、よいしょ、よいしょ、と先生が大きな箱を持って来ています。とても大変そうです。僕は先生の為にこっそり鉛筆を転がしてみました。

「ひゃうっ……あー！ー！」

うんうん、見事な転びっぷりです先生。散らばった物を慌てて涙目で拾う姿もなかなかの高ポイントです。それでこそドジっ娘です。ほら、ムツツリス男ヒュー君も満足そうにしています。僕って友達思いですね。

しかし、先生の動作はトロク拾うだけで授業が潰れそうな勢いです。仕方なく僕も他の生徒と共に拾う事にしました。

「ワピコちゃんは本当にいい子だねー、たとえそれが偽善だとして
もー」

さすがにこれはツッコませていただきます。それはただの悪口ですミズホちゃん。事実だけにグサツとききます。

片付け終わり、箱の中のものは先生が改めて皆に一つずつ配って結局僕達の元にきました。それは透明な紐に七色に光る小さい石がポツンと一つ付いた可愛いブレスレットでした。

「それは、発動する魔力が一定量以上にはならないようにする制御魔法具です。それを外すには、初歩魔法知識、魔力コントロール、そして心理テストの三つを合格しないと外れませんので頑張ってください」

女の子は特に騒いでいないのですが、男の子達は「女みてえ……」とブレスレットを鬱陶しがっています。

そうですかね？ シンプルですから、シンプルでスマートな服装に合わせるとワンポイントになって格好良く見えると思うのですが。

こてん、と首を倒してそれを言うと、自称「スマートに生きる男」が教室を占拠しました。男って単純バカです。服装の事を言ったのに何故生き様になったのでしょうか？

そんなこんなで初歩魔法の授業が始まりました。最初は危険の少ない水属性からです。

まず、魔法を使うには各種属性の精霊と契約しなければなりません。知識が未熟な人間が精霊を喚ぶには魔法陣が必要です。なので、A4サイズの紙にコピーしました。感じての魔法陣を一人ずつ配られ、皆机の上に置いてそわそわしながら座っています。

「さあそれでは精霊さんを喚んでみましょう。魔法陣に手を置いて、魔力を流して。先程教えた呪文を唱えましょう。さんっはいっ」

サランヘヨ

地球にいた頃、お隣の国の愛の言葉を皆で合唱しました。この世界では古代オチヨン語の愛の言葉です。どちらにせよ愛の言葉です。召喚の呪文は魔法陣の術式によって変わるので、言ったら魔法陣を描いた人の趣味です。つまりは先生の趣味です。

ギョっとなりました。神様パワーで一瞬にして魔法陣の術式が変わったのです。紙の上に手を置いていた僕から強制的に神力が引き出されてあわあわしているうちに魔法陣が発動してしまいました。

まず、見えたのは水でできた小さな手でした。そして絵に書いたようなしずくの形をして小さい点が離れた所に位置する目だけが付いた顔。最後に、顔よりも小さい楕円にちよんちよんとした手足が付いているだけの身体。

ああ、なんかのジューズのキャラクターにいそくだなって感じのやつができました。全体的に丸々していて可愛らしいのですが、出てき方が貞子のようなだったのでちよっとな引きました。

「きゃー可愛いーこんな可愛い精霊もいるのねー」

「私でも見た事無いなー、結構上位の精霊だったりして？」

ハニーちゃんは可愛いモノ好きなのでキャラクター言っています。そしてミズホちゃん、君の言う通りです。これは可愛いキャラクターの皮を被った『精霊神』です。王どころか神が出てきてしまいました。

しかし、皮を被っているのでクラスメイト達は気付かずに（主に女子達が）キャラクター言っています。さすがに先生は気付いてしまったようでちよっとな困ったような顔をしています。それだけの反応で済むとは先生は想像よりも凄いのかもしれません。

それよりも、今は契約するフリをしてさっさと終わらせましょう。僕は神様スペックなので契約していなくとも使役する事ができるのです。

「契約しましょう」

無いはずの口がニヤリ、とした気がしました。悪寒が走ったのですが特に変わった事は無く、小さい手を繋いで契約（のフリ）をして、精霊神は大人しく帰っていったのでした。

……？感じた悪寒は僕の勘違いだったのでしょうか？

そうして無事に初めての初歩魔法の授業は終了しました。

帰宅して、悪寒の正体を知ります。

玄関で僕を迎えてくれたのは、心友黒猫ジャックと……その背に我が物顔で乗っている水の精霊神でした。

よし、推測してみましよう。

「契約は『フリ』ではなく、他の何かの契約だった。それは僕と一緒にいられるような類のもので、これからは背後霊のごとく僕に付き纏う……という事でいいですか？」

満足そうに頷くひ ちゃん君（仮）。

何故そんな事をするのか、という考えは無粋と言うものです。だって異世界転生モノですから。やたらめったに好かれるのが常識なのです。この調子だときつと他の四精霊も僕の背後霊になる事でしょう。

そして、その予想は当たり、ひ ちゃん君（仮）に似たり寄ったりな姿に形を変えた精霊神達にストーキングされる事になりましたとさ。

15 プレイ目『悪ノリってやつです』

「ワピコ、今日は二人で帰ろう」

あらやだペコちゃん、おデートのお誘いですか？ちょっと待ってね、ジョニーに確認してみますから。

ジョニー「Go!Go!Go!」

ジョニーは戦意満々です。

「なんだよペコー！オレも一緒に帰るー！」

「そうですペコ。抜け駆けは許しません」

その意気ですメラ君、ヒュー君！僕のジョニーが暴れないようにもつと皆で帰るように推すのです！

「今日は皆で天まで届け！マウンテンチュロスを食べに行くって言うたじゃない〜」

「そうよ、ペコ。二人っきりはまた今度にして、今日は皆で帰りましょ〜」

ミスホちゃん、マウンテンチュロスの約束はしてませんが、いい攻めです！ハニーちゃんもいつものようにナイスフォローありがとうございます！

「今日は皆で帰ろ〜？」

トドメの僕のイケメンスマイルです！ペコちゃんの抵抗力は0に

なりました。ほら、僕が手を繋いでもいつものように振りほどきません。

ボソツと「ワピコ、覚えてるよ……」と言ったのも、ただのツンデレ発言にしか聞こえませんか。

そして、仲良く六人で帰りました。

ふいー、助かったー。

ペコちゃんてば隙あらば「兄さんはどうしてる？」とか「いつ会える？」とかばっかり聞いてくるんですよね。

実はあれから僕は一度もポコ君に会っていません。

遠視鏡という対象者を覗ける神様アイテムでちょいちょい見ていたのですが、生きようと頑張る姿、人を拒絶する態度、ボロボロになってもガムシヤラに強くなるうとする姿を見ているうちに、日に日に罪悪感は積もり積もって行って、どんな顔してポコ君に会えばいいのか分からずに、いつしか顔を見る事さえも辛くなって最近はおっぱら“蒼い稲妻”こと今はポコ君の養父ビーさんから話を聞くくらいしかできていません。

ペコちゃんだけでも会わせてあげようと思ったんですが、ビーさんの情報によると、ポコ君はピカルツ家をそれはそれはとても憎悪しているらしいのです。

きっと、その憎悪はペコちゃんにも向けられていて、会えばきつとペコちゃんはとても傷ついてしまうでしょう。ペコちゃんの哀しむ顔なんてみたくありません。

はてさて、どうしたものか。

お家に帰ってジャックと精霊神達とゴロゴロしていると、歌が高らかに響きました。

「ごめんねー素直じゃなくてー 夢のなーかなーら言ーえーるっ
月のモチーフが付いた手のひらサイズの携帯通話魔法具（神様デ
ザイン）の呼び出し音です。おお、噂をすればのビーさんです。」

「むーん！ぷりずむばわー！」

『ワピコか！？助けてくれ！！』

僕のなりきり美少女戦士が無かった事にされました。おのれ、子
々孫々呪ってやる。

「どうしたんですかビーさん？暑苦しいですよ？」

『俺の手に負えない魔物が出た！ポコが危ない！助けてくれ！』

なんですとー。

ポコ君が危険です！ビーさんは後でお仕置きです！助けに行かな
ければ！

しかし、僕はポコ君に合わせる顔がありません。どうしましょう。

「にゃー！（ワピコちゃん！変身よー！）」

黄色い折り紙を三日月の形に切り額に貼り付けてなりきっている
ジャックが、サツと丸いコンパクトを差し出してきました。

分かりました！今こそあの台詞が活きる時ですね！

むーん！ぷりずむばわー！

コンパクトを掲げるとパカッと開き、シャララランという音と共にぷりぷりな光りが溢れ出しました。

瞬く間に僕の服が変わっていきます。

ゆったりとしたクリーム色のワンピースから、超ミニのセーラー服をちよつとイジつたようなどう見ても戦闘向けじゃないけど美少女戦士の戦闘服へ。

髪の毛は高い位置にある二つのお団子から髪の毛を垂らし、額にはティアラが付いています。

そして、ここでポーズ！

「月にかわつてお仕置きです！」

ちなみに、服の素材は精霊神達です。

あつ変身したのに顔が丸見えじゃないですか。これじゃ元の木阿弥つてヤツですよ。確かお父さんの工房にいくつか仮面がありましたね。借りましょう。

工房に向かう途中、お父さんに発見されてパラッチされたのは言うまでもありません。

「はあつはあつはあつ」

断崖絶壁の荒れ果てた古城の中、男の子が大きな汗の粒を浮かべて走っていました。

艶のある黒い髪。子供らしいふっくらとした頬。少し筋肉の付いた手足。

あの頃とは見違えるほどにポコ君は健康的になっていました。

本来ならば感動するシーンです。……そう、彼がゾンビと化した遙か古の竜王に追われていなければ。

一体全体、何がどうなってるんでしょ？

それは後でビーさんにじっくり聞くとして、今は竜王撃退に全力を注ぎましょう。

「セー　ーキック！！」

足に浄化の白い炎を纏わせて横っ腹に突入しました。

竜王は屍肉を撒き散らしながら大きな音を立てて壁に突っ込みます。

「な…なんだ…？お前…？」

ポコ君が！ポコ君が喋っています！ああ、そんな声をしていたのですね、ああ、ああ、感動で震えてきてしまいました。

オ”オ”オ”…オ”オ”オ”オ”

地の底から響いてくるようなおぞましい声が聞こえました。

やだ、ゾンビ怖い。並のゾンビならさっきのキックで瞬殺なくらいの威力だったはずですが、さすが古の竜王。まだ動けるようです。壊れた壁からのそり、のそり、と這い出して来ます。動く度にびちゃびちゃと鳴る腐った肉と、そこから漂う腐臭が僕の胃に刺激を与えます。おえええつ。

「おいつ大丈夫か！？逃げるぞ！！」

有無を言わず背負われました。やだ、ポコ君たら強引なのね。

「ねえ！僕を背負ってたりしたら逃げれないよ！？降ろして！」

「大丈夫だ！俺、足はめっちゃめっちゃ速いんだ！」

それは僕が作ったペンダント効果のおかげです。

ポコ君の首からチラチラ見えるオリハルコン製のチェーンが僕の胸を締め付けます。

まだ、付けていてくれたんだね。ありがとう。

「ポコ！こつちだ！」

天井が崩れ、吹き抜けのようになっていた大広間で声が聞こえて見上げてみると、ビーさんが五階らへんからワイヤーのようなモノを垂らしてきています。

ポコ君がそれを掴むと、生きているようにそれはシュルシュルと彼の腕に巻き付き、ジェットコースターのような勢いで上がっていききました。

僕の三半規管がブローケン！

そして、勢いづいた僕達をビーさんが野性味溢れる体躯でキャッチ！固痛いです！

「ごおおおお！」

と凄まじい音が聞こえたので下を見てみたら、僕達がいた広間は黒い炎で埋め尽くされていました。

もう少しタイミングが遅ければ、僕達は消し炭になっていた事でしょう。

ハラハラ、ドキドキ大冒険ですね。

「お、おい、大丈夫か？ やっぱりお前でもアイツは無理か…？」

いいえ、胃と三半規管がやられているだけです。

「親父、コイツ知り合いか？」

「そつだ。コイツはお前を…」

おーつと！それは必殺美少女ビンターー！

それはまだ言わない約束だぜ旦那？

尊敬する養父を一発で沈める美少女を唾然とした感じで見るポコ君。

そんなポコ君に向かって毅然とした態度でポーズをとる僕。

「僕は通りすがりの美少女戦士！ 善良な市民を襲うゾンビを月にかわってお仕置きしに来たの」

ポコ君の瞳がキラキラしています。彼の中の何かが目覚めたようです。

さて、もう少し摩訶不思議アドベンチャーを楽しみたかったので、油断は禁物です。甘く見ていて後で後悔するのはもうごめんですからね。

これは、ただのイベントではなく、生死がかかった戦闘です。全力でいきますよ！

しゃらん、と僕の手には白銀に輝く錫杖が現れる。それを、先ほどからこちらに登ってこようとして自分のぬるぬるとした肉で滑り落

ちる、といった行動を繰返している間抜けな竜王に向けました。

「全能なる光よ…堕ちた魂に安寧なる眠りを…」

柔らかな光がゾンビになってしまった遙か古の竜王を包み込みました。

最初こそ苦しげにいましたが、最後には安らぎを得た赤子のように、眠るように光に溶けていきました。

ふう、ミッションコンプリートです。

多分そろそろお夕飯の時間ですね。お母さんの潜在悪魔の角がよきによきしないうちに帰らないと。

「また…会える…?」

帰ろうとした僕をポコ君が名残惜しそうに見つめてきます。

やめて下さい！そんな純粋な瞳で見つめないで下さい！溶けてしまします！

応えは何も返さないまま、ただ僕は少し微笑んで、月に向かって飛んで行ったのでした。

後日。

ポコ君がもつぱら銀色の髪のお人形を買ってきては美少女戦士へアーにさせて遊んではかりいるという話を聞き、ポコ君の将来が少し心配になりました。

16 プレイ目『僕ってば悪女です』

さて、僕は五年生になりました。日々ゆるゆると生きております。成績は学年で一番をはらせて頂いていますが、飽くまで『天才』レベルではなく『秀才』レベルを維持しています。

例えるならば、陸上部ではない学生レベルの100メートル走で二位との差が0.2くらいのレベルです。

理由といたしましては、僕は『最強チート』向けの性格はしていませんからです。

正義感溢れる真っ直ぐ少年でもありませんし、俺様になれる程の甲斐性もありません。面倒事は華麗にするりとかわしてしまうスキルを持っていますから巻き込まれ体質でもありません。

そんな性質と、温い現状を気に入っている事を踏まえまして、『秀才』レベルを維持しています。

そんなゆるゆると過ごしている僕ですが、憂鬱な事というものもあります。

最近、巷では『美少女戦士ブレイザームーン』という漫画が流行っており、あちらこちらでで見かける度に僕の胃がしくしくとしまつてしまつたのです。作者は伏せられていますが、ポコ君である事は一目瞭然です。

しかし、彼が美少女戦士マニアになってから徐々に明るくなってきて、お外（美少女戦士同好会）に自主的に遊びに行くようになって聞かされれば責めるに責められませんが、

ポコ君に甘い僕でした。

うららかな春のある日の事。王子様がパーティーの招待状を持ってきました。

「今度僕の誕生日パーティーがあるんだ。来て貰えるかい？」

次で御歳十六歳になられる王子様は、そろそろ婚約者を決めないといけないらしく、最近呼んでもいないのに色々な理由をつけては僕の所に猛烈アピールしにきます。

「とても行きたいのですが…僕は男爵家ですし、そんな高貴な方々が集まるような場所は場違いかと…」

弱々しく俯いてみせる僕。こういうタイプはこつやって庇護欲をそそってあげると勝手に燃え上がるんですね。

「そんな事……！？キミの存在はどんなものよりも気高く美しい！もし、キミを傷つける者がいたとしても、どんな事があっても僕がキミを守ってあげるよ！」

控え目に嬉しそうな顔をする僕を見て、真紅の瞳を優しく気に細める純粹培養の王子様。

でも期待させちゃってごめんねー、実は行けないんだー。

ポコ君が僅か九歳でギルドランクSになっちゃったもんだから、将来有望株として特別にパーティーに招待されてるネタはあがってるんですね。

せめて仮面舞踏会なら行っても良かったんですが、ポコ君に面と向かって会う勇氣はまだ無いのですよ。

「あつその日は、お父さんの嫁のお母さんの娘の夫のお母さんが出産予定日でした！僕が取り上げる予定なので、もしかしたら行けないかもしれません…」

つまりはお婆ちゃんの出産予定日です。勿論、嘘です。

「そう…それなら仕方ないね…そちらの方が大切なものね…」

可哀想な程しよんぼりとする王子様。ごめんね、嫌いだから行かないんじゃないんだよ。むしろ、その純粹さにとても好感を持っています。

僕のばーじんはやらんがな！

「えー？ワピコちゃん行かないのー？」

教室に戻ってパーティーの話をミズホちゃんにするととても残念がっていました。彼女の声いつものメンバーが集まります。メラ君は相変わらず騒々しく騒ぎたて、それをヒュー君とハニーちゃんが諫め、冷たい目でペコちゃんが……

アッー！

そうです！ペコちゃんが問題じゃないですか！五大貴族はパーティーに行くんですから、ペコちゃんも行くって事じゃないですか！そしてその場にはポコ君も……

ああ、どうしましょう…切腹をしてまでペコちゃんの会場行きを妨害しましょうか……

ごめんねー素直じゃなくってー

おっと、携帯通話機を無音にしておくのを忘れていました。着信画面を見ればピーさんでした。いつもポコ君の事を考えているとかかってきます。その動物的本能的なものには戦慄を覚えるかぎりで

す。

「一応、廊下に出て通話機に出ます。」

「このケダモノ！」

「俺がお前に何をしたって言うんだ！」

「しいて言うなら、獣臭い？」

「まあ、いい。お前、今度の休日何してる？」

「ちょうど王子様のお誕生日パーティーの日ですね。護衛かその類の依頼ですか？」

「僕はギルド登録はしていませんが、ビーさんの仕事をちよいちよい手伝っています。ポコ君のお世話を押し付けてしまったのですからその恩返しというやつです。」

「さすが、話が早くて助かるな。実はブリーフ教団の過激派がパーティー会場にテロ行為を行うという情報が入ってな。人手は多い方がいいし、ワピコが来てくれるなら心強い。手伝ってくれるか？」

「勿論です！お友達がわんさかいる場所にテロのテの字も入れさせません！！」

「あつついでにポコ君とペコちゃんの接近を妨害すれば一石二鳥ですな。」

「二兎追う者は一兎をも得ずにならないように頑張ります！むしろ入れ食い状態に持って行ってやりますとも！！」

『お、おお…？よく分からんが、頼む…』

王子様の誕生日パーティー。

それが、僕達の運命の歯車が狂い始めた日でした

…

すみません、言ってみただけです。なんの意味もありません、反省します。

17 プレイ目『喧嘩の仲裁は犬も食いません』

近代的な建物が建ち並ぶ王都の中央。時代に取り残されてしまったかのようなその白いお城は、しかし壮麗で、やはりこの王都の主はこのお城だと感じてしまう程美しいものでした。

そのお城の中では、第一位王位継承者であるラビト王子の誕生日パーティーが行われていました。

大広間から漏れる煌々とした灯り、優雅な音楽、人々の華やかな笑い声、それらを僕は遠くから眺めていました。

美少女戦士の姿で。

「なあ…聞いていいか？」

「却下します」

ビーさんの言いたい事は分かります。何故、この格好をしているのかと聞きたいのでしょうか？

その問いの答えは、ポコ君に見られてしまった時の為です。

どんな変装をしようかと悩んでいたところ、神様が僕の頭の中でずっと美少女戦士のあの歌を歌っていたので、結局これしか考えつかなかったのです。

それでも、ポコ君が喜んでくれるならいいかな…と一瞬デレてしまったのは秘密です。

僕とビーさんは今お城のてっぺんにいます。まだ肌寒い春風にびゅーびゅー吹かれながら遠隔監視中です。

どうやって遠隔監視しているのかと言うと、僕が昨日までにお城

の内外をこつそりと回り、いたる所の植物や物に『目』を付けて、それらを携帯型テレビと接続させて、ビーさんと二人で慌ただしく切り替わる画面をチェックしているのです。魔法世界なのに、地球にいる施設警備員になった気分です。

僕はぶらす、ペコポコ遭遇を阻む為に遠視鏡で大広間を覗いています。思った以上に目に過酷な作業です。

ちなみにここにいる理由は、単純に中心にいればどこで何があっても動きやすいだろーって理由なんです。春風を侮っていました。とても寒いです。

アツと、ペコポコ接近中！総員ただちに配置につけ！

わらわらとペコちゃんとかポコ君の間に僕が造って会場に紛れ込ませた人形達が集まり、人の壁を作って視界を遮ります。

ふいー、危ない、危ない。

「…っ！？ワピコー！」

「分かってますビーさん！」

真上から巨大な魔力を感じました。なんて事でしょう、僕達の目の疲労は全くの無意味な事になりました。

お城の上に巨大な魔方陣が現れました。あれは『魔神の手』を召喚する禁術です。

巨大な魔神の手が掴んだ物は全て闇の塵となって消え、掴まれた者は魂を闇に囚われ永久に苦しむという恐ろしいものです。

「あれは…！？ブーリフ教団め！なんて非道な奴らなんだ…！！」

ビーさんもアレの恐ろしさを知っているようです。トランシーバ

ーのような魔法器具を取り出し、城内外で警備をしている人間に避難を呼び掛けようとしている彼を止めました。

「任せて下さい」

だって僕チートですから。

不安の色を隠せないビーさんを横目に白銀に輝く錫杖を召喚します。

今度は無差別に光らせないように意識を空へと集中。

「全てを救せ！全能なる光よ！」

魔力無効の光を放ちました。魔神さんの爪の部分がちょっとこんにちはしていました。光に包まれてさよならです。

光が治まった空には、魔方阵などカケラもなく、三日月が浮いているだけでした。

下では庭に出てざわざわと空を見上げる人達。多分魔方阵の事は気づかずに、いきなり現れてすぐに消えた光に驚いているだけでしょう。

「お前…なんていうか…本当に凄いな…？」

だって僕、愛と正義の美少女戦士ですから。

あんな大規模な魔方阵は相当な準備期間と相当な人数の魔力が必要ですからもうアレは出てこないし、過激派の連中もへ口へ口になっている事でしょう。任務完了って事で帰っていいですか？

春風の奴めに冷やされた体がお風呂を求めています。ほら、鼻がむずむず…

「ぶえつくしょーん！」

おおよそ女の子らしくなくしゃみをしたら、足を踏み外してしまいました。

アツとした顔のビーさんが手を伸ばすも僅かに届かず。僕は屋根の上から空中へと放り出されます。

僕、またもや死亡？

なーんて、僕は空飛べるから大丈夫です。

三階らへんまで落ちたところで力を発動させようとしたところ、黒い影が凄いスピードで壁を駆け上がってきて僕をお姫さま抱っこして地上に着地しました。

黒い礼服につやつやの黒い髪の毛。ポコ君です。

「美少女戦士……」と熱い視線を投げかけないで下さい。

ほら、何かと人が集まって来てるじゃないですか。早く離しなさい、あんな所にペコちゃんもいるんですから …… って、アツ

「……兄さん？」

ペコポコ遭遇。僕の心労ゲージはぐいぐい上がり中。

「……誰だ？」

「僕だよ！ペコだよ！いもう……兄弟の！」

「……俺の家族は、育ててくれた親父だけだ」

ペコちゃんは予想通り、とてもとても傷ついた瞳をしました。泣きそうになるのを堪えているのが分かります。

ああ、ダメです。泣かないで。ペコちゃんは笑った方が可愛いんです。

なのに、そんな僕の心中とは裏腹にポコ君は辛辣な言葉を吐き捨てました。

「さっさと消えろ」

堪えきれなかったのでしょうか、ペコちゃんの顔がクシャツと歪み、どこかへと走り去って行きました。

パンツ
…

思わずポコ君の頬を叩いてしまいました。僕はそんな熱いキヤラではありませんが、でも、色々な悔しさが込み上げてきて、体が震えだします。

「ポコ君の気持ちは分かる。いや、僕なんかが理解できるようなものじゃないけど。家族を恨んでしまった理由は理解できる。でも、あの子は……ペコちゃんはいつだって君の心配ばかりしてた。毎日、僕に兄さんは元気？兄さんは、兄さんは……そんな、優しい子の気持ちまではね付けて、あまつさえ泣かせてしまう奴なんて……っ」

僕の目からポロツと涙が溢れた。どうしよう、言葉が詰まって何を言ったらいいか分からない。

「嫌いだー！ー！ー！ー！ー！」

逃げ出す僕。

子供の捨て台詞みたいな事しか言えなくて、恥ずかしくて逃げました。

鼻をぐずぐず言わせながら庭園を歩きます。今は美少女戦士のコスチュームに化けている僕のストーカー達が『大丈夫？』と心配してくれています。大丈夫です、ただ迷子になっているだけですから。

…ぐすっ…ぐすっ

不思議の国の迷路のような庭園を抜けた先の噴水の前に、蹲って泣いているペコちゃんがありました。

なでなでしてあげようと歩を進めようとした僕はハタ、と止まって考えます。

今、僕は美少女戦士。女の子を慰めるのは紳士の務めではないのか……と。

精霊神、モードチェンジ！！

コードネーム『タキシードお面』発動！！

美少女戦士の戦闘服が光に包まれて姿を変えます。

超ミニセーラー服からタキシードへ。ティアラからシルクハットへ。髪の毛はシルクハットの中へ。女の子からジョニーへ。

いざ、出撃！

「お嬢さん、どうしたんだい？」

ビクツと振り向いたペコちゃんの瞳は真っ赤に充血しています。

「あなたには関係無い」

ツーンとするペコちゃん。ところがどっこい、関係あるのです。ポコ君をあんな風にしてしまったのは、僕にも責任があるのです。なので引き下がる訳にはいきません。

「ごめんね、実は事情を知っているんだ。君のお兄さんはとても辛い思いをしてね、ピカルツ家をとても恨んでいるんだ」

ペコちゃんはハツとしてこちらを見ました。思い当たる事があるのでしょうか。

「でも、君への恨みは勘違い。僕は君が優しい子だと知っている。大丈夫、その勘違いを僕が正してみせるよ。だから……」

サツと一輪の薔薇を差し出す僕。

「笑って？君の笑顔はこの薔薇より美しい」

イケメンタキシードスマーイー！

……僕、カッコいい……（うっとり）

ペコちゃんは薔薇を受け取って、頬を赤らめ惚けています。大成功です。

「それでは、お嬢さん。またお会いしましょう。アデュー！」

僕はマントをひるがえし高笑いしながら飛び去りました。
イケメンって何しても許されるんだな！。

…後日。

ペコちゃんが『美少女戦士ブレザームーン』に『タキシードお面
様』が出ている事を知り、全巻買い揃えた後グッズを買い漁った拳
げ句に『美少女戦士同好会』に参加するまでになったそう。

そこでポコ君と再開。美少女戦士話しに華を咲かせてアツサリ和
解したそう…：僕、道化。

アツサリ和解した裏に、僕に「嫌いだー！」と言われた事が相当
効いたらしく、そして美少女戦士の言う事に間違いは無い！といっ
た思い込みも混ざって、ペコちゃんへの考えを改めたという話しが
あるらしい。

何それ、こわい。

18 プレイ目 『修学旅行初日です』

六年生になりました。成長期な僕らはぐんぐん背が伸びています。僕は156センチにまで伸びて、おっは いももうBカップまで成長してしまい、もういたいけな子供という武器が使えなくなってます。てしまつて淋しい限りです。

今年の六年生の組のテーマは『枝毛の数』というなかなかシユールなテーマです。まあ数字なので呼ぶ時はそんなにおかしくありません。僕達は『3本』組になりました。

「3本組〜！集まつてください〜い！」

今日は三泊四日の修学旅行初日です。行き先はまだ教えられていません。ですが、旅のしおりに持つていくものの覧に『バナナ』があつたのが不信感を抱かせます。

先生が生徒達をバスへと誘導し始めました。どこでもドアで行けばいいじゃないかと思う方もおられるでしょうが、移動時間も旅の醍醐味というものです。

僕がバスに乗り窓際に座ると、周りを権力とそれに伴う実力で他を押し伏せ見事に五大貴族達が固めました。そんなに僕の側にいたんですね。照れます。僕の席の隣に座る権を得たのはヒュー君です。

「ワピコ、君は行く先はどこだと思ひます？」

「無難に観光地……が好ましいんですけど、儂い夢ですかね？」

そんなんです。この学院の修学旅行は毎年ちょっと過酷なものが多く、水だけ持たされて無人島に放り込まれたりとか、断崖絶壁に建つ旅館までロッククライミングさせられたりとか、普通の観光地に行ったとしてもご飯にありつくには近くの火山に鎮座している火竜の糞を取ってこないといけなかったりと、旅行と言つ名のサバイバルばかりなのです。

「それでは出発します！皆様上空に出ましてシートベルトマークランプが消えるまで席を立つ事の無いようお願いします」

妖精族のバスガイドのお姉さんが注意を呼びかけます。この国は基本地上で車を走らせてはいけないので、今回は目的地に着くまで空の旅となります。

ふわっとバスが浮いて、空中道路へと入ります。一見透明に見える空中道路ですが、一定の高度まで上がれば見える仕様になっています。順調に道路に乗り車内が安定すると、ぴろりろり〜ん、とシートベルトマークランプが消えました。すると待っていたかのように子供達がはしゃぎ出します。

僕の前に座っているハニーちゃんとミズホちゃんも同様に、嬉しそうにお菓子を持ってこちらへ身乗り出してきています。ふふふ、いくら大人びていてもやはりまだ子供ですね。生きた年数が地球時代と合わせて三十路近いおっちゃんから見たらとても微笑ましいです。

「ねえ、バナナって何に使うんだろうね？非常食？」

ミズホちゃんが皆の気になる話を代表して言いました。

「今から行く所にいる魔物の好物かもしれないわよ」

「なるほど、それを餌に気をそらして逃げる戦法ですね」

莓子ヨコを食べながら言うハニーちゃんに、ヒュー君がふむ、と手を顎にあてて答えました。

「え？ただのオヤツじゃねーの？むくむく」

そうですね、メラ君には先を考える頭はありませんよね。

「お、お前！この馬鹿！今バナナ食べてどうするんだ！？何かあつても僕のバナナあげないからな！」

タキシードお面様のシールが貼つてあるバナナケースを握り締め、ペコちゃんが叫んでいます。最近、ちよつとずつ女の子らしくなつてきていますが本人は気づいていません。他の四人に既に女の子だとバレている事にも気づいていません。

「みなさ〜ん、右手にございます湖をご覧下さ〜い。」

王都を出て小一時間経つた頃、バスガイドのお姉さんが促しました。窓の外を見ると、美しい森に囲まれた虹色に輝く湖がありました。とても神秘的です。

「あの湖はかの有名な妖精王ベロベロンが、妻に喧嘩で負ける度にあの場所でこつそり泣いていたところ、涙が溜まってできたと言われる悲劇の湖です。今も女に泣かされた男達が傷を舐め合う負け犬の聖地となつております」

なんとという恐ろしい場所でしょう。僕もお世話にならないように気をつけなければ。

そんな名所をいくつか通り過ぎ、お昼前に漸く目的地に着いたようです。バスが降り立ったのは妖精王の涙ではなく、普通の湖の横でした。降りて周りを見渡すと、そこは地平線が見える程広大な草原。たまにこの木なんの木的な大きい木があるくらいで、一体ここで何のイベントがあるのかと首を傾げるくらい何もありません。

六年生全員が降りて整立すると、体育会系の熱い学年主任が現状説明をし始めました。

「えー！今日はこれからお前らに自身が泊まる施設を作ってもらおう！」

ざわ…ざわ…

周りが顔を合わせ合って不安そうな顔をしています。僕も不安です。この体育会系が、魔法を使わず己の肉体一つで家を建てると言いそうで不安です。

「材料は今から配る魔方陣から出てくる！余った材料はまた魔方陣の中へ還してくれ！では、班代表者はそれぞれの担任の所へ行き魔方陣を受け取ってくれ！」

良かった、ちゃんと材料はあるみたいです。うちの班のメンバーは当然、僕、メラ君、ヒュー君、ペコちゃん、ハニーちゃん、ミズホちゃん、リーダーは僕が上目遣いを駆使してヒュー君になってもらいました。

班別に指定された場所でお弁当を食べながら待っていると、ヒュー君が数枚の魔方陣を持って来ました。

「どうしてそんなに魔法陣があるんですか？」

「これが木材、こちらがセメント、後、ガラスに鉄筋に畳に布団用

材料にガーデニング用品に……」

何やら本格的ですね。立派な庭付き一戸建てができそうです。

「何だか色々ありすぎて何使っていていいかわからないわね」

「そうですね。まずどんな物を建てるか設計しなくては」

ため息をつくハニーちゃんにヒュー君が冷静な事を言います。冷静なのはいいですが、建築知識を持っているのでしょうか？基礎がしっかりしていないのに、むやみやたらに大きい家を造るとペしゃんこになっちゃいますよ？

僕が、ぴかー、ででーん、みんなぼかーん、というチート展開してあげても良いのですが、ここは子供達の豊かな発想と才能を伸ばしてあげる為に助言程度におさめておきましょう。

「やっぱりデツカいのがいいよな！？そんでデツカいロボットに変形できるようにしてさ！魔物が出たらそれで蹴散らすんだ！！」

「馬鹿かお前は。ピンチの際にはタキシードお面様が来てくれるに決まってるだろう」

「やめなよ二人共。夢見てると現実を知った時に打ちひしがれちゃうよ」

喧嘩を始めたメラ君とペコちゃんをミズホちゃんが止めます。ミズホちゃんは天然だと思っていたのですが、実はワザとだという事を最近知りました。この僕を欺くなんて侮れませんね。やはり女という生き物は奥深く恐ろしい生き物です。

そんな三人を横目にハニーちゃんとヒュー君、時々僕は着々と設

計を進めます。軽いプレハブ程度の設計図も貰っていたようで、それを元に割りとしつかりした二階建ての家を造る事になりました。部屋は仕切らず、十二畳程の部屋を各階に一つずつ。男子は一階、女子は二階です。お風呂は近くの温泉へ。お手洗いや洗面所は先生方が共同のを建設中です。

さて、設計図もできて建設に取り掛かります。

まず、地属性が得意なハニーちゃんが土を掘りおこし、そこに風属性が得意なヒュー君とまあまあ得意なメラ君が風で鉄筋を持ち上げ組み立てていきます。型作りが終わったら、ミズホちゃんがセメント粉を水で溶かして作っていたセメントを、ペコちゃんが光の障壁で作った型の中へ皆で流し込みます。

さて、ある程度形が出来上がったら、いよいよ僕の出番です。

「しゃらんら」

リリアン又先生の真似をして余った短い鉄筋を振ると、あら不思議。

打ちっぱなしのセメントが柔らかいクリーム色へ。無骨な四角い建物の屋上からは可愛らしいお花がついた蔦が垂れさがり、窓やドアなどの細かい部分にも木でできた可愛らしいお花のモチーフが散りばめられ、とってもメルヘンなお家へと姿を変えました。

「わー！ワピコちゃんすごい！」

「めっちゃくちゃ可愛いじゃない！」

「さすがワピコですね」

「ロボットはー？」

「……ふ、ふんつまあまあだな（可愛い……）」

約一名を除き、皆が無邪気に僕を褒めそやします。うんうん、皆

のその無邪気な笑顔が見れたなら、おっちゃん頑張った甲斐がある
と言つものです。

「もうできたんですか？さすが優等生軍団ですね。ワピコさん、
最後のはどういった魔法なんですか？」

「それは、我が家の秘匿する鍛冶技術なのでお答えできません。す
みません」

嘘です。チート技です。がっかりさせてしまつてすみません先生。
周りを見渡すと、まだまだ家らしいものはありません。僕は想
像以上に早く終わってしまったようです。暇ですし、優等生代表と
して皆を手伝つてきましょう。

その後、僕達3本組は全員無事建て終わりましたが、他の組はち
らほら野宿という憐れな班を出し、夜は湖の畔でバーベキュー、そ
してキャンプファイヤーをして、修学旅行一日目は終了したのでし
た。

19 プレイ目 『修学旅行二日目です』

おはようございます。修学旅行二日目の朝です。昨夜はめっきり女性らしくなってきたハニーちゃんとミズホちゃんの寝顔にちよつとムラムラしてしまったのは秘密です。

顔を洗って、歯を磨いて、朝ご飯を食べて。いつもと同じ作業ですが、みんなと一緒だという非日常な状況が何故かワクワクさせるから不思議です。

朝ご飯の後、リュックに水筒とシートとオヤツとバナナだけ持って集合と言われました。バナナはオヤツじゃないようです。

「今日はこれから創世神を祀る地下神殿へ行く！列を崩さずついてくるように！」

なるほど、今日は僕がバナナのオカズになりに行くんですね。そんな変態の出現しそうな場所に行くなんて、子供達の情操教育に悪そうです。

しかし、見渡す限り広がるこの草原。どれ程歩けば着くのでしょうか？そんな事を考えていると前の方から戸惑い混じりのざわめきが聞こえてきました。

おお、先頭集団に見る見る間に離されて行ってるではないですか。

「風の移動速度上昇の魔法使ってるみたいだぞ！」

ペコちゃんが叫びました。その声が聞こえた子達は慌てて魔法を発動させます。この何も無い広大な大地に取り残されないように皆必死です。風魔法が苦手な子なんかは涙目になっています。これは修学旅行ではなく、修行旅行ですね。なんというスパルタ。

途中、数人の脱落者が出たものの、先生に回収され無事地下神殿へと繋がる洞の前に着きました。三時間走り続けて皆汗だくの動悸息切れのへろへろになっています。

「さ、さすが、わひこでふね…ふひゅっはひゅっ」

いつもクールなヒュー君もさすがに疲れたようです。汗ひとつ掻いてない僕を間抜けな感じになりながら褒めてきます。クールでいたいその心意気だけ買っておきましょう。

ちようどお昼なので、一時間休憩を兼ねてのお弁当タイムになりました。しかし、皆は疲れすぎて食が進まないらしくほとんどの子がお弁当を残していました。もったいないオバケが出ちゃいますよー？

休憩も終わり、いよいよ地下神殿への移動が始まりました。森の中にある洞の入り口はさほど大きくはなく、二列になって少しづつ入って行きます。その中はぼんやりと光る魔鉱石が壁に設置されているだけで、薄暗く薄気味悪い印象を与えます。しかしその印象は、少し歩くと地中へと降りる白光色の螺旋階段が現れ、神秘的なものへと変わりました。淡く光る白い階段。一段、一段階段を踏む度に光の粒が舞い上がって宙へと舞います。上から見下ろすと粒が螺旋状に浮かび上がっていて、とても幻想的な光景です。

しかし、うっとりするような気分は階段を降り終わった時、粉々に打ち砕かれました。

そこには見上げる程大きな扉。それはいつでも誰でもウエルカムと言わんばかりに開け放たれ、その先には神殿らしき黄色いとうるつとした球体の建物。その前に溢れる人々。大声で呼び込みをする露店。バナナグッズがいっぱいの土産屋。

そこは、神秘さのカケラも無い観光地でした。さすがバナナ神殿

です。

しかし、子供達にはこういう場所の方が良いのでしょうか。皆、目を輝かせてキョロキョロしています。

「チョースケ学院の皆様ですね？ようこそおいで下さいました」

バナナを連想させる黄色い神官服を着たちよびゲのおじさまが体育会系先生に声をかけました。少し話した後、僕達を丸い神殿へと連れて行きます。しかし、見事な丸です。どうやって安定させているのでしょうか。きっとバナナパワーですね。

入り口に入つてすぐの所に、おヒゲもじゃもじゃの、ふおっふおつて笑つてそうなお爺さんの姿をした銅像がありました。その前には溢れんばかりのバナナがお供えされており、僕らも例に漏れずお爺さん銅像にバナナを捧げます。メラ君は食べてしまつて無いので、先生に怒られて涙目になっていました。しかし、立ちこめるバナナ臭が凄いです。

それからさらに奥へと移動し、ちよつとした会議室のような場所へ通されました。体育座りで待っていると、今度は黒に近い焦げ茶色の神官服を来たお爺さんが現れました。

「皆様、はじめまして。私はこの神殿の神官長を勤めている者です。今日は、皆様に創世神様の起こした奇跡。この世界の始まりをお話しようと思います。はじめ、この世界は何もない無でした。無の世界に創世神は一つの果物を投げ入れました。そう、バナナです。バナナは自ら己の皮を剥き、一つ、また一つとその実を無の世界に放ちます。それは大地となり、空となり、海となり……」

バナナ話が延々と二時間程続きました。僕は目を開けたまま寝るスキルを発動しました。

神官長から解放された後、僕達は神殿内にある博物館へと移動し

ます。創世神にまつわる物が置いてあるみたいです。

「すげー！バナナすげー！」

「ホント、このバナナなんて五千年前の物らしいわよ？」

「うわあ、もしかしたらこのバナナの皮が創世神が投げたバナナか
もしれないんだねー」

「この黒斑点の出方…実に興味深いバナナです」

「タキシードお面様とバナナ…次の同人誌のネタはこれだな…」

皆、バナナに洗脳されてしまったようです。僕はノイローゼになり
そうです。

「なあ！みんなこれ見てみるよー！」

メラ君がなにやら興奮しています。どれどれ。

「何かしらね？コレ」

チューリップです。

いや、チューリップ型の時空転移する乗り物ですハニーちゃん。
リボンをつけた黄色い猫型ロボットが乗っているアレです。

「おや、中に入れるようですね」

「ヒュー君、勝手に入ったら怒られちゃうかもしれませんよ？」

控え目に牽制してみました。君子危うきに近寄らずです。

「黙ってりゃバレないって！」

なんというKYでしょうメラ君。もう入って行ってしまってます。皆もそれに続いてしまいました。仕方ありません。巻き込まれるのは甚だ遺憾ですが、皆に危険があったら大変です。僕も入りましよう。

「なんだろうねこのボタン？」

「ミスホちゃん、危ないですよ」

「大丈夫だってー！」

ぼちっ ぱかっ

まさかの落とし穴でした。メラ君のKY加減にも驚きでしたが、原始的なトラップにも驚きです。

僕達は滑り台型式の穴に落ちていきました。一応レディの嗜みとしてスカートを押さえながらキヤーキヤー叫んでみました。たまにパンチラするのは視聴者サービスです。

どすーん

下から順にメラ君、ハニーちゃん、ペコちゃん、ミスホちゃん、僕、ヒュー君の順に漫画のように山になって落ちました。

「きゃっピュ、ヒュー君！どこ触ってるの!？」

「あ、あ…!？わ、わわわワピコ!す、すみません!！」

「えっちー!！」

どさくさに紛れてラブコメしてみました。勿論ワザとヒュー君の手の下に僕のBカップがくるように移動しました。

「痛〜……」じじ……どじ……?」

真つ暗の空間。ペコちゃんが光魔法で照らすと、ハニーちゃんが柔らかそうな茶色い髪の毛を掻き上げながら辺りを見渡します。僕も乱れてしまったご自慢の銀髪を手でとかしながら見渡してみました。

そこはドキドキはらはらアドベンチャーが待っているような洞窟でした。

ゴツゴツした岩の壁。チラホラ転がっている獣の骨。先の見えない暗い道。てつきり神様がバナナあたりが待ち構えていると思っていたのですがちよつと拍子抜けです。あ、もしかしてボスモンスター的に出て来たりするかもしれませぬ。要、注意です。

「だいぶ落ちて来ちゃったね…？どうしよう…？」

「ここで救出を待ちますか？」

不安そうなミズボちゃんの肩を抱いてあげていると、ヒュー君が落ちて来た穴を見上げながら言いました。そうですね、迷子になった時は動かないのが一番です。

「ばっか！お前ばか！ここには絶対お宝の山とかあるぜ！？探検しないで男が語れるか！」

「馬鹿はお前だ！この馬鹿が！何がいるかも分からないのにフラフラして危険な目に合ったらどうするんだ！？」

メラ君、そのウズウズする気持ちはとてもよく分かりますが、ペコちゃんの言う事の方がもっともです。好奇心が身を滅ぼす事だつてあるのです。

「どうする…？ワピル」

むむ、いつも強気なハニーちゃんが珍しく弱っています。そんな
絶るような目付きで見つめられたらジョニーが張り切ってしまう
すね。

「そうですね。上の穴が開いたままだとは限りませんから、僕達の
行く先を示すようなものを残しながら、慎重に出口を探す……とい
うのはどうでしょう?」

「……そうですね…開いてないかもしれませんが…では、どうやっ
て僕達の痕跡を残しましょう?」

それが問題なんですヒュー君。食べ物は何かに食べられてしまっ
たかもしれないし、とりあえず動いてしまう物はダメです。強い魔
力の痕跡を残して変な魔物に追いかけても困りますし……むむ
む。

「それならさ、矢印書いて行こうぜ!」

おっと、その手がありましたか。単純すぎて思いつきませんでした。
た。単純すぎるのもたまには役に立ちますねメラ君。

「そうしましょう。すぐ消えるのはダメなので魔法で地面と、念の
為壁にも削って行きましょう。ハニーちゃん、ヒュー君、矢印役お
願いできますか?」

頷く二人。とても素直でおっちゃん嬉しいです。

「では、行きましょう。僕が先導しますから、ペコちゃんは後ろに
気を配って下さい」

ペロちゃんが頷くのを確認して、僕達は暗い洞窟の中を進んで行きました。

19 プレイ目『修学旅行二日目です』（後書き）

< どうつでもいい設定 >

創世神に仕える神官達は、位によって服の色が変わる。

一番始めの見習いは青い色。そこから順に、黄緑 黄色 茶色 ほぼ黒な焦げ茶色となる。

バナナが熟れる色になる程、位が高くなるのである。

故に俗世社会の人々には彼らはバナナ神官と呼ばれている。

20 プレイ目 『続・修学旅行二日目です』

『あつちに水場があるよ』

存在が薄い僕のストーカー、もとい可愛いキャラクターの皮を被った水の精霊神が言いました。普段は僕にしか姿が見えないようにして、声も僕にしか聞こえません。

皆既に水筒のお茶を飲みきってしまったので、それはありがたい情報です。

枝分かれしている道を幾つか通り過ぎ、少し歩いた先にそれはありました。

「うわ…凄いな…」

ミスホちゃん感嘆の声をあげました。

僕達の目の前に広がるのは、底から蒼い光が溢れている巨大な地底湖。どこまで続いているのかも分からない湖に辺りは照らされて、この空間では光の魔法が必要無い程です。

僕は皆が安心して飲めるように率先して水を飲みました。

ほんのりバナナ味です。

脳裏をよぎるバナナを貪る変態にほんのり殺意が沸いてきました。が、それよりも皆の喉を潤す事を優先させましょう。

「大丈夫。飲めますよ」

皆のアイドル僕がそう言うと、皆こぞって飲み始めます。バナナに洗脳されている皆にとってこの湖の水は神の贈り物だと感じるらしく、バナナへの感謝の言葉を呟き涙ぐみながら飲んでいきます。

なんだろう、この狂集団に混じりたくない気持ちはあるけれど、

アウエーな気分が切ない感じです。僕も混ざった方が良いのかな……
……はっ。今は危険思想です。危うく僕もバナナの仲間入りしてしまつてころでした……
ぐううきゅるるるうううう……

「怪獣です！皆！怪獣がいます！気をつけて！！」

バツと切羽詰まった表情で構える演技をする僕。笑いを堪える四人。真っ赤になりながら俯くハニーちゃん。「え？あれ？」と天然を装い皆を見渡す僕。

「……もう……ワピコのばか……」

ぐっじよぶ！！その恥じらい顔、グッジョブですハニーちゃん！
！それが見たかったんです！！お礼におっちゃんがお菓子をあげましょうね！。

「……え？ワピコいいの？」

「まだあるから大丈夫です。遠慮せず食べて？」

「オレにも！オレにも！」

「はいはい、皆の分もちゃんとありますからね！」

KYメラ君以外の四人は遠慮がちに、けれど襲う空腹に勝てず受け取ります。

もそもそ……もそ……

無言で野菜クッキーを食べる皆。……とても……暗いです……

それも仕方ない事です。ここに辿り着くまでに結構なエンカウント率で魔物と遭遇、幸い一匹ずつの強さはRPGの初期ダンジョン並でしたが、何せ魔物と戦った事の無いまだ十一歳の子供達。ピーさんのお仕事のお手伝いで今は見慣れている僕ですが、始めて魔物

を見た時は余りにもグロテスクさにジョニーが縮こまる程でした。僕でさえそうだったのに、まだ幼いこの子達にとってどれほど恐怖だった事でしょう。

そんな子供達が涙目になりながら拙い魔法で攻撃、僕は皆に危険が及ばないようにフォローして、途中で休憩を入れながらここまで辿り着きました。

僕のリュックは四次元リュックなので本当にまだまだ食糧はあるのですが、この子達はそんな事知りません。きっと、心情は最後の晚餐的なものでしょう。メラ君以外は。

メラ君に危機感を持って欲しかったから四次元リュックの事を黙っているのに、これじゃ僕は他の四人にとってただのイジメっ子です。

「先生達来ないなー。出口も見つかんねーし…まあ、なんとかなるだろー」

ごろんと寝転んで呑気に言うメラ君。君の挫けない心は美点ですが、そのKYさにはお父さん頭が痛くなります。

「メラ…分かってますか？君の不注意な行動が皆をこの状況に追いやったんですよ」

おお、ヒュー君よく言ってくれました。

「何だよ！？お前だって嬉しそうに入って来てたじゃねーか！？…ちっ。せつかく人が暗くならないように振る舞ってたっていうのに……」

メラ君がっ！？メラ君がそんな事を考えていたなんて驚きです！ただのKYだなんて思っていてごめんなさい。

「やめなよ二人共！今そんな事言い合ったってしょうがないでしょ！この単細胞共が！」

とつても素が出ていますミスホちゃん。それ程ミスホちゃんも追いつめられているのでしよう。

「皆、疲れているでしょう？今日はここで寝ましょう。幸いこの湖は神聖なものみたくですから、魔物も近づいてこないと思います。今日はゆっくり休んで、また明日頑張りましょう？皆で、一緒に」

だから喧嘩はダメですよって意を込めて優しく微笑んであげます。皆が涙目で僕を見つめていますね。よしよし、僕を崇め奉りたまへ。四次元リユックから毛布を人数分出して皆に渡します。軽く驚かれましたが、我が家秘伝の技術だと言うとすんなり納得してくれました。皆素直で助かります。

皆が寝静まった頃、僕はふと違和感を感じて目が覚めました。なんでしよう、邪悪な気配では無いのですが、何か……何か、こ
う……不愉快な……

「ワピコ……？どうしたんだ……？」

「ああ、すみませんペコちゃん、起こしてしまいましたか？」

「いや、大丈夫。半分起きていたからな。それより、どうした？何か気になる事でもあるのか？」

「うーん……何と言いますか……こう、ムカムカして、触る者皆傷つけてしまいそうなギザギザしたハートになると言うか……」

「はあ？何だそれは？」

チ ッカーズです。知りませんか？そうですか。

「じぼっ……じぼっじぼ……」

「…っ何だ!？」

湖から気泡が沸いてきました。じぼじぼじぼ……段々激しくなってきた、湖の中に大きな影が現れます。

「皆!!起きて下さい!!」

「じぼっ!!」

僕が叫ぶのとほぼ同時に、ソレは姿を現しました。

ざばーん、と水飛沫を上げながら現れたソレは、威風堂々とした黄色い右曲がりの体躯。手や足、目や口さえ付いてないけれど、神々しさ溢れる巨大なバナナでした。

「バナナー!!」

「バナナだわ!!」

「おお、なんと神々しいバナナでしょう!!」

「バナナが助けに来てくれたんだね!!」

起きたばかりの四人が変なテンションになっています。僕はやはり来たか、という気持ちと、不愉快な気配はコイツか、と妙に納得してしまいました。

『純粋な心を持つ人の子らよ。汝らが願い叶えたくば、我が試練を乗り越えよ』

無意味に澄んだ綺麗な声をしています。バナナのくせに女性の声

です。

「バ、バナナ様！僕達を地上に帰して下さい！」

ペコちゃんもノリノリですね。神様は何をしたいんでしょうか？しかし、変な事はしても危険な事は無いでしょう。僕も空気を読んで胸の前で手を組みお祈りポーズをしました。

『よかるう。では行くがいい、人の子らよ』

僕達を眩い黄色い光が包みました。眩しすぎて目を瞑ってしまいます。

そして、次に目を開けた時には、あの白い空間にいました。

21プレイ目『修学旅行三日目です』

「よし、うぬが言い分を聞いてやるう」

僕は今、白い空間で飽きもせずバナナを貪る変態と向かい合っています。

変態：もとい、神様はバナナを食べるのを止め、キリッとした青い瞳を細めて僕を見据えます。そして、その手に持つバナナをスツ、と僕に差し出しました。

「バナナ、ウソ、ツカナイ」

「よし、掘られる覚悟はあるようだ。ケツを出せ」

「すみません、それだけは勘弁して下さい」

軽くデジャヴを感じる会話をした後、神様は現状説明をしてくれました。

「キミがテンプレ、テンプレと言いますからね、私なりに勉強したのですよ。大体が最強チートか、仲間と共に成長していくサクセスストーリー。それに文明が進んでいない世界に地球技術を提供しながらのんびり生活というモノもありますね。んぐんぐ」

お茶を飲んで喉を潤そうとするかのようにバナナを食べる神様。

「ですが、キミは最強チートを見せつける訳でも無く。戦争も無く、魔物はあるけれど人類を脅かす程の驚異でもない平和な世界で仲間達が成長する機会は無く。地球より文明が進んでいるこの世界で地

球技術が役立つ事は無く、ハーレム以外これ以上のテンプレ展開は期待できないと思ひまして」

「なるほど、それで僕の友人を成長させる為に試練を与えた訳ですね？このバナナ野郎が。危険はありませんか？」

「それは大丈夫です。私達はのんびり見学しましょう」

神様が手を横から横へスツと移動させると、五枚の鏡が現れました。そこには、自分にそっくりな人間と向き合う五人の姿。

「ほほう、自分と戦ってトラウマや自分の弱い部分を克服するの的なアレですね？」

「さすがキングギョ君。それです」

今回は僕発信の神様の遊びに巻き込んでしまった五人には悪い事をしたかな、とは思いますが、彼らは将来人の上に立つ事を約束された人間です。成長する機会があるというのは良い事でしょう。僕ものんびり見物としゃれこみましょうか。

「私はあなた。あなたは私。」

目の前にいる自分と瓜二つの人間に、ミズホちゃんが戸惑っています。

「私、いつもいつもイイ子でいなきゃいけないと思ってた。それで

ないとお父様に見てもらえないから。面倒くさいお勉強だって、苦手なダンスだって頑張って、お父様が望む淑女になろうと頑張った」

「あ…あなたに何が分かるって言うの…?」

ミスホちゃんの唇が震えます。

「分かる。だって、私はあなただもの。イイ子でいようとして、でも、自分を抑えきれなくて、ストレス発散の為に普通の会話の中に他人を貶めるような言葉を混ぜるんだよね?」

おお、そんな理由があったのですね。ただの女の二面性だと思っ
ていました。

ミスホちゃんは、青い顔をして……と思うたら、めっちゃくちゃ
ガン飛ばしてるじゃないですか。あわわわ。

「だから……何?」

「そんな事していたって意味無いよ。お父様はいつもうわべだけ。
本当の私を見てくれない。私はいらぬ子なん……」

ぐっしやあ。

おーっと！ミスホちゃんの右ストレートが偽ミスホちゃんの顔面
を捉えましたー！

「私の顔してごちゃごちゃメソメソしてんじゃないわよ気持ち悪い
！そんな事とつくに分かつてるのよ！でもイイ子はやめない！イイ
子でいて、周りに認められて、いつかお父様よりも権力を持って、
お父様を顎でこき使ってやるんだから！舐めないでよね!!」

鼻血を出しながら偽ミスホちゃんぐらりと立ち上がりました。

「ふ…ふふ。いいパンチね。あなたの心意気、熱いハート、感じたわ…」

偽ミスホちゃんの体が薄くなっています。

「その……反骨精神……忘れないで……」

そう言うと偽ミスホちゃんから光が溢れ、鏡は真っ白に映りました。

そして、鏡はキラキラと消えていき、後には眠っているミスホちゃんが現れます。

ミスホちゃん、力技でクリアです。

ヒュー君は自分と戦っていました。
トマトをぶつけ合って。

黄緑色の髪の毛も白い制服もトマトで真っ赤に染まる二人。地面には飛び散ったトマトで埋め尽くされています。さながら某国のトマト祭りです。

「いい加減負けを認めたらどうです!？」

「あなたこそ!！」

ああ、どっちがどっちだか分かりません。

あ、片方が足元のトマトで滑って転んで悶絶しています。

そして、偽ヒュー君はイイ顔をしながら消えていくのでした。

ヒュー君、トマトでクリアです。

ハニーちゃんは、ただ泣いていました。

「ねえ、さっさと消えてよ」

ビクツと肩を震わすハニーちゃん。

「あんたのせいで、お母様は死んだのよ。あんたなんかを生んだせいだ！」

これはヘヴィーな話ですね。トマトの余韻があるのでついていくのが難しいです。

ハニーちゃんのお母さんは、出産の際に亡くなったと解釈しているんですかね？

それを裏付けるような言葉で責めたてる偽ハニーちゃん。ハニーちゃんは、小さい子供のように縮こまって震えながら泣いているだけ。

これは、ヤバイですね。ハニーちゃんに抵抗する気力は無いようです。このままではクリアするどころか、余計心に深い傷を残していまいそうです。仕方ありません。少し助けてあげましょう。

僕は指をパチン、と鳴らします。

すると、ハニーちゃんの周りに僕達五人の幻影が現れました。

『ハニー何泣いてんだ？』

『ハニー、私達がいるじゃない』

『大切な友人が消えると言うのは納得できませんね』

『タキシードお面様のフィギュアあげるから泣きやめよ』

『ハニーちゃん、君がいなくなったら、僕はとても悲しいです』

僕達の幻影がハニーちゃんを優しく抱き締め、そして光の粒になり消えていきました。キラキラと煌めく光を見つめるハニーちゃんの瞳には少しの戸惑いと、存在を許されたという安堵感。そして、震える唇をゆっくりと開きました。

「ごめん、私、消える事はできない」

「はあ！？ふざけた事言っでんじゃないわよ！早く！さっさと消えて！！」

「私の事、必要としてくれるバカ達がいるの。それに、お母様が命を懸けてまでくれた生命を簡単に捨てられない」

それを聞くと、偽ハニーちゃん表情が、柔らかいものへと変わりました。そして、淡い光に包まれてその姿をハニーちゃんによく似た女性へと変えます。

「お…母様…？」

なんと、素晴らしい演出です。僕はチラリと隣を見ると、神様がドヤ顔をしてこちらを見ていました。うむ、今回はイイ仕事をしたと認めてあげましょう。

『私の愛しい子。あなたの人生に幸多いからん事を』

ハニーママは我が子を抱き締めて、光を放ちました。

ハニーちゃん、お母さんに会えて良かったですね。

「でさー、オレが気を使って言ってるのにアイツらはオレをバカにするわけよ！」

「うんうん、分かる分かる！」

思わず二度見してしまいました。メラ君は戦うどころか、マブダチがごとく偽自分と語り合っています。

ちよっと放って置いて、先にペコちゃんの方を見てみましょう。

これは……僕にとっても大ダメージです。

「おや、これはキングヨ君にとっても試練ですか？」

「……そうですね、いつか乗り越えなければいけないものですね」

それは、ペコちゃんの過去でした。

彼女の前には自分によく似た人間ではなく、泣き喚く三歳くらいのペコちゃん、それにポコ君。そして……ポコ君に暴力を振るう彼らの父親。

「お願いもうやめて！もう兄さんを傷つけないで！！」

ペコちゃんは叫びます。しかし、その声は幻影であるものには届きません。それでも叫び続けるペコちゃん。やがてその声が涸れ始

め、瞳も虚ろになってきた頃、神様が口を開きます。

「キンギョ君。彼女にはこの試練、まだ早かったようですね。ギブアップさせますか？」

「そうですね……ん？……んんん？」

また、思わず二度見してしまいました。

頂垂れる彼女の手には、タキシードお面様のフィギュアが握られています。神様を見ても、自分がやったんじゃないと首を振ります。

「……タキシード……お面様……格好良くて……優しくて……僕のヒーロー……そう、僕は、タキシードお面様のよう……」

ペコちゃんは何かを決意したように、フィギュアを強く握り締めながらガバッと立ち上がりました。

「タキシードお面様のよう……！僕はなる……！」

海賊王に！俺はなる！と叫んでいるゴム人間の声が脳内再生されました。

「強く！兄さんを守るくらい強く！強く……！」

ペコちゃんがそう叫ぶと光が溢れ、鏡を白く映しました。

ペコちゃん、僕に複雑な気持ちをさせながらクリアです。

マブダチ同士がいつの間にもやら殴り合いの喧嘩をしていました。

しかも、鼻水を流しながら泣いています。

「お、オレだって！自分がバカな事くらい分かってるもん！」

「お、オレ、ば、バカじゃないもん！」

嗚咽を漏らしながら争う光景は幼児のものです。これに決着はつくのでしょうか。

「お前なんか嫌いだー！」

「お、オレだって、お前の事なんか嫌いだー！」

「お前なんか、バカすぎてみんなが嫌いなんだよー！」

「うわーん！みんなに嫌われるのイヤだー！」

「オレだってイヤだよー！うわーん！」

「じゃあ、賢くなればいーんじゃん？」

「あ、それもそうだな」

いきなり素に戻る二人。あれ、鏡が光に包まれています。あれ、これでクリアですか？僕には何がどうなったか理解不能です。戸惑う僕の前には清々しい顔をして眠るメラ君。

……何はともあれ。全員無事クリアです。

修学旅行三日目の朝。神殿の前に、眠っている僕達が放置されていたのをバナナ神殿の方が保護してくれました。捜索隊が結成されていたらしく、すぐに体育会系先生とリリアン又先生が来て、とても怒られた後、泣かれました。暑苦しかったり、メガネだったりしますが、二人共いい先生です。

僕達六人は念の為すぐに王都へと帰され、病院に連れて行かれ、ひもじい思いをしていたのでご飯をがつつき、そんなこんなで僕達六人の修学旅行は終わったのでした。

色々疲れましたが、皆がいつもよりいい笑顔をしているのを見て、たまにはこういうのも悪くないな、と思う僕でした。

22 プレイ目 『まさかのトキメキ展開です』

今日は高等部の卒業式です。ここチヨースケ学院に中等部なるものではなく、初等部の次は高等部となります。高等部は五年制になっており、つまりは五つ年上のラビト王子様は今年ご卒業となります。

春の訪れを知らせる桃色の花の木が蕾をつける中、僕達初等部六年生が卒業生の未来を祝福する歌がホールに響きます。そして、初等部を代表して僕が祝辞を読み上げます。……熱い。視線が熱いです王子様。まるで「僕の為に言ってくれてるんだね」と言わんばかりのうっとり加減です。

無事に式が終わった後、王子様が取巻きを引き連れながら僕の前に現れました。まだ十二歳とは言え、よきによき伸び盛りの僕の身長は既に160センチにまでなっていて、まだ幼さは残るけれども王子様に負けるとも劣らない、むしろ絶世の美少女の僕に、取巻きのお姉様方は妬みと嫌悪の眼差しを投げつけてきます。女って恐いです。

「ワピコさん、僕と婚約して貰えませんか？」

その言葉にさすがの僕もぽかーん、となってしまうました。普段大人しい人間程キレたら何をするか分からないってノリですね。キレてはいないのでしょうが、学院を卒業してしまったら僕との接点は無くなると考えたのでしょうか。それともコイツは鈍感だからハッキリ言わないと分かってくれないと思ったのでしょうか。それにしても、お付き合いをとばしての婚約は驚きです。

「僕が君を幸せにしてみせます。……ダメですか？」

不安そうな顔をしている王子様。周りのお姉様方は泣いたり叫んだり、僕に罵詈雑言を飛ばしたり。逆に六年生の男子達は王子様を凄じ勢いで罵っています。自分の国の王子様に齒向かわせる僕の美貌って凄いです。

しかし、どうしたものでしょうか。グレーな返事でハーレム隊員である事を維持させる事も可能ですが、ラビット王子は将来この国を背負って立つ人です。早めに結婚して、早めに世継ぎを作る事も大切な義務です。しかし、既に僕の為に婚約者を決めなければいけない年を過ぎてしまっています。それに、これは恋愛シミュレーションゲームではありません。これ以上、王子様の心を踏みにじる行為は、できません。

「お気持ちはとても嬉しいです。ですが、ラビット殿下のお気持ちにお応えする事はできません……申し訳ありません」

王子様は一瞬傷付いた顔をしましたが、それはすぐにいつものような優しい微笑みになり、僕に握手を求めて来ました。

「キミを想いながら過ごした十一年はとても幸せな時間でした。ありがとう」

そう言って去って行く王子様の背中はとても寂しそうで、つい声をかけてしまいそうになる衝動を抑えながら、僕はその背中が消えるまで見つめていました。

衝撃の高等部卒業式から一週間後、僕達は初等部を卒業し、ゆるゆるとした春休みを経て高等部に入学しました。

高等部の制服は白いブレザーと赤いチェックのプリーツスカートです。少し大人びた感じの可愛さに僕はご機嫌にくるくる回ります。

「いーよ！いーよ！可愛いねー！ほら、もっとイイ顔してごらん！」

六年経っても同じように鼻息荒く写真を撮っているのはお父さんです。いいでしょう。韓流アイドル達にも負けないこの美脚を惜しみなく晒してあげましょう！

大人と子供の顔を併せ持つ僕の魅力は、やはり他の父兄の方々にも目に止まり、またもや大撮影会へと発展しました。高等部は、外部入学も受け入れており、初等部の約倍の人数になっています。なので、撮影会は混乱に混雑を極め、乱闘騒ぎまで起こってしまったりと、後の世にワピコ伝説として語り継がれていったそうなの。

「いやーワピコ旋風凄かったわねー」

式が終わった後にハニーちゃんに言われました。確かに凄かったです。僕が入学生代表で挨拶をしている時なんか特に凄くて、絶え間なく光るフラッシュが僕の目を殺しかけた程です。

「どうして皆僕なんかの写真撮りたがるんでしょうねー？」

「やれやれ、ワピコはいい加減自分の魅力に気づいた方がいいですよ」

気づいてますヒュー君。そんな僕達のやり取りを見て、隣でミズホちゃんが「ふふ」と笑いました。彼女には同じ穴のむじなの嗅覚で、僕が養殖だと最近気づかれてしまいました。ぼ、僕の方が先に

気づいてたんだからねっ。

「なあ！アイツ入学早々遅刻したみたいだぜ！オレのお仲間発見！？」

なんと。メラ君に同族意識を持たれてしまった可哀想な人はどんな人でしょう？……ん？……んんん？

「に、兄さん！！」

ペコちゃんが尻尾があるならば、ぶるんぶるん振ってそんな勢いで走って行きました。皆は「兄弟なんていたっけ？」と首を傾げていますが、僕は知っています。

艶やかな黒い髪。少しキツめの黒曜石の瞳。そう、彼の名は……ポコ君！！何故！！ここに！！？

あわわわあわわ。ど、どうしよう。か、仮面。仮面はどこかにありませんかー！！？

「何挙動不審になってるんだワピコ？」

はっ。ペコの姐さん、こりゃいいところに。タキシードお面のお面を貸して下さいやせんか？

「兄さん、紹介するよ。これがいつも話してる友達だよ」

あああああ！！この裏切り者ー！！！！

ゆったりと近付いて来るポコ君。固まる僕。一人、一人に挨拶をして、そしてこちらへ向いた、その瞬間

黒曜石の眼差しが僕を貫きました。

心臓が一つ跳ね、それから鷲掴みにされたような感覚。中から湧き上がってくる熱と一緒に身体が震え出します。

約二年ぶりに見る彼は、僕が知っている頼りなげな彼ではなく。身体は僕より少し背が高く、細身ではあるけれどもしなやかな隙の無い動きが鍛え上げられた肉体を想像させます。青年へとなる前の少年の危うさを醸し出している美少年が僕を見つめていました。

キレイな、キレイな、宝石を見つめるように。

宝物を、見つけたように

…

堪らず、僕は走り去ってしまいました。何故か僕の頬は目から溢れ出している雫で濡れています。

僕は、始めて会った時の彼への罪悪感と、新しく沸き上がってきたまさかの感情に押し潰されそうになりながら、家へと逃げ込みました。

23 プレイ目『ふり向けばヤツがいました』

僕は決めました。

そうだ、新体操部に入ろう、と。

際どいレオタード姿で、あーんなポーズやこーんなポーズをしたり、お姉様方にリボンで縛られた拳げ句「ふふ、縛られただけでこんなになってる…いやらしい子ね」と言われながら、その他の道具を駆使して虐められるという百合展開を目指すのです。

もしくは、あるならば茶道部に入ってお茶ではなくジョニーを夕てるのです。

「その考えを下衆いと言うのですよね？」

「いいえ神様、漢の浪漫です」

現在我が家で、神様に年に一度のピアス調整をしてもらっています。悶々とした僕の理想郷を神様パワーで覗かれたようです。

「僕は女の子が好きなんです」

「そんなに頑なにならずとも、女性としての性質も持っているのですから、男性に惹かれるのは可笑しくありません」

「ぼ、ぼ、僕は、お、女の子がす、好きなんだな」

「おお、それは清先生ですね。彼は実にいい」

裸 大将いいですね。

そうこうしているうちにお夕飯の時間になりました。当たり前前の

ような顔をしてついてくる神様と一緒にご飯を食べた後、お父さんの「うちの娘はやらんぞ！」的展開を神様にこなしてもらって、僕はお母さんとのんびりお茶を飲みながら団欒を楽しんだのでした。

翌日。僕は教室へと向かう途中、ハタ、と足を止めました。

高等部は初等部と打って変わって組の名前は普通です。異世界なのに何故かアルファベットな優秀な人間はS組という王道的なアレです。そして僕は勿論S組な訳ですが、脳裏を過ぎるのはポコ君です。

絶対S組ですよ？テンプレキャラな彼は魔力制御のアクセサリを付けた上でのS組に決まっています。

そうだ、登校拒否児になろう。もしくは、急に不治の病にかかった薄幸の美少女にでもなりましょう。ああ、でもそれは危険かもしれません。闘病生活中に出会った男性とスイーツ（笑）な展開になつてしまつかも知れません。

とりあえず帰……………アッー！！

振り向くと、ねっとり僕を見つめているポコ君がいました。

喰われる

エマーゼンシー！！エマーゼンシー！！

これは捕食者の目です！僕を捕食対象として認定したようです！

僕は力の限り逃げました。僕はまだ貞操を奪われる気はありません。しかし、高等部校舎を出た所で違和感を感じて後ろを振り向いてみました。

「おっぴよるふいはあっ」

人間、本気で驚いたら可笑しな声が出るものです。僕のすぐ後

るにはポコ君が迫って来ていました。無表情で。

僕は本気を出しました。光さえ追いつけない、常人には視認できない速さで。学院を出て、撒く為に王都にそびえ立つビルの間を短い感覚で曲がり、目くらましの為に催涙魔法をしたり、太陽拳を使ってみたり。それでも彼はついてきます。

神様スベックの僕についてくるなんて彼は本当に人間でしょうか？そう思っていた僕の目に、彼の首にキラリと光る物が見えました。アッー！！僕があげたペンダントは脚力上昇効果が付いていました！！

元が僕の次に多分最強キャラであろう彼の身体能力にそれが付いているとは、そりゃあ僕についてこれる訳ですよ。なんて事でしょう。僕が僕の首を締めているオチだったとは。

ラチがあきませんね。戦闘覚悟で彼を眠らせて逃げましょう。そう考えた僕は、もう一度学院に戻り、敷地内にある小さい森へと入り森全体に結界を張りました。

いきなり止まった僕にポコ君は対応できず、一度通り過ぎた後また戻って来ました。ちよつと恥ずかしい行動なはずなんですが、彼は少しも動じず無表情です。その無表情がとても恐ろしいです。

背中に冷たい汗が伝うのを感じながら僕は白銀に輝く錫杖を召喚します。

「我が歌は眠れる愛しい子の為に」

錫杖の鈴がリンつと震え、眠りへと誘う振動が広がりました。森にいた動物達が眠りにつき、森は静寂に包まれます。ポコ君はピンピンしています。むしろキラキラとした目付きでこちらへゆっくと近付いて来ています。

何故動けるのかと目を凝らして見てみると、絶対防御の障壁を『創造』しているではありませんか。

そうですね。テンプレキャラですものね。きつと、内に『創造』と『破壊』の力でも眠っていて、何かをきつかけに解放されたんでしょう。力を得たのは良い事ですが、今程テンプレを憎んだ事はありませんね。

仕方ありません、実力行使です。気絶するくらいのダメージを与えて……って……どうやって？

殴る？蹴る？魔法で攻撃する？彼の、父親のように……？

ダメです。それはできません。僕は、彼を守る力は持ち合わせていても、彼を傷つける力は持ち合わせていません。

戸惑っている僕の手を、彼が掴みました。

「……どうして…そんな泣きそうな顔をしてる？」

そんな顔をしていたでしょうか？

それよりも、手を、離して欲しいです。

掴まれた部分から熱が広がって。

手が、身体が、心が、震えます。

「…離…して…っ」

あわわ、自分のか弱い女の子のような声にビククリです。まさか演技ではないのにこんな声が出るなんて！BLの受けになってしまった気分です……

僕が色々な事に怯えて後退ると、ベタに木の枝に足をとられ転けてしまいました。自然にポコ君が僕の上に覆い被さる格好になる訳ですが……

なんとというラブコメ。見てる分にはむふむふしてしまいますが、見るのと自分がするのでは大違いです。恥ずかしすぎて軽く死ねそうです。しかも、僕が押し倒されている側ですと？心が男の僕にと

つてはめくるめくBLの世界です。

ん？顔がやたら近いです。まさか。それはダメですポコ君。まだ十二歳ですよ？おマセすぎます。そんなねっとりとした目付きで見つめないで下さい。ダメです。ら……らめええええ！！アツーーー！！

そして、僕は地球時代から大切にしていた唇を奪われました。男の子に。

真っ白に燃え尽きている僕にポコ君は言いました。

「……やっと、見つけた」

そう呟いたその瞬間。彼の記憶が走馬燈のように僕に流れてきました。

暗い、暗い、光の差さない汚い部屋。

自分が何なのかも分からず。ただ、心をどこかへやって、暗い部屋の中にいるだけ。

心が戻る時は、たまに部屋が明るくなった時。

だけどそれは、自分とは違う大きな人間が彼に苦痛を与える合図。

だけど、その日は違った。

いつもとは違う。大きな人間ではなく、自分と同じくらいの大きさの人間。

宝石のような目からキラキラと落ちる水。

それが何なのか分からないけれど。

ただ、それを手にして、いつまでも、ずーっと、眺めていたいと

思った。

気がついた時には、その子はおらず、また違う大きな人間がいて、また痛い事をされるのかと怖かったけど、その人間はいつまでも彼に酷い事はせず、体をキレイに洗ってくれて、あたたかいご飯をいっぱいくれて、やわらかい場所で寝かせてくれて。

たまに、目を細めて、口を大きく開いて、ははは、と言った。それを見て、はじめて『安堵』という気持ちを知った。

彼は『養父』になつてくれた。

言葉を教えてくれた。身を守る術を教えてくれた。笑う事を教えてくれた。

人を、『大切』に思う心を教えてくれた。

『大切』という心が分かつて気づいた事がある。

いつも、いつも、自分の心の中にいる、あの日出会った女の子。

あの子を想う気持ちが、とても『大切』だという事。

あの子に会いたい。

あの子に触れたい。

どこに行つてしまったんだろう。

いつも近くにいる気がするのに、どこを探してもいない。

十二歳になり、必要無いと言つたのに養父が勝手に学院に入学手続きをしていた。友達を作つて欲しいらしい。

仕方なく行つた入学式。そこに、彼女はいた。

絹糸のような煌めく銀色の髪。

光が宿る紫の瞳は、夜空に煌めく星のよう。

神に祝福されてできたようなその容姿は息をするのを忘れる程に美しい。

やっと、見つけた。
大切な、大切な、宝物
…

「やめる!!」

僕は堪らず叫んだ。ポコ君はキスした事に対してだと思っただらしく、飛び退いて「ご、ごめん…」と言った。違う。その事じゃ無い。オロオロする彼の姿が涙で滲んでよく見えない。

「ぼ、僕はっ…君にそんな風に思っただけで貰える資格なんか無いんだ…!ほ、本当は…もっと早くに君を助ける事だっただけだったんだ…赤ちゃんの時から君の存在に気づいていたんだから…それなのにっ…僕は、お話を見ているように、傍観していつっ…!」

抑えがきかない感情が溢れ出してきて、ポタポタと地面に落ちた。

「僕がもっとっ…もっと早くに君を連れ出してれば!君は、痛い思いも、怖い思いも、する事が無かったんだ!僕はッ…自分が楽しむ為だけに君に苦しい思いをさせていたんだ!!僕は、君に大切に思っただけで貰える資格なんて無い!!」

「知ってたよ」

……ええ???

「知ってた。親父から聞いてた。名前やいる所は教えるなど言われたいけど、あなたの気持ち、どう言った事情で俺に会いに来ないのかに関しては口止めされていないから教えて貰った」

なんだと？

「はつきり言わせて貰えば、そう思うのは見当違いだ。俺があの酷い家に生まれたのはただ運が悪かっただけ。あなたにどんな力があるうと、他の家の事情に口を突っ込む義理は無い。それなのに、あなたは俺を連れ出し、俺を親父に預け、結果、俺は救われた。あなたがどう思おうと、俺の気持ちは変わらない。」

彼の強い意思を映した黒い太陽の瞳が僕を見据えた。

「あなたは、俺の救世主。俺の、かけがえのない宝物」

赦された。そう、思った。

六年、僕の心の底に沈んでいた汚いモノがポコ君のその言葉でアツサリ綺麗になった気がした。こんなにアツサリ綺麗になるならば、もっと早く会いに行けば良かったのかな？

いや、彼がどう思おうとやっぱり僕は罪を犯した。この六年、彼に対して抱き続けた罪悪感と死にたくなる程の自己嫌悪は僕の罪に対する罰。

だけど、彼が赦してくれると言うのなら、僕は、彼に微笑みかけましょう。

「ありがとう」

僕が微笑むと、ポコ君も微笑みました。

その笑顔はお花のように笑うペコちゃんにどこことなく似ていて、だけど垣間見える男らしさに僕の胸は高鳴ってしまいました。

だけど認めません。やっぱり女の子とイチャイチャしたいです。それよりも、とりあえず……

「ビーさんのピーー（自主規制）を潰しに行きましょか……」

僕のデリケートな気持ちを勝手に他者に話すとは、月が許してもこの僕が許しません。

「ま、待ってくれ！！親父が女になったら気持ち悪い！！あんな筋肉がモリモリついた女は嫌だ！！」

青ざめながら僕に縋り付くポコ君。彼を引き摺りながら歩く僕。そんな攻防を続けながら、学院の事などすっかり忘れて陽は暮れていったのでした。

後日。ビーさんには豊かな胸毛をハート型に剃って、ひと月上半身裸のまま過ごすという事で許してあげました。

僕ってとても心が広いです。

24 プレイ目『オラオラ営業されました』

朝、僕が机の中にお昼寝グッズを入れてっていると、教室がざわめきました。

皆の視線を追っていくと、そこにはポコ君の姿。

彼の外見はとても目立ちます。その整ったお顔もさる事ながら、得意属性が髪の毛に現れるというテンプレ設定のこの世界で、黒と白の『闇』か『無属性』を表します。勿論、それはイジメ対象です。

しかし、嫌煙されがちなの黒い色も、ポコ君の妖しい魅力を実際立たせているだけです。

冷たい眼差しがちょいワルでクールな雰囲気醸し出していて、思春期女子にとっては生唾モノでしょう。ファンクラブとかできちゃっても可笑しくない程の美少年ぶりです。

胸ポケットに美少女戦士の人形を入れていなければ。

アレですね。きつと、挙動不審になりながら胸元を隠して「ついで来るなって言っただろ！…え？俺の側にいたかった…？しょうがないヤツだな」とブツブツ言うプレイをするんですね。地球で出会っていたならば、きつと良い友になれた事でしょう。

そんな残念なイケメンが僕を認識すると、ねっとりとした目付きで「おはよう…」と言いました。

側にいたハニーちゃんとミズホちゃんが、彼のただならぬ雰囲気気づいてキヤーキヤー言い始めます。

「なんかイイ雰囲気だねっ？」

「昨日は二人していなかったし、もしかして、もしかしちゃうの！」

「？」

「えーワピコちゃん手が早い！」

「昨日はどんなヤらしい事してたの？教えなさいよー！」

やめて下さい二人共。ブラコンペコちゃんが僕を射殺さんばかりに睨んでいます。

男子達は泣いたり、イケメンに対する呪いの言葉を吐いてたりします。

そんな、二人はデキちゃったの？ヒューヒュー！ムードに僕の心労ゲージはMAXになりかけです。

そんな時、面倒臭そうに現れたのは小汚ない男でした。

「…え、皆出席だな？よし、HR終了。ワピコ・コーとポコ・ストロングはプリントを取りに来い」

くすんだ金の髪の毛をボサボサにさせて、汚ないジャージに便所スリッパを履いた担任が面倒臭そうに言いました。

きっと彼は、ダメ人間と思わせておいて実はギルドのSランク以上の実力者のクセに何故か教師をしているっていうテンプレキャラですね。

「ほらよ。今週中にそこに選択科目を書いて提出しろ。よし、行っていーぞ」

昨日配り終わっていたと思われるプリントに目を落としました。そこには、これから学びたい科目を記入する欄がいっぱいあります。

ここチョースケ学院は、とても自由度が高い学院です。

クラス揃って授業をするのは午前中を使った二、三時間の一般教養だけ。後は、選択科目か部活動となります。

選択科目は魔法学系、魔法科学系、薬草学系、言語学系、鉱石学系、その他諸々と盛り沢山で、本当に今から将来就きたい職業を決めて選択しないと、いくら色々学んだとしても器用貧乏で終わってしまいます。

そして、この学院は一応五年制ですが、一般教養をある程度修学したら卒業できるようになっています。なので、必要な科目だけ学ばだけ学んでさっさと卒業し、就職するなり、専門家の所に弟子入りしたりする人が結構います。

勿論、五年では足りず、卒業してから大学院や専門学校へ行く人もいます。特にエリートと言われる職業になるには、三十路になってもお勉強しないといけない場合もあります。

自分の未来は自分で決めろ、的な制度のせいでしょうか。この学院には自立心や上昇思考がある生徒を多く見かけます。無気力系の僕には厳しい環境です。

「ワピコちゃんは将来何になるの？」

「うーん、まだ迷ってます。ミスホちゃんは？」

「私？私はとりあえず、魔法師団に入って頑張ってみようかなー？」

「……ああ、なるほど」

魔法師団は中央にのさばる貴族達に負けず劣らずの権力を持つ組織ですもんね。その中で地位を確立して、そこから人脈作りをして、色々手駒を揃える訳ですね？

「ふふふ」とお互い含み笑いをしていると、一時限目を知らせる鐘の音が鳴りました。

一時限目は、外部入学生の為のレクリエーションです。

初等部から在籍している生徒との親睦を深める為に、外部入学生と在籍生、二人一組になって学院を回ります。ポコ君は早々にペコちゃんに連れられて行ったのでホツと胸を撫で下ろしました。

さて、僕は誰にしましょう？できればかわゆい女の子がいいです。

「ワピコさんですよ？俺と回ってくれませんか？」

その声をかけてきたのは、かの王子様を思わせる男の子でした。

穢れの無い真っ白な髪は短くツンツンと立てていて。真紅に燃える瞳は挑戦的です。

「はい。一緒に行きましょうか」

男だという事の中で軽く舌打ちはしましたが、良い子の僕は快く返事をしました。彼の名前はハクトと言うみたいです。

まずは入り口まで戻り、迷ったらここに来ればどこでもドアで大体の場所に行けるよ、と教えます。そして主に使う教室、施設を一つずつ回り、最後に休憩所として使われるスポットを回りました。

そして、昨日ペコ君とラブコメをした場所に行った時に事件は起こりました。

「ここは誰も来てないんだな？」

「そうですね、知る人ぞ知るって感じの所ですから」

「……ふん」

意味深な間があった後、ハクト君はいきなり僕に寄って来て、僕

の両手を掴んで木に縫いつけました。

「兄貴が随分と惚れ込んでたって言うから、どんな女かと思ったら……こりゃ納得だね。お前、兄貴じゃなくて俺の女になれよ」

気づいていましたが、僕にオラオラ営業しているのはあのお優しいラビト王子の弟さんのようです。

僕はキツと睨んで「離して」と言いました。すると、何を血迷ったかハクト君は僕にちゅーをしました。なんとというスイーツ（笑）展開。

パシッ

渴いた音が静かな森に響きます。僕がハクト君を叩いたのです。

「はは、俺にキスされて喜ばない奴はいないんだぜ？」

「舐めないで！そこらへんのバカ女と一緒にしないでよね！！」

啖呵を切って、僕は一人駆け出しました。

何よ！あのサイテー男！？あたしファーストキスだったんだから！！バカバカバカ！！今度寄って来たら思い切りぶん殴ってやるんだから！！

そんな僕の心中とは裏腹に、ハクト君は走り去る僕の背中を見つめながら、「いい女だぜ……」と呟いていたのでした……

……はっ。

いつものクセでフラグを立ててしまいました。ハクト君があんなスイーツ（笑）な事言うから、スイーツが入って地位なんて関係無い勝気な女の子を演じてしまったじゃないですか。

しかも、また男の子にちゅーされました。切ないです。帰ったらお母さんのおっは いに顔を埋めて癒して貰いましょう。

しかし、僕はいつになったら女の子のハーレムを作れるのでしょうか……哀愁。

25プレイ目『僕のジョニーよ天まで届け』

新体操部が

無い……だと………？

無駄に行数を開けてしまいました。仕方が無いのです。僕はそれ程までにショックを受けたのです。僕の拙い文章力では無駄に行数を開ける事ではこの気持ちを表現できなかったのです。お察し下さい。

「……大丈夫か？」

僕が部活案内板の前で打ちひしがれていると、ポコ君が大変色気のある眼差しで心配してくれました。まだ十二歳だというのに滑稽な程の色気です。

「チツこの腐女子系妄想キャラが」

がーん、って感じでショックを受けていますね。何の事だか分からないけども、とりあえず僕に舌打ちされた事がショックだったよ

うです。

しかし、そんな事はどうだっていいのです。この僕のささくれた心は触るもの皆傷つけるのです。

「ようワピコ。俺写真部に入ったんだ。お前被写体になれよ。勿論ヌード」黙れ皮もまだ剥けてないクソガキが」

がーん、って顔していますねオラオラハクト君。口には出していませんが「な、なんでその事を…」って感じですよ。

「な、何？この屍二体？」

「屍だなんて酷いよハニーちゃん。ただのゴミだよ」

ゴミ二つを跨いでハニーちゃんとミスホちゃんがやって来ました。はあ。女の子は癒されます。

「二人は部活どこかに入るんですか？」

「私達は魔術技部に入るわよ」

魔術技部ですか。魔法の技術を戦闘法式で競い合う物騒な部ですね。しかし、魔法師団を目指す子達には人気の部です。

ふむ。この平和な国にあるこの学院では、いたいけな子供達が魔法で戦う全学年合同トーナメントなんて物騒なテンプレイベントはありませんからね。テンプレイベントをこなすには、魔術技部に入り全国トーナメントとかに出る必要があるでしょう。しかし。

「そうですか…部活は二人とは別々になりますね…」

「ああ、そうね。ワピコは平和主義なものね」

「でも勿体無いね」。ワピコちゃんなら全国大会でもいいトコまで

いけそうなのに」

すみません、最近テンプレに疲れてきたのです。主にお色気黒髪男子とオラオラ男子のせいで。

どこか僕のささくれた心を癒してくれそうな部は無いですかね。そう思っつて、案内板に再び目を移すと、端っこのほうに汚ない字で書かれた紙がありました。

『急募！！ワピコちゃんファンクラブ会員募集中！！会員急増中の為、雑務が追い付きません。年齢・資格不問。事務業務得意な方優遇致します』

ほほう、ファンクラブも色々大変そうですね。しかし、どうせ会員はむさい男共ばかりでしょう。なので同情はしません。

僕は女の子にキヤーキヤー言われたいのです。ジョニーを出しっぱなしにしておけば解決する話なのですが、うっかりパンチラした時に股間がもっこりしていたら大変です。僕は女装趣味の変態男子の烙印を押されてしまいました。

女の子にキヤーキヤー言われる女の子……と言えば、やはり凛々しい女の子でしょうか。縦巻きロールにしてフェンシング？シヨートカットにして球技系？むむむむ……

あ、そうだ。生徒会にしよう。

学院創立以来初の最年少の会長になって、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、人望厚い生徒会長になって「きゃー、会長かつこEー」と言われるのです！！

そうと決まれば早速入会願書を提出しに行きましょう。むふむふ、明るい未来が僕を待っています。

……ん？人波で十戒をしている人がいますね。……お？おお？？？

縦巻きです。金髪縦巻きロールのお姉様が豊満なお胸をぼよんぼよん揺さ振りながらこちらに向かって来ています。

「ご機嫌よう。ワピコ・コーさん」

「ごきげんよう！ちょっとそのお胸に顔を埋めさせて貰っていいですか！？」

「私は、生徒会副会長を務めている三年S組ローズ・バタフライ。今日はあなたに話があつて来た。一緒に来て貰えるかな？」

なん……だと……？そんなけしからん胸をしておいて十四、五歳……だと？

よし、それは不問に処してやるので、我が顔をうぬのけしからん胸に埋めさせるがいい。

「それでは行こうか」

あつそんなつ僕まだ心の準備が……ん？何やら転移の呪文を唱えていますね。複数転移なんて高度なものを使えるとは優秀なのですね。呪文が終わつたと同時に視界が歪みました。まだまだ転移魔法の精度が低いようですね。酔いそうです。おえつ。

「大丈夫？」

目を瞑って口を手で押さえて青い顔をしている僕にローズ先輩が声をかけました。どうやら無事転移できたようです。

顔を上げ目を開けたその先には、用途を教えて欲しいくらいの無駄に広い部屋。ベル薔薇的なシャンデリア。シンプルだけでも細部には意匠をこらした調度品の数々。

だが、しかし、そんなものはどうだっていい。そんなものはクズだ！この！僕の前に立ち並ぶお姉様方の前では！！

ここより、テンションが上がり過ぎた為、2ちゃんねらー風味でお送りします

「初めまして、会計を務めております四年A組ナデシコ・イロハです」

うはwww清楚系眼鏡美人w清楚なのにwはち切れんばかりのwオパーイがたまりませんwww大人しい顔して夜は凄いのwww的な妄想に僕のジョニーよ天まで届けwww

「ボクは書記をしてる三年A組ヒマワリ・パーオだよ！よろしくね！」

僕以外のボクっ子登場wwwポニーテールにシュシュをつけた元気っ子wちよつと小さいオパーイを気にしながら「おっは いはちつちやいけど…ボク、頑張るから…」とかwww言われたらどうしてくれようwww

「わたくし、二年S組マリー・ローリングです。会計補助をしておりますの。言っておきますが、わたくしはあなたを認めませんの！」

つるぺたですのwww大きいリボンなんか付けちゃってかわいいーでちゅねーwwwもうCカップになった僕の代わりのロリ要員でちゅかー？wwwそんな生意気な事言ってるw調教wしwちやうwぞwww「も…もう許して…ですの…」とか言っても許さないのでwww

ん？何を認めないんですの？

首を傾げてローズお姉様を見てみると、お姉様はオスカル様のよ
うにキリッとした顔で言いました。

「前任の会長の推薦でな。君に会長をして貰う事になった」

なんとというご都合展開。だが今回は敢えて声を大にして言おう。
ご都合展開 万歳！！

「……前任と言つと、ラビト殿下の事でしょうか？」

薔薇をバツクに背負いながら頷くローズお姉様。

うほつ。王子様グツジョブです。こんな事なら最後にパンツの一
つや二つ見せてあげれば良かったです。いや、乳首を見せても良い
くらいのグツジョブさです。

「急な事だが引き受けてくれるかい？我が生徒会は会員の推薦でし
か入れない上に会長の発言は絶対なんだ」

勿論です！そのご都合展開を立派にこなしてみせましょう！

まずは第一印象が大事です。いでよ！ジョニー！！

「皆様、まだ若輩者ではありますが、精一杯頑張りたいと思います
のでよろしくご指導のほどお願い致します」

きりつ（イケメンスマイル）

どぎゅぎゅぎゅーん！！（お姉様方の胸の高鳴り）

キラキラキラ（お姉様目線の僕のエフェクト）

(い、嫌だわ、私ったら。女の子相手なのに…)

(か、かつこいい…ボク、ヤバいかも…)

(気のせいなんですの！わたくしが好きなのはラビト様ですよ！)

(この…胸の高鳴りは何だ…?)

ふふふふ、皆普通と百合の間で揺れ動いていますね。しかし、ギヤルゲーで鍛え抜かれたこの僕に！そんな抵抗は無駄です！これからじつくりと…

その時、生徒会室の扉を叩く音が聞こえました。誰ですかこのご都合展開を邪魔する無粋な人は。

「……失礼します」

どぎゅどぎゅどぎゅーん！！(お姉様方の胸の高鳴り)

……え？

「おお、ポコ君来てくれたか。皆、今日から雑務全般を手伝ってくれるポコ・ストロング君だ」

「……よろしく」

面倒臭そうに挨拶するポコ君。しかし、そんな彼を見るお姉様方の視線はうつとりしていて、もしかしたら濡れすぎてリヴァイアサンになってそうな勢いです。

僕の……僕のむふむふ百合ライフが……

おのれ 純 イケメソめ。

スツとポコ君の前に移動する僕。僕がいる事に少し驚いているものの、嬉しそうな顔をするポコ君。しかし。

「ポコ君……今日から僕と君は敵同士です……」

「え……？は……？」

戸惑うポコ君もなんのその。僕は涙目になりながら彼を睨み。

「覚えてろよ……！！」

負け犬の遠吠えをして去ったのでした……哀愁。

26 プレイ目『ストーカーが増えました』

「見て、最年少で生徒会長になられたワピコ・コーさんよ」

「まあ、お可愛らしいのに凄いわ」

「成績も優秀で人格もそれは素晴らしい方のようよ」

「まあ、天は二物も三物も与えられたのね」

「わ、ワピコたん…はあはあ」

ふふふ、我を讃えよ、そして崇めよ。

「きゃー！ポコ様よー！」

「見て、あの憂いたお顔！」

「ああ、もうダメえん」

「抱いてー！ー！！」

お姉様方目を覚まして！！その憂いた視線の先にあるのは美少女戦士の人形よ！！きつと、僕と髪の色が一緒であるその人形を僕に見立ててめくるめく妄想をしてるのよ！！ほらっボソつと「ワピコ…」とか言ってる！！

何故！？何故あんな残念なイケメソに僕の憧れのポジションを奪われなければいけないんだー！？うわー！ーん！！

「きゃっ」

「おっと」

悲劇のヒロインぶって前も見ずに走っていると、エキゾチックな殿方にぶつかってしまいました。

褐色の肌に青みがかった天パっぱい銀色の髪。額には千田光男的な丸いちよんが中心にあります。

「君…泣いているのかい…？」

「あ…な、なんでもないんです！ごめんなさい！」

「あ…！ま、待って…！」

走り去る僕。名残惜しそうにしているエキゾチックな人。

こんちくしょう！またクセでフラグ立ててしまったじゃないか！
男相手に！きつとさっきのは留学しに来てるところかの国の王子様だよー！うわー！ん…！！

はてさて、悲劇のヒロインごっこもひと息ついたので僕は教室に向かっています。今日から選択科目の授業開始です。僕が選んだのは下記の通り。

体術（凛々しい姿をアピールしつつ、女の子と密着する為）

声楽（歌うのが好きなのです）

召喚魔法学（テンプレイベントをこなす為）

古代歴史学（遺跡見学に参加したいのです）

調合学（ハリーポッターみたいなのを期待して）

後は適当にあみだクジで決め、主に僕の趣味で決めたラインナップとなっておりま。だって僕神様スペックですから、学ばずとも何でもできるのです。

さて、今から始まるのは召喚学？です。選択科目は学年関係無く合同で行われる為教室も広く、大学のように教卓から段々と上がっていつている形になっており、使う席も早いもの勝ちです。

僕が後ろの方に陣取ると、無言で横に座る黒いモノが見えました。横目でチラッと見ると、胸ポケットにいる美少女戦士と目が合いました。ちよつとしたホラーです。美少女戦士と見つめ合いつつ、その持ち主である彼に声をかけます。

「…ポコ君も召喚学選択したんですね」
「全部ワピコと一緒にした」

なんとというストーカーでしょう。捕食した後にドロドロと消化する食虫花のようです。

「あ…さっきの子じゃないか」

そう言って爽やかに歯を光らせながら現れたのは先程のエキゾチックです。

「君も召喚学を受講するんだね。私はパイス・カーリ。これから一年よろしく」

「よろしくお願いします」

握手を求めてきた爽やか担当ににこやかに応えようとした時、光の速さで黒いモノが彼の手を握りました。

「お久しぶりですパイス殿下。その節はどうも」

「き…君は…！？“タキシード能面”！？」

始めて聞きました。ポコ君の二つ名。能面を付けて現れる彼の姿はとても迫力ある事でしょう。

「今はイチ学生です。それよりも、コイツにちょっかいかけないで下さいね」

「……ふふ。それはどうかな」

静かに闘志を燃え上がらせる二人を天然のフリして見なかった事

にしました。養殖は楽です。

そうこうしているうちに鐘の音が聞こえてきました。あまり特徴の無いシヨボシヨボした中年男性が教壇に立ちます。意識して見ないと存在を確認できない程の影の薄さです。

「は…始めまして…召喚学を担当している者です…」

まだ存在を気づかずにお喋りをしている生徒のなんと多い事でしょう。きつと、彼の存在を確認する事が召喚学の第一関門ですね。それも慣れているのでしょうか。お喋りしている生徒達を気にせずに授業を進めていっています。

「え…召喚とは…古代語と…現代言語とを用いた二つの種類があり…古代語は少しの文字で召喚陣を作れますが、古代語を修得しなければならず…現代言語は、膨大な言葉を使用しなければいけません…どちらも一長一短なものです…共通しているのは緻密な計算によって文字を配列させなければならず…」

ウトウトしてきました。すぐに召喚実習して、使い魔と契約するぜ！おお！神級召喚しちゃったぜ！的な展開が来ると思っていたのですが、まだまだ先のようです。当分召喚学はお昼寝タイムになりそうです。

うと…うと………はっ悪寒！！

妙な気配がして飛び起きると、カメラを構えたポコ君と目が合いました。僕に気づかれたポコ君は何事も無かったかのように無表情で前を向きます。危うく夜のオカズになりかけるところでした。どきどき。

召喚学が終わり、お昼になりました。お昼はハニーちゃん達と約束しているので中庭に向かいます。後ろには黒とエキゾチックのピ

クミンを二匹連れていきます。途中でオラオラピクミンもついて来てしまいました。

「ワピコ〜こっちこっち〜！」

「ワピコ…また取巻きをふやしましたね…」

「どういう事ビュー君？皆で食べた方が楽しいでしょ」

「ふふふ、だよねワピコちゃん」

「ねーミズホちゃん」

養殖仲間ミズホちゃんと微笑み合っている横では既にKYメラ君がお弁当をがつついています。ペコちゃんは豪華なお弁当をポコ君に食べさせようとウキウキしています。

「なあワピコ食べさせてくれよ」

「勝手に食べなよ！バカ男！」

「ワピコ、私の国の特製スパイススープだよ。一口どうだい？」

「あ、ありがとうございますスパイス君…」

何故、こんなにキャラ変えているのに気づいてくれるのはミズホちゃんだけなのでしょう？異世界七不思議です。

「そうそう、ワピコ。僕達は放課後ギルドに登録しに行くのですが、一緒にどうですか？」

「どうして登録するんですかビュー君？」

「腕試しだよ！血湧き肉踊るぜー！」

「メラ、そんな軽い気持ちだとすぐ死ぬぞ」

「大丈夫だよ兄さん。僕達がしっかりこの馬鹿を管理しとくから」

ふむ。ギルドランクが高いと魔法師団に入る時に優遇されますからね。魔法師団を目指すミズホちゃんとハニーちゃんに付き合っ

ヒュー君とペコちゃん、ついでにお遊び気分でメラ君がついて行くといった感じですかね。

ギルドには子供のお遣いのような依頼も沢山ありますが、危険なものもいっぱいあります。まだまだ危機感が足りない五人だけでは心配ですね。仕方ありませんね。僕も行きましょう。

「僕も行きます。ポコ君はビーさんに連絡を入れておいて下さい」

頷くポコ君。なんの事だか分からない五人はとりあえず僕が行く事に喜んでくれています。そんな無邪気に喜んでくれるなんておっちゃん嬉しいです。

そして放課後。まだついて来ようとするオラオラピクミンとエキゾチックピクミンをサラリと躲して七人でギルドに向かうのです。

27 プレイ目『夢も希望もありませんでした』

「ようワピコ！やっと登録してくれる気になったか！」

「ビーさん、相変わらず獣臭いですね。僕は付き添いで来たんです。積極的に動くつもりはありませんよ？」

近代的なビルに入るとビーさんが仁王立ちで待ち構えていました。初めて見るガチムチに五人は少し怯えています。

「こちらはポコ君の養父ビーさんです。大丈夫、人並みの知能はあるはずですから、こちらから刺激しない限りは安全です」

恐る恐る、といった感じで握手していく皆。自分が怯えられている事に気づかずビーさんはポコ君がお友達を連れて来た事にご機嫌です。

「まずは登録だな！七階に行こうか！」

エントランスを抜けて、エレベーター的な装置に乗り七階へ向かいました。降りた先には、右側に受け付けカウンターがあり、十人ほど座っている受け付けの人の上には番号が表示されている魔光板が設置されています。銀行とか携帯ショップの受け付けのようですね。

そして受け付けカウンターの前には冒険者らしき人達が番号札を持って座っており、受け付けの人と話している人は「この依頼は向いてないと思いますよ」「はあ…待遇が良かったんで選んだんですが…」といったような会話をしています。日本の職安のようです。

「おい、お前ら。この紙に記入事項を書いて、あそこの魔具から出てくる番号札を取って待ってる」

ビーさんに言われた通りに登録申し込み書に、氏名、年齢、住所、連絡先、そして特技を記入します。特技は鍛冶にしておきました。

そして皆で他愛ない話をしながら待っていると、『番号札五百二十番をお持ちの方へ受け付けカウンター三番へどうぞ』とアナウンスが流れました。あっ僕の番ですね。行きましよう。

「こんにちは今日はどのようなご用件ですか？」

まだ若くて可憐な花のような僕を侮っているようです。脂ぎったおじさまはアメちゃんをくれた後に拉致しそうな感じで話しかけてきます。おじさまのご妄想にお応えして、頬を赤らめながらもじもじと申し込み書を差し出しました。

「ん？君はコー男爵様のご息女様でしたか。いつもお世話になっております」

おお、態度が改まりましたね。うちのお父さんは顔が広いんですねー。

「では、説明させて頂きます。まず、ギルド証管理部でギルド証を発行された後に依頼を受けられるようになります。ギルドランクは下からD、C、B、A、S、SS、そして最高ランクZとなり、ランクによって受けられる依頼が制限されております。依頼は当ビル八階にある検索魔具で探して頂き、依頼番号をこの受け付けカウンターにてお知らせ下さい。それから依頼内容と本人の実力を比べまして、問題無いと判断されましたら依頼を引き受ける事ができます。依頼が終了しましたら、ランクD～Bは当ビル十階へ、A～Zまで

は十一階にてご報告下さい。報酬は金銭の場合銀行振込みとなりますので、依頼を受けるまでには振込み先をお知らせ下さい。他に「質問はございますか？」

「大丈夫です」

「それでは、こちらの契約書をご確認頂き、宜しければご署名をお願い致します」

契約書には、怪我をするのは自己責任だという事、依頼放棄した場合による注意事項、依頼を他者と共にした場合の事等々、他にも細かい事項がびっしり五枚に渡って書かれており、重要そうなるだけ目を通してサインをしました。

「はい。それではあちら、右の通路に出られまして突き当たりにギルド証管理部がございますので、そちらにてこちらを提出して頂き、ギルド証をお受け取り下さい」

そう言っってパソコンのような魔具からプリントアウトされた紙を渡されました。とても…事務的です…

大抵のお話では、ギルドに来たぜ！ギルドランクが分かるアクセスリー渡されたぜ！軽い説明されたぜ！依頼受けたぜ！とトントン進んでいくのに、夢も希望も無いやりとりです。僕がこの物語の読者ならきつと読み飛ばしている事でしょう。

他の五人が終わるのを待って、ギルド証管理部とやらに向かいます。質素な扉をくぐると、先程とは打って変わってこじんまりとしたカウンターがありました。奥ではパソコンに向かって忙しそうにしている人が大勢いますが、ここに来る冒険者は新入会者しかほばいないのでしょう。カウンターには誰もいません。

「おーい！入会者だぞー！」

ビーさんの獣の雄叫びが部屋にいる人達の身をすくませました。

「は、はい。入会者の方ですかね？では、ただいま発行して参りますのでしばらくお待ち下さい」

雄叫びの効果があまりきかなかったお姉さんがなんとか立ち上がって奥へとよろめきながら行きました。他の人達はすぐんでしまつて何ターンかの間動けません。営業妨害で訴えられますよビーさん。

「お待ちせいたしました。こちらがギルド証です」

紙です。ぺらつとしたただの紙です。ギルドランクが上がる度にアクセサリーの色が変わっていくんだぜ！的なものではないのですね。

「それでは魔力認証を行いますので、お一人ずつギルド証に魔力を流して下さい」

そう言ったお姉さんの手には何かを計測する魔法具が持たれています。メラ君がウキウキ言いながら張り切つて魔力を流しました。

「はい、結構です。メラ・ポーボ様様の魔力を確認できました。これから魔力認証器に魔力を流して頂くとポーボ様様の情報を確認できますので、そちらのギルド証は持ち歩かなくても結構です。ただ、失くされますと再発行に手数料が発生しますのでご注意ください」

とても…ハイテクです…

そして、全員滞りなく認証が終わつて、依頼を見に行く事になりました。

そこは、フロア全体に埋めつくさんばかりに置かれている依頼検索魔具。魔具に向かっている真剣な目の冒険者達。地球時代にニユースで見た、一生懸命再就職先を探している人達で溢れている都心の職安を彷彿とさせる光景でした。皆、生きるのに一生懸命なんです。

「なんだか…凄いい熱気ね…」

「空いてる所ありませんね」

「今日は平日だからまだマシだぞー。休日なんかお小遣い稼ぎの親父達が押し寄せるからなー」

熱気にちよつと押され気味のハニーちゃんとヒュー君にビーさんが世知辛い事を言いました。どこの世界もお父さん達のお小遣い問題は深刻なようです。

「あそこ空いたぞ」

「さすが兄さん！行こ行こー！」

ポコ君と腕を組みながら行くペコちゃん。女の子丸出しになっている彼女に皆は生温かい目をしながらついて行くのでした。

「まずは、ここに魔力を流してだなー」

ビーさんが見た目パソコンが進化したような検索魔具に付いている認証器に魔力を流すと、画面いっぱい『ようこそ ビー・ストロング』と表示された後、カテゴリー選択画面と、上部にビーさんの名前とランクが表示されました。

「えっ！？おっさんZランクなの！？」

メラ君が叫ぶと、皆もそれに気づき驚いています。

「おう、ちなみにコイツもぞだぞ」

「親父、黙ってるって言っただろ」

おお、ポコ君もぞになっていたのですね。ハッキリ言わせて貰うと、何も驚く事はありません。ですよー、ってノリで終了です。しかし、やはり皆は驚いているようです。メラ君とペコちゃんにいたっては、英雄を見るようなキラキラした目で見ています。

「まあまあ、お前らも頑張ったらなれるから。ほれ、これ見ろ。」

根性でなんでもできると考えている脳筋は軽い感じで流して、画面を見るように促しました。タッチパネルのようで、表示されているカテゴリの一つ、魔物討伐の所を押しました。

「まあ、こんな感じで検索していったなー、目ぼしいものがあつたらほら、ここ。ここに依頼番号があるから、覚えるなり何かに書いていくなりして、七階の受け付けに行くんだ。分かったか？」

「バッチリ！次オレ！オレやりたいー！」

「メラ君、静かにしないと、馬鹿みたいに思われちゃうよ？」

もう馬鹿だと思われていますよミズホちゃん。そんなミズホちゃんにも負けずにメラ君はそくさと席に着いて検索魔具を起動させました。メラ君のテンションはうなぎ上りです。しかし、それはすぐに下がる事になりました。

「どうしたんですかメラ君？」

「どこかの家の掃除とか、お遣いとか、ペット探しとかしか無い…つまんねー…」

「ははは！そりゃDランクだからな！子供でもできるようなヤツしか無いな！」

「そう言えば…どうやってランクは上がるの？」

首を傾げるハニーちゃん。そう言えば説明された時には言っていなかったですね。僕は知っているので流してました。

「Aまでは申請したらいつでもランクアップのテストが受けられるぞ！Sからは仕事ぶりで上がる！質の良い仕事を質の良い成果で終わらせれば、上からお声がかかるんだ！一に努力、二に努力！三四は無くて五に根性だな！」

「まあ、Bまでのテストは簡単だからな。すぐになれるだろ。しばらくテストの為に励むんだな」

ビーさんの脳筋発言を冷静に流すポコ君の言葉に、メラ君は「テスト…」と嫌そうな顔をしました。筆記もありますからね。精々脳を鍛えて下さい。

「じゃあ、今日は帰りましょうか。それともビーさんのお金でご飯でも食べに行きましょうか？」

「おう！いいぞー！ちびっこ共の五、六匹くらいたんまり食わせてやるぞー！」

そうして、何の盛り上がりもなく初ギルドは終わったのでした。

余談として、ビーさんが涙目になる程高級なお店でたんまり食べたのには後悔も反省もしていません。だって、ビーさんがたんまり食べるって言ったんだもん！

27ブレイ目『夢も希望もありませんでした』（後書き）

<ギルド設定>

怪我をした場合の為に死亡保証もついた保険がある。

休日はお父さん達と子供達の壮絶なお小遣い合戦がある。

一応S以上の人間に贈られる指輪があるが、ビーとポコは邪魔くさがって放置した挙げ句家のどこかに行方不明中。

28『ブレイ目』ある、うららかな日の事でした』

ある日、黒い彼のせいで思うようにハーレム化が進まない僕は、業を煮やして強硬策をとりました。

「マリー先輩、お茶の時間にこのクッキーも一緒に出して下さい」

そう言って差し出した僕の手には、ピンク色のハート型のクッキー。

「まあ、可愛らしいですの」

「僕、今日料理実習だったんです。普通のクッキーじゃお可愛らしいマリー先輩に似合わないと思ってちょっと色付けしました」

今日は爽やかにイケメンスマイルです。マリー先輩は悪態をつきながらも顔を真っ赤にさせていそいそとお茶の準備をしに行きました。

そしてポコ君を除く生徒会メンバーに出されたお茶と、クッキー。四人はクッキーを褒めながら、その、可愛らしい、お口へ……ぱくり。

「……なんだか…身体が熱いな…」

いつも凜々しいローズ先輩が頬を蒸気させながら弱々しく言いました。

「ボクも……何だか身体が火照って…」

元氣印のヒマワリ先輩も同様に瞳をつるつるさせています。

なんと！他の二人も同様に身体をもじもじさせているではないですかー。

何ですか？棒読みなんかじゃありませんよ。決してクッキーの中に媚薬効果のある薬草なんて混ぜてませんよ。

「ああ…もうダメ…熱い…!!」

きゃー。ナデシコ先輩なんて破廉恥なー。けしからんお胸が現わになっていきますうー。

「ああ、ワピコ。貴女、そんなに麗しかったのです…?」

きゃー。マリー先輩、そんな乱れた格好で絡みつかれては僕の暴れん棒が当たってしまいますよーう。

「ワピコ…」

「ワピコさん…」

「ワピコちゃん…」

「ああ、ワピコ…」

あっそんなねっとりとした手付きで鎖骨触っちゃらめえー。み、耳が…耳が熱い吐息でランデブーしちゃいますー。ぼ、ぼ、僕、始めてだから、優しくしてーアッー……

「……何してるんだ？」

アッー!!!ポコ君ー!!!??

な、ななな何故……落とし穴に落として三時間は出られない結果を張ったのに……

「これは…何かの毒だな…今治してやる」

そして、僕の企みはポコ君によってアッサリと破られたのでした
……哀愁。

また違うある日の事。

やっぱり自分の意志ではないのに、そういう関係に持っていくのは道徳的にいかん！と反省して別の策を練りました。

階段の上で楽しそうにお喋りしているヒマワリ先輩にこっそり近付いて、本物そっくりの赤茶羽根の驚異、コードネームGのオモチヤを彼女の足元に投げました。

「うわ！うわわわ！あつ……！！！」

ヒマワリ先輩が足を踏み外して階下へ真っ逆さま。

今です！サツと登場して彼女をお姫さま抱っこで助けて「大丈夫かい？キリッ」とヒロインのピンチに駆け付ける王子さまになるのです！！

その時、僕の横を黒いモノが光を超えた速さで横切りました。

「……大丈夫ですか先輩？」

「あつ……ぼ、ポコ君……ぼっ」

そして、またもや僕は涙を飲んだのでした。

またまたある日。

やっぱり女の子を危険な目に合わせてはいけないと反省し、違う策を練りました。

「やだ、届かないわ。台はどこかしら…」

今です！後ろからまるでナデシコ先輩を抱くようにして手を伸ばし、「この本が見たかったのかい？キリッ」と頼れる男(?)をアピールするのです！

アッー！しまった！背後に回ったのはいいけれど、僕も届かないです！

「どうぞ、先輩」

「ぼ、ポコ君ありがとう……ぼっ」

「……」

そして、僕はナデシコ先輩とポコ君に挟まれながら宙を眺めていたのです。

またまたまたある日。

やっぱり自分にやれる事とできない事を見極めないと、と反省して違う策を練りました。

「ローズ先輩勝負です！僕が勝ったら、貴女は僕のハーレムの一員になって貰います！」

ヤケクソなんかじゃありません。誰がなんと言おうとヤケクソなんかじゃないんだからね！

「なんだか分からん理由だが……いいだろう。……だが、私は強いぞ？」

そうして体技室にて僕とローズ先輩の決闘が始まったのです。

「……そこまでですローズ先輩」

始まったと思ったら、黒いこんちくしょうめがローズ先輩の喉元に練習用の木刀を突き付けていました。

「もし、ワピコを傷つければ……いくらローズ先輩でも許しませんよ？」

「ふふ……君は強いのだな……ぽっ」

そして、僕は世の無情を呪ったのでした。

僕は気づきました。

彼は、あの憎々しい黒い彼は……僕限定のフラグクラッシュャーなのだ……

決して彼自身には作用せず、僕に対してのみ作用する恐ろしい隠しステータス。

「ワピコ……今度の休日は何してるんだ？」

僕が心の中で血の涙を流しているというのに、このフラグクラッシュャーめ。僕の髪に口付けしながらお色気ムンムンに見つめるんじゃないですこんちくしょうめが！

「お前を蠟人形にしてやろうか……！」

僕の叫びにビクツとしましたが、彼はすぐに頬を赤らめて呟きました。

「ワピコに……人形にされるなら……いい……」

どころやら彼は、僕の予想斜め上をいく妄想をしているようです。
違います。かのご高名なデーモン閣下の名言です。勘違いですか
ら、ねっとり見つめないで下さい。

……意外とドキめいてしまうのですから。

29『ブレイ目』とても…ぶらぶらしています…』

なんやかんやでポコ君とくだらない戦いに明け暮れて、気がつけば二年生になっていました。

僕の血と涙と何か色々な汁を垂れ流して頑張った結果、徐々にワピコファンクラブに女生徒が増えてきました。体術の授業でキリツとしたり、僕の背が165センチになって、可愛い系ではなく綺麗系になってきたのも関係あるのでしょうか。

そんな順調な学生ライフを過ごしていたキラキラと太陽が照りつける夏のある日の事、ヒュー君が僕達を別荘に招待してくれました。

「メラもようやくBランクになれた事ですし、僕達でもできそうなBランクの依頼がちょうど僕の別荘の近くでありましてね」

そして、夏休みを利用しての依頼とバカンスに出かける事になりました。

「夏だ！」

「海だ！」

「おっは いだー！ー！！」

「ワピコ、それなんか違う」

Oh！テンション上がりすぎてメラ君にツッコまれてしまうなんて不覚です！

碧い海。青い空。白い砂浜。しかし、そんなものはどうだっていい。そんなものはクズだ！見たまえあの子達を！

手入れが行き届いたなめらかな肌。部活によって引き締められた

身体は無駄な肉が付いておらず。ワンピース型という初々しい水着に身を包んだ彼女達の未成熟な身体は、しかし発展途上の瑞々しい魅力に満ち溢れており……

むふむふ、ここはヒュー君ちのプライベートビーチなので他の女人はいませんが、今回はハニーちゃんとミズホちゃんも勘弁してあげましょう。二人共、この前までつるぺただと思っていたのにいつの間になんか成長して……うっとり。

ばしゃっばしゃっ

はっ。いつものクセでポーズをとってしまいました。

僕のCカップの水着姿を無表情で撮るのはポコ君です。しかし、無表情だけでも、今回は頬を赤らめています。

うむ、そうであろう、そうであろう。このシミどころかホクロさえ一つとして無いこの白い肌。たわとまではいかないけれど、Cカップを寄せに寄せてDカップほどにまで見せているビキニ姿。引き締まったウエストからお尻に流れるラインはまだなめらかさが足りないけれど、チエリーボーイ共にはこの若さ溢れる僕の肉体で何回夜のオカズにできる事でしょう！

あっポコ君とヒュー君が股間を押さえて走って行きました。きつとトイレに駆け込むでしょう…若いつて素晴らしいですね。

「アイツら、どこ行ったんだ？」

メラ君にはまだ大人の世界は分からないようです。放って置いてハニーちゃんとミズホちゃんと戯れてきましょう。いやっほい！

「ペコも来れば良かったのにねー」

ハニーちゃんがイルカボートに乗りながら言いました。そう、ペ

「コちゃんは「そんな子供の遊びに付き合ってられるか！」とツンツンしながら別荘でお留守番です。」

「女の子だって事を隠したいなら、上着でも羽織ってればいいのにな。」

「でも、ペコちゃんは多分もう僕と同じくらいの胸の大きさしていますから、水に濡れれば隠すの難しいんじゃないですかね？」

「「うそー!?!」」

二人は叫んだ後、自分と僕の胸を見比べて難しい顔をしています。女の子は胸の大きさを気にしますよね。僕は大きさより形を優先する派ですから、そこまで気にしないんですが、気にしている姿はなんととも言えない可愛さがありますのう。むふむふ。

「それよりもさー。いつまで男の格好してるんだろな？」

プカプカと浮輪に乗って通り過ぎて行くメラ君。僕達三人は気まずい感じで顔を見合わせます。

「ペコちゃんは男の子のフリをするのが普通になり過ぎてて……」

「そこまで考えて無かったね……」

「……そうね……」

少しの沈黙の後、お互いに顔を見合わせ強く頷きました。その目に映るのは揺るがない決意です。

『ペコちゃんを女の子に戻そう同盟』ここに結束です!!

「でも、どうする?ペコ君の事だから、本当は女の子でしょ!って言っても、逆に頑なに自分は男だ!って言い張りそうだよな?」

「そうですね、ミズホちゃん。ひん剥いてしまえば手っ取り早いん

ですけど…ペコちゃんの繊細な心には衝撃が強すぎますかね？」

「はは…ワピコ、それは流石にやめてあげて…言い逃れできない状況にさり気なく持って行かないと…」

「」「むむむむむ…」

「……………野球拳……………」

ボソつと言った僕の言葉に、二人が「何それ？」って感じで首を傾げています。

「遠い遠い異国の地で、神がその遊びで戯れていたという、神降ろしの時に用いられる神聖な儀式です」

二人が喉を、ごくり、と鳴らしました。

「仕方はいたって簡単。まず、二人で一瞬で終わる簡単な勝負をし、負けた方が一枚、また一枚と服を脱いでいくのです。そして、それは片方が裸になるまで続けられると言っ……………」

「な…なんて恐ろしい儀式なの…!？」

「でもでも！それならペコ君を少しずつ脱がせていけるね…!」

また強く頷き合った後、どことなくスッキリした顔をしたポコ君とビュー君、ついでにメラ君を混じえて、綿密に作戦を練っていくのでした。

「遅かったな」

「おやおや、ペコちゃん寂しかったんですかー？」

「だ、誰がっ!？」

うふふ、夜の事を考えるとテンションが上がって、うっかりペコちゃんをイジメてしまいました。僕の脳内は既に脱衣麻雀の世界です。

ヒュー君ちの専属コックの料理に舌鼓を打ち、食休みをして夜も深まっていった頃、ペコちゃん女の子作戦が開始されました。

ペコちゃんは最初ゲームをする事にあまりノリ気ではありませんでしたが、メラ君の「負けるのが怖いんだろー」という安い挑発にまんまと乗せられ、無事ゲーム参加となりました。

しかし、僕達がゲームの概要を説明すると、ペコちゃんは見る見るうちに真っ青になります。

「言っておきますが、今さらやっぱりやらないって言ってもダメですからね?」

「…ふんっ嫌だと言ったらどうなるんだ」

「お前のタキシードお面コレクションを尽く燃やし尽くす」

「に、兄さんまで…!だ、ダメ!タキシードお面様だけはダメー!」

そして涙目のペコちゃんを諫めながら二人一組になる為のアイテム作りをします。勿論、イカサマです。皆が線を書き足した後に、僕の神様パワーでちよちよいと変更させて、僕とペコちゃんがゲームをするように仕向けるのです。

それ、めたもるふお〜ぜ〜

そして、まずは僕の名前からあつみだつくじ〜となぞっていくと……………ヒュー君の名前のところに着きました。

皆やめて下さい。そんな冷めた瞳で見ないで下さい。誰だって失敗する時くらいあるんです。

結局ペコちゃんと当たるのは、ポコ君になりました。ポコ君なら安心ですが、念の為にそりと動体視力上昇の魔法をかけましょう。

え？結局何で勝負するかですって？ジャンケンです。普通だとかそんな苦情・批判は受け付けません。勝てる勝負をしないとイケないのです。

勝つ秘訣はアレです。次の新刊いつ出るんだよ！ってくらい新刊が出ない某漫画にて方法が載っていたのですが、それをちよつとパク……拝借いたしまして、最初はグーをします。するとグーから振り下ろす瞬間には大概次に出す手の形をしているので、それを判断しながら勝てる手を出すのです。

地球時代に試して、そんなのできる訳ないだろってキレかけましたが、今の僕とポコ君のスペックなら問題ないのです。

そういう訳で僕はアツサリとヒュー君をひん剥き、真っ裸になりながらもクールでいようとすると彼に誠意を示してさり気なくパンチラしてあげると、また股間を押さえてトイレに駆け込んで行ってしまいました。僕って友達思いです。

さて、次はいよいよペコポコ兄弟対決です。

「ペコ……悪いが、容赦はしないぞ」

「兄さん……」

何だか悲愴感が漂っています。まるでこれから命をかけたバトルが繰り広げられるかのようです。

「最初はグー！」

「ジャンケン……」

「「ぽん……」

ポコ君パー。ペコちゃんグー。ペコちゃんは悔しそうに靴下を片方脱ぎました。

「くそっ次は負けないからな！」

そうペコちゃんは意気込むも、一枚、また一枚と脱がされていき

……

そして、ついにペコちゃんはタンクトップ一枚に下はおパンテーだけになりました。タンクトップからはサラシがチラチラ見えており、パンツにもっこりとしたモノが無い事から男では無い事が既に明らかです。

しかし、それでもペコちゃんは自分は男だと言わんばかりに、涙目になりながらも凜として立っています。そんなペコちゃんを居た堪れない気持ちになりながら、それでも自分から言っただけと思っ僕達は見守る事しかできません。

「ペコ……まだ、やるのか？」

「当たり前だ！最初はグー！」

「ジャンケンポン！！！」

ペコちゃんグー。ポコ君……チョキ。

「や……やったー！」

ざわ…ざわ…僕達は動揺しました。まさか、ポコ君が負けるなんて。違う事に気をとられていたのでしょうか。それともうっかり手が滑ってしまっただけでしょうか。

そんな僕達の心配をよそに、ポコ君はまた負け、一枚、また一枚と脱がされていきます。そして、ついにポコ君はブリーフ一枚になりました。ブリーフです。黒の。彼は、今、黒のブリーフ一丁です。いや、もはやアレはブーメラパンツというものでしょうか……

「ポコ君……」

僕がそう呟いたのが聞こえたのでしょうか、彼はこちらを振り向きました。その瞳に映るのは戸惑い。

そうか、ポコ君は妹を女に戻してあげたいという気持ちと、辛い目に合わせたくないという気持ちの間で迷っているんですね。

しかし、ポコ君。彼女が女だという事は変えられぬ事実です。今日でなくとも、いつかこの壁にぶち当たるでしょう。それならば、いつそ僕達の手で彼女の殻を破ってあげたい。これは単なる僕達のエゴかもしれないけれど。僕なら友の手で為される事を願います。

そう、想いを込めた眼差しでポコ君を見ると、彼は決意を込めた目になり強く頷きました。

「ペコ！これで最後だ！！最初はグー！」

「ジャンケン！」

「ぼん！！！」

ペコちゃんパー。ポコ君……グー。

皆啞然としています。そして、ポコ君は潔くブーメランパンツを脱ぎ捨て……十四歳にしては立派なソレを隠そうともせず、威風堂々と僕に近付いて来ました。

「ワピコ……どうだ？」

「何がでしょう？」

「お前が俺の裸が見たいと……そう、目が語っていたじゃないか」

どうやら彼は、僕の予想遙か斜め上をいく妄想をしていたようです。

ペコちゃんは顔を赤らめながらもじっと見ている、ハニーちゃんとミズホちゃんはキヤーキヤー言いながら遠くに逃げ、メラ君はバカ笑いをし、ヒュー君は呆れた目をしています。

僕はどうしたものか…と考えていた時です。部屋にバナナ臭が立ち込めました。

「ば……バナナ？」

「誰かバナナ持ってきました？」

首を振る皆。そして、ミズホちゃんがボソツと呟きました。

「神降ろしの儀式……」

ハツとするハニーちゃん。

「そ、そうよ！私達神降ろしの儀式をしていたんだもの！まさか…成功していたの…！？」

「そうなんですか！？」

「か、神様来んのか！？」

「神様！！」

神様！神様！と叫ぶ狂信者達。僕はまた疎外感を感じ、ポコ君は無表情でぶらんぶらんさせています。そして、狂信者達の熱狂が最高潮に高まった時、部屋を眩い光が満たしました。

僕達がゆっくりと目を開けると、そこにはバナナを貪る変態。真っ裸の金髪碧眼のイケメソが立っていました。おお、今日は僕達に合わせて裸なんですね。とても変態が際立っています。

神々しくイチモツをぶらぶらさせている神様に皆が見惚れている中、神様はバナナをひと振りさせました。

すると、どうでしょう。ペコちゃんのサラシが弾け、細身男子用のタンクトップがペコちゃんのCカップではち切れんばかりにパツンパツンになっているじゃないですか！

まさかの事態に呆然とするペコちゃんに、神様は言いました。

「今、あなたを女にしました」

「……え？」

「男だったあなたを、たった今、私が、女にしました。これからは女として生きていきなさい」

それだけ言うと、神様はブランブランさせながら光へと消えて行くのでした。

おお、神様。つまりは、神様の気まぐれで女にされたのだから、それを理由に正々堂々と女として生きなさい、と言う事ですね。中々粹な事しますね。

いまだ呆然とするペコちゃんに、「女用の服買いに行かなくちゃね！」とキヤピキヤピするハニーちゃんとミズホちゃん。それを微笑ましく見守る僕達。

今回は神様に助けられました。今度、お仏壇に神様の写真を立ててバナナでもお供えしてあげましょう。

後日のお話ですが。ペコちゃんの両親は「神様が！」「神様が！」と鬼気迫る五大貴族の子息子女達に説得され、ペコちゃんは無事女の子として生きられる事になりました。

その噂が巷に広まり、ペコちゃんが『聖女』とか呼ばれ出したのはまた別のお話です。

29プレイ目』とても…ぶらぶらしています…』(後書き)

まさか、信じる方はいないと思いますが、とってもピュアな方のご説明。

野球拳の『神降ろしの儀式』という説明。嘘です。

とてもピュアな方、信じてしまったならごめんなさい。

300プロイ目『ブレんブレんしちゃいます』

ヒュー君ちの別荘にて。ペコちゃんの動揺が収まるのを待ち、依頼へと出掛けられたのは四日目の事でした。

「では、これから『つちのこ』搜索を行います。予定通りヒュー君とミズホちゃんは東へ。メラ君とハニーちゃんは西へ。僕とペコちゃんは北へ。ポコ君は野生の勘で適当に。三十分ごとにポコ君に連絡を入れるように。無い場合、何かあったと見なしてポコ君が能面を付けて現れますからね。もう一度念を押しますが、見つけても絶対に独断で動かないように。全員が揃うのを待って捕獲です。これは命に関わる事です。いいですね？」

全員頷いて、そして各々散らばって行きました。

依頼内容は『つちのこ』の討伐or捕獲。とても凶暴な魔物なので死んでいても可。生きて捕らえられれば尚良し。そしてつちのこが生息するのは、ヒュー君ちのプライベートビーチの近くにある入り江から行ける鍾乳洞。天井から乳白色の石がつららのように突起しており、照明で照らせば普通の洞窟とはまた違った幻想的な光景が広がっています。足元は海の水が浅く満たし、ちよっとぬるっとしていて危ないです。

「ペコちゃん、足元に気をつけて下さいね」

「……」

返事が無い。ただのツンデレのようだ。いや、これはツンツンさえていますません。デリケートなお年頃にデリケートな問題ですからね。ちよっと落ち着いたとは言え、そう簡単には解決しませんね。

腫れ物を触るかのようにしか接せない不甲斐ないお父さんのよう

に、僕はペコちゃんが転ばないようにと注意しながら、つちのこの痕跡を探します。

つちのこは、鍾乳洞を形成している成分が好物で、つちのこが食べた後の鍾乳石は虫喰いのようになっていいます。ペコちゃんに辺りを照らして貰い、僕が周りに気を配りながら念入りに石をチエックしていきます。

三十分程歩いた後、ポコ君に連絡を入れてすぐ後の事でした。道が少し狭くなって、高さも屈まないといけないくらいの所で白い蝙蝠がばっさー、わっさーと僕達を通り過ぎました。

「うわっ！」

思わず手で顔を庇い、蝙蝠が通り過ぎるのを待っていると、ばしやーん、と後ろで音がしました。お……？おお……

振り向くと、そこには驚いて尻餅をついてしまったペコちゃん。勢い良く倒れた彼女は、白いシャツと共に綺麗な金色の髪までしつとりと濡れていて、まだオパイカバーを装着するのに抵抗のある彼女のＣカップが……むしろＣカップに付いている突起物が……まさか、二次元の世界にしか存在しないと思っていた、あの、濡れ濡れうっすらオパイが……僕、生きて良かったです。

僕の視線に気づいたのか、ペコちゃんは顔をりんごのようにさせて胸を隠しました。ダメです！そんな顔されては僕の暴れん棒ジョニーが勝手に起動してしまいます！ぐぐ……まあ、今日はスポンなのでそのままにしておきましょう。

「もう、蝙蝠はいなくなっただから大丈夫ですよ」

「……あっ……」

僕がイケメソオーラを出しながらペコちゃんの手を引っ張り立たせてあげ、そしてどさくさに紛れて腰に手を回してみました。

抱き合う形で向き合う僕とペコちゃん。僕よりも10センチ程低いペコちゃんをイケメソビームで見おろす僕。自然と彼女は僕を見上げる形になり、イケメソオーラにやられて頬を蒸気させながら、恥ずかしさで瞳を潤ませて、そんな可愛らしい彼女の顔に髪の毛から垂れてきた水がつっ……とエロさを演出しています。

あれ？これ、僕いけちゃうんじゃないですか？女の子との初ちゅー……僕、いっちゃいます？

「ごめんねー素直じゃなくってー

ですよ。フラグクラツシャーは半径一キロくらいまでその効果を及ぼしますものね。

僕が心の中で盛大に舌打ちしながら携帯に出ると、『ただ、声を聞きたかつ……』の所で切りました。

「……ん？ペコちゃん、どうしました？」

ペコちゃんは僕に背を向けて、少し震えています。

「やっぱり……僕は男なんだ……」

「……え？」

「女の子にトキめくなんて……！やっぱり僕の心は男なんだ……！」

おう、なんて事でしょう。それは告白として受け取ってもよろしいですか？

このまま百合道に引つ張りこんでしまいたいですが、ペコちゃんは生真面目な子ですから悩んで悩んでハゲてしまつては可哀想です。

「大丈夫ですよ。僕、男ですから」

ペコちゃんは可愛らしいお目々を飛び出すんじゃないかと思うくらいに見開いて、「え？え？」と僕の顔とオパ―イを交互に見ています。

「正確に言つと、男でもあり、女でもある。両生具有つてヤツです」
「……創世神様と……同じ……つて事？」

「そうです。だから、ペコちゃん。君は何も可笑しくはありません。男である僕にトキめいたんですから。君は、女の子です」

ペコちゃんは泣きそうな顔をしましたが、すぐにまた背を向けてしまいました。よしやるぞ！ここが僕の男の見せどころです！

「これは、ペコちゃんだから言つたんです。皆にはヒミツ……ですよ？」

ペコちゃんを後ろから抱き締めて耳元で囁いてやりました。イケメンだから許される秘技です。これが地球時代の僕だったら、ただのイタイ僕です。

ペコちゃんは僕の耳元でのスイ〜トな囁きに、ぶるっ、と身体を震わせた後、顔を背けて言いました。

「黙っていてやってもいいけど！……今度、美少女戦士喫茶に付き合えよ……」

ペコちゃんのツンデレっぷりに、僕の鼻の下はデレんデレんです。

「ごめんねー素直じゃ「何ですか？」」

トゲのある言い方になったのは否定しません。

『ヒュー・ミズホ組が発見した。今から位置情報を送るからすぐに集合してくれ』

携帯を切ってしばらく待った後、携帯に位置情報が送られてきました。ポコ君の精度の高い探索魔法のおかげで、鍾乳洞内の迷路のような道が細部に渡って表示されています。

「ふむ、そう遠くないようですね。ちよつと戻って、水の中を潜って行けばすぐに着くはず。ペコちゃん、いけますか？」

「大丈夫だ」

先程までの沈んだ雰囲気を感じさせる事なく、ペコちゃんは凛々しく頷きました。僕のジョニーのおかげですね。

そして、つちのこの元に向かう為水を潜り、濡れ濡れ透け透けのペコちゃんの為に神様パワーで服を乾かしてあげて、ペコちゃんにツンツンデレデレされながら着きました。

「早かったですね」

「うん、ちよつと近道して来たんだ」

「あれ？あれれ？ペコ君、なんだか表情が柔らかくなったね？」

「…っつき、気のせいだ！」

さすがミズホちゃん、僕の養殖を見破るだけの洞察力を持つだけがありますね。

「さて、皆集まった事だし、始めるか。現在つちのこはあの鍾乳柱でお食事中だ。これは、お前達の依頼だ。俺はお前達が死にかけるまでは手を出さない。落ちてくる鍾乳石に気をつけながら戦うんだぞ？」

ポコ君の言葉に五人に緊張感が走ります。今まではBランクになる為の訓練しかしていなかったから、依頼に来るのは初めてです。しかもつちのこは結構強いのです。彼らの実力ならぎりぎり討伐くらいならできるでしょうが、捕獲は無理でしょう。しかし、僕もサポートはしますが、基本戦ってるフリだけしましょう。彼らの為になりませんんからね。

「来い、火の精霊。風の精霊。」

ファンヒーター
「熱風」

メラ君が、漢字で書いて異世界なのに何故か英語な呪文を唱えると、つちのこが潜む鍾乳柱の周りをぐるぐると熱風が渦巻きます。この魔法は、主に洗濯物を乾かしたり、髪の毛を乾かしたりと、生活密着型の魔法です。

とても地味な魔法なんですけど、つちのこは熱と乾燥に弱いので地味に体力を奪っていけるのです。

グイシャアアアア！！

体長60センチ程のつちのこが苦しみながら飛び出してきました。蛇の胴が太くなった感じの生き物は黒ずんだ鱗をヌメヌメと光らせてのたうち回っています。ハニーちゃんがさかさず地の精霊を喚び出し、土の壁で覆います。しかし、さすがはつちのこ、土なんてものともせず喰い破り、ヒュー君に襲いかかりました。

「くっ……！！」
ウインドウエッジ
「風の鞭」

ヒュー君が噛み付かれ、それをしなる風で叩き落とします。

「ミスホちゃん！すぐにヒュー君の毒を抜いてあげて下さい！」

「うん！水の精霊よ…」
キアリー
「吸毒」

つちのこは毒を持っており、それは男にとってとても深刻なものです。毒が下半身まで回ると……ジヨニーが不能になるのです。恐ろしい。

その間にもペコちゃんが光の矢で威嚇していますが、つちのこはとても素早くものともしていません。

「皆！周りを囲むように動いて下さい！」

このままでは逃げられてしまいそうです。と思っていたら、つちのこが地面に向かって潜っていくではありませんか。ああ、今日は失敗ですね。また明日にでも……

「地の底に潜む大いなる火の精霊よ！我が血脈による盟約に応えよ！
ポーボボ・マグマ！！！」

なんと。メラ君、もうお家伝統芸を使えるのですね。しかし、逃がさない為とは言えそれはやりすぎだと思つのですよ。

地の底から響いてくる轟音。揺れる鍾乳洞。底から溢れてくる熱から逃げるように出てくるつちのこ。その首を掴むミスホちゃん。

「おい！ここは崩れるぞ！！お前ら俺に掴まれ！！！」

溶岩が火柱のように溢れ出してくると、ポコ君が皆を連れて転移したのは、ほぼ同時の出来事でした。

僕はと言うと、崩れないように鍾乳洞全体に結界を張って、マグマの精霊さんに丁寧に帰って頂けるようお願いしてから、ポコ君に続いて転移したのでした。

「ワピコどこ行ってたんだ！」

「ワピロ！」

「無事だったのね！」

皆が涙目で寄って来ました。すみません。環境破壊を防ぐ為に居残りしてただけなんです。

「ご心配おかけしてすみませんでした。それよりも、メラ君。あんな場所でマグマを呼び出すなんてダメですよ」

「へへへ」

「へへへ、じゃないだろ！この馬鹿！」

「そうです。危つく皆で仲良く生き埋めになるところだったんですよ。」

苦笑いをして後退るメラ君を凄じ勢いで責め立てる皆。うむ、今回は同情の余地ありませんね。さすがのポコ君も呆れたようにため息をついて言いました。

「今日はつちのこは諦めよう。また日を改めて…」

「え？つちのこなら、ここにいろよ？」

そう言ったミズホちゃんの手には、ピチピチと抵抗を続けているつちのこ。あ、そう言えばさっき何やら掴んでいた気がしますね。

又メラと気持ち悪く動くつちのこを、笑顔で素手で持っているミズホちゃんに皆はちよつと引いています。

「…ま、まあ…捕獲はできたものの、出来としては及第点だな。特にメラ。お前は現状把握能力が無さすぎだ。もっと無難な依頼を沢山こなして経験を積み」

ポコ先生のお言葉にさすがのメラ君もションボリしています。さ

さすがに経験豊富な人は迫力が違いますな！。

「ねえ、コレどうすればいい？」

可愛らしく首を傾げるミズホちゃん。ですが、その手に持っているものはキーキー鳴いていて気持ち悪いです。

ヒュー君が腰を退けながら近寄り、持ってきていた魔物用捕獲籠に入れ、そして依頼は無事達成しました。

その日は僕とポコ君以外はぐったりしていて、早めに寝てしまったので夜は暇だったのですが、また次の日にはみんな元気になっていたの、ペコちゃんも引っ張って海で遊んで、皆ではしゃいで、皆で笑って、そして楽しかった一週間のバカンスは終わったのでした。

ペコちゃんの水着姿を見れたのが今回一番の収穫でしたね。むふむふ。

3 『プロパティ』 『プロパティ』 『プロパティ』 (後書き)

< 呪文について >

弁解の余地もございません。

一言、言わせて頂くならば、ウケを狙ったのではなく、あんなのし
か思いつかなかったという...救いようも無いものでございます...

どござ、お気の済むまで罵って下さいませ...

31 プレイ目 『そういつ展開、僕苦手です』

「え？僕ご指名ですか？」

木の葉が紅く染まる頃、ビーさんから依頼要請が来ました。Zランクにもなると色んな繋がりが出来てしまつらしく、今回は王族直々に依頼されたようで、内容はラビト王子様の結婚披露パーティーでの護衛のようです。

『ああ、断るに断れんな。すまんが引き受けてくれるか？』

「依頼主はどっちの王子様です？」

『二番目の方だ』

ああ、オラオラハクト君ですか。勝手にライバル視しているラビト王子様の結婚披露パーティーで、護衛として置いておきながらイチヤイチャしてラビト王子様に見せつける気ですね。いいでしょう、その挑戦受けてたきましょう。

そして、結婚お披露目当日。お城の大広間で将来の国王様と王妃様の登場を大勢が待つていました。

今、僕の目の前にはイライラしているハクト君と、デレた顔しているペコちゃんと、無表情だけれど凄い勢いで僕の写真を撮っているポコ君がいます。

「……おい、お前、どういつつもりだ？」

「おや、ペコちゃん。僕に惚れなおしちゃいました？」

「ばっ……馬鹿言え！」

「……ワピコ、どんな姿でも綺麗だ……」パシヤツパシヤツ

「おい！俺の質問に答えろ！」

ハクト君がイライラしている原因は僕の服装にあります。なぜなら今僕は、男装をしているのです。ピシッと決まった黒い礼服に、腰まである銀髪を襟足で纏めていて、男としてはちよつと背が足りないかな？と思ったので十センチ底上げされたシークレットブーツを履いています。

僕の美貌は性別を越えたものがありますからね。声を出さなければ、男に見られるでしょう。そんな僕とイチャイチャしようものなら、「まあ、ハクト殿下は男色家でしたのね」なんて、ご婦人方の妄想の餌にされる事でしょう。

「大体、俺が送ったドレスはどうした!？」

「え、僕のお仕事は護衛ですよ？こんな動きにくいドレスは着てくるなって事じゃなかったんですか？」

軽く嫌味を込めて、こてん、と首を倒して天然ぶります。そんな僕の奇跡のような可愛らしさにハクト君は頬を赤らめ後退り、ポコ君はデジカメ風魔具の容量が無くなってしまいました。

ペコちゃんはただハクト王子様に五大貴族として挨拶に来ていただけらしく、まだ挨拶に回らなければいけないのでオラオラ王子にもう一度礼をしてから、まだ着慣れないドレスとヒールを履いて、覚束無い足取りで歩いて行きました。

ポコ君は僕のストーカーなので離れません。それもオラオラ王子様のお気に召さないのでしょうか、絶好調に不機嫌です。

僕はと言うと、ハクト君に挨拶に来たご婦人方にイケメソスマイルを振り撒き、入れ食い状態です。

「おや、ワピコじゃないか。……どうしたんだい？その服装は……」

インドのマハラジャのような、自国の民族衣装に身を包んだエキ

ゾチックなパイヌ君がやってきました。ご婦人方にキヤーキヤー言われている僕に軽く引いています。

「今日はハクト君の護衛なんで、動きやすく、かつこの場に相応しい格好をしているだけですよ?」

また、こてん、と首を傾げて見せると、まんまと頬を赤らめたパイヌ君がハクト君に詰め寄りました。

「そんな危ない事をワピコにさせるなんて、どういうつもりだい?」
「他にも護衛なんざいっぱいいるんだし、なんかあってもワピコに危険が及ぶ前に他が片付けるだろ」

おっと、ハクト君フラグ立ててしまいましたね。まあ、過激な宗教団体に狙われた事もある次期国王の結婚パーティーです。何かあっても可笑しくはありません。今回もビーさんに施設警備員のようになっただけです。

『ラビト王子殿下ご夫妻、ご入場!』

アナウンスが流れ、大広間の階上から王子様ご夫妻が高貴さ溢れる礼をしてから、ゆっくりと階段を降りて来ました。

ラビト王子様は顔立ちにまだ多少の幼さは残るものの、すっかり引き締まった顔つきになっており、あの拐われていた小さい男の子がこんなに立派になって……とおっちゃんはしみりしてしまいました。

そんな王子様の隣に立つのは、平凡な顔つきながらもとても穏やかそうな女性です。王子様を見つめる眼差しには慈愛が溢れており、きつと、この女性とならラビト王子様も幸せになれるでしょう……と、感慨深げにうんうん頷く僕を見たオラオラ王子に変なものを見

る目で見られました。

「なあ、お前そんな事よりさ、今からでもドレスに着替えて来いよ。なんなら俺が手伝ってやろうか？」

「ハクト殿下、ワピコを辱めるのなら俺が許しませんよ…？」

「私だって許さないからね、ハクト王子」

「うふふ、皆仲がいいんですね」

剣呑な雰囲気のある三人を養殖で流す僕。「どこが！？」とハモつてる三人を見て、思った通りの反応をするなあ、と生温かい目をする僕でした。

「あ、ほら、ラビット殿下がこちらにおいでになりますよ」

ラビット王子様は僕に気づいて、一瞬動揺した瞳になりましたが、すぐにいつものように真紅の瞳を優しく気に細めて微笑みました。その王子様っぷりは素晴らしいです。僕が身も心も女ならば、僕の中の抱かれない男No.1ですね。

こちらへ笑顔で近付いて来るラビット王子様。しかし、横からどこかのお貴族様が現れて小汚い笑顔で握手を求めています。

次期国王様は大変ですねえ。ちよつとの距離もまともに歩けないなんて肩がこりそうです。ほら、また薄気味悪い男が…ああ…あんなの相手にも優しいな笑みを崩さないなんてさすが生まれた時から王子様やってる事がありますね。

……ん？ラビット王子様の様子が可笑しいです。ぐらぐらしてる気がします。

そう、感じた時、先程握手をしていた薄気味悪い男が走り出し、王子様が倒れました。

「ポコ君！あの男を追って下さい！」

広場に響きわたる悲鳴。王子様に群がる人達。慌ただしく動く護衛達の怒号。

僕はラビト王子の容態を見る為に駆け寄ろうとするも人垣に遮られ、思うように前へ進みません。

「どけ！道を開ける！」

そこにハクト君の怒声が響きました。その表情は、いつも反抗ばかりしている兄相手に心底心配している様子で、人垣が割けた道を足音荒く進んで行きます。僕もそれにあやかって彼に続きました。泣きじゃくっている奥さんに抱えられているラビト王子は、目を見開いて痙攣しており、汗を滲ませるその顔は紫色に変色しています。

「…っあ…兄貴！！おい！！しっかりしろ兄貴！！」

あっ！ちょ、ちょっと！明らかに毒でしょう！？揺さぶったら毒の回りが早くなるじゃないですか！！

やめなさい、と言ってもハクト君は混乱すぎて僕の声が届いていないようで、魔法で眠らせて静かになって貰いました。

「治療師！治療師はまだですか！？」

「落ち着いて下さい。僕が今診ますから」

興奮している奥さんに声をかけ、ラビト王子の体内を神様パワーで探ってみました。

「あ…っ！？ラビト様…？ラビト様——！！」

あつ。もう十数秒後くらいにご臨終されてしまいそうだったので、焦って仮死状態にしてしまいました。がくり、としてしまった王子様が死んでしまったと勘違いして、奥さんを筆頭に会場は悲しみに包まれてしまいます……どうしよう……ただの仮死状態だよとは言いづらい状況です……

「ワピコ……男を捕まえて衛兵に引き渡して来たんだが……」

おつちようどイイところにポコ君！

状況の把握ができていない彼の耳元でごによごによし、ポコ君が大丈夫だ、と頷いたのを確認して、僕は全てポコ君に押し付けてスタコラと逃げ出したのでした。

さて、ポコ君なら無事ラビト王子様を治せる事でしょうし、僕はまだ不審者がいないかどうかをビーさんに確認してみましようかね。

『お、ワピコか。ちようどいい。今、右塔最上階に怪しい奴がいるのを確認した。行ってくれるか？』

「分かりました。ビーさんはそのまま監視をお願いします」

そして僕は携帯を切った後、そのまま右塔最上階に転移、そしてアツと言う間もなく不審者を気絶させました。チートなのに、白熱した戦いなんてできないですよね。

念の為、しっかりとした縄でぐるぐる巻きにして、猿轡をさせてから、不審者の記憶を覗きます。組織の情報、今回の目的、城にどれほどの不審者が紛れ込んでいるのか。

……これは……いつからそういう物語になったのでしょうか？って感じでした。

まあ、一言で言ってしまうえば、宮廷内における権力争いですがね。ラビト王子と、ハクト王子は腹違いで、ハクト王子の方の母親の

兄、つまりハクト君の叔父が、ラビット王子を亡き者にしてハクト君を王に仕立て上げ、ハクト君を影で操り実質の最高権力を握るつもりらしいです。

なんとまあ、陳腐な展開でしょう。分かりやすすぎる悪役ですハクト君の叔父さん。

しかし、叔父さんは陳腐なりに頑張っているようで、過去ラビット王子を襲ったブリーフ教団と裏で繋がり、教団員を叔父の伝手でお城で働かせているようです。それが結構な数になるらしく、すぐに特定するのは難しいでしょう。

なので、目下の目的はその叔父さんの陰謀を暴く、という事になりますね。

さて、ここで僕のとる行動は……

- 一、神様パワーで叔父さんを操り大勢の前で自白させる。
- 二、ビーさんのギルド内における権力を駆使して、証拠集めをさせる
- 三、単独で動き、目立つ所で効果的に現れ、叔父さんの悪事をあばき、崇め奉られる。
- 四、ポコ君に全て押し付ける。

一はあまりにも呆気ないし、二は出来るならラビット王子様が拐われた時にとくに解決しているでしょうし……うん、三と四を合わせて、僕が証拠を集めて、ポコ君に正義の見方的に暴露して貰いましょう。

理由としましては、僕はまだポコ君の能面姿を見ていないので見てみたいからです。

とりあえず、今日は警備が固くなるでしょうから、目立った動きはできないでしょう。ビーさんに報告して、何か情報を持ってたら教えてもらっ……おや、僕の手刀をくらったのもう目覚めるなん

て、中々タフな不審者ですね。

……おお？じゃ、邪眼です！！こ、この不審者、厨二が憧れる邪眼を持っていますよ！！？

え？あっそうですか。その邪眼は人を動物に変える能力を持つのですね。それで僕をにゃんこに変えて、僕はどこぞの無骨な騎士とか、冷徹な魔法使いとかに飼われたりする乙女展開になる訳ですね。

とか思ってるうちに、結界を張るのを忘れ、まんまと邪眼の餌食にされたのです。

3 2 プレイ目『仔豚行進曲です』

服の中に埋もれてしまった小さな身体を一生懸命ぶひぶひ動かして、ぶごつと服から顔を出しました。

あれ？僕、今、ぶひぶひ言ってた？

僕は自分の身体の確認をしました。視界に映るのは特徴的な鼻。薄桃色の前足の先のヒズメ。ぽっこりとしたお腹。

豚です。明らかに豚です。

なんて事でしょう。僕は仔豚になってしまったようです。これじゃ、豚野郎と罵られたとしても、興奮はすれど否定はできません。

しかし、動物にされてしまう時って普通にやんことかがお決まりじゃないんですか？肉球ぶにぶにされたりとか、可愛い可愛いともて離さるものじゃないんでしょうか？

仔豚のまま首を、こてん、と倒すと、縛られて猿轡をされている不審者がうっとりとした目で僕を見つめていました。……コイツの趣味ですか。

神様パワーは健在のようで、すぐに術にかけられた身体を調べて、これなら簡単に戻れるな、と思った時でした。

こつてりとしたガチムチの身体。乱雑に切られた灰色の髪に無精ひげ。獣臭を撒き散らすビーさんが転移してきました。

仔豚サイズの僕から見上げる彼は怪獣のようです。

彼は、いると思っていた僕がおらず、縛られている不審者と、場違いな仔豚を見比べて混乱しているようです。

「ぶぎっぶぎっ」

僕がビーさんの足に鼻を押し付け、からっぽになった服を前足でてしてし叩くと、脳筋の彼でも理解できたようです。ぴこーん、と

した顔をして言いました。

「そうか！お前も服が欲しいんだな！？」

さすが脳筋。期待を裏切りませんね。

「しっかし、ワピコの奴どこ行ったんだ？まあ、アイツの事だから無事だろう」

そうして自己完結した彼は、不審者と仔豚を抱えて再び転移したのです。

ラビット王子殿下の結婚お披露目パーティーが波乱で幕を閉じた後、ラビット王子の容態は回復に向かっているものの、捕獲した不審者二名は、尋問の為猿轡を外した瞬間に舌を噛み千切って自害をしてしまい、身元捜査も思うように進展せず、黒幕が割り出せないまま三日が過ぎました。

僕はというと。

「よしよしよし、ピグちゃんカワイーでちゅねー」

「……」パシヤッパシヤッ

ビー、ポコ家にて、ペットとして鎮座していました。

元に戻らないのはアレです。某ハリウッド映画の主役の仔豚のように、ちよつとした冒険をしたかったからです。

ビーさんは相変わらず僕の正体に気づかず、赤ちゃん言葉で喋りかけています。

ポコ君はさすがストーカーといつかなんといつか、僕の正体をす

ぐに見破って写真を撮り続けています。

「ぶぎっ」

「親父、喉が渴いたらしい」

「よしよしよし、ほーらミルクでちゅよー」

「ぶっぎーっ！」

「親父、こんな安もの飲めるか、雌古竜からとれるミルクを持ってこい、と言ってるぞ」

「び、ピグちゃん…さすがにそれは命懸けすぎる…」

ポコ君はさすが僕マニアというかなんというか、僕の言葉を理解できるようです。

そんなくだらないやりとりを朝から繰り広げた後、ポコ君は僕のコピー人形と共に学校へと、そしてビーさんはギルドへと赴いて行きました。

さて、僕も仔豚大冒険へと出掛けましょう。

「こやー」

ビー家の窓をカリカリと引つ掻く隻眼の黒猫がいます。あれは僕の心の友ジャックです。今回の旅のお供として呼んだのです。窓を開け、ジャックを背中にライドオン。

仔豚の上に、お供猫。

テンションが上がって参りました。よし、ロデオしちゃうぞー。さながらモン　ンの仔豚とお供猫のように、ジャックを僕の上でがくんがくんさせながら、ご機嫌に跳び跳ねて冒険へと向かうのでした。

まず向かったのは、ハクト君の叔父であるトンヌラ侯爵のお屋敷でした。

さすがは侯爵家という広さで、仔豚の短い足では門から屋敷まではとても遠いです。ぶひぶひ言いながら、使用人に見つからないように物陰に隠れて移動し、重力を無視して壁を歩いて、三階の部屋を覗いた時でした。

「くそっブリーフ教団のヤツらめ！また失敗しおつて！私が一体どれ程の投資をしたと思っているのだ！！」

出ましたご都合展開。僕を待っていたかのような独り言です。

「……そろそろ奴らを切るか……」

「それは困りますね」

「な…！？お、お前…どこから現れた！？」

トンヌラ伯爵の背後に突然現れた謎のイケメン。黒いローブを纏ったその男は、ポコ君と同じ漆黒の長い髪を三つ編みにして前へと持ってきており、深い闇のような瞳は冷たい色をしています。明らかに悪者です。三文芝居を見ているかのようです。

「あなたはまだ使える“駒”なんですよ。このまま、従順な“駒”でいて下さい」

そう言った謎イケメンの手から、闇の力が溢れてきました。トンヌラ侯爵はまわりついてくる闇を振り払おうと僕よりも豚らしい前足をぶんぶん振っています。正直、放っておいても僕の良心は痛みませんが、あの闇は対象者を使用者の傀儡に変えてしまうものです。そんなものになられてしまったのは、告白させるなんて無理ですし、最悪証拠を全て隠滅された後にまた自害されてしまいます。

「ぶぎっ（ジャック、行きますよ）」

「にゃ〜ご（久々に暴れられるぜ）」

がしゃーん！と窓ガラスを割るなんてお行儀悪い事はせずに、普通に窓を開けて三文芝居に飛び入り参加しました。

「ぶぎーぶごっ（全てを救せ！全能なる光よ！）」

短い両前足で錫杖を頑張って持ち、魔力無効の光を放ちました。トンヌラ侯爵にまとわりついていた闇は、光に飲まれ消えていきま

す。
「な…！？この豚め！！」

「うにゃっ（おっと、お前の相手はこの俺様だぜ）」

どこからともなく取り出した短剣を僕に向けた謎イケメソにジャックが鋭い爪で襲いかかりました。音より速く動けるジャックの爪攻撃を紙一重で避ける謎イケメソ。おお、ジャックの攻撃を避けれるなんて、中々の手練ですね。

しかし、完全に避けきれていなかったらしく、謎イケメソのローブの胸の部分がザックリ斜めに避けていて、そこから少し血を流した素肌が現わになりました。

その肌は、何やらおどろおどろしい黒い刺青がびっしりされています。ちよろつと見えているだけですが、闇を取り込みやすくする呪文に似ている気がしますね。

トンヌラ侯爵についていた闇が完全に消えた後、僕もジャックの加勢に回ります。ジャックが目にも止まらぬ速さで連撃をかまし、僕が短い足をせかせか動かしながら謎イケメソの足に突撃します。

しかし、謎イケメソは中々素早しっこく、たまに掠るくらいで大打撃を与えられません。更にはこちらの隙については反撃をしてくるではありませんか。

謎イケメソの短剣がジャックの後ろ足を掠った時です。血が滲み、ジャックの動きが一瞬鈍ったのを見逃さなかった謎イケメソがジャックを思い切り蹴り飛ばしました。

「ふごっ（ジャック！！）」

おのれ、よくもジャックを。手加減してあげてましたが、もう許しませんよ。

「な…っ！？何だこの威圧感は！？」

今、僕の背後には、ゴゴゴゴゴゴ、と効果音が書かれている事でしょう。謎イケメソが冷や汗を流しながら後退っています。彼がなんとか気持ちを持ち直して短剣を構えた時です。彼の前から僕の姿は消えました。いや、彼の目にはそう映っただけで、僕は既に彼の背後へと回っていました。

僕が後ろにいる事に気づいてももう遅い。僕は光よりも速く、謎イケメソの鳩尾めがけて頭突きをかましました。

後にジャックは語る。「にゃあ…（俺はあの時桃色の彗星を見た…）」と。

そんな攻撃を受けて謎イケメソは蹲り、胃液を吐き出しています。ああ、それくらいで済んで良かったです。ちよつとカツとなつちやつたから、加減ができなくて、お腹を突き破っても可笑しくない威力でしたから。さすが黒幕的なイケメソ。丈夫にできてます。

「くそ…っ！この畜生が…！！」

失礼な！僕はれつきとした愛玩動物です！

「其は闇の淵よりも暗く…其は世界の黄昏よりも昏く…」

ギョツとしました。その呪文は遙か昔に滅びた闇黒魔王という厨二つばい名前のやつ之魂を喚び出すものです。正確には魂の一部を喚び寄せて、魔王の技を拝借するってものなんですけどね。なんにしるこんな可愛らしい愛玩動物相手にこんな所で使うものではありません。

「我が求むるは愚者を奈落に墮とす腕……」

ギョギョツとしました。広範囲高火力魔法です。いたいけな愛玩動物相手にどれだけムキになっているのでしょうか。は、早く結界を張らなければ。

僕があたふたしていると、謎イケメソの両腕の周りに古代語できた黒い魔法陣が浮かび上がりました。

あつあつ待つて待つて、まだ結界が完成してないんです！

「轟かせよ……」

アツ……！待つて……！！

「闇愚……」

詠唱が終わりかけたその時、謎イケメソの声が『破壊』されました。

驚いて見上げてみると、タキシードに身を包み、黒いマントを靡かせて、凜と立つ能面がいました。

た、タキシード能面様……！！

思っていた以上の迫力です！タキシードに能面と不釣り合いな組み合わせが、ポコ君の妙な迫力で見事な洋と和のコラボレーションを完成させています……！！

「……………っ！？」

「無駄だ。しばらくお前の声は出ない」

謎イケメソは、悔し気に顔を歪ませています。そして、分が悪いと悟ったのか、腕に付けていた魔具を発動させました。ポコ君が謎イケメソに掴みかかりますが、ポコ君が掴んだ腕は闇に溶けるように消えていき、ポコ君の手は宙を彷徨います。

そして、謎イケメソは謎のまま、消えてしまいました。

その後、ポコ君はお城へとトンヌラを連行し。存在を忘れかけていた精霊神達に僕が頼んで撮影させていた一部始終を収めた映像をポコ君に提出させて。ブーリフ教団との繋がりをほのめかす会話をしていた事から言い逃れはできず、家宅搜索を徹底的に行つたところ、色々な証拠が出てきてトンヌラ侯爵はお縄となりました。

その関係でハクト君の立場も悪くなるんじゃないかと心配していたら、ハクト君のトンヌラ侯爵嫌いは有名だったらしく、ハクト君の事を嫌いな人以外には特に何も言われず、逆に良かったね、と言われる程だったとか。

そんなハクト君を操れるとか思っていたトンヌラ侯爵は、本気で頭がイタイ人だったのでしょう。

「ねえ、ところでポコ君、めちゃくちゃイイ瞬間に現れましたね？」

「なんか、こう、ビビったときた」

つまりはストーリーカーの勘ってヤツですね。とても恐ろしいです。そして、後で気づいた事なのですが、あの時慌てすぎていて結果を張る事しか考えていなかった僕ですが、そんな事よりも、ポコ君

みたいに詠唱止めれば良かったんじゃない。と思った僕でした。
精進します。

33 プレイ目『ほんの出来心でした』

息が白く染まりだした冬のある日の事でした。

休憩時間中、中庭で僕の横に座り、うつとりと美少女戦士の人形を撫でているポコ君を見て、ちょっとしたイタズラ心が沸いたので

「ねえ…あたしと美少女戦士…どっちが大切なの？」

「……え？え？」

僕と美少女戦士を見比べて、珍しくキョドるポコ君。僕は調子に乗って更に責め立てます。

「ねえ！どっちが大切なのよ！？」

「お、俺はワピコを愛している！だ、だが、美少女戦士は俺の生活の営みの一部で…」

「じゃあ、美少女戦士と結婚すれば！？ばかー！！」

そして、世界の終わりのような顔をしているポコ君を置いて走り去って行く僕でした。

ふはー。今日はいいい仕事（演技）しましたねえ。ポコ君の焦る姿も見れて日々のストレスも発散できたし、僕ご満悦です。

そんなイタズラをした次の日の事でした。

「離せ！俺は美少女戦士を捨てるんだ！」

「そんなご無体なポコ氏いいいいいい！」

「カリスマ美少女戦士愛好家ポコ氏が居らずして、いかにして同好会が存続できましようかあああ！！！」

「ご慈悲を！ご慈悲をおおお！！！」

中庭で、泣きじゃくっているいかにもアレな人達を足に絡みつかせて、引き摺りながら叫んでいるポコ君がいました。

今日は見ないと思ったら、まだ悩んでたんですねポコ君。そんな血の涙を流してまで捨てなくていいのに。

自分のせいだという事は棚に上げ、ヒト事のように通り過ぎる僕でした。

「ワピコ、今日はポコは来ないんですの？」

生徒会室にて執務中、マリー先輩が聞いてきました。

彼ならあなたのすぐ後ろにいるじゃないですか。心なしか影が薄くなっています。

「ポコ君なら後ろに」

「え……？きゃっポコーい、いるならいると言って下さいですの！！！」

ぼそっぼそぼそ……

「え？なんておっしやっってるんですの？」

「すみません、気をつけます、と言っています」

「凄いな…よく分かったな…？」

「僕、耳はいい方なんです」

冷や汗をかいているローズ先輩にイケメスマイルをすると、どぎゅぎゅーん、という効果音が聞こえてきました。

おやおやおや？何だか、いつもより生徒会メンバーの反応が良いですね？

……はっ。もしや、ポコ君が弱る事によって、フラグクラッシュの効果も弱まっているのでは……!？

脳裏に浮かぶのはポコ君に辛酸を舐めさせられた日々。それが今日でオサラバです。なにやら色々とみなぎってくる思いです。ポコ君には悪いですが、僕ハーレムが確立されるまではこのままでいて貰いましょう。

そしてその日は生徒会メンバーのお姉様方にたっぷりイケメソオーラを振り撒いたのでした。

そんな僕とジョニーが共にウキウキしながら迎えた次の日の事でした。

「なあワピコ…お願いだから兄さんに美少女戦士を持つ事を許してやってくれないか…?」

ペコちゃんに悲壮感漂う面持ちで詰め寄られました。

「どうかしたんですか？」

「どうもこうも無いですよワピコ。ポコが授業中もずっとケタケタ笑っているんです」

ヒュー君の言葉にビックリしました。今日、僕は朝から生徒会室でハーレム促進会を繰り広げていたので、まさかポコ君がそんな状態になっているとは知りませんでした。

「私からもお願いよワピコ!」

「は、ハニーちゃん…」

「いくら人形を眺めている目が気持ち悪くても可哀想だよ」

「み、ミズホちゃん……」

「マジで頼むよワピコ!」

「め、メラ君まで……」

五人に縋り付かれる僕。動揺しながら後退る僕。確かに、それはちよつと怖いし、迷惑だし、可哀想だけれど……

「い、ごめん皆……!」

皆を振り切つてダツと走り出しました。

「ごめん皆!僕は……女の子のハーレムを作りたいんだー!」

そうやって五人から逃げ続けて三日が経つた日の事でした。

『なあ……ポコがどこにいるのか分からないんだが……』

ビーさんからポコ君行方不明の報せを受けました。

『飯が作つてあたり、シャワーの音が聞こえたりして、確かに存在は感じられるんだが……どこを見てもいないんだ……』

「大丈夫ですよ。ポコ君はちゃんといます。ただ、めちゃくちゃ目を凝らさないと見えませんが」

そう、今も確かに僕の背後でうつすらと存在しているのです。

奇妙な笑い現象を越えて、現在また影が薄い状態になっているのですが、日に日に見えづらくなつていつています。

そんな状態になつてもまだ僕に付いて来る姿は、僕に対する執念を感じさせます。

『このままじゃ、依頼に支障が出ちゃう。なあ、ポコに美少女戦士を…』の所で携帯を切りました。

く……っ！皆して僕のハーレム化を邪魔しようとして！こうなったら意地です！何としてでもやり遂げてみせるんだからー！！うわーん！！

そんな捨て台詞を誰かに向かって吐いた二日後の事でした。

「……あれ？ポコ君？おーい、ポコ君やーい！」

ついに、僕にも彼が見えなくなりました。

「どうしたのワピコちゃん？」

「あっヒマワリ先輩。ついに僕もポコ君の姿が確認できなくなりました……」

「えっ？ワピコさんまで見えなくなるなんて…このままではポコ君の存在が失くなってしまいそうね…」

「えっ……？」

ナデシコ先輩の言葉に一瞬頭が白くなりました。

ポコ君の存在が失くなる……？ポコ君が、この世界から消えて失くなってしまふ……？

血の気がザツと引いて、僕の身体から熱が全て無くなってしまったかのようでした。

僕は、何をやっていたんだろう。

ポコ君に、世界を恨んで欲しくなかった。

色んな楽しい事を、嬉しい事を、いっぱいして、いっぱい笑って欲しかった。

この世界は、哀しくて、辛い事ばかりじゃないんだって事を、知って欲しかった。

ポコ君に出会ったあの夜に、そう願ったはずなのに、なんて事だろう。僕が彼の楽しみを、僕のエゴで奪ってしまっていたんだ。

また、僕のせいで彼を辛い目に合わせてしまった。

「ご……ごめんポコ君……！ただのイタズラだったんだ！美少女戦士でも何でも持っていていいから……っ！謝るから……お願い……」

震えて上手く出ない声を振り絞って、僕は叫びました。

「お願いだから消えないでー！ー！ー！」

その瞬間、生徒会室に七色に煌めく光が溢れました。

「ワピロ……」

光の中からポコ君が誕生しました。その姿はさながら美の神のようです。

その声はいつもより艶めいていて、濡れているかのように艶めく黒い前髪がかかった黒い瞳の中にはベル薔薇並みの星が煌めいています。

> i 2 7 1 1 7 — 3 5 3 5 <

そして、ポコ君から湧き出ている七色のイケメンウェーブが生徒会メンバーを包み込み……

「ああ、もうダメですの…」

「ああああー」

「うっ…」

「はあああん…」

後ひと息というところまでできていたハーレムが、フラグクラッシュによるイケメソウエーブの藻屑となって消えたのでした。

そんな、切ない気持ちになった次の日の事でした。

「ワピコ…今日の放課後、美少女戦士喫茶に行かないか？」

影が薄くなっていたここ数日の分を取り戻すかのように、過剰にお色気をムンムンさせているポコ君が言いました。

僕が心の中で血の涙を流しているというのに、このフラグクラッシュャーめ。耳元で甘い声出してるんじゃないですよこんちくしょうめ！！

でも、確かに感じるポコ君の吐息を感じながら、消えなくて本当に良かったと思う僕でした。

34 プレイ目『やだ…そんな事言われたら私…』

今日は、二年生最後の召喚学の授業です。

今までは、既存の魔法陣で力の弱いものを喚ぶだけだったので、今日は違います。

なんと！あの！テンプレイベント！使い魔召喚をするのです！！この世界に転生して十四年。やっとです。一人でもできたのですが、皆の前でやって、うわー、凄いのできたー、皆ぽかーん、というテンプレ展開をしたかったのです。ただ、それだけの為に十四年待っていました。ええ、それだけの為ですよ。

「ワピコ、今日はご機嫌だね？」

「ふふ、そういうパイス君も」

「ああ、この召喚術を学ぶ為にここに留学してきたようなものだからね」

パイス君が褐色の肌から覗く白い歯を輝かせて笑いました。きっと、暗闇で彼を見たら歯だけしか見えないでしょう。

「そういえば、ポコ君は使い魔いないんですか？」

「ああ、必要無いからな」

「さすが、“タキシード能面”は言う事が違うな」

そんな他愛ない話をしながら特殊実技室に着きました。

特殊実技室に入ると、教師が四人いました。使い魔召喚は何が出てくるか分からない事から、生徒をふた組に分けて、更にそこから少人数ずつ一人が指導、一人が監視という体制をとるようです。

早速第一斑が召喚をするようです。ノートに描いている召喚陣を

確認しながら、特殊なペンを使って魔力を込めながら陣を描いていきます。先生が召喚陣を確認して、問題無いとなった場合はそのまま召喚、駄目と言われれば今日はただの見学になり、また来年度召喚学？を受講し直さなければなりません。

使い魔召喚陣は、召喚の言葉と自身の情報を陣に組み込むのですが、自分で考えなければいけない文字の羅列が七割にもなっていて、意外と難易度が高いのです。

生徒達が徐々に成功していき、色んな魔物や精霊や妖精が実技室を埋めていきます。ふむ、やはり従わせやすい力の弱いものばかりですね。

そんな中、ポコ君の番になりました。

「……うん、さすがストロング君ですね。陣は完璧です。それでは、召喚に移って下さい」

ポコ君が無表情のまま頷いて、もう一人の先生の前で陣を描き、そして召喚の呪文を唱え始めました。

「偉大なる父の導きよ。我が魂に応える者を導き賜え」

呪文にしても自分に合ったものを自分で考えなくてはいけません。ポコ君は、ペコちゃんに似て真面目なので、模範的な呪文ですね。

召喚陣の文字が一つずつ光を放ち始めます。それが陣全体まで広がると同時に、実技室が別の空間になったかのような違和感を感じ、この場にある時計全てが凄いい勢いで右や左にグルグルと回り始めました。

この異常事態に対応しなければいけない先生達は冷や汗をかいて動けません。僕は予想していた事なので生温かい目で見守ります。

そして、召喚陣の上に歪んだ空間が生まれ、そこから大きな時計の上に乗っかっている三人のお美しい女性が現れました。

「過去を嘆き」

「今を懸命に生き」

「未来を願う者よ」

「契約してくれ」

ポコ君は、お前らの名前なんざ聞く気はねえとばかりに急かしています。面倒臭いんですね。

「いいでしょう」

「我らノルン」

「貴方と共に」

ほらっポコ君、運命の三女神ですよ。もっとありがたい気持ちでいなさい。

それでもポコ君は無表情で淡々とこなし、女神様達をとっと帰らせました。

「……す…素晴らしい！ストロング君！」

「そうです！運命の三女神と契約するなんて貴方は何者です!？」

「ポコ・ストロングです」

興奮する先生達に無表情で答えるポコ君。他の生徒達もぼかんとしたり、尊敬の眼差しで彼を見つめています。

ああ、何だか目的達成した気分です。テンプレイベントを見てしまったので、僕はもう何でもいいですね。

いまだ興奮している先生の一人に召喚陣を確認させ、チラッと見られた後に邪魔者を追い払うかのように召喚をするようにと促されました。

いいもん。僕一人でできるもん。
気を取り直して、サツと陣を描いて呪文を唱えます。

「エロイムエツサイム、エロイムエツサイム、我は求め訴えたりー」
ついでに手で三角形と逆三角形の形をしてなりきりました。

え？悪魔 ン、知りませんか？そうですか。
召喚陣の文字が光を放ち、上に向かって光が伸びた後、人型のソレが徐々に姿を現します。

たまねぎの形をした髪の毛。昭和の小学生的な服の上に唐草模様の緑のマント。の格好をした神様です。

「神様、それは喚び出される方ではなくて、喚ぶ方のキャラです」

「私はこの格好がしたかったのです」

「それなら仕方ありません。それではお帰り下さい」

そしてただあの姿を見せたいが為だけに現れた神様は帰っていき
ました。

「わ、ワピコ…さっきのは一体…？」

「お気になさらず。ただの変態です」

パイヌ君の戸惑いをサラリと躲し、僕は再び「我は求め訴えたりー」と言いました。

すると、今度は黒い光が溢れました。黒いけれど邪悪な感じはなく、むしろ安らぎを感じる光です。テンプレイベントはもう見ましたが、それでも何が出てくるのだろうとワクワクする気持ちは否定できません。

そして現れたのは、お手入れが行き届いた上質の毛並みの黒い身体。尖った耳の下にあるのは隻眼の金色の瞳。首には、うちのお父

さんお手製のお魚マークが付いた首輪があります。

どこからどう見ても、僕の心の友、黒猫ジャックです。

「ジャック、何故君が来たのかは分かりませんが、今僕は使い魔になつてくれるものを喚んだのです」

「うにゃ（問題無え。もう俺様とお前は契約している）」

寝耳にジャックです。いつの間に？

「ごろごろ（俺様に勝てば契約者として認めるといふ術を俺様が自身にかけてたんだ）」

「ああ、なるほど。だから戦いが終わった時に、心が通じ合った感があつたのですね」

「にゃっ（そういう事だ）」

皆の度肝を抜くような大物ではありませんでしたが、まあいいです。ジャックは僕の自慢の心友ですからね。ジャックが使い魔なら僕も満足です。

「ワ…ワピコ…それは…」

パイス君がジャックを震える手で指差し驚いています。

えらい驚きようですね。まさか、どこぞの魔王でしたー、つてオチですかね？

「それは…！我が国が信仰している夜の神じゃないか！？」

残念、魔王ではなく神様でした。

「な、なんですってー？ジャックー、あなた、そんな凄いものだっ

たのー？」

僕が空気を呼んで大根的演技をすると、ジャックはちよっと自慢気に鼻で笑い、ドロンチヨ、と変化しました。

おお、これまたイケメソです。

漆黒のロン毛に、つり上がった金色の瞳の長身イケメソです。その頭には猫耳、お尻からは尻尾を生やしています。

「萌えー！」

「ワピコ…それはなんだい？」

「これは、遙か異国の地の伝統的な風習で、猫耳がついた聖なる存在に捧げる祝詞のりことです」

「そ、そうなんだ…も、萌えー！」

ジャックが萌えキャラだとは知りませんでした。

「どうだワピコ？俺様に惚れなおしたか？」

そう言いながら僕の顎をクイツと上げてイタズラっ子のように金色の瞳を細めて笑うジャック。

おお、そうきますか。隠れハーレムキャラだったとは、さすがの僕も驚きでふ。驚いてちよっと噛みました。

僕にじやれるように絡み付いてくるイケメソジャック。そこに、パイヌ君が僕の腕を引っ張り、そのまま僕を腕の中に閉じ込めました。

「いくら我が神だろうと、ワピコは渡しません」

「何言ってやがる、クソガキが。俺様の爪の餌食にしてやるつか？」

やめてー。私の為に争わないでー。

スイーツ（笑）です。まさか、召喚テンプレではなく、スイーツ（笑）テンプレが待ち構えているとは。

「ワピコ、お前はどっちが好きなんだ？ 勿論、俺様だよな？」
「ワピコ…」

やだ…二人が真剣な目で私を見てる…
どうするの私？

- 一、「私…ジャックが好き！」
- 二、「私、前からパイス君の事が…」
- 三、養殖発揮

「僕、みーんな大好きだよ！ みんな大好きなお友達だもの！」

スキル「無垢な天使の笑顔」を発動しました。

ジャックとパイス君は「お友達」発言に致命的ダメージを受けたものの、「天使の笑顔」でHPが最大値まで回復します。
養殖ってホント楽です。

「ねえ、次はパイス君の番ですよ？」

そろそろ飽きてきたのでパイス君を急かしました。そう言われた彼は少し引き締まった顔をして、先生に召喚陣を見せた後、彼の国の文字を混じえながら召喚陣を描いていきます。

んん？ 何やら物騒な文字の羅列になってます。先生はこの召喚陣に本当に合格を出したのでしょうか？

不思議に思ってからこつそりパイス君のノートに下書きされていた召喚陣を確認してみると、そこに書かれていたのは夜の神、つまりはジャックを連想させる文字の組み合わせでした。

今、実際に描いているものとは若干違います。僕が先にジャックを喚び出してしまったから、即興で変えたのでしょうか。監督をしている先生はパイヌ君の国の言葉に詳しくないのでしよう、僅かな違いに気づいていません。

「夜よりも暗く、夜よりも深く…」

そうこうしているうちにパイヌ君は陣を完成させていたようです。その呪文はどこぞの魔王を連想させます。ジャックもそれに気づいて、ちよつと嫌な顔して言いました。

「ワピコ、あれはヤバいぜ…?」

うむ、失敗も成功の母です。結界だけ張って、事を見守りましよう。

「我が求むるは永遠とわの安らぎ。現れ賜え、我と共に安らぎの闇を導くものよ」

パイヌ君の呪文が終わっても召喚陣は反応する事なく静まりかえっていました。パイヌ君が失敗した…と思って頂垂れた瞬間の事です。

耳障りな音を立てて召喚陣が割れ、この場にいる人間を一瞬にして絶望に陥れる程の恐怖が襲ってきました。

先生達はさすがに堪えています。生徒達は足腰立たなくなっていて、中には失禁しちゃっている子もいます。

見るだけで生きている事を後悔してしまうような闇が召喚陣から広がり、周囲の人間を覆います。結界を張っていてもなお侵食してくるおぞましい闇。不定形なそれは召喚者である彼の中に入りこもうとしていました。

「や……やめろ！来るな！！」

パイヌ君は、陣が割れてしまったので喚んでしまったソレを制御できずに、ただ身を震わせています。

チラツとポコ君を見てみると、俺関係ねえし、って感じで美少女戦士人形とお喋りしていました。立派な世捨て人っぷりですポコ君。僕はポコ君を立派な勇者様に仕立てあげる為に動きました。半分闇と化していたパイヌ君をペリツと闇から引き剥がし、浄化の魔法をかけてあげてからそこら辺に転がして、と。さて。

「きゃー！。助けてー食べられるー！ーう」

「来い、ノルン！時を遡れウルズ！」

僕が半分闇に埋まってみせると、キリツとしたポコ君がすぐさまノルンを喚び出しました。

ポコ君の頭上に渦巻く歪みから現れるノルン。その三人姉妹の長女であるウルズがしなやかな腕を動かして大きな時計の針を逆向きに回します。

すると、広がっていた闇が逆再生されるように動き、召喚陣の中へと戻っていきます。するすると吸い込まれるように戻っていく闇。そして、闇が全て戻った後に、割れた召喚陣も元通りになり、それから元から無かったかのように消えて無くなりました。

失禁してしまうくらい怖い闇が一瞬で無くなって、皆ばかーん、としていきます。こら！皆ポコ君を褒め称えてあげないと！このままポコ君が帰っちゃったら救世主的イベント見れないじゃないですか！仕方ないですね。僕が先に言ってあげますから、皆ちゃんと後に続いて下さいよ？

「ポコ君すーごーいー」

ちよつとムカツとくる女子高生の喋り方のように僕が言うと、それに触発されて徐々にポコ君を褒め称える声が増えて、最終的には実技室を震わす程のポココールが巻き起こりました。僕の耳がブロークンしてしまいそうです。そんな中、パイス君が神妙な面持ちで僕の横に立って、ポコ君を眺めながら言いました。

「彼は…凄いな…」

「そうですね。色々とアレですからね」

「僕も彼のように……」

ポコ君のようにになりたいんですか？それはさすがにオススメできませんね。ポコ君がもう一匹増えたら僕の心労ゲージが限界突破してしまいます。

「いや……いつか、彼を超えてみせる！」

彼を超えてしまったら、もはや人ではなくなってしまうですよ？

「そして、いつか君を振り向かせてみせる」

うほつ。とても爽やかな笑顔です。歯磨き粉のコマーシャルに出演できそうです。自分に無いものを持つている人を見ると、憧れと同時に妬みを抱いてしまう複雑な僕心。

「パイス君、もうポコ君の身長越えてるじゃないですか」

そんな複雑な気持ちを隠して、にこにこしながら天然ぶるのですた。

そして、ガツクリと頂垂れるパイヌ君と、いまだポケ信徒に囲まれて動けないポケ君を置いて、ジャックと共に去る僕。
今日もいいテンプレ日和でした。

34 プレイ目『やだ…そんな事言われたら私…』 (後書き)

<運命の三女神ノルン>

北欧神話に出てくる女神です。

一般的な解釈として、

長女ウルズは過去を司り、

次女ヴェルザンデイは現在を司り、

三女スクルドは未来を司ると言われています。

35 プレイ目『健全な男子なら仕方ない事なのです』（前書き）

注意！過激な性表現有り

そうだ、エロシーンに挑戦してみよう。

という出来心的な回です。

何分未熟ですので、エロエロが好きな方には物足りないかもしれませんが、せんが、苦手な方には、おえっ、とくる表現が含まれております。ご注意ください。

35 プレイ目『健全な男子なら仕方のない事なのです』

三年生になりました。

最近フラググクッシャーに抗う気力も湧かず、女の子ハーレムは諦めかけています。

そんな無気力溢れる春の午後。

ぽかぽかと暖かい陽射しの中、ポコ君とハクト君とのイベントをこなした森の中で、一人ではーっとしていました。

まだ選択科目の授業は始まっておらず、生徒会のお仕事も特になく、ポコ君も今日はギルドのお仕事でいなくて、久しぶりに穏やかな午後を過ごしています。

そよそよとそよぐ風に揺らされて、心安らぐ緑がゆらゆらと木陰と共に揺れています。そんな身も心も癒される空間にいて、なんかムラムラしてきました。

可笑しくありません。リラックスしすぎて己の欲望があらわになってしまっただけです。だから僕は変態なんかじゃありません。そして僕は考えてしまったのです。

今なら野外ジョニープレイできるんじゃないだろうか…と…

この森はこんな安らぎの空間なのに意外と人気がなく、滅多に人が来ません。そして今学院にいるのは、教師を除けば部活に励む生徒ばかりです。つまり、今は絶好の、チャンス、なのです。

カモン！ジョニーー！！

いや、しばし待たれいジョニー殿。

一人遊びはジョニー。と、固定概念がありました。ジョニーを出さなければ僕は女の子じゃないですか。女の子の、身体……何やら色々とみなぎってきました。

いや、決してこれはただの一人遊びではない。何故今までそれに気付かなかったのか。固定概念とは実に恐ろしいものだ。女人の身体は繊細だと聞く。いざ、いつか来るであろうその日を迎えたとして、至らぬ動作で気分がそがれるどころか、女人の身体に傷をつけてしまうなんて事は漢としてあるまじき行為ではなからうか。そう、これはそうならない為の行為。いつか来るであろうその日の為の予行演習なのだ。己に恥じるどころなど何も無いのだ。

そして、いそいそとブラウスのボタンを外す僕。はうん。興奮しすぎて火照った身体に、まだ少し冷たい風が当たって気持ちイイです。

オパリーカバーのホックを外し、恐る恐る下から持ち上げるように触ってみます。ふむ、Dカップまで成長した胸はとても触り心地が良いです。しかし、それは手が気持ち良いだけで、胸はそんなにですね。

そんな事を思いながら、うつすらと桃色に色付く突起物を触ってみました。

「あっ……」

あらイヤだ。思わず声が出ちゃいました。なんでしょう今の。なんだか、くすぐったいような、しびれるような、変な感じ。もう一度確かめる為に触ってみます。

「ん……」

やっぱり少しくすぐったいです。でも、なんだか気持ち良く感じ

てきて、自然と指が動きます。

熱でほんのり桃色に染まる僕の指先が、形の良いソレをつまんで、くりくり、と動かししました。

腰がぞわりとして、全身に震えが走ります。それでも休まず手を動かしていくうちに、徐々に下半身が疼いてきました。なんだかむず痒くて、熱を持ったソコに、僕は我慢できず、左手はそのまま右手を下着の上に置きました。

軽くさすると、布の上からでも分かるコリコリしたものがあって、自然と荒くなっていく吐息にも気づかず、それをさすっていくと、余計にむず痒くなってきました。それに比例して下着がしつとりと濡れていきます。

僕はまた、恐る恐る下着の中に手を入れました。

「は…っああ…あっ…！」

又ルツとした感触に、先程触っていたコリコリがとても固く、大きくなっていて、下着に入れた指がすぐにそれに触れたと思ったら、血が逆流したような感覚に襲われました。それと同時に腰から広がる痺れるような感覚が僕の身体を痙攣させます。

え？ええー？僕、ビクンビクンしましたよね？それって、つまりは、イツちゃったって事でしょか？ええ？もう？なんという早う。いや、女の子だからそ 漏なんて言わないんですかね？

混乱しながら一度手を抜けば、指先に付いていたソレが目につきました。

てらてらと光るソレ。透明なその液は、人差し指と中指の間でねつとりと糸をひいています。

うわわわ、エロ画像でしか見た事なかったものが、今僕の目の前にあります。うわー、本当に糸ひくもんなんですわー。凄いなー、うわー。

なんてネバネバさせて遊んでいると、またムラムラしてきました。そうです、まだ女体解明には至っていません。もっとお勉強しないとー！

はりきって下着の中に手を入れると、またコリコリでビクンビクンしてしまいました。最初はビックリしましたが、なんだかクセになりそうです。

何度目かのコリコリの驚異を越え、僕の指はやっとその下にたどり着きました。

んん？どこに入れるんだろ？ん？ん？

何度か位置を変えてつついていると、液でまみれたソコに、ヌルツ、と入りました。

「んん…っ」

なんだか変な感じです。異物が入ってるって感じです。

しかし、指に吸いつくように絡みついてくる中は温かく、指を動かすのも困難な程締め付けてくるソレに、僕の興奮度は上がってきます。

ゆっくりと指を動かし、出して、入れて、とする度に、ぴちゃぴちゃ、とソコは音を立てます。

ああ、なんか、気持ちいいかもしれない。

指が中でこすれる度に、じんわりと快感が広がってきます。

「は…っあっあっ」

自然と速くなってくる指。それと共にぴちゃぴちゃという音も激しくなってきました。

頭がぼんやりとしてきて、お腹の周りに熱が集中してきて、ああ、このままどこかへ飛んで行ってしまいそうだな、と感じた時

赤い、ツンツンした髪の毛が目に戻りました。

「……っあ！？メ……メラ君……っ」

あばばばば。メラ君です。メラ君が顔を真っ赤にさせて、アホの子のように、いや、実際にアホだけでも、とにかく口を開きっぱなしにしています。その目に映るのは僕。

胸をはだけさせ、足をつぱーと開いて、片手は胸に、もう片方は下着の中に入れている、乱れた僕です。

「メラ君……どうしてここに……？」

いや、そんな事はどうでもいいのです。いつから見ていたんでしよう？途中から目を瞑って集中していたので、メラ君の接近に全く気づきませんでした。いや、もういつからとかどうでもいいです。結局、この状態を見られている事は変わらないのですから。

「お……お……オレ……」

とても混乱しているようです。僕も混乱しています。

「……う……っ……うめん……」

そう言って、脱兎のごとく走り去って行ってしまいました。

……
……
……どうしましょつか……？

36 プレイ目『男はみんな狼です』

あ、そうだ。記憶を消しちゃえばいいんだ。
と気づいたのは、失態を犯した三日後の事でした。

気づくのが遅すぎました。記憶操作はとても危険なのです。消したい記憶が、その人にとってとても重要で、強い意思であればある程、その出来事だけを消すのは難しく、また時間が経てば経つ程にその後にとつた行動にも影響されるので、良くて記憶障害による混乱、悪くて精神崩壊に繋がってしまうのです。

良かったと思うのは、あの僕の痴態をメラ君が誰にも喋る様子が無い事です。このまま知らんぷりしたいのですが、彼は僕を見る度に顔を赤くして逃げて行くので、いずれちゃんと話をしないと、と思うのですが、さすがの僕でもアレは恥ずかしすぎてまだ面と向かって話す勇氣はありません。

「はあああ……」

声楽の時間中、一緒に受講しているハニーちゃんが、窓の外を眺めて盛大な桃色吐息をつきました。その表情はどことなく色っぽく、『何か』を追っているその瞳は熱を帯びています。ハニーちゃんの目線を追っていくと、魔術技部所属の四年生の男子がいました。

「…マーク・タイガー先輩ですね？」

「ワワワワ、ワピコっ…！？な、何の話かしら？」

「ふん…？彼、ちょっとカッコイイですよええ。部でも優秀らしいし…僕、惚れちゃいそうです」

「だ、ダメよ！…」

にやっとする僕に、ハツとなって顔を真っ赤にするハニーちゃん。ふふふ、青春ですねぇ。

「…まったく。自分に対する好意には鈍感なクセに、人の事には鋭いんだから」

いいえ、気づいてる上での養殖です。

「ねえねえ、ハニーちゃん。告白はしないんですか？」

「そ…っ！？そんな…事…恥ずかしくて…」

「ふふふ、可愛いですねえ」

「なんか、時々アンタがおっさんに見えるわ…」

おっと、危ない。つついハニーちゃんの恥じらい顔に涎が出る
ところでした。気をつけないと。

「そんな事言つてると、彼みたいな優良物件はすぐ売れきれちゃいますよ？ハニーちゃんなら大丈夫！美人だし、気はきくし、スタイルもいいし！並の男ならイチコロですよ！」

「そ、そんな事言われても…：きっかけとか…無いし…」

「きっかけさえあれば…：いいんですね？」

にやっとする僕にハニーちゃんはちょっと引いています。安心せい、悪いようにはせぬ。

「ねえ、明日誰にチョコあげる？」

「私、ポコ君！」

「やだ！あんたも!?」

「え、私はヒュー君」

「あゝヒュー君も意外とカッコイイもんね」

一週間後、校内中が浮足立っていました。

校内の至る所に、『君には愛を 僕にはチョコを』と銘打ったポコ君がはだけて流し目をしているポスターと、『伝えたい…この想い…』と上目遣いでチョコを持っていく僕のポスターが貼られています。

そうです、生徒会の権力と神様パワーとを駆使してバレンタインをこの学院に流布させたのです。今は春ですが、季節など異世界には関係ありません。

まず、生徒会発案のイベントとして大々的に宣伝し、ポスターを見る度に「誰かにチョコあげなくちゃ…」と徐々に洗脳されていく効果を付けてみました。

「あたし、マーク君にあげる」

廊下ですれ違った上級生の言葉に、ハニーちゃんがビクツと肩を震わせました。

「マーク先輩、結構人気だよなー?」

「ですよなー?すぐに誰かと付き合っちゃうかもですよー?」

ミスホちゃんと一緒にハニーちゃんを焚き付けてみます。ハニーちゃんはというと、色々な妄想が駆け巡っているのでしょう。顔を青くしたり、赤くしたりと忙しく色を変えています。

やがて、何かを決意した目をしました。

「私……今日は帰るわ!先輩が度肝を抜くくらいにチョコ作ってみ

せるんだから！」

そう言っただけでハニーちゃんは慌ただしく帰って行きました。そんなハニーちゃんを見て、僕とミスホちゃんは微笑み合います。

「度肝つて…どんなチヨコ作るんでしょうね？」

「きつと、身体中にチヨコ塗って、私を食べてくっつけてするんだよ。それよりも、ワピコちゃんは誰にあげるの？やっぱりポコ君？」

「はい、ポコ君にも、ミスホちゃんにも、皆にあげます。みんな大好きですから」

「いつか刺されちゃうよ？」

「ミスホちゃんこそ〜」

「ふふふふ」

僕は知っています。ミスホちゃんは既に四人キープしている事を。未恐ろしいです。

そんなこんなで、バレンタインデー当日になりました。

今、僕の目の前には、無表情でチヨコに埋もれているポコ君がいます。ロッカーを開けると同時に爆発してロッカーの許容量を超えるチヨコが溢れてきたのです。さすがテンプレキャラです。

埋もれながら黙々とチヨコを食べるポコ君に、チャンスとばかりにポコファン達がお供えしては埋もれていっています。

テンプレキャラも大変ですねえ。と、ヒト事のように自分のロッカーを開けると。

ビッグバンが起こりました。

忘れていました。僕もチートテンプレでした。しかも、女子からだけではなく、男子からのチヨコも混ざっていますからね。教室がチヨコのせいで大惨事です。

チョコを四次元ポシエットに収納し、ポコ君がノルンの力で教室を元に戻して、さあこれでつつが無く授業ができますね、とひと息ついた時でした。

ポコ君には女生徒の群れが、僕には男子生徒の群れが襲ってきました。僕達は逃げました。

女子ならば喜んでうえるかむですけれど、さすがにむさい男子に囲まれたくはありません。女子に追いかけてられているポコ君がとても恨めしいです。

「ポコ君、どうしてついて来るんですか？」

「ワピコの側には俺。自然の摂理だ」

つまりは宇宙的ストーカーって事ですね。とても壮大です。

「一緒にいては追いかけて来る人達が多すぎて他の人達に迷惑がかってしまいます。後で僕の使用済みお箸をあげますから、別々に逃げましょう」

「今の約束録音した。後でな」

そうしてポコ君は喜々として去って行きました。

さて、今日はファン感謝デーです。彼らと適当に遊んであげてから隠れましょう。

挟み打ちにされて怯えた顔をしてあげてみたり、途中でミズホちゃんや男子にチョコをあげているのを目撃したり、階段を上ってる途中にパンチラしてみたり、ミズホちゃんや男子がまた別の男子にあげているのを目撃したり、ブレザーを脱いで汗をしっかりとらせてオパァイカバーを透けてみせたり、またミズホちゃんや男子が別の…以下略

そんなこんなで、今僕は体育館の裏の茂みでのんびり隠れています。結構サービスしてあげたと思いますから、僕にチョコをあげられなくてもある意味満足してくれるでしょう。それにしてもミズホち

やんを計六回見ました。二人増やす気ですね。

「先輩……」

おや？ハニーちゃんの声が聞こえてきましたね。茂みの中からこっそり覗き見ると、ハニーちゃんとその想い人であるマーク先輩がいました。

体育館の裏で…告白…青春ですね〜しみじみ。

「先輩！好きです！私を食べて下さい！」

そう言うとハニーちゃんは、変質者がごとくガバツとブラウスの前を開けました。

うむ、Cカップです。Cカップのオパ―イにチヨコが塗られています。ミスホちゃん、ニアピンです。身体中ではなくて、オパ―イだけです。しかし、ハニーちゃんは常識人だと思っていただけに衝撃的な光景です。

「ハ…ハニーさん…その姿…」

先輩は驚いています。そうですね、普通いきなりそんな事されれば誰だって…

「俺も君がずっと好きだった！俺を食べてくれ！！」

ですよね、この世界に普通なんて通用しませんよね。

ハニーちゃんと同じようにガバツと脱いだ服の中身はムキムキの形のチヨコでした。

「先輩！その腹筋素敵！」

「ハニーさんこそ！乳首の形がとてもセクシーだ！」

ガシツと抱き合う二人。これ以上はめくるめく大人の世界になりそうなので、僕はおいとましましょうか……

軽く精神的ダメージを受けて僕はヨボヨボと解体予定の旧高等部校舎の横を歩いていた時でした。

「いたぞー!!」

僕ファン達に見つかってしまいました。

気力がなくなっていた僕は、ああ、もうこのまま彼らのチヨコを大人しく受け取ってあげようかな、と思っていた時、力強い腕が僕を旧校舎の中へ引っ張り込みました。

「なんだよ！いねーじゃん！」

「あれ？おかしいなあ、見たと思ったんだけどな」

遠ざかっていく声と足音。背後から僕の口を塞ぎ、じつと動かない遅い腕。夕日が差し込む誰もいない古い教室。乙女展開の時間がやって参りました。僕を助けてくれた遅い殿方は誰でしょう？新キャラでしょうか？

腕の力が弱くなり、女優としてお礼を言おうと振り向きました。

「あの、ありがとうございま……うほっ」

思わず驚きの声をあげてしまいました。

赤いツンツンした髪。いつもはアホ丸出しの顔を、今はちょっとしかめさせて俯いているメラ君がいました。

……

……沈黙です。とても気まずいです。

僕がこのままではいけないと、勇気を振り絞って声をかけようとしたら、先にメラ君が口を開きました。

「オレ…っ！オレさ…！」

また、沈黙が訪れました。一生懸命言葉を選んでいるのが分かります。

「オレ…おかしいんだ…」

何がでしょう？頭が？アホではありませんが、許容範囲内です。大丈夫！自信持って！

「あの時から…ずっと、ズーッと…ワピコの事が頭から離れないんだ…」

メラ君もアホですが男子ですからね。そりゃあ、僕のような美少女が乱れていたなら、何かこう、ググツ、とくるものがあるでしょう。仕方ありません。

「子供の頃からさ、ワピコの事考えるだけで、嬉しくなったり、なんか変な気分になる事はあったけど…なんか…今は違うんだ……なんか、こう、胸がぎゅーってなるって言うか…」

それは、淡い恋心から本格的に好きになったって事ですか…あんな痴態を見て…なんだか複雑な心境です。

「あの時のワピコさ…めちゃくちゃキレイだった…」

んん？メラ君の瞳が熱っぽくなっています。なんですか？ちょっと

とずつ近付いて来ていませんか？

「なあ…もう一回…見せてくれよ…」

メラ君の骨張った指が僕のジューシーな唇をなぞりました。

わお！ぞくぞくします。あの一人野外プレイをした時から、僕の身体はちよつと敏感になっているのですから、そんな事されたらとても危険です。

戸惑っている間にメラ君の指は、僕のブラウスのボタンを外してしまいました。あらわになる僕の白い胸。ハッとして慌てて手で隠すも、メラ君の逞しい腕に開かれて、勢い余って押し倒されてしまいました。

下から見上げるメラ君の顔つきはもう『男』の顔で。僕の手を縛りつける腕は、いつこんな成長してしまったのかとビックリする程力強いです。

いつでも振りほどける程の力が僕にはあるけれど、僕の『女』としての情欲が、このままメラ君を受け入れてしまいそうになった時。

「お前…何やってんだ…？」

阿修羅の顔をしたポコ君が、メラ君をアイアンクローで持ち上げました。

あばばばば。めちゃくちゃ危なかったです。メラ君と大人の関係になってしまったところでした。

さすがフラグクラッシュャー！ナイスタイミングです！今回ばかりは褒めてあげましょう！

ポコ君がメラ君を壁に投げつけて、それから胸ぐらを掴んで詰め寄ります。

「俺の…！ワピコに…！！何したんだ！？」

「……ってえな！！いつワピコがお前のもんになったってんだ！？」

やめてー。私のために争わないでー。

なんて、今回はふざけている場合ではないようです。プツンしている二人が無意識に垂れ流している魔力のせいで、脆くなっている旧校舎がミシミシと悲鳴を上げています。

「全てを救せ！全能なる光よ！」

喚び寄せた白銀の錫杖から溢れた魔力を無効にする光が二人を包みます。これは鎮静効果もあるので、二人の顔つきは徐々に柔らかくなっていきました。

「ポコ君、僕は何もされていません。ちょっと遊んでいた時に僕の胸が急激に成長してボタンが弾け飛んだだけです。メラ君、女性の肌は軽々しく見ているものではありません。今回ののはちょっとした事故です。忘れるように」

穏やかな気分になっている二人は、素直にうんうんと頷きます。

「よろしい、では解散！！」

菩薩のような顔をした二人が大人しく帰っていくのを見届け、心身共に疲れはてた僕もヨボヨボと帰りました。

その後、ポコ君とメラ君の間に亀裂が生じた様子もなく、メラ君も多少のスキンシップは増えたものの、前と変わらず接してくれるようになり、ほっと胸を撫で下ろしました。

……でも、これからは自制心を養う努力をしようと思心に誓った十
四歳の春でした。

37 プレイ目『なんだか不安です』（前書き）

このような訳の分からない物語を読んで下さっている方々ありがとうございます。

連載開始から駆け足で駆けて来まして、もう最終章突入しちゃいます。

シリアスになるかも？ならないかも？

恋愛要素強くなるかも？ならないかも？

って感じでお送りします。

m 最後まで生温かい目で見守っていただけると嬉しいですm（）（）

37 プレイ目『なんだか不安です』

もうすぐ夏休みだな、何してようかな、と考えていた放課後の事でした。

負け犬オーラをムンムンに出しているヒュー君が視界に映りました。どうやら今学期の成績表を見ているようです。

この学院の成績表は、各選択科目ごとにつけられており、ランク付けされた紙がでーんと校内に貼り出される事はありませんが、成績表に科目内における自分の順位と上位三位までが記されています。

ポコ君と後ろからこっさり覗いて見ると、一般教養と古代遺跡学と古代言語学の成績表を、見比べては魂が抜けていつているようなため息をつけています。

その三つのどれもが一位、僕。二位、ポコ君。三位、ヒュー君になっています。

「どうしてそんなに落ち込んでるんですヒュー君？」

「ワピコですか…僕はどう頑張っても一位にはなれないみたいです

…」

「何言ってるんだ？他の科目は全部一位じゃないか」

「ワピコとポコがいなければね……」

うっ。負け犬オーラが濃くなってしまいました。若草色の髪が今は枯れて見えます。

「所詮、僕は主役どころか、主要人物にもなれない脇役……万年二位どころか、万年三位ですよ…はは」

どうやら初等部の修学旅行を思い出して自暴自棄になっているよ

うです。これは早く目を覚ましてあげないといけませんね。

「ヒュー君……君が主要人物にもなれないのはズバリ……」

「ず……ずばり……？」

ヒュー君が戦々恐々とした面持ちをしています。

「個性が足りないのです！！」

凄まじい衝撃がヒュー君に襲いかかりました。わなわなと震えるヒュー君に僕は心を鬼にして言います。

「ポコ君のような戦慄する程のイタイ思考を持っている訳ではなく！ペコちゃんのように男装女子の上にツンデレな訳ではなく！クールが故にメラ君のようなぶっとんだ行動はできず！ハニーちゃんも最近はタガが外れたかのようにバカップルしています！ミスホちゃんは……ミスホちゃんはとても可愛いです！」

ミスホちゃんのところはぼかしました。だって、養殖をバラしたら色々と……ねえ？恐ろしい事が待ち受けてそうですし。あっホラ、ちよっと離れた所からこちらをニコニコと笑顔で見えています。とても脅迫じみた笑顔です。

「それでは……それでは、僕は一体どうしたらいいと言っんです！？」

地面に手をついてガツクリと頂垂れるヒュー君。そんな彼の肩に手を置いて、僕はどこからともなくサツと眼鏡を取り出しました。

「僕は前々から思っていたのですよ……ヒュー君には眼鏡が足りな

い……と」

困惑するヒュー君に無理矢理眼鏡をかけさせました。そして立たせて、彼のお決まりの立ち方、右斜めに構え、腕を組んでいる状態にさせます。

「そう！そこです！そこで眼鏡を指で、くいつくいつ、とさせるのですー！！」

くいつくいつ。

その瞬間。彼の中で何かが弾けました。

「…おおー！何か…みなぎってきましたー！！」

生きる気力が湧いてきたようです。興奮しすぎた熱気で眼鏡が曇ってヒュー君の目が見えませんが、きつとギラギラとしている事でしょう。

「ありがとうワピコ！これからはもっと目立てるような気がしますー！」

そうしてヒュー君は、眼鏡をくいつくいつとさせながら帰って行きました。

その後ろ姿を眺めながらポコ君がボソツと言います。

「…ワピコ。何が変わったんだ？」

…そうですね。ムツツリ度が増しただけのような気がします。ムツツリは内に秘めるからこそそのムツツリですから、表面的には結局変わらないような……

まあ、ヒュー君がその気になってるんだから、いつか！

そうして鼻歌を歌いながら帰っている途中の事です。

校舎の柱に隠れてキョロキョロしているペコちゃんがいきました。キラキラとした金色の髪は今は肩の下まで伸びており、女子の制服を着ている彼女は、もうどこからどう見ても立派な女の子です。

「ペコちゃん」

「うひゃうん！！」

「おひよっ！？」

パシヤツパシヤツ

凄い勢いで驚かれたので、僕もそれに驚いて変な声を出してしまいまいました。そんな僕をポコ君はシャツターチャンスとばかりに写真を撮ります。

「な、なんだワピコか！驚かすなよ！」

「すみません。ところで何をそんなに拳動不審になっているんです？」

「僕を『聖女』だとか崇めてくるヤツらから逃げてたんだよ……」

ありゃ、ペコちゃんも大変ですね。

最近巷では、『ペコちゃん教』なる集団が徐々に勢力を伸ばしてきています。神の御業で女になったペコちゃんを『聖女』として崇めているのです。

宗教じみているだけに皆妄信的で色々と大変みたいです。ポコ君のストーリーカールレベルをちよっと落とすくらいに集団って感じですか？想像してみたら僕の胃がブロークンしてしまいそうでした。ペコちゃん、心から同情します。

「最近さ…追いかけて来るだけじゃなくって、物が失くったり、家に帰ると携帯が鳴って『お帰りなさいませ』とか言ってくるんだよ…」

ペコちゃん、それは立派な犯罪です。いくらポコ君でも僕の許可無しに物を持っていったりしません。

その時、背後から声が聞こえてきました。

「ペコ…ヤツらには気をつけた方がいい」

ヒュー君です。右斜めに構えて眼鏡をくいつくいつとさせているヒュー君です。

「ヒュー、お前眼鏡なんかかける程目が悪かったか？」

「それは悪質なストーカー集団です。放っておけば行為は過激になり、ペコの身も危なくなりますよ？」

ペコちゃんの言葉は聞かず、眼鏡を光らせながら自分のキャラを貫こうとするヒュー君。イマイチ何キャラか分かりません。ペコちゃんもどう対応していいか戸惑っています。

「安心して下さい。僕が解決してみましよう…この眼鏡の名にかけてー！」

じっちゃんの名にかけて！ってノリですね。ようやく分かりました。

「…眼鏡の名は眼鏡じゃないのか？」

そう呟いたポコ君の言葉は無視されたのでした。

まずはヒュー君がペコちゃんのお家の様子が見たいと言うので、僕もついていって行く事になりました。ポコ君はピカルツ家に近付きたくないので今日はもう帰ります。

帰る途中にも何やら不審な気配がしたり、目付きがイッてる男がペコちゃんに触ろうとしてきたりと、ちょっと怖かったです。

始めてペコちゃんのお部屋に入りました。壁がピンクだったり、かわゆい又イグルミがいっぱいあったり、ペコちゃんもやっぱり女の子ですね、ふふ、といった妄想をしていたのですが、現実はそう甘くありません。

壁一面にはタキシードお面のポスター。棚にはフィギュアや同人誌がパンパンに詰められており、コスプレ用衣装までかけられています。

同人誌をパラッと開いてみると、タキシードお面と、敵役の男との濃ゆい絡みシーンがありました。

「あっその本いいだろ？この敵役に攻められてる時のタキシードお面様の表情がさー…」

ペコちゃんは喜々として濡れ場の感想を喋ってきます。立派な腐った女子です。

そんな僕達を横目にヒュー君は、眼鏡をくいつくいつとさせながら風の精霊を喚びました。

「風の精霊よ、姿なき悪意を感じとれ“聖なる風の日”」

煌めく風がヒュー君の周りに巻き起こりました。静かなその風は部屋を巡り、天上の角に触れた時にソレは姿を現しました。

おお、探索魔法系の上位の魔法ですね。目くらまし系の魔法を破るものですが、十五歳でもう修得しているとはさすがです。

「こんな物がこんなに…」

ペコちゃんがヒュー君の手によって集められたソレらを見て青ざめています。盗撮用と盗聴用の魔具が計六個見つかりました。本格的な犯罪に僕もゾツとする思いです。

「ペコちゃん…これ、本気でヤバいですよ…これは十分な証拠になりますし、早く魔法師団に通報しましょう」

魔法師団は、地球でいうところの警察のような機関です。見つかった魔具を提出すれば、魔具から出ている魔力を辿り、持ち主を見つけてお縄にしてくれるでしょう。

ペコちゃんは無言で頷きます。可哀想に、こんなに震えて。許せませんね、気持ち的には問答無用でブツ潰したいですが、そんな障害事件を起こせば僕も犯罪者になってしまいます。ムカムカしますが、大人しく法に裁かせましょう。

そしてペコちゃんは魔具を持って、ご両親と共に魔法師団本部へと向かいました。

ペコちゃんちからの帰り道、ヒュー君は眼鏡をくいくいする事も忘れ神妙な面持ちで言いました。

「『聖女教』の規模は最近大きくなっていくと聞きます。今回逮捕されるのは多分一部の信者だけでしょう。これがかっかけて魔法師団から解散要請が出たとしても、隠れながら活動する輩もいるでしょうね…」

「当分、ペコちゃんを一人にさせないようにしましょう。それと、万が一の為に危機察知機能が付いた魔具を作ります。…ペコちゃん

を、守りますよ」

頷くヒュー君。夕日で眼鏡が光って目が見えません。やっぱり眼鏡は失敗だったかな、と思いながら家路についたのでした。

家に着き、服を着替えた後に早速魔具作りをします。ペコちゃんに付ける用のピアスと、彼女の危険を報せる用のピアスを十個程。彼女の為に動いてくれる人に渡すつもりです。

「ジャック、僕が学校に行っている間はペコちゃん教の動向を探っていて貰えますか？」

「にゃっ（いいぜ）」

「後、精霊神達、夜は交代でペコちゃんを守っていて下さい」

過保護かもしれませんが、念には念を、です。それに、バナナ力的勘が僕に胸騒ぎを覚えさせるのです。

気のせいだといいのだけれど…そう思いながら夜は更けていきました。

38 プレイ目 『魔術技世界大会はーじまーるよー』

夏休みに入りました。

ペコちゃん教は、ペコちゃんに告発されて一部信者が捕まったものの、やはり解散には至らず存在しています。しかし、告発されて以来ペコちゃんの半径百メートル以内に入ってはいけないと魔法師団から定められたので、遠くで眺めているだけになり、それさえ我慢できれば問題無い程度になりました。

そして今、僕達はお隣の国にある都市にきています。

連なる岩山の中でも一際高い岩山の上にあるその街は、聖なる水が湧き出る水の都と呼ばれています。

水の都と呼ばれるだけあって、至る所に水路や池などがあり、しかしそれらは緻密な計算によって位置づけられていて、一つの巨大な守護魔方陣として形成されているのです。

街並みは僕が住んでいる王都の近代的な街並みとは違い、中世ヨーロッパを思わせる情緒溢れるもので、水路を移動する小舟を見て地球のヴェネチアのようだな、と思いました。違うところがあるとならば、水の透明度が凄まじく高いところでしょうか。

そんな異世界情緒溢れる街は、現在ある催しものの為に各国から人が大勢集まって来ています。

「ペコちゃん、はぐれたら困りますから、手をつなぎましょ?」

「はああ!?! そんな恥ずかしい事できるか!?!」

そうですか、でも僕は何も聞こえませんでした。僕が手を握ると、顔を真っ赤にしながらも振りほどきません。うほっいい雰囲気。

「オレもオレもー!」

そう言っただけの僕のもう片方の手を握るのはKYメラ君です。例の事件で少しは成長したかなと思えば、空気の読めなさは変わっていません。

背の低いペコちゃんが人ゴミに流されないようにと気をつけながら、露店の食べ物や異国の珍しい物を見つけはどこかへ行こうとするメラ君を引っ張りながら、まるで保母さんのように二人を連れて目的地へ向かいました。

そこは街の中心に位置する巨大な競技場です。

そう、今日はテンプレイベントデーなのです。僕は観戦するだけですけどね。

この世界にある六大大陸の、各大陸代表の魔術技部の皆さんが集まって、トーナメント形式で戦うのです。魔術技部に所属しているミズホちゃんとハニーちゃんは、個人戦こそ予選敗退してしまいましたが、団体戦の選手として晴れ舞台に立ちます。

やっとの事で観戦席に着き、先に席取りをしてくれているはずの眼鏡を探します。太陽に反射されて光るソレを、くいくいさせながら手を振るヒュー君を見つけました。

「遅いかったですね。もうすぐ始まりますよ」

「すみません、ヒュー君。思った以上に人が多くて中々進まなかったんです」

「祭りみたいで来るだけで面白かったぜ！ポコも来れば良かったのになあ！」

「兄さんは人ゴミが嫌いだから、逆に良かったかも」

そう、ポコ君は最近ギルドのお仕事が忙しくて今日も来ていません。

最高ランクであるZランクは色々大変そうで、僕はBランクで

止めておいて良かったなと思う今日この頃です。

四次元ポシエットから人数分の飲み物を取り出して、他愛ない話をしてしていると、間もなくして盛大な音楽が会場を震わし、同時に火花が上がりました。

歓声が上がると、次は競技場の中心から虹色に揺らめく水が泡のように次々と浮かび上がります。

宙で弾けてはキラキラと落ちていくそれは、地面に付いて雫が弾けると、闘技会場を形作っていきました。

「綺麗…」

「すげーなあ！アレどんな魔法なんだ!？」

「幻覚系の魔法だと思いますが…複数の魔法が混ざってそうですね」

ペコちゃんは目を輝かせて魅入っていて、メラ君は手を叩きながら興奮して、ヒュー君はクールに眼鏡をくいくいさせていますが、眼鏡の光り方がワクワクしている事を物語っています。

そんな彼らを見て、僕も自然とテンションが上がってきます。

会場が出来上がったと同時に音楽が変わりました。最近流行りの歌のイントロが始まると、浮かび上がっていた水の玉が急速に中心に集まって大きな水の球体になります。次にそれが弾けて中から人が現れると、歓声がより大きく競技場を震わせました。

桃色の髪を波打たせ、眠たそうな瞳は蠱惑的で、誘惑する為に作られたかのようなその身体をより魅力的に演出している衣装は、七色に揺らめいた先から水飛沫が舞っていて先程の水でできたかのようで、その姿はとても美しくジョニーが興奮してしまいました。

この、世の男達を惑わすような美貌の人は、世界の歌姫、アイル

さんです。

世界の歌姫が前座で出てくるなんて、この大会に世界がどれ程注目しているのかが分かりますね。

競技場内に甘い歌声が広がります。その歌は、未来への希望と夢を歌ったもので、学生の大会には相応しい歌でした。

歌い終わり、軽く挨拶してから手を振ると、水に溶けて消えてしまったかのように会場の興奮冷め止まぬ中退場しました。

そして次に、水球に乗ったオーケストラが宙に現れて、行進曲を奏で始めました。

『選手入場！アフィル大陸代表、王立チヨースケ学院！』

アナウンスが流れ、オーケストラの楽器から赤色に煌めく水飛沫が会場の中心に集まっていきます。

それらが形作ったものは、我らがチヨースケ学院の選手一同でした。大歓声の中、赤く煌めく水飛沫に囲まれて手を振る選手達。

うむうむ、立派ですハニーちゃん、ミズホちゃん。お父さんは鼻が高いです。

『ウイシャーギ大陸代表！国立オング学園！』

次にオーケストラから出てきたのは黄色い水飛沫です。それらが形作ったのは、褐色の肌に額に千田光男的なぼつちりが付いた子達。パイス君の母国の人達ですね。

そうして、次々に水飛沫は色を変え、選手達を形作っていき、合計六組の選手団が揃いました。選手宣誓の為、各校の代表が拡声魔具の前に立ちます。

おっ、我が校代表はハニーちゃんのダーリンじゃないですか。

『宣誓!』

『我々は、日々の鍛錬と』

『修行の成果を発揮し』

『一戦一戦全力を尽くし』

『母国の誇りと輝く未来の為に』

『正々堂々と戦う事を誓います!』

沸き上がる歓声の中、礼をして下がる代表選手達。なんだか、青春って感じしますね。おっちゃんは見てるだけで胸イッパイです。選手達が退場した後、各国の魔法師団が魔法演舞を見せて、最後に偉い人のお言葉があった後に開会式は終わりました。

大会本戦は明日からなので、観客達はこぞって帰って行きます。

「さあ、ホテルに帰りましょうか」

「え〜!? 観光してから帰ろうぜ!」

「はあ…またあの人ゴミにまみれるのか…」

ヒュー君の言葉に、メラ君とペコちゃんは違った対応を見せます。僕も正直観光したいんですが、ペコちゃんがげっそりしているので可哀想です。

「メラ君、僕の転移魔法で一度ホテルに戻ってから一緒に観光しましょう。」

メラ君は僕の提案に、首が千切れるんじゃないかと思うくらい勢いで頷いています。うむ、それでは部屋に直接転移しましょうか。それ、てればーてーしよ〜ん。

「きゃっ」

どうやら失敗したようです。部屋の前に転移してしまいました。僕も歩けばオパイに当たる、です。

ん？オパイ？

うほっいいオツパイ。なんだか顔が柔らかいと思ったら、豊満なお胸に顔を埋めていました。

「どこのどなたか存じませんが、ありが…いえ、すみません」
「あつ…！アイル!？」

押し倒している状態だったので、慌てて土下座しようとしたら、ヒュー君が驚きの声を上げました。

顔を上げてみると、桃色の波打つ髪の毛を掻き上げて、蠱惑的な瞳を愉快そうに細めて微笑する世界の歌姫がいました。おお…歌姫のオパイに顔を埋めてしまいました…本当にありがとございました。

「あら…嘘みたいに綺麗な子ね」

いやはや、貴女にそう言われると照れます。僕のチェリーをどうぞ貰ってやって下さい。

「……それに…そちらのお嬢さんはもしかして、噂の『聖女』様？」
「えっ？僕の事ご存知なんですか？そんなに噂は広がってます…？」
「そうね、一部では凄い有名だわ」

居心地悪そうなペコちゃんの様子を、愉快そうに眺める歌姫。もつと、僕にかまって！。

「あたし、用事があるから失礼するわね。それじゃ…またね」

「ごきげんよー！また会えたら、その時は僕のチェリーを…以下略
そうして、歌姫はお尻をぷりんぷりんさせながら去って行ったの
でした。それから、いまだアホの子のように、いや、実際アホだけ
ども、口を開けっ放しにしているメラ君を引きずって部屋に入りま
した。」

「僕達は四人で一部屋に泊まります。と言っても、五大貴族のボン
ボンとお嬢様達なので、すういゝとです。ワンフロアに二部屋しか
無いその部屋は、寝室が三つに、無駄に広いバーカウンター付きの
リビングや、これまた無駄に広いスカイビューの浴室があります。」

「なので、四人で泊まっても窮屈でない上に、兄弟のように育った
僕らにとって、男女がどうのはさほど問題では無いのです。メラ君
は無邪気に一緒に寝るとか言いそうなので寝室の鍵はしっかりかけ
ますがね。」

「なあなあ、ワピコ！早く行こうぜ！」

「ちよつと待ってメラ君。その前にミスホちゃん達の様子を見に行
きませんか？」

「そうだな、僕も激励しに行きたいな」

「という訳で、同じホテルに泊まっている彼女達の部屋を訪れる事
になりました。選手達が泊まる部屋は学院が取ってくれるのですが、
やはりお嬢様な彼女達は二人でセミスイートに自腹で泊まってい
ます。」

「あつ、みんな来てくれたんだね。ただの暇潰しだとしても嬉し
いよ」

「ニコニコしながらミスホ節をきかせて中に招き入れてくれました。
そこに待ち構えていたものは…」

「皆、強そうだったわね。私こゝわ〜い〜」

「大丈夫だよ、ハニー。君には僕がついてるよ」

「先輩、ハニー嬉しい!」

「おう!来てやったぜ!」

二人の世界を作っているバカップルと、それを気にせず突撃していくKYメラ君。おお、勇者よ…

ハニーちゃんは気分をそがされて、メラ君を凄じ勢いで罵っています。それをヒュー君とペコちゃんが宥めて、僕とミスホちゃんは離れた所でのんびりお茶を啜っています。

「いやはや、同じ部屋にはいて欲しくないですね〜」

「そうだね、せめて別々に部屋取ればよかったよー」

あの二人のバカップルさに辟易して、さすがのミスホちゃんも本音がポロリします。ミスホちゃんも連れてくれば良かったのに。

んん?誰を?皆連れて来たら修羅場になっちゃいますよね。誰が本命なんでしょう?そもそも本命なんているんでしょうか?

「ミスホちゃんは、本命がいるんですか?」

「ええ?いきなりだね。…まあ、いるよ?」

おお、ミスホちゃんは理想が高そうですから、全員ただのキープかと思つたら、ちゃんといたんですね。

「ミスホちゃんのお眼鏡にかなつた紳士は誰なんですか?」

ミスホちゃんは、僕をじーっと見つめた後、大人の女の顔を
して微笑みました。

「誰だろっね？」

おひよっ。この真性小悪魔め。僕のジョニーを翻弄する気ですか？
……ん？んん？もしかして、ミズホちゃんは、僕のジョニーの存在に気づいてるんでしょうか……？……有り得そうぞ恐ろしいです。

「なあなあワピコ！もういいだろ？早く行こうぜ！」

駄々っ子メラ君がやってきました。無駄に図体がデカくなったので、もう可愛くないですよ？

「メラ君は仕方ない子ですね。ミズホちゃん、明日応援に行きますから。今日はゆっくり休んで下さいね？」

「うん、ありがとう。ただの友達としても嬉しいよ。明日頑張るから、ちゃんと見ててね？」

おひよっ。さりげにアピールしてきましたよこの子。ただの百合なのか、ジョニーに気づいてるのか……
ビクビクしながら、メラ君と観光に向かう僕でした。

39 プレイ目『僕は水中生物ではありません』

夕焼けが水路を赤く染める中、僕とメラ君は観光用のゴンドラに乗っています。

メラ君は、露店で買った訳の分からない怪しげなお面やアクセサリをこれでもかと言う程に付けていて、どこからどう見ても不審者です。

横にるのがそんな不審者ではなければ、このロマンチックな風景を楽しめたのは間違いありません。

「なあなあワピコ！なんでこの水ん中、一匹も魚がないんだ？」
「この水は清らかすぎて、聖なる生き物しか生きていけないんですよ」

「ふん？じゃあワピコはこの中で生きていけるな！」

どうやら彼の中では僕は人間では無いようです。

メラ君のアホ丸出しの台詞を聞いたゴンドラを漕いでいるおじさんが噴き出しました。

「確かにお嬢さん、とてつもなく綺麗だもんな！エラさえ付いてれば、ここに住んで欲しいくらいだよ！」

僕はまだ人間でいたので遠慮しておきます。

一人ではしゃいでいるメラ君を軽くあしらいながら、夕陽に照らされた水路をボーッと眺めます。

水って見ると何でこんなに癒されるんでしょうかねー。んん？底にゴミがちらほら沈んでいますね。あつ、あそこの人がまたゴミを投げ入れてます。けしからん！

「せつかく綺麗な水なのに、汚れちゃいますねえ……」

「ああ、大きな祭りがある時はマナーが悪い観光客のせいで水がちよっと汚れるんだ！水が汚れると守護魔法陣の効果も弱まるから、困ったもんだよ。ゴミを投げ入れると罰金対象になるから、お嬢さん達も気を付けてな」

ふむ、自浄作用はあるみたいですが、それ以上にゴミを捨てる人が多くて追いつかないんですね。まったく、けしからん！

そんな事を思いながら一人でプリプリしていると、また誰かが水路にゴミを投げ入れました。

けしからん！とまたプリプリして沈んでいくゴミを見ると、なんだか他のゴミとは様子が違います。

注意深く見ていると、その瓶から漏れだした液体から、『穢れ』が広がっていきました。

「メラ君！あの瓶を取って来て下さい！」

「え？」

「早く！！！」

戸惑いながらも、水路に飛び込むメラ君。彼も水の中の違和感に気づいたようで、自身に結界を張りながら瓶を拾い上げます。

僕は水の中に手を差し入れて白銀の錫杖を喚び、浄化の魔法をかけました。

「其は清らかなる乙女の祈り、乙女は穢れを知らずに歌う」

錫杖から浄化の力が溢れて波紋が広がります。波紋は清らかな歌声を思わせる音をたてながら広がっていき、穢れを浄化していきました。

「お嬢さん、何したんだ？今の音綺麗だったなー！」

「おじさん、この街の魔法師団の詰所の近くまで行って下さい」

「え？観光コースからは外れちまうよ？」

「結構です。なるべく急ぎでお願いしますね？」

渋るおじさんを、僕の天使の笑みで従わせ、魔法師団の詰所へと向かいました。

おじさんに丁寧に敬礼を言ってから、教会のような外観のそこに入ると、もわっと獣臭がしました。

「おう！ワピコじゃないか！」

ガチムチ ビー が あらわれた！

たたかう

まほう

どろぐ

何も見なかった

「お、おい！ちよっ待てよ！」

ちよっと古めのキムタクのような事を言うビーさんを無視して、受け付けに行きました。

それでもめげずについて来る彼をメラ君に押し付けて、僕は受け付けのお姉さんに事情を話すと、顔色を変えていかつい顔をしたおじさん呼び寄せます。

「おう、ビーじゃねえか。まだなんか用があんのか？」

「いや、俺はコイツの付き添いだ」

どうやら保護者気取りのようです。仕方なくビーさんを混じえて、投げ入れられた瓶の事を話すと、いかつい顔したおじさんの顔がよりにかっくなりします。

「ブリーフ教団のヤツらか…?」

また出ました過激派集団。ビーさんがいるからそんな予感はずたんですよ。ポコ君が、最近ブリーフ教団に関するお仕事ばかりだとボヤいてましたからね。

いかついおじさんが部下を呼んで、瓶から出ている魔力を追うようにと指示すると、僕に感謝の言葉を述べた後、ここからは魔法師団のお仕事だから、と帰るよう促されました。

「でも、コイツは有能だから役に立つぞ?」

「ビーさん、僕も手伝ってあげたいのは山々なんですが、ここには友人の応援に来ているので、時間をそんなに割けないんですよ」

困った顔をする僕を見て、ビーさんも困った顔になり、渋々納得してくれました。

さあ、帰りましょう。ペコちゃんとヒュー君がきつとお腹をすかせて待っています。

「え? 帰っちゃうの?」

KYメラ君が何やら駄々をこねそうな予感です。

「メラ君、僕達のささやかな手がなくとも、魔法師団の方達とビーさんが無事解決してくれますよ?」

「でもさ、悪いヤツらが悪い事しようとしてんだろ? オレ達にも何かできる事があるなら…」

「メラ君、君は才能はありますが、まだまだ実力は学生の域を出ません。プロの方に混じれば君は足でまといにしかならず、ご迷惑をおかけする事になりますよ?」

なるべく、メラ君を刺激しないように優しく言っただつもりなんです。が、めっちゃくちや不満そうです。「オレだつて役に立つ事証明してやる!」とか言つて飛び出しちゃいそうです。

「ま…まあ、ほら、なんだ。メラ、これは子供のお遊びとは違つただな…」

「誰も遊びだなんて思つてねえよ」

ナイス逆フオローですビーさん!見事にメラ君の機嫌を逆撫でしています!この脳筋が!

「いいよ!誰にも迷惑かかんないように一人でするからさ!それでいいだろ!?!」

そう言い捨てて走り去つていくメラ君。オロオロしている脳筋。無言で携帯を取り出す僕。

「もしもしヒュー君?カクカクシカジカで今日は何時に戻れるか分かりません。すみませんが、先に寝ていて下さい」

『それなら、僕達も一緒に…』

「ペコちゃん教が完全になつた訳ではありません。ヒュー君はペコちゃんをしつかり守つていて下さい」

『でも、僕の出番が…』のところで切りました。

「ビーさん…僕が水路を見張つていてあげますから、メラ君に危険

が無いように、見張っていて下さい、ね…?」

部屋の温度を二十度程下げる冷気を実際に出しながら、無表情でビーさんをお願いしました。

僕が追いかけても、興奮状態のメラ君は止まらないでしょうからね。興奮が収まるまでビーさんに責任持って追いかけて貰いましょう。

何が怖いのか分かりませんが、ビーさんは涙目で震えてガクガクと頷きます。

そうして、僕はビーさんの推薦により、魔法師団の方達に混ざって水路に不審者が近づかないように見張る事になりました。

と言っても、街中を駆けずり回るのは疲れるので、そこらへんはプロの方達にお任せして、水の精霊神に水路に異常があつた場合に報せて貰うようにして、僕は魔法師団の詰所内でのんびりお茶を啜っています。

「んん?ガエルさん、ここと、ここに穢れが」

僕は街の地図の前で偉そうに指を差し、いかついおっさんことガエルさんに言いました。

最初こそ訝しみながら指示を出していたのですが、本当に穢れていたものだから、今は黙って僕の言う事を信じてくれています。

「しかし、嬢ちゃんみたいな実力者が何でまだBランクなんだ?」

「僕は、鍛冶師になるつもりですからね、ギルドランクにはさして興味が無いのですよ」

「ほほう、家が鍛冶師の家系なのかい?」

「いいえ、お父さんが一代で築きあげました。結構有名だと思うんですが…コー印の装備品」

「な…何！？コー印だと！？」

ガエルさんが腰を抜かしてしまいそうな程驚いています。やっぱりお父さんは有名なんですねぇ。

「彼の作品は素晴らしい！魂を揺さぶれるかのような情熱が表れていて、更には戦地に赴く勇者達を奮い立たせる漢気溢れる形！それでいて……」

ただのお父さんマニアでした。お父さんのファンはとても暑苦しいです。ガエルさんの興奮冷めやらぬ中、通信魔具から焦った声が聞こえました。

『隊長！駄目です！数が多すぎて浄化が間に合いません！』

ふむ、さっきのもう二十六個目ですからね。浄化の魔法は普通時間がかかるものですから、そうなるのも仕方ありませんか。

「しょうがない…本部に応援を求めるか…」

「どれくらいの時間で来ます？」

「夜番の人間はすぐ来るだろうが…それ抜きだと早くて三時間くらいじゃねえかな？」

『穢れ』の広がり方が早いですから、三時間後では守護魔方陣が機能しなくなってしまうですね。ブリーフ教団が、守護魔方陣を消して何かを為そうとしているのは明白です。ただ、その何かがどれ程の驚異なのか…

「ガエルさん、聖なる水の湧き出している場所へ案内して下さい。自浄作用を強めます」

「嬢ちゃん、そんな事もできんのかい？ すごいな」

僕ツエーですからね。僕にできない事など今のところハーレム形
成以外無いのですよ。くそーポコ君めー。

ガエルさんは詰所を離れられないらしく、源水のある場所を地図
に書いてくれて、地下にあるそこに入る為の許可証をくれました。
詰所を出ると、もう夜も遅いというのにまだまだ人が溢れ返って
いて、普通に歩いて行けば無駄に時間がかかってしまうな、と思い、
姿を見えなくして屋根の上を飛んで行く事にしました。

暗闇に紛れて屋根の上を飛ぶ美少女。おお、とても異世界っぽい
です。転移すればいい話だったのですが、霧困気を重視しました。

そこは競技場に入り口があり、地下に源水が湧き出ている場所が
あるようです。まだ人の出入りが激しい競技場内にはすんなり入る
事ができ、地下へと続く道に入る前に許可証があるのかなー、と思
いながらすいすい階段を降りて行く事ができました。あれ？ 本当に
どこで許可証がいるんだろ？

なんて思いながら薄暗い通路を進んで行くと、何やら警備の人っ
ぱい人が倒れていました。おお、悪者登場しそうな予感です。

気絶している警備の人に治癒魔法をかけてあげて、ちよつと失礼
して何があったのか記憶を探ってみます。……うん、一瞬で気絶し
たみたいで何も分かりませんでした。仕方ないですね。小走りであ
ちよつと急いでみますか。

水の精霊と、神聖なものの霧困気に満ちているそこは、今は殺伐
とした霧困気が満ちていました。

どこをどう辿って来たのか都合良くいるメラ君は傷だらけで、彼
を守りながら戦っているビーさんも苦戦を強いられています。

彼らの前に立ち塞がるのは、黒いローブに、黒く長い髪を三つ編
みにして、黒い瞳は冷たい色を放っている男。僕が仔豚の時に遭遇

した謎イケメソでした。

メラ君達と、謎イケメソが僕に気づいたのは、僕の蹴りが謎イケメソのこめかみを捉えた時でした。

「「ワピコ!?!」」

いきなり現れた僕にメラ君とビーさんは驚いています。謎イケメソは脳を揺さぶらされてフラフラしています。それをチャンスとばかりにビーさんは捕縛魔法を唱えました。

「聖なる水の聖霊よ、穢れを封じよ“聖なる戒めの手”」

おお、源水を有効活用した即興魔法です。さすが、脳筋だけれどズラंक。実践慣れしているだけあって、頭が柔らかいですね。

源水の泉から聖なる力を宿した水が、しゆるしゆると触手のように伸びてきました。態勢を立て直した謎イケメソは水の手から逃げようとするも、既に手に囲まれていて抵抗も虚しく捕らえられます。

「ぐっああつ!?!」

謎イケメソが苦しんでいます。それもそのはず、聖なる水が彼の肌に触れると、しゅうしゅうと音を立てながら火傷のように痕をつけているのです。

人間なのに、浄化されています。この謎イケメソ、どれ程穢らわしい存在なのでしょう？

「ビーさん、何故ここに？」

「ああ、ワピコ。すまないな、助かった。俺はただメラを追っただけなんだがな。それがいつの間にかこんな事になっちまって、俺にも何がなんだか」

つまりは、この謎イケメソの性質も分からないままに、聖なる水で捕らえたという事ですね。その野生の勘には驚かされるばかりです。

「コイツ、水路に例の瓶を投げてたんだよ。で、追いかけてたらここに着いてさ。おい！お前一体何が目的なんだ！？」

もがき苦しんでいる謎イケメソに視線を合わせて詰め寄るメラ君。傷だらけですけど、まだまだ元気そうで何よりです。

メラ君に詰め寄られると、謎イケメソの瞳が深い憎しみの色に染まりました。それと同時に、聖なる水さえも侵すおぞましい闇が彼から湧き出します。

いきなり湧き出した闇。メラ君はそれに怯み、謎イケメソが水の手から逃れた事に気づいた時には、もう闇を纏った手はメラ君の目の前まで来ていました。

「メラ君！！」

「メラ！！」

僕の手がメラ君の服を掴み、彼を後ろへ凄い勢いで飛ばしてしまいました。それで、メラ君は助かったのですが…

「うっぐおお！！」

「ビーさん！！」

メラ君を庇おうとしたビーさんが、闇に目を穢されてしまいました。

「はは、世界に在るべき闇から目をそらす貴様らには、目など必要

無いものだろう?」

そう、冷たく笑うと、源水に『穢れ』が詰まった瓶を投げ入れました。そして、再び彼を闇が包み込みます。

また逃げる気ですね、そうはさせませんよ。その闇を吹き飛ばしてやります!

僕は白銀に輝く錫杖を喚び …… 出せない?

おっと、ピンチです。アレが無いと、密かに神様系の力は使えないのです。

仕方なく、僕は人間が使う普通の魔法で闇を祓おうとしたら、もう謎イケメソの姿は闇に消えた後で……

「ビーさん!? ビーさん!」

「くそっ! 目が見えねえ!」

メラ君がビーさんに駆け寄り、心配しています。どうやらビーさんは、闇に穢されて失明してしまったようです。

錫杖さえあれば……彼の目を治す事など容易いのに……

僕が……僕が、メラ君を任せただけに巻き込んでしまった……

ビーさんの目はもう……見えない? 僕の……せいで……?

絶望を感じかけたその時、羽のように軽い、しかし確かに質量を感じるものが、僕の右手の中に現れました。

……え? 錫杖? どうして……

いや、そんな事はどうだっていい。ビーさんの目が治せるんだから!

「其は清らかなる乙女の祈り、穢れに染まりし身は乙女の涙によって救われる」

錫杖が清らかな音を響かせる。その音は目に見える旋律となってビーさんの上に集束し、音の一つが波紋を広げて、ぴちゅん、と雫のようにこぼれ落ちました。

ビーさんの瞳に落ちた音は、彼の身体全体に広がり、闇によって穢された身体を浄化していきます。

「…ん？おお？見えるぞ？」

不思議な顔をして目をパチパチさせるビーさん。それを見たメラ君が号泣しながらビーさんに抱きつきます。鼻水がビーさんの服にめちやくちゃ付いてますね。ご愁傷さまです。

しかし、本当に良かったです。僕の脳内では、バリアフリー完備の部屋の中、ビーさんの介護をしている僕、といったところまで想像が進んでいましたからね。冷や汗ものです。

しかし、何故先程は錫杖を喚び出せなかったのでしょうか？神様が使用中はダメだとか？

心の中で神様に呼びかけるものの、応答はありません。忙しいのでしょうか？まあ、今はちゃんとありますからその話はまた後日という事で。ひとまずは、源水の浄化とそれに続く水路の浄化に取り掛かりましょう。

いくらチートな僕でも、さすがに消えかかっている巨大な守護魔方陣が回復する程までに浄化させるのは時間がかかり、終わったのは翌日の朝日が昇りかけている時間でした。

そして、僕は、倒れました。

40 プレイ目『あっそんなノリなんですね』

僕が目を覚ましたのは、あれから二日後の夜更けでした。

ひんやりとした指が僕の頬に触れ、夢見心地のままに目を開けると、ポコ君がとても哀しそうな顔をしていました。

どうしたの？ポコ君。

何がそんなに哀しいの？

僕がまた、君に何か酷い事したのかな？

「……違う」

それじゃあ、どうしたの？

冷たい指先が、今度は僕の髪の毛を掬います。

指先から零れる僕の銀色の髪が、僅かな月明かりを受けて、キラ、キラ、とベッドに落ちていきました。

「……ワピコは、俺の救いの女神。あの日、ワピコが俺を救い出してくれなかったら、俺はどうなっていただろう？」

ポコ君は、在りし日の自分を思い出し、深く、暗い、瞳になりました。

「こうして、ワピコに触れられる安らぎも、その瞳が俺を映す度に感じる歓びも、共に在れる事の楽しさも、全て、知る事なく朽ちていただろう……」

大丈夫だよ。もう、怖い事なんて何も無いよ。
僕が、守ってあげるよ。

側にいて、哀しい事から全部、君の心を守ってあげる。
そして、もっと、もっと、楽しい事、嬉しい事、いっぱいしよう。
だから、ねえ、そんな哀しい顔しないで。

「ワピコ……ワピコに逢えて、本当に良かった…俺の、女神…」

ポコ君は泣きそうな顔をして、けれど安堵を得た子供のように微笑んで。

ゆっくりと、僕に口付けをしました。

「わひひゆるろいつ」

人間、驚いたら本当に可笑しな声が出るものです。

「え？あれ？ここ、ホテル…だよな？あれ？ポコ君？夢…じゃない？」

飛び起きて、挙動不審になる僕。先程の哀しげな表情は何だったのかというくらい、無表情で頷くポコ君。

うん、じゃないですよこんちくしょうが。寝込みを襲うなんて、ストーリーレベルもそこまで来ましたか。

「じゃ、俺行くから」

呆然とする僕を置いて、ポコ君はさっさと転移して行きました。
え？え？何この流れ？僕には理解不能です。僕はただ呆然とする

しかなかったのです。

翌朝、あれから鬱々とした気持ちのまま寝る事ができず、げっそりとお茶を飲んでいる所、メラ君が現れて鼻水を垂らしながら泣きつかれました。

「ごべん、ワビゴおお！オレのぜいで倒れじまつでえええ！もう…もう、目え覚まざないがど思ったあああ！！」

何やら誤解があるようです。倒れたのは、ただ力を使い過ぎて疲れただけなんですけどね。冬眠的な感じですよ。でもまあ、メラ君に責任感というものが芽生えたのなら、黙つときますかね。

「ワピコ！やっと目を覚ましたのか！」

「ワピコ！良かったです！」

ペコちゃんやヒュー君にもご心配をおかけしていたようです。申し訳ない。しかし、二人はちゃんと疲労によるものだと知っていたようで、メラ君のように過剰な反応はされませんでした。

さて、今日は大会三日目、決勝戦です。我が校は決勝まで残っていたようで、決勝はエキゾチックパイスイ君の母国との試合です。朝食を皆で軽く済ませた後に、張り切って応援に向かいました。

競技場内は凄まじい盛り上がりようで、まだ選手も入場していないのに、我が国と相手国による応援合戦が繰り広げられています。

「磨きあげたその技術　溢れた気迫　さあ魔法を」

「「「ぶーちっこめー！チョーッスケ！」」」

「オング学園に！」

「「「ぶーちつこめー！チヨーツスケ！」「」」

メガホン同士をバシバシぶつけて、太鼓やトランペットの音と合わせて歌っています。あつ、そんなノリなんですね。僕はすみっこで大人しくしていいですか？

会場に流れる音楽が、ゆったりとしたものから行進曲へと変わり、アナウンスが流れました。

『チヨースケ学院、選手一同入場！』

こちらの客席から凄まじい大歓声が湧き起こります。魔法弾幕やら、人文字的なものを魔法で作ったりと、それをやりたいが為に来ているんじゃないかと思う程の凝りようです。

『オング学園、選手一同入場！』

声援から、向こう側を野次る怒号に変わりました。なんとというフーリガンでしょう。僕のジョニーが縮こまってしまいそうです。

そんな大歓声の中、両校の代表が前に出て、審判が持っている箱の中へと手を入れました。

「ヒュー君、あれは何してるんです？」

「ああ、戦闘フィールドをあれて決めるんですよ。片方が基本フィールドを。もう片方が天候などの特定の条件下に置かれるシチュエーションを決めるんです。」

「昨日は、嵐吹き荒れる海での船上試合は白熱したな」

くいつくいつの後にペコちゃんが続けました。それは確かに過酷そうですが面白そうですね。情眠を貪っていたのが悔やまれます。そうこうしているうちに決まったようです。両校の選手達は一旦

リングの外に出て、審判がオング学園が取り出した青い玉をリングの上に投げました。

宙で止まったその玉は、眩い光でリングを包み、光が収まった後に現れたのは十個の柱のようなリングでした。柱の一つ一つが、人が一人立つのがやっとなくらいの狭さで、足場の他は底の見えない真っ暗な空間です。落ちたら即アウトですか？ゾツとします。

リングが完成されると、審判はもう一つの赤い玉を投げました。すると、玉は燃え盛り、次に直線上にリングを駆け巡って、選手達の動きを制限させる何本もの炎のロープとなりました。

なんだか…血と涙と汗とが入り乱れるガチムチ熱血修行漫画とかに出てきそうなシチュエーションですね…仲間が底に落ちるのを見て「西郷（仮名）どおおおん！！」とか泣き叫んでそうです。

「両校選手、リングに立って！」

僅かな作戦会議の時間の後、審判の指示に従って、魔法で浮いたり跳躍してリングの上に立つ選手達。その表情は真剣そのもので、離れた所からでも緊張が伝わってくるかのようです。

「始め！！」

合図と共に両校の前衛が飛び出しました。

バゴーン！！

宙で魔法と魔法が交じり合う轟音が響き、拮抗した力はそのまま両者を後方へ弾き飛ばします。相手校の前衛は自らの魔法で宙を浮いて止まり、こちらはミスホちゃんの魔法で受け止められました。

相手校は全員風魔法が得意なようで、誰の援助も受けずに宙を浮いています。

変わって我が校の選手陣は浮遊魔法を使っているのはミスホちゃんともう一人だけ。二人が後の三人をフォローしながら戦わなけれ

ばならず、この時点で若干我が校が不利です。

どうやら相手校は、風と火が中心の戦法のようなようです。前衛が使う簡単な火魔法を、後衛が風魔法で煽って威力を増しています。前衛が二人、後衛が二人、残り一人が全面的なサポートや隙あらば威力の大きな魔法で攻撃：といった感じですよ。

対して我が校は、五人とも得意属性がバラバラですが、バランスは良く、状況に応じて前衛と後衛を交代しています。しかし基本はミズホちゃんが相手側の火魔法を水魔法で和らげて、ヒヨロツとした男子が光魔法で攪乱、その隙にハニーちゃんの地属性魔法を、ダーリンであるマーク先輩が火魔法で固めて硬度を増して攻撃、残りのガツチリした女子が風魔法で三人の足場をフオローしています。

しばらく拮抗した戦いが続く中、相手校が炎のロープに当たって攻撃が止んだ隙について、ミズホちゃんが大魔法を唱えました。

「慈悲深き大いなる水の精霊よ、我が血脈による盟約に応えよ“母なる水の領域”」

相手校の選手達を薄い水の膜が覆いました。あれはミズホちゃんちのお家伝統芸で、一定時間対象者の能力と戦意を大幅に下げる魔法です。

その時宙を浮いていた相手校の前衛二人は、底へ落ちかけてしまったので近くの足場に慌てて降りようとしたところに、ハニーちゃんとダーリン、そして光魔法の男子が突撃しました。

「地の精霊よ轟け“弾岩”」

「火の精霊よ爆ぜろ“炎の咆哮”」

「光の精霊よ纏え“光掌波”」

風魔法で勢いづいていた三人のスピードに、相手校の後衛陣も対応できず、近距離で撃ち放たれた魔法は前衛の二人を底に突き落と

しました。

『オング学園、ポポ・シザース選手、トグダ・フォン選手、場外リタイア』

アナウンスが流れると、我が校の観客席が沸きました。ハニーちゃんやダーリン、光魔法の男子の名前をメガフォンを叩きながら叫んでいます。メラ君はともかく、ペコちゃんまで興奮して立ち上がりメガフォンを叩いています。ヒュー君はクールに手を叩いているのですが、曇っている眼鏡が興奮度を物語っています。僕もメガフォンは叩きませんでした。ハニーちゃんの名前を手を叩きながら叫びました。

主戦力の二人がリタイアしてしまったオング学園は、焦って逃げ回っていると思ったら、それはただの演技だったようで、いつの間にか我が校の選手達を三角形に囲むようにして位置していました。

「何か来るぞ！」

ダーリン先輩が叫ぶのと同時に、オング学園の選手達の合同魔法が発動しました。

「『『『 新月の夜の獣』』』」

「水の精霊よ！ “水王の衣”」

黒い、大きな三匹の獣が、聞けば腹の底が冷えるような咆哮を上げながら、チヨースケ学院の選手達を呑み込むように襲いかかりました。

ミスホちゃんが咄嗟に水の上位守護魔法を唱えましたが、魔力の

練りが足りなかったようで、ミスホちゃんとハニーちゃん、ガツチリした風魔法の女子しか守れず、残りの二人は獣に呑み込まれてしまいました。

「せんぱーいーいーいー!!」

今生の別れのような嘆きっぷりを披露するハニーちゃん。

致命的なダメージを感知したら、無傷で退場になるご都合主義魔法がかけられていますから大丈夫ですよ。

しかし、さっきのオング学園の魔法。お国独自の夜の魔法かと思わせての闇魔法じゃないですか？

闇魔法は忌み嫌われていますが、森羅万象に在るべきものです。別に闇魔法だからと言って、必ずしも悪いものだとは限らないので、普段なら特に気にする事は無いのですが、何せブリーフ教団を見かけた後ですからね。念の為、ビーさんに報告しますか。

ヒュー君達にひと声かけてから、席を立てて少し静かな所へ移動しました。

「もしもし、ビーさん？」

『「おう！ワピコか！どうした？」』

んん？携帯の声と、近くで聞こえる声がかぶりました？

振り向くと、ガチムチの背中が見えました。なんだろう、また野生の勦的なものが働いて来たんですかね？

声をかけたら向こうも驚いたようで、ウホッ、と本物のゴリラのような声を出していました。

「今の試合観戦してました？」

「いいや？俺はブリーフ教団の調査の一環でここにいるだけだからな」

「そうですね。先程、オング学園の選手が闇魔法を使いましたね。考え過ぎかもしれませんが、念の為彼らから話を聞いた方が良かったと思います」

「そうか：分かった、そんじゃ話聞きに行つて来るわ。ありがとうな」

ウホウホ去つて行くビーさんを見送つて、僕は観客席へと戻りました。

リングに目をやると、戦況はこちら側が不利になっていました。相手校は三人、こちらはミスホちゃんとハニーちゃんの二人だけ。

ミスホちゃんが目配せをすると、ハニーちゃんは頷きました。お、何かやらかす気ですね。

「水の精霊よ、惑わせ“幻鏡水”」

ミスホちゃんが、幻覚系の魔法をハニーちゃんにかけました。一瞬揺らめいた後、姿が見えなくなるハニーちゃん。当然、姿の見えない人間より丸見えの人間を狙う訳で、三対一という構図になってしまいます。

何かの為の時間稼ぎだという事は相手側も分かっているようで、短期決着をしようと猛攻撃をされます。

ミスホちゃんは水の結界を張りながら、風の移動力上昇の魔法でギリギリ避けていましたが、炎のロープに邪魔されて思うように動けず、ついにはミスホちゃんの背中に火の魔法が衝突してしまいました。

致命傷ではなかったようで、すぐには退場になりませんでした。宙に放り出されたミスホちゃんは浮遊魔法を唱えようとしてしまいましたが、それは叶わず畳み掛けるような攻撃で底に落とされて行つてしまいました。

しかし、落ちる瞬間に、ミスホちゃんから水の大精霊の力が放た

れ、オング学園の選手達から離れた場所へ集束されていきます。
そこには、魔法の効果が切れて姿を現したハニーちゃん。

「全てを呑み込め！“怒流の大地”」

水の大精霊と、地の大精霊の力を合わせた合成大魔法です。

下から凄まじい勢いで泥水が噴き出して、それはリングをも巻き込む渦になりました。渦巻く泥に呑み込まれたオング学園の選手達は、どうにかして脱出をしようと試みますが、纏わり付く泥はそれを決して許しません。

そして、オング学園の選手達は底へと引き摺りこまれ、リングに立っているのはハニーちゃんだけになりました。

『チヨースケ学院の勝利！！』

沸き起こる歓声。選手達を褒め称える歓喜の声。会場に溢れる、勝利を演出する魔法の数々。ハニーちゃんがリングを降りるのを待って抱き締め合う選手達。

そんな姿に、おっちゃんもついつい感極まって、ハンカチを取り出したのです。立派になったね〜二人共…しみじみ

そうして、大会はチヨースケ学院の優勝をもって、幕を閉じたのです。

41プレイ目『ドキドキ初体験です』

大会三日目の夜。ホテルの大きめの会場で優勝祝いパーティーが行われました。

会場には学院関係者だけでなく、魔法師団や騎士団、ギルドの関係者が有能な彼らをスカウトしようと押し寄せています。

「魔術技部の皆様。本日は誠におめでとございます。あなた方は、我が国の誇りであり、宝です。皆様、素晴らしい勝利を収めた魔術技部の選手達に今一度盛大な拍手を」

ヴァンパイア族の学院長が、ぴっちりとしたドレスに身を包み、豊満なお胸をぼよんぼよんさせながら言いました。

ちよつと高くなっている段の上に集められた選手の皆に、盛大な拍手が贈られます。皆は、恥ずかし気でもあり、誇らし気でもありません。初々しいのう。

「あううう…ハニーさん、ミスホさん、ご立派ですううう…」

眼鏡をずらして号泣しているのは、緑の髪を今日はハーフアップにさせているドジっ子眼鏡、リリアン又先生です。

「先生、いらしてたんですか？お久しぶりです」

「ええ、愛する教え子の晴れ舞台を見に来ていまし…ひゃうっ」

何も無い所で躓きました。ドジっ子がドジっ子たる所以です。膝丈のドレスがめくれ上がっておパンツが丸見えになりました。隣でヒュー君が眼鏡を曇らせる程興奮しています。とてもムツツリさが際立っています。

「それでは、魔術技部の皆様の輝かしい未来を祝して、乾杯！」

皆がお酒やジュースの入ったグラスを持ち上げて乾杯しました。僕も、ジュースと見せかけたお酒で乾杯します。

お酒は二十歳からだよ 十代まではアルコールを分解する身体機能が出来上がってないから危ないんだよ 僕は神様スペックだからいいんだよ

「ご都合主義設定を全面に押し出して堂々といかせて頂きます。

実は始めて飲むお酒に心弾ませながら口をつけました。んん〜シユワシユワフル〜テイ〜。このシャンパンとても美味しいです！僕は夢中になってイツキに三杯飲み干してしまいました。

おお、なんだかイイ気分です。ふわふわして、今なら自由に空も飛べるかもです。

「ワピコ…？足、フラフラしてるぞ？」

おお、不 家のマスコットキャラクターじゃないですか！

ほらっ、いつものようにアホみたいにペロツてしてごらんなさい？

「な、なんだ？昔も同じような事言ってたが、不 家って何なんだ？」

「どうしましたペコ？」

「ビュー、なんだかコイツ可笑しいんだ」

「あらあら、ワピコさん。これ、お酒のグラスですよ〜？」

おお、眼鏡が二匹いますね。なんですか？それで知的さをアピールしたいんですか？はんっ、ただのドジっ子とムツツリじゃないで

すか。

「む…むつつり…」

「私、ドジっ子じゃありません」

ふふん、悔しかったらいつでもかかって来やがれです。

「ワピコ、来てたのか。こんなツマンネーとこ抜け出して俺の部屋行こうぜ。お前も俺と二人きりになりたいだろ？」

誰に向かって何オラオラ営業してんですか。この包 野郎が。

茎野郎は白い毛と赤い目してうさちゃんみたいでしゅね。ほーら、ニンジンお食べ。

「ちよつ、どつから取り出してきた!？」

「ハクト王子、どうしてニンジンを丸ごと食べてるんだい？」

エキゾチックじゃぱ〜ん!ん?こんな黒々した日本人は松崎しるくらいですよ。お前はどこのスパイだ!?!この売国奴め!!

「え…つと?ハ、ハクト王子…僕は向こうに行くから…」

「お、おい、パイヌ!俺も行くよ!」

この負け犬共め!!

「ま…負け犬…?」

「ヒュー、お前に言ってるんじゃないんだから、落ち込むなよ…」

おお、べろんべろんは優しいでしゅね。ほらっ、アホみたいにペロっとしてごらん?

「ふあひ、んぐ、何してんだお前ら？」

あつ…僕のキレイなおべべが汚れちゃった…

「え？え？何、泣いてんだワピコ？」

「メラの汚い口から飛び出た食べカスが付いてショックだったんだろ？」

「ひでえペコ！オレの唾液付き食べ物プレミアムもんだぜ！？」

えぐっ、えぐっ、アホがいるよ。アホに汚されたよ。もうお嫁にいけない。うわ。ん。

「大丈夫！オレが貰ってやるって！」

「はあ！？寝言は寝て言え！」

「そうですメラ。寝て、そして二度と目覚めなくていいです」

「ペコもヒューも酷すぎる！」

んぐ、なんだか喉が渴いてきましたね。おいっ！酒だ！酒を持ってこい！

「おい！ワピコ、もう酒を飲むな！」

何ですかべるんべろんぐ？やめて下さい、オパーイが当たってますよ？

「え？きやつ」

ふはははは、今のうちです。サラバ愚民共よ。

おや、アソコにいるのは、バカップルじゃありませんか？公害です！バカップルは公害です！僕が退治してあげましょう！
いでよ！ジャック！

「ごろにゃ〜」

「ん？…うわっ！」

「きゃっ先輩！オシッコかけられてる！汚い！」

「ハ、ハニー…」

ふはははは、どうだ神の天誅は。ふはははは。

おっと、何やらゾクゾクするものがありますよ？

「うちのミズホは幼い頃から自慢の娘でしてね、はっはっはっ
嫌だわ、お父様ったら、ふふふ」

お…おお…僕には見える…彼女から沸き出る世にも恐ろしい黒い
オーラが…

んん？ミズホちゃんのお父さんが何やらコソコソ話しかけていま
すね？

ゴッドイヤー発動！！

「おい、ミズホ。今のうちに金持ちの小倅共に媚びを売ってこい」
「……はい、お父様」

むむむ！娘を道具のように扱うその諸行！父親の風上にもおけま
せん！

お天道様が許しても、この僕が許しませんよ！月にかわってお仕
置きです！

くらえ！膝かっくん！

「うわっ!?!」

「ワピコちゃん!?!」

それ、逃げますよミズホちゃん。そんな腐った魚の目なんてしてないで、エンジョイしようぜ

「ワピコちゃん…」

ふいふ、疲れた。ミズホちゃんをお姫様抱っこしながらの、十階から三十三階までの全力疾走は、老体にはキツイですな。

あゝ、ベッドがふかふか気持ちいいです。

「ワピコちゃん…寝ちゃったの…?」

んん…?僕は酒に吞まれてなんていませんよ?むにゃむにゃ…

「ワピコちゃんだけだよ…?『私』に気づいてくれるのは…それがどれだけ嬉しい事か…分かる?」

ああ!巨大ミジンコが!巨大ミジンコがああ!?!…むにゃ…

「ふふ、おやすみなさい…私の王子さま」

ふあふつ…なんだか頼つぺたにしっとり柔らかいものが…んんむ
ううう…おやすみな…さ…い…

翌朝、目を覚ますと僕の腕の中でミズホちゃんが寝ていました。何がどうなって、こうなったのでしょうか?パーティーの途中から

まったく記憶がありません。

「…んん…おはよ…ワピコちゃん…」

眠たい目をこすりながら起き上がったミズホちゃんは、キャミソールワンピースのような薄い下着だけでした……せめて、オパーイカバ―をつけてくれないと、目のやり場が突起物に集中してしまいます。危ない！朝ジョニーが起きてしてしまいます！こんな至近距離ではごまかしきれません！早く！早くその突起物を隠してえええ！！ミズホちゃんは、僕の視線に気づいて、ポツと頬を赤らめます。

「初めてだったの…責任…とってね？」

それは、言葉に言い表せない程の衝撃でした。

……何も…覚えて無いなんて…勿体無い……っ！！

「ふふ、なんてね。そんな事ある訳ないよ。女の子同士だもん、ね？」

そうやって笑う彼女の視線の先には、テント。

朝ジョニーによって作られたシーツのテントがありました。このジョニーのお茶目さんめ

そして、何事も無かったかのようにミズホちゃんは服を着て、出て行ってしまいました。……うん、気にしてないみたいだし、まあいいか！

それでも、お酒って怖いな……と思った十五歳の夏でした。

41ブレイ目『ドキドキ初体験です』（後書き）

これは、未成年による飲酒を推奨するものではありません。
未成年の飲酒は法で禁じられており、また未成年にとっては体に毒
となるものです。

お酒は二十歳から！！

42 プレイ目 『もしや世紀末的テンプレ来ました?』

大会が開催された水の都が、壊滅したと聞かされたのは二週間後の事でした。

「どういう事ですビーさん?」

『オング学園の選手達がな、どうやらブーリフ教団の信者だったらしい』

「らしい…とは、はっきりとは分からなかったって事ですか?」

『ああ、大会中に使った魔法については、闇魔法とは思わずに夜魔法だと思ってたと言い張っていてな、外交問題にも繋がるから厳しくは取り調べられなかったんだ』

「そうですか…」

『ああ、それで他にはブーリフ教団に繋がるものが何も出てこんくてな、しょうがないから俺も他に飛んだんだが…オング学園の選手達がある後に源泉に侵入して、闇魔法で聖なる水を穢したんだ。それから酷かったらしい。守護魔方阵の効果が失くなった街に、闇に侵された動物や、闇で強化された魔物共が雪崩れ込んで…』

闇で強化された魔物はとてつもなく強くなっていたらしく、魔法師団の抵抗も虚しくあつという間に壊滅させられたようです。

生き残った人間はごく少数で、街は今でも魔物によって占拠されているみたいです。

『俺とポコはこれから討伐に行く。できればお前にも来て欲しいんだが……あっおい!』

ビーさんの声が遠くなりました。どうやらポコ君に携帯を奪われたようです。

『ワピコ、来なくていい』

「え…?でも、凄く手強い魔物達なんでしょう…?」

『もし来たら、問答無用でワピコの処「行かないです、絶対行きません」』

僕の返事に満足したのか、『じゃあな』とだけ言っただけ切っていました。

ああ、ビックリしました。ポコ君は僕が本当に本気で嫌がる事なんてしないのに、あんな事言うなんて一体どうしたんでしょう?

この前も、夜中に侵入してきた時、ちよつと様子が可笑しかったですし…

こっそり行く?いやいや、彼のストーカーの勘を侮ってはいけません。もし見つかったら僕の貞操が…いや、でも、彼の身にもしも危険があったら……

そんな一人問答を続けて、あ、遠くから覗いてればいーんじゃん、と気づいたのは、ご飯を食べて、お風呂に入って、ジャックと猫じやらしで遊んであげて、もう日が変わってしまうくらいの時間でした。

「テレレツテレ、遠視鏡」

「うにゃー(ワピえも〜ん、それなあに)」

「ジャク太くん、この鏡は対象者が今何してるかを映してくれる覗きアイテムだよ〜う〜ふ〜ふ〜」

なりきっているジャックに、僕もなりきって答えました。僕はのぶ代しか認めません。

はてさて、早速覗いてみるとしますかね。おお、もう既にあらかた片付いているじゃありませんか。心配する必要はありませんでしたかね？

しかし……エグいですね……

美しい街並みは破壊され尽くしていて、澄んだ美しい水も今は闇と、魔物と、それに人間の血によってどす黒く濁っていました。

ポコ君達討伐隊によって殺された魔物達がグロテスクに転がっていて、その魔物達によって喰い散らかされたのであるう人であった残骸も至る所に転がっています。

……確かに……行かなくて良かったかもしれない。ビーさんのお仕事を手伝ったりした事もありましたが、それは魔物討伐だとしてもごく少数の魔物だけで、こんなに大量の魔物の死骸や、あまつさえ人が死ぬ姿など見た事はありません。見ているだけでも胃液が逆流してきそうなのに、実際にこの場にいたとしたら吐いていた事でしょう。

ポコ君：君はこんな世界で生きてきたんですね……

もうちょっとポコ君に優しくしてあげよう……と思っていた時、彼の様子がおかしい事に気づきました。彼の額には、大きな汗の粒が滲んでいて、殆ど無表情を崩さない顔が、今は苦痛を堪えているかのように歪められています。

立っているのもやっとだったようで、周りの魔物を片付け終わった後、崩れるように膝をついてしまいました。

どうしてしまったんでしょう？もしかして、魔物に大きな傷を負わされたんでしょうか？でも、目立った傷は無いし……ああ、もう早く帰って来て下さい。そしたら、僕の貞操を守りつつ治癒できる

のに。

僕がヤキモキしていると、ソイツは気配も無くポコ君の目の前に現れました。

「だ…れだっ!？」

ポコ君が苦し気に叫ぶも、ソイツは黒く長い三つ編みを手で弄びながら、黒く冷たい瞳を細めて微笑むだけ。

また君ですか謎イケメソ。君の悪役っぷりは分かりやすすぎて、安い三文芝居を見せられてる気分になるのですよ。

絶対こいつポコ君をブーリフ教団に勧誘しますよ。

「君が噂の“タキシード能面”か…どうだ？ブーリフ教団に入らないか？君ならすぐに幹部になれるだろう」

ほら、出た。ポコ君！ビシッと言ってやりなさい！髪を切れとね！

「…ワピコが入るなら、別にいいけどな」

ポコ君の僕至上主義にはいつも驚かされます。僕が死んだら、すぐにあの世まで追って来そうぞ恐ろしいです。

「でも…ワピコはお前らみたいな卑劣な奴らは好きじゃないからな。ワピコが嫌いなものは俺も嫌いだ。だから無理だ」

断る理由がちよっとアレですが、よく言いましたポコ君。

「君はこの世界が憎くないのか？髪が黒いというだけで、我らを迫害するこの愚かしい世界が！」

活動理由も分かりやすすぎますね。僕が深刻な厨二病を患っていた時に、こんな台詞を吐く悪役が登場する『闇の書』と題した漫画を描いた記憶があります。抹殺したい黒歴史です。

「別に」

サラッと言いましたねポコ君。そこにシビれて憧れはしませんが、よく言ったと褒めておきましょう。

「そうか…なら、死ね」

そんなご無体なお代官さまああ。

なんてね、ふふん、ポコ君にそんなただの斬撃なんて効きませんよ。スイツと避けちゃいます。

……………え？

謎イケメソの短剣の軌道は至って単純に真っ直ぐで、スピードも普通の人間よりは速いけども、いつものポコ君なら簡単に避けられるもの。

しかし、短剣はポコ君のお腹に深く、突き刺さりました。

どうして？なんで避けなかったのポコ君？

彼の苦痛に歪む顔の額には、溢れんばかりの汗の粒。

ああ、そうだ。様子がおかしかったんだ。そんな攻撃も避けられない程だったの？

「ジャツ…ク…ジャツク！すぐにポコ君を回収して来て！」

「任せとけ」

ジャツクは、黒猫の身体から人型へと変化し、夜の闇を渡るよう

に転移して行きました。

情けない。震えて動けないなんて。こんなで彼を守るなんて言っていた自分が恥ずかしい。ジャック…早くポコ君を助け出して。

「最後に聞く。我々と共に行くか？それとも、死を選ぶか？」

「ワピコの…いない場所になんて…興味は…無い」

短剣が、ポコ君の喉元に届きそうになった時でした。

ジャックの長く鋭い爪が、甲高い金属音を上げて短剣を弾き飛ばしました。

「去れ、人間」

ジャックの鋭い金色の眼差しが謎イケメソを貫きます。

「これは、これは…夜の神…同じく闇を司るあなたが…我らに牙を向けるとは…」

「勘違いすんなよ？夜の闇は安らぎと休息を与える。お前らのは穢れを伴う混沌と絶望だ。一緒にすんじゃねえよクソガキが」

「…くっ…！そうですか。今日は大人しく退かせて頂きましょう。」

“タキシード能面”、次は容赦はしないぞ」

そう言い捨てて、謎イケメソは闇に溶けて消えて行きました。

「お…前…？ワピコの…使い魔か…」

「ああ、お前なんざ知った事じゃねえが、ワピコが泣くからな。黙

って俺様に連れてかれるよ？」

夜の闇がポコ君を優しく包み込みました。夜の闇を音もなく渡り、僕の部屋へと二人は現れます。ベッドに横たえられたポコ君の顔色は蒼白で、意識も朦朧としているようです。

「光の精霊よ、生命の輝きを其の腕で癒せ“聖母の抱擁”」

傷を塞ぐ程度なら神様能力までは必要としないので、光の魔法で治癒しました。しかし、傷は塞がっても、ペコ君の意識は戻る事なく、いまだ苦しそうに唸っています。

どうして？傷はもうどこにも無いのに。もしかして、何かの毒でも受けたのでしょうか？

そう思っ、神様能力でポコ君の身体の中を探ってみました。

「え…っ!？」

驚きの余り、思わず声が漏れてしまいました。ポコ君の身体は、毒なんかよりももっと深刻な問題になっていたのです。

身体の組織、あらゆる細胞が、内臓が、筋肉が、どうして生きていれるのかという程までにボロボロになっていて、弱った彼の身体に、闇に抵抗する力もなく、穢れに侵されていました。

どうして…そう考える前に僕は白銀に輝く錫杖を喚びます。

「愛しき子よ、我が胎内で一時の癒しの眠りを」

柔らかく温かい光がポコ君を包みました。それは繭状になり、ほのかに点滅しながらポコ君の傷を癒していきます。光の繭の中で、ポコ君の顔が徐々に穏やかなものへと変わっていきました。

ふう、これでもう大丈夫です。ドキドキしてまだ手が震えています

すが、それよりも安堵の気持ちが大きいです。だって本当に死にかけだったので。間に合って良かったです。

しかし、身体の組織が完全に回復するまで二、三日はかかるでしょう。ビーさんに連絡を入れて置かないと。

「もしもし、ビーさん？」

『おう、ワピコか。どうした？』

「かくかくしかじかと言う事で、ポコ君を迎えに来てくれませんか？」

『何！？分かったすぐ行く！』

本当に、かくかくしかじかしか言っていないんですが、さすがビーさん、野性的本能で分かったみたいです。

数分後、うちの戸を叩いたガチムチが、うちのガチムチと遭遇。一発発射の雰囲気の中、何か通じるものがあつたらしく、肉と肉がぶつかり合う音を立てながら抱き締め合った後、僕の部屋へ来ました。とてもおぞましい光景でした。

「ねえ、ビーさん。ポコ君の身体の事は知ってました？」

「そんなに悪かったのか？最近顔色が悪かったから、病院へ行けと言っただけなんだが、平気だの一点張りだな……」

「そうですね……では、こんなにポロポロになった理由は知らないんですね……多分、二、三日で目が覚めるはず。ポコ君が目覚めたら連絡を下さい」

「ああ……すまなかったな」

ビーさんは、ポコ君の身体の事に気づけなかった自分が情けないという感じで渋い顔をし、そしてポコ君を連れて転移して行きました。

本当に彼に一体何があったのか。脳裏に浮かぶのはあの過激派集団、ブリーフ教団。我が国の王子様を狙い、水の都を狙った。

密かに我が国の王家は、祖に聖なる獣を持つという隠れ設定があります。その血筋は王都の中心に在るだけで、この地に聖なる獣の祝福と恩恵をもたらすというものです。

きっと、王子様を狙ったのは、お金や宗教的主張が目的ではなく、『聖なるもの』。水の都も聖なる水を穢し、これから先何百年かは人の手では浄化できないでしょう。

『聖なるもの』を排除しようと活発化する闇の動き。強く、人類を守る程成長したポコ君。分かりやすすぎる悪役。

これは……もしや、魔王的存在vs救世主というテンプレ？
テンプレ展開には、面白可笑しく乗っかかりたい僕ですが、ポコ君のあんな状態を見てなおそんな気持ちにはなれません。

僕は、ポコ君にもう苦しい思いをして欲しくはないのです。

……アイツら……潰して来るか……

目を瞑り、そう決意した後、次に目を開ければそこは、僕の部屋ではない空間でした。

43 プレイ目『傍観者』

ここに来るのは三度目でしょうか？

一度死んだ時、初等部の修学旅行の時、そして今。

僕の目の前に広がるのは何も無い白い空間です。そう、あのバナナの住処です。

そのバナナの住処にはバナナを貪る変態がいる訳で。

「何のご用ですか神様？」

「実は最近バナナジュースに凝ってましてね、一杯いかがですか？」

「貰いましょう。で、何の用ですバナナ野郎？」

「やれやれ、最近の若者は忍耐と言うものを知りませんね」

バナナジュースが入った湯呑みを啜りながら、年寄り臭い事を言う神様。いけない、いけない、つい本音が。

「まあ、いいでしょう。今日は警告をする為に呼んだのです」

「……警告？」

「ブリーフ教団に手出ししてはいけません」

「どうしてですか？今潰せばテンプレイベントが起こらないからですか？」

「そうですね。ですが、これはただの私の気まぐれによるものでは

ありません。世界に必要な事なのです」

「どう必要だと言うのです？戦争も無い平和な時代、救世主が戦争を納めて皆で魔王をたおすぞー、なんて展開が無くとも手を取り合っ
て生きています」

「世界とは、魔法世界の事だけを示すものではありません」

そうですね、僕がいたあの地球も別の次元にはありますが一つの世界です。ですが、それが魔法世界とどういった関係があるというのでしょうか？

「私が創った世界は十三個あり、それらは密接な関係で繋がっています。一つの世界に歪みがあれば隣接した世界にも歪みが起こり、そしてその世界に隣接した世界にも…といった具合に全世界に混乱が起きます」

「なるほど。しかし、それならば尚更ブーリフ教団のような世界を混乱に陥れるものは排除した方が良いのでは？」

「今回は、魔法世界文明の衰退が目的です」

……んん？何故、衰退???

「ご存知の通り、魔法世界の文明は地球よりも進んでいます。それこそが、『歪み』なのです。隣り合う世界には類似性があります。それは生態系だとか、その世界を支配する生物だとか…そして、文明の発展もその一つです。類似性が無くなれば無くなる程に歪みが生じ、歪みはあらゆる問題を引き起こし、それは混沌を生み、やがては破滅へと繋がるのです」

ははあ……つまり、まとめると。

- ・文明の発展の差が大きいから歪み起きる。
- ・歪みが大きくなったら全世界が破滅する。
- ・困る。

「で、魔法世界を衰退させる為に用意したのが、ブリーフ教団という訳ですか」

そういう事だ、といった感じに頷き、バナナジュースで喉を潤わしながらバナナを貪る神様。

「お聞きしたいのですが、それがもたらす魔法世界の損害はどれほどのものになるのか、それから、ポコ君は今回どういった役割を担うのか、ついでに彼の身に一体何が起きたのか教えて頂けると嬉しいのですが」

「いいでしょう。まず、魔法世界に与える損害は、今の魔法科学知識の半分程は損失させる予定です。その為には、知識を持つ人間を失わせる事も必要になり、また彼らと技術、知識を守る人間がいたとすれば必然的に被害は増えますね」

水の都のあの巨大守護結界も、その失わせるべき魔法科学の一つであり、それを守ろうとする人間は巻き添えをくらったという事でしょうか。

だとしたら、これからあの規模……またはそれ以上の災害が増えるという事ですね。

色々と思うところはありますが、世界の為だと言われれば僕には何も言えません。湧き上がってくる感情を押し殺し、神様に話の続きを促します。

「ポコ君の役割は、あなたの予想通り、救世主的役割です。目的を果たした時、破壊活動を行うソレを止める者」

「……それは…僕ではいけないのですか…?」

神様はバナナを食べる手を一旦止め、僕の目を真っ直ぐ見つめました。

「あなたは、私と同じ力を持っている事は理解していますね?」

ただ、頷く僕。

「勿論、それは私の力の半分にも及ばないものですが、それでも人間からすれば絶対的なものです。絶対的な力を目の当たりにした時、人間達はどうするでしょう?」

神様の半分以下の力だなんて初耳です。やっぱり、神様の力ですからアルファが付いて、神様より強くなっちゃったー、なんて可笑しな展開は無いんですね。

「……オーソドックスなところで言えば、必要以上に崇めるか、それが異端過ぎるものを排他しようとするか……ですか?」

「そうです。少しばかり特別扱いされて、凄いなー、でもアイツだから納得、なんて程度では収まりません。崇拜される場合、必要以上にあなたを求め、頼り、己の足で立つ事を忘れるでしょう。また、願いが叶えられなかった場合、理不尽に憤り、積もり積もった不満は、やがて己の責であったとしても全てあなたに罪をなすりつけるものになるでしょう」

「おお、妄信者って怖いです。凄いなレベルで済む力しか使ってなくて良かったです。」

「排他されそうになった場合は分かりますよね？どちらにせよ、あなたの存在は混乱と新たな歪みを生み、魔法世界でのあなたの居場所はなくなる」

居場所が…なくなる…僕はまた、生きる世界を失う…

「だから、事を為すのは脆弱な人間でなければいけない」

「ぼ…ポコ君だって！ポコ君だって、チートな能力持っているじゃありませんか…」

「言って、気づきました。確かに色々創造できたり、破壊できたり、あまつさえ僅かな時を操作する事ができますが…：…身体作りは脆弱な人間のものです。僕の、人間離れた肉体とは違うのです。」

「彼の能力の性質そのものは人ならざる者の力です。ですが、彼の扱える力は私の半分以下であるあなたの更に百分の一以下。それでも人の身には持て余す巨大な力。巨体な力は人の身には耐えられず、力を使えば使う程に身体は悲鳴を上げて崩れていくのです」

「つまり…：…ポコ君の身体の中がボロボロだったのは、力を行使したせい…：…」

「そんなの…：…ブリーフ教団をやっつける前にポコ君が力のせいで死んでしまったら、どうするんですか…：…？」

「彼が事を為す前に死ぬ事は決してありません。私がそういう風に

創ったからです」

人間はあんたのオモチャじゃない!!

なんて、そんな熱血ヒーローぶった頭悪い事は言いません。

これは、神様のただのお遊びとは違うんです。そうしなければいけない理由があるので。

「もう一度言います。あなたは決してブリーフ教団に手を出してはいけません。あなたの周辺の人間を守る程度なら目を瞑りましょう。しかし、ポコ君の手助けをしてはいけません」

「身体を……癒す事すらいけませんか……？」

「あなたの元へ帰ってきた時はいいでしよう。しかし、戦いにはついて行かないように。あなたは彼の事になると少し混乱しやすい。彼が傷つきながら戦っているところを見て、あなたは力を使わないと断言できますか？」

答えは、いいえ、です。僕は必ず彼を傷つけるものを滅しようとするでしょう。

「もし、あなたが彼について行こうとした時は、あなたの『力』を奪います」

力：力がなくなったとして、僕はどれ程ポコ君の力になれるでしょう？とりあえず、彼の破壊される体内を癒す事はできません。先程彼を癒した力は限りなく蘇生に近いものです。ただの人では、使えない力、なのです。

「あなたにも色々と思うところはあるでしょう。一人で少し、考え

てみなさい」

何も答えない僕を見て、神様はいつものように淡々と言い、白銀に輝く錫杖を掲げました。

リンツと鈴の音が聞こえた次の瞬間には、僕の部屋で。

考えるとと言っても、僕にはどんな選択肢があると言つのでしょ
うか。

僕の存在は人の世に在つてはいけないもので。

力を行使すれば、力を奪われる。力がなければポコ君を癒す事
らできなくて。

それならば、やはり僕はただ傍観する事しかできないのではない
のでしょうか。

神様のように、ただ淡々と。

三日後、ポコ君が目覚めたときビーさんから連絡がありました。

しかし、僕は彼に会いに行く事はせず、彼からの連絡も全て無視
して。

僕はもう、彼とは必要以上に関わらない。僕は、ただの傍観者。

ただ、物語の行く末を見守るだけ。

ただ、ただ、淡々と。

44 プレイ目『ついに等身大ですか』

夏休みが明けて始業式。

ポコ君はまたお仕事で来てなくて、夜寝てる間にでも身体の調子を見て来ようかな、と思いながらぼーっと廊下を歩いていました。

「ねえ、あれポコじゃない？」

そう言った八二ーちゃんの目線は窓の外に向けられています。

ミズホちゃんとペコちゃんと一緒に外を見てみると、そこには中庭のベンチに座るポコ君と、見た事の無い女の子。

艶々の長い黒髪に、くりくりした黒目がちの瞳。白すぎる肌は生気が感じられず、本当にお人形さんみたいです。

その、お人形さんを見つめるポコ君の瞳は、酷く優しげで、髪の毛を撫でる長い指は、愛おしいものを慈しむよう。

ポコ君…

ついに、等身大人形に手を出しましたか……

叶うならば、ダツちなワイフではない事を願うばかりです。

ポコ君がこちらに気づいてお人形さんを連れて嬉しそうに歩みよって来ました。

おお、最近のお人形さんは動くのですね。最新の魔法技術でしょうか？ああ、しかし、その技術ももうすぐ失われてしまつかもしれません。

ドンマイ、ポコ君。

「ポコ君、その子だあれ？」

ミスホちゃんが色々な思惑を隠した柔らかい笑顔で聞きました。
ブラコンペコちゃんは怪訝な表情で見つめています。

「ああ、ちよつとした事情で今俺んちで面倒見ててな、今日から二年のB組に編入して来たんだ。ミフィ、挨拶しろ」

「……ミフィです……」

おお！？喋りました！！最新の技術は本当に凄いですねー！！

「はじめまして、ハニーよ。よろしくね」

「私はミスホだよ。ミフィちゃんてお人形さんみたいで可愛いねー。
ね？ポコ君？」

「えっ？お人形さんじゃないんですか？」

「やだ、ワピコつたら！本当に天然なんだからー！」

「こんな流暢に歩く人形がいるか」

ハニーちゃんが笑って、ペコちゃんは呆れてため息をついています。
す。養殖ですみません。

「本当にお人形さんみたいに可愛かったから、勘違いしちゃいました。てへっ。ポコ君の彼女ですか？やつとできたんですねー、おめでとつございます」

皆が、え？つて顔してます。

「ワピコ違、二人のお邪魔しちゃ悪いですから、行きますねー。ごゆっくりー」

ポコ君が何か言おうとしたのを遮ってタツタカ去りました。

彼女を見つめる彼の瞳。彼女を優しく撫でる彼の手。今まで僕だけに向けられていたもの。

僕と美少女戦士の他に興味を持てるものができて良かったです。ミフィちゃん、どうぞポコ君を僅かな時間だけでも幸せにしてあげて下さい。僕は、遠くで見えています。

心が、キシキシ、と悲鳴を上げているのに聞こえないフリをして、僕は逃げるようにして家に帰りました。

深夜、ポコ君の体調をコツソリ確認しようと、遠視鏡で様子を窺ってみました。よし、寝てますね。さっさか転移して、ちゃちゃつと見て来ましょう。

ポコ君の部屋は、さすがはペコちゃんの兄、部屋中美少女戦士で溢れ返って……って思ってたんですが、僕で溢れ返っていました。

壁に僕の写真を引き伸ばしたものは勿論、手作りと思われる僕人形の数々、僕がポコ君に言う事をきかす為に与えた僕の使用済みグッズがガラス付きの棚に丁寧に並べ飾られており…

まさにストーリーカーです。

分かってはいましたが、目の当たりにすると中々精神的ダメージが大きいものですね。

暗い部屋の中、音をたてずに近寄ります。

擬似魔力を出すピアスも外してきたし、神様パワーで気配のみな

らず匂いもバツチリ消したし、いくらポコ君でも寝てる今ならきつと気づかないはずです。

それでも、ハラハラしながら近付くと、布団が、もぞつ、と動きました。

ええ！？ストーカーの勘はそこまでなんですか！？

え？でも、ポコ君の頭は枕の上にあつて、布団の動きと合つてな

……

ふあさり、と布団が捲れ、中から起き上がって来たのは

「ん…ミフィ…？どうした…？」

布団から出てきた人間の名を呼ぶポコ君の声に、反射的に転移していました。

「うにゃー（ワピコ、早かったな。クソガキの具合はどうだった？）

」

「……はは、ジャック……」

「にゃ…？（どうした…？）」

「僕はもう……本当に、必用無いみたいだ……」

イタくない。イタくなんかない。

そう、これは、まさかミフィちゃんと一緒に寝てるなんて思わなかったから、ちょっと驚いて、ドキドキしてるだけなんだ。

ただ、僕が突き放したりしたとしても、ポコ君が僕から離れる訳ないって思い込んでたから、ちょっとだけ、シヨックだっただけな

んだ。

「なんだ、もう一緒に寝るくらいの仲にまでなってるんだったら、僕はもう必要無いね。なら僕は、安心して離れられる。」

心揺さぶられる事無く、傍観していられる。

「にゃあ…（泣くなよ…俺様がいるだろ）」

「泣いて…っなんか、ない…っよ…」

ただ、ちよつとだけ、寂しいだけだよ。

「ごめんねー 素直じゃな」もしもし

『……ワピコ??』

あつ、ポコ君…!なんだか着信音にイラツときて、誰からか確認せずに携帯に出ちゃいました。

『ミファイが…さっき、ワピコが来てたつて言ってるんだが…』

「はい、行きましたよ。ポコ君の体調を見ようと思って。でも、お邪魔しちゃったみたいでごめんね?」

『あ、いや、なんか誤解があるみたいなんだが…』

「ポコ君、最近お仕事忙しいでしょう?もう生徒会の方は手伝わなくて大丈夫ですから、ギルドの方に集中してもらって大丈夫ですよ?もし何か単位欲しい科目があるなら僕がなんとかしますし。あつでも、身体に何か異変があったらすぐに僕に言って下さいね?あまり無理しないように。それじゃ、おやすみなさい」

『あっ…ワピ…』

ポコ君の言葉を最後まで聞かずに携帯を切りました。すぐにまたかかってきたけど、それも無視して、またかかってきて、無視して、を十回ほど繰り返し返して、さすがに無音モードにしてからベッドに潜り込みました。

それでも、まだまだ着信の光がずっとついてて、ポコ君の執念深さにゾツとしました。ポコ君は僕をノイローゼにするつもりでしょうか？

夢のなーかなーら言ーえーるっ…ですか…

僕は、夢の中でなら、彼になんて言うのでしよう。

そんなくだらない事を、携帯の点滅する光を見ながら思ってしまった。
いました。

そして朝方、僕はやっと浅い眠りについたのでした。

45 プレイ目『何故かしがみつかりました』

あれから二ヶ月。

二ヶ月の間に一つの大きな都市と、いくつかの国の研究施設が数ヶ所破壊されました。そのせいでポコ君はほとんどギルドのお仕事で世界中飛び回っています。

お仕事先で、闇を象徴する黒い髪の色で嫌煙されていたポコ君ですが、実際彼は闇属性ではなく特殊属性の色で何色にも染まらないという事が分かり、更にはその力と美貌のおかげであちこちで大人気の英雄的扱いを受けているそう。

英雄と言っても、やはり彼は脆弱な人間であって、傷つき、苦しみながら戦っているのです、必要以上に崇拜されたりはしてないみたいです。さて、僕はと言つと。

「はっ！」

「きゃっ！」

体術の練習試合、しばらく打ち合いをして、相手の子の手をくると返し、そのまま投げ飛ばしました。

「いたた…た…？あれ、あんま痛くないや」

投げ飛ばした女子が不思議そうに首を傾げています。それを見た先生が笑いながら言いました。

「上手い奴ほど加減ができるからな、俺ももうワピコにはかなわんかもな！はっはっは！」

「さすがワピコさんだわ…」

「ああ、なぜ男性でなく女性なのかしら…」

「私！ワピコさんとなら茨の道でも歩いて行けるわ！」

「ああ…ワピコさん…」

うっとり…

僕の時代が到来していました。

ポコ君と女子の人気を競い合った（一人相撲）苦い日々は一体なんだったのかと言うくらい、ポコ君があまり来なくなってからあっさりハーレムできちゃいました。まさに今、人生薔薇色です。

体術の時間が終わり、女子からのタオル使って下さいラッシュをキリッとしながら抜けて、体技室の外で待っていたペコちゃんと共に生徒会室に向かいました。

ペコちゃんは今学期から、ポコ君が抜けた代わりに生徒会を手伝って貰っています。と言うのは建て前で、いまだ存在している『ペコちゃん教』を警戒して、ペコちゃんを一人で帰さない為に生徒会に入って貰いました。

「…凄まじい慕われようだな」

「ふふ、ヤキモチですか？」

「はっ！？なっ！…う、自惚れるなよ！？」

今日もペコちゃんのツンデレ加減は絶好調で、僕のジョニーも絶好調です。

体技室から少し離れ、体育館の側を通りかかった時でした。何やら近くから怒鳴り声が聞こえてきました。

一応、愛と正義感に満ち溢れた人望厚い生徒会会長としては放っておく事もできず、そちらの方へ行ってみれば。

十数人の女子に囲まれて、座り込んでいるミフィちゃんがいまし

た。

「アンタのせいでポコ君とワピコ会長が別れたのよ！」

「そのせいで、ポコ君も学院に来なくなっちゃったじゃない！」

「ワピコ会長だからあたし達も諦めてたのに！」

「黒髪の分際で生意気なのよ！」

「なんとか言ったらどうなの？このブス！！」

あばばばば。こんなテンプレはいりません。勘違いでそこまで責められるなんて女って恐ろしいです。

隣を見ると、ペコちゃんも去年まで男として育っていただけに、この女子特有のノリについて行けず、呆れた顔をしています。

「やめないか！！」

「誰……えっペコさん！？か……会長も……」

「多人数でたった一人を責め立てるなんて感心しませんね」

勇ましいペコちゃんに便乗させて貰って、ビクビクしながら僕も割り込みました。

「わ……私達……会長とポコ君のためを思って……」

「何か、勘違いがあるようですが、ポコ君が来ないのは単にお仕事
が忙しいだけであって、僕とポコ君は元々付き合ってませんでした
よ？いいお友達です。」

混乱している子もいれば、まだまだ不満そうに顔を歪めている子
もいます。ただ単にポコ君が来ない不満をミフィちゃんて発散させ

たかつただけですよね、分かります。

「さあ！皆でミフィちゃんに謝って仲直りしましょう！皆が仲良い方が僕は嬉しいです。ね？」

天然王子様のスマイルを放つと、先程の般若のような形相もなんのその、皆ほんわかした顔つきになりました。

「ご、ごめんね、ミフィさん」

「あたしも…ごめん…」

「ごめん、ミフィさん」

女子達のごめんね大合唱が終わった後、彼女達はそのままほんわかした笑顔で去って行きました。ふふ、ポコ君さえいなければチヨ口いもんです。

そして、後に残ったのは僕とペコちゃんと、ミフィちゃん。僕はミフィちゃんを立てさせてあげて、服についた汚れを払ってあげながら外傷が無いか確認します。うん、見た感じはどこにも異常はありませんね。

「どこも痛いところはありませんか？大丈夫？」

ペコちゃんよりも少し身長が低いミフィちゃんの顔を覗きこんで言いました。しかし、返事はありません。返事は無いけれども、つぶらな瞳が僕を穴をあけてしまうかという程にガン見しています。

「あ…あの…ミフィちゃん…？」

もう一度声をかけてみるも無表情のままガン見してきます。そして、無表情を崩さないままに、ガシツ！と抱きついてきました。抱

きつく…いや、もはやしがみつくと言った方がいいかもしれません。足まで僕に巻き付いています。何でしょうこれ？

「お、お前！ワピコから離れろ！」

デレ状態のポコちゃんが焦って引き離そうとしますが、ミフィちゃんは無表情のままビクともしません。その無表情さはポコ君を彷彿とさせます。

いくら言っても離れてくれなかったので、仕方なくミフィちゃんを巻き付けたまま生徒会室へ行く事になりました。

「
…
」

現在、執務中です。生徒会のお姉様方から殺気が溢れています。

それもそのはず、見事ハーレム入りを果たしたお姉様方からすれば今のこの状態は、とっってもお気に召さないものなのです。

生徒会のお仕事を机に向かって黙々とこなしている僕の膝の上には、ミフィちゃん。引き離そうとすると、しがみつき状態になってお仕事ができないので、仕方なく膝の上に座らせている訳ですが…
…何せガン見してきます。

この状態になって一時間。微動だにしなかった彼女に動きがありました。

「……本当に…夜が宝石になったみたいな目…」

ミフィちゃんの白すぎる指が僕の目元をなぞりました。その生気を感じられない程冷たい指は、僕の体温を確かめるかのように、さ

わさわさわさわと顔を撫でまわし、そしてついには鎖骨に侵入して来ました。

「あっ……」

「あなた！いい加減離れなさいですのー！！」

思わずビクンビクンしてしまった僕を見て、高飛車つるぺたマリ先輩がついにキレてしまいました。

「そっだよーワピコちゃん！その子をどかさないんだったらボクもくっつくもんねー！！」

元氣印のボクっ娘ヒマワリ先輩が方向性を間違えて僕に抱きついてきました。すると、マリー先輩もですの言いながら僕に抱きついてきて、ヒマワリ先輩と僕の取り合いに発展してしまいます。二人ともオパーイは残念な感じですが、それでも女の子の身体は柔らかいし、何よりイイ匂いがたまらんのう。

「まあ……ワピコさんったら、お鼻の下が伸びてるわよ……？」

いつもは控え目な眼鏡美人のナデシコ先輩が、般若の顔をして言いました。否定はしません。否定はしませんが、落ち着いて下さい。

「お前らー！！いい加減にせんと斬るぞー！！」

オスカル様のように凜々しいローズ先輩もさすがにキレてしまったようで、愛剣を抜いて今にも斬りかかってきそっで恐ろしいです。

「そっだよいい加減にしろよ！僕は別にワピコが誰と抱き合おうが

興味無いが、生徒会の仕事が滞るのは嫌だからな！早く離れるよ！」

ペコちゃんたらまたツンツンしちゃって。そう言いながら涙目ですよ。

「…………おばさん達…うるさい…」

ミフィちゃんがボソツと言ったその言葉に、場が凍りつきました。

その後はまさに修羅場。特殊実技室以外での校内攻撃魔法使用厳禁なのにも関わらず、凄まじい威力の魔法が飛び交い、刃物が僕の目の前をかすり、引つ掻き合いをし、服をボロボロにさせてたまにポロリをし、皆の魔力と体力が切れて肩で息を شدした頃に、「皆仲良くて、僕羨ましいな」の言葉で皆を脱力させて終了させました。そしてペコちゃんとミフィちゃん以外がすごすこと帰って行った後、生徒会室の通話魔具が鳴りました。

『お疲れ様。学院長室まで来て貰えるかしら？』

学院長から呼び出しをくらってしまいました。攻撃魔法を使ってしまった事へのお叱りでしょうか。結界は張ったのだから許しててへりんこ でやり過ぎしましょう。

ペコちゃんとはもかく、またしがみついて離れないミフィちゃんも仕方ないので連れて学院長室へ向かいました。

こんこん、と扉を叩くと「どうぞ」と声が聞こえたので入ると、相変わらずけしからんお胸をしている学院長が、淡い紫色の髪の毛を掻き上げながら机に向かっていた顔を上げました。

「さつきは、だいぶはしゃいでたみたいね。ふふ」

「すみません…結界はちゃんと張っていたので見逃して貰えませんか…？」

罪悪感を抱かせてしまう程のしょんぼり加減で、上目づかいで謝ってみました。

「ふふ、その事はいいのよ。今日は別件で来て貰ったの」

何だろっ、と首を傾げると、学院長はチラリ、とペコちゃんとミフィちゃんに視線をやりました。ああ、二人には聞かせられないお話しなんですネ。

すぐ行くから、と二人に校門前で待っていて貰おうとしたのですが、ペコちゃんは素直に退室してくれたのにミフィちゃんはやはりしがみついて離れてくれません。

「ね、ミフィちゃん。僕はとーっっても大切なお話があるんです。すぐに行くから、ちょっとだけ待ってて下さい。ね？お願い」

懇願する目付きで言ったら、渋々だけれど退室してくれました。彼女からはポコ君と同じ匂いがするようで恐ろしいです。

「彼女…ポコ君が連れて来た子ね…」

「はあ…そうなんですか…それより、お話しは何ですか？」

ポコ君とミフィちゃんのなれそめ話は興味ありません、とばかりに学院長に話を促しました。

「最近、世界各地でブーリフ教団が暴れているのは知っているわよね？」

よく存じております。しかし、僕は何も言わずただ頷くだけです。

「ブーリフ教団による闇の影響で魔物達は異常なまでに強くなり、各国の魔法師団や騎士団だけでは手に負えず、ポコ君含むギルドの高ランク保持者達が奔走していても徐々に闇の勢力に押されているという現状…このままでは、世界は闇に覆われてしまうのでは…と考えてしまうのだけど…どう、思う？」

それは、つまり、僕に神様の意志を聞いて欲しい、と言う事なのでしょう。学院長は僕がどういった存在なのかは知っていますし、世界が混乱する中不安になる気持ちは分かります。しかし、どこまで話していいものなのでしょうか。

「生徒の中でも優秀な子達で討伐隊を結成させて、魔物討伐に参加させようと思っっているのだけれど…」

おっと、それは困ります。确实五大貴族のあの子達が入ってしまうわけではありませんか。仕方ありません、ちよろっとだけ話しましょう。

「最終的には、世界が闇に支配される事はありません。しかし、今の状況は神様の意によるものです。時が来れば再び平和が訪れるでしょう。しかし、逆を言えば時が来るまでは何をしても無駄だと言う事です。ですので、生徒達を無駄に死に行かせる事だけはやめて下さい」

学院長は、言葉を失って、呆然としています。絶望。きっと、学院長はその言葉に全身を支配されているのでしょう。

「……神のご意志ですから、はい、そうですね、で納得なんてできないわ……」

学院長は唇を震わせながら呟きました。

「今回の騒動で、もう何人も……何人も知り合いが死んでいるの……それが……っ！！無駄死にだったですって!？」

ダンツ！と机を叩く音が響いて、学院長室は静寂に包まれました。僕は、それを淡々と見つめるだけ。

「……ごめんなさい……少し……興奮してしまったわ……頭の中を整理したいから、一人にして貰えるかしら……？」

哀しみが溢れる瞳を両手で隠しながら、至って冷静に振る舞って僕に退室を促しました。

「学院長……お気持ちはお察ししますが、無駄な混乱を招かないようにこの事は他言無用でお願いしますね」

淡々と、そう告げて、僕は学院長室を後にしました。

扉を締めたと同時に聞こえてきた学院長の泣き叫ぶ声が、ずっと頭の中で響いていたけれど、それでも僕は振り返らずに、ペコちゃんミフィちゃんの元へと向かったのです。

46 プレイ目『そこは恐怖の館でした』

学院長室を出て、二人が待っている校門に行きました。

「……………」

「……………」

見つめ合っています。ペコちゃんとミフィちゃんは何故か無言で見つめ合っています。

「……………二人共、何してるんですか？」

「あ…！ワピロ…！」

ペコちゃんに、救世主がおいで下さった！みたいな笑顔でお出迎えされました。

「この子が、僕をずっと見てきてさ、話しかけても何も喋らないし、一体どうしたらいいのかと…」

それはさぞかし不安だった事でしょう。なまじお人形さんみたいな容姿をしていますから、じっと見つめられればちよつとしたホラーですよ。夜に遭遇したらおパンツが大惨事になりそうです。

なんて思っていたら、ミフィちゃんがペコちゃんを見ながらボソツと言いました。

「…あなた…見た事ある…」

「え…？あ、僕？以前、兄さんに紹介して貰ったじゃないか」

「違う…ポコと会う前…『聖女』の写真を見た…」

おお、ペコちゃんが悶えています。そうですよ、またか！って感じで恥ずかしいんですね。ふふふ、可愛らしいのう。

「そ、そんなものはどうだっていい…もう、帰ろう…」

そして、シヨボシヨボしたペコちゃんをお家まで送り、ミフィちゃん二人きりになってしまいました。

今、僕はミフィちゃんを背中に巻き付けています。まだまだ離れてくれそうな感じはしません。

「ミフィちゃん…今、お家に誰かいますか？」

「…わかんない」

仕方ありません。ポコ君がいない事を祈りながら送ってあげるとしましょう。

まあ、結果から言わして貰えばいましたよね。ポコ君てそんな奴ですよ。

玄関の扉を開ければ都合よくポコ君が通りかかっていたところで僕を見て嬉しそうな顔はしたものの、ミフィちゃんが僕からすりゃりはがれてポコ君のところへ小動物のように寄って行けば、とても優しい笑顔をしました。

それを見て、胸がギュってした気がしたけれど、きっとアレですね。更年期障害です。

「……じゃあ、僕、帰りますね」

そう言って帰ろうと、ポコ君達に背を向け、俯きながら玄関を出ようとした。

ふと、人の気配を感じて顔を上げると、一秒前まで確かに家の中にいたはずのポコ君が、無表情で立っていました。

そのホラー具合に、ごくり、と喉を鳴らして、後退ると、ガシッ！と僕の背中にしがみつくと無表情のお人形さん。

何この恐怖の館。僕の正直な感想です。

そして、僕は恐怖の館へと引き摺り込まれてしまいました。

恐怖の館の居間に連れて行かれ、相変わらず背中にしがみついているミフィちゃんに気をつかいながらソファに座り、隣ではそんな事は無視して僕の髪の毛をいじるポコ君。

「ワピコ……会いたかった……」

やめて下さい、そんな絡みつくようにねっとりと見つめないで下さい。ああ、ミフィちゃんもやめて下さい、僕の首をはむはむしないで下さい。

心を無にして現状を乗り切ろうとした時、ふと、ポコ君の髪の毛が目に行きました。

元々ちよつと長い方だったので、今は更に長くなって、襟足が肩にかかる程まで伸びています。自然と手が伸び、ポコ君の艶やかな黒髪を、さらり、と触れました。

「少し…伸びましたね…」

「ああ、忙しくて切る暇が無かったからな」

ポコ君はそう言って、髪に触れる僕の指を握り締めました。
それから訪れる沈黙。

彼の黒曜石の瞳が僕を絡みつくように、逃がさないように、見つめてきます。久しぶりに見る彼の眼差しの強さに、心が揺さぶられそうになった時。

スツ、とミフィちゃんが、僕とポコ君の間に座りました。

「あ……！ご、ごめんね、ミフィちゃん。別に僕、ポコ君を君から取る気は無いから」

嫉妬させてしまって悪いな……と思っていたら、ミフィちゃんは先程よりも力強く僕にしがみついてきました。そして、あるう事がポコ君にアツチ行け、とばかりに足で押しているではありませんか。んん？何やら面倒臭い展開になる気がします。

「ミフィ……何のつもりだ……？」

「ワピコは……私のもの……」

僕は物じゃありませんよー。

「駄目だ。ワピコだけはやれない。ほら、飴やるからワピコを離せ」

「……やだ……ポコ嫌い……」

ああ、ほら、そんなに嫌いって言われてショックな顔するなら、僕の事なんてもう放って置けばいいのに。二兎追う者は一兎をも得ず、ですよ。

しかし、僕のせいで二人の仲が悪くなってしまうたら責任を感じてしまいます。むむむ、どう乗り切るべきか……

「ただいまー。おう、ワピコ来てたのか」

おお、飛んで火にいるビーさんが帰って来ました。

「ポコ君…ミフィちゃん…」

僕はスツ、と立ち上がり、ビーさんの元へ歩み寄ります。そして、獣臭いのを我慢して、彼の胸に手を置き寄り添いました。

「僕…ビーさんが好きなの…ごめんね…？」

皆の時間が止まりました。僕は気にせずビーさんの手を引いて言います。

「ねえ、ビーさあん。この前、夜景の綺麗なレストランでエフルコーズ食べた後にい、ホテルの最上階でえ一緒にモーニングコーヒー飲もつって言ったじゃないですかあ。今日こそ約束守ってくださいねえ？」

くねくねしながら甘い声を出しました。まだ頭がついて行かない三人ですが、それを無視してビーさんをぐいぐい引っ張りながら外へと脱出しました。

ふう。とんだ恐怖の館でしたね。

「ああああの、ワワワピコ…さ、さっきの話なんだが、お前がまさかそんな気持ちでいるなんて思わなくて、その、なんだ、俺達は歳も離れてだな、でも、お前が本気だって言うなら、俺も真剣に考えモルスア！」

本気で真剣に受け止めて暴走しているビーさんをバックドロップで止めました。

「やだな、ビーさん。さっきのはほんのアメリカンジョークですよ」

「え…？は…？あめりかん…？」

「冗談だって事です。ポコ君とミフィちゃんが喧嘩みたいになってましてね。それを止める為に言っただけです」

まだちょっと混乱しているビーさんを横目に僕はため息をついてボソツと言います。

「まったく…さつさと、ちゃんとくっついてくれればいいの」…」

「は…？誰と誰がだ？」

おう、小声で言ったつもりなのですが、さすが獣の耳はいいですね。

「ポコ君とミフィちゃんですよ」

「いや、アイツらに限って、そんな事は絶対にあり得ない」

「あり得ない事は無いでしょう？ポコ君のミフィちゃんを見る目は特別なものを見る目です。なんかこう、大切なものを慈しむような？」

「そりゃ、ポコにとつたらミフィは『娘』みたいなもんだからな」

娘……？妹ですらなくて娘？何故に……？

「ミフィはな、ブーリフ教団の支部の地下に監禁されててな、見つけた時はそりゃあ酷い有り様だったんだよ。全身傷だらけでな、飯も口々に食わせて貰ってなかったみたいで今よりももつとガリガリだよ。言葉は理解できるんだけど、酷い事されすぎたせいかな声が出せなくなってるな。まるで初めてポコに会った時みたいだったよ」

ふんふん、つまり、ポコ君は昔の自分と重ねてしまって、ミフィちゃんに優しくしていると？

「髪が黒かったからな、どこに預けるべきか対処に困ってたんだが……。ありや魔術技大会の時だったかな？フラツとどっか行ってフラツと帰って来たと思ったら、いきなり『おれが育てる』とか言い出したんだ」

育てる……一歳しか変わらない子を育てるといふ発想は、さすがポコ君としか言いようがありません。しかし、魔術技大会の時ですか……もしかして、僕に破廉恥な事を働いた時の事でしょうか？ちよつとおセンチな感じでしたもんね。

「まあ、実際引き取るのは俺になるんだけどさ、アイツ『俺はワピコがいたから生まれてきて良かったと思えた。ワピコを通して見たこの世界は、色鮮やかで、美しくて、素晴らしい世界だった。この世界は、酷く醜いものばかりじゃないと知った。俺はミフィにも、その事を知って貰いたい』なんて言うもんだからよ。そんな事言われたら反対なんてできないだろ？……あれ？お前、泣いてんのか？」

ポコ君は、世界を恨んでいない。僕の願いは届いていた。

だけど、僕はポコ君にそんな風に想っていて貰える資格なんて無

い。結局、ポコ君に苦しい思いをさせて、拳げ句の果てに見殺しにしようとしているのだから。

「クソおやじいいい！！！」

遠くから近づいて来るポコ君の声が聞こえて、すぐそこまで来たと思ったら、僕の目線に合わせて心配してくれていたビーさんの顔が、潰れました。

飛んで来たポコ君の足。

横つ面にポコ君の足をめり込ませながら潰れいくビーさんの顔。

鼻血やら鼻水やら色んな汁を飛び散らせながら遠ざかって行くビーさん。

スローモーションに感じたそれらをすぐ目の前で見てしまい、軽くトラウマになりそうです。

「クソ親父！何ワピコ泣かせてんだ！？ワピコが幸せならいいと思っただが、幸せどころか泣かせるクソ野郎になんか渡せるか！！ブツ殺す！！親父を殺して俺も死ぬ！！！」

え？ええ？それなんてヤンデレ？

「ま、待てポコ！なんでお前まで死ぬんだ！？」

「うるせえ！ワピコのいない世界なんて生きてても仕方ない！俺も死ぬから親父も死ぬえええ！！！」

ヤバいです！ポコ君、目が本気と書いてマジです！

ああ！いきなりノルンを召喚して、ビーさんの時間を止めて動けなくさせました！

うわわわわ。フルボッコです。ヤバいです。ビーさん本気で死んじやいます。

あつああー！ビーさんが！ビーさんの顔が！？ああー！これ以上はダメです！モザイクがかかってしまいます！

「や、やめてー！！ポコ君！さっきのは嘘だから！ビーさんを好きって言うのはお茶目な冗談だったんですー！！！」

「……………本当か…？」

僕が泣き叫びながらポコ君を止めようと腰に抱きついたら、ピタッ、と止まりました。

自分の養父の血で手を染めたポコ君を見て、僕は青ざめながら何度も頷きました。

「俺の側を…離れないか…？」

切なげな表情だけでも、血飛沫が付いた顔を見て、また何度も何度も頷きます。

「良かった…ワピコが俺の側からいなくなるかと思って…怖かった…」

悲惨な形になったビーさんの横で、泣きそうな顔をしたポコ君に抱き締められました。

そうしてその日は、僕はトラウマを作り、ポコ君と仲直り（？）をして終わったのでした。

……これから、あまりポコ君に刺激を与えないようにしようと思
った夜でした。

47ブレイ目『世の中うまくいきません』

「え…パイス君、帰国しちゃうんですか…？」

「恐怖の館からの生還の翌日。淋しそうなパイス君から帰国の報告を受けました。」

「ああ、僕の国は信仰している夜の神と邪悪な闇とをブリーフ教団のせいで混合している国民が多くてね…優雅に遊んでいられる状況じゃなくなってしまったんだ…」

パイス君の国は優秀な科学者が多く、うちの国でもよく見られるどこでもドアもパイス君の国の特産品です。

……きつと、世界中のどの国よりも、厄災に見舞われてしまうでしょう。」

「…パイス君。どんなものよりも、命が一番の宝です。信念を貫いて死ぬよりも、惨めに逃げても生きる事を選んで下さいね…？」

「ワピコ…」

遠くから見ている事しかできない僕が言つのも烏滸がましい事だけれども、どうか、死なないで欲しい。

「パイス君…国が落ち着いたらまた帰って来てね？」

「そうだ、パイス。僕達はいつまでも待っているからな」

一緒にいたミズホちゃんとペコちゃんも心配しています。

「皆…ありがとう…ワピコ…僕は、君を忘れない。きっと、いつか必ず君を迎えに来る」

おお、パイヌ君、感極まって抱きつくのはいいですが、まるで僕がパイヌ君の気持ちを受け入れた風になっているじゃありませんか。ぺちっ。

そんなパイヌ君の頭を、アッチ行け、とばかりにぺちっぺちっ叩く白い手。

「ワピコ…さつきから気になっていたんだが、ソレは何なんだい…？」

パイヌ君は僕の背中にこびりついているお人形さんを見て、青い顔をしています。

「この子は、ポコ君の『娘』です」

「え！兄さんの！？」

「やだ！ポコ君隠し子発覚！？」

「い、いや、でも、どう見たって年齢可笑しいよね！？」

おっと、いけない。娘、の後に、のようなもの、と付けるのをすっかり忘れていました。

「なんだ？俺に娘がいるのは可笑しいか？」

どこからともなく現れたポコ君が、勘違いを増長させる事を言いました。

「に、に、に、兄さん！だ、誰の子なの！？どこの馬の骨が兄さんをたぶらかしたんだー！？」

「えっワピコちゃんじゃないの？」

「うふふ、嫌だなあ、ミズホちゃん。いくら僕でも一歳の時に子供は産めませんよ。ポコ君が自分のお腹を痛めて産んだんじゃないですか？」

「ああ…ポコならありえるな…」

暴走するブラコンペコちゃんを横目に、ミズホちゃんとパイス君相手に言いたい放題言いました。ポコ君はペコちゃんに胸元を掴まれ、無表情でがくんがくんされています。

一通り騒いでペコちゃんの興奮も収まった後、ポコ君がパイス君に言いました。

「パイス殿下。そろそろ行きましょうか」

どうやらポコ君は“タキシード能面”として、パイス君を国まで護衛するようです。頷くパイス君を見て、そのまま行くのかと思いきや、くるとこちらを向いて僕の背中にいるミフィちゃんの頭を撫でました。

「ミフィ…すぐ帰って来るからな…いい子にしてるんだぞ…？」

嬉しそうに頷くミフィちゃんを見て、とても優しげに微笑むポコ君。僕の胸は昨日から不思議と痛みません。今日は更年期障害の症状はマシなようです。

「ポコ君、気をつけて。帰って来たらすぐに身体の様子を見せに来て下さいね？」

どれ程の力を使えば、どれ程のペースで身体が壊れて行くのか。二ヶ月前から一度も身体の具合を診ていないので把握できていません。時が来るまではどんなに傷ついても絶対に死ぬ事は無いポコ君だけでも、それでも苦しいのには変わり無いので、できるだけ体調を良くしてあげたいのです。

「あ、ああ…そ、そうだな…まだ、ご両親に挨拶もしてないしな…」

何故か照れてれているポコ君。

「俺達は永遠に離れないと誓ったんだしな…挨拶して、それから式の日取りも決めて…」

どうやら彼の脳内では、昨日のやりとりで僕達の婚約が成立しているようです。僕がトラウマを作ったあの惨劇現場で、ポコ君の目には一体どんなロマンチックな景色が見えていたと言うのでしょうか。

いまだブツブツ言っているポコ君と、オロオロしているパイヌ君を置いて、お昼ご飯を食べに行く事にしました。

「……なあ、ワピコ…その…兄さんと…」

「ポコ君？挨拶とか、式とか何の事でしょうね？また美少女戦士の話でしょうか？ふふふ」

「そんなとぼけてても、意外と満更でもなさそうな感じじゃない？」

しー…ん。

ミズホちゃん…なんか、今日は、トゲトゲしてますね…？

「やっとポコ君が離れたと思ったのに、結局ワピコちゃんはポコ君が好きなんだね」

「え…？いや、あの、その、僕はただ、ポコ君の傷の治療をしてあげよう…」

ミズホちゃんには養殖がきかないので、オロオロするしかありません。まるで浮気現場がばれて言い訳している男のようです。

「そ…うか…やっぱり、ワピコは兄さんの事が…」

ああ、ペコちゃんまでそんな事涙目で言っちゃって。何このプチ修羅場？リアル恋愛経験値0の僕にとってはハードルが高い状況です。

「いや、さっきのは本当にポコ君の勘ちが「ワピコは私のだから…」」

誠意をもって誤解を解こうとしたら、ミフィちゃんに遮られてしまいました。

「そ…うか…兄さんと結婚するなら、ミフィの母親になるんだもん…」

「ふーん？良かったね。お幸せに」

「こ、この涙は兄さんを取られて悔しいだけだからな！お前の事が好きだったからじゃないんだからな！」

ミズホちゃんは冷たい目で僕を一瞥して去って行き、ペコちゃんは泣きながら去って行ってしまいました。

……なんだろう。ミフィちゃんは、ポコ君が遣わしたフラグクラッシュャーでしょうか。本当にポコ君が産んだんじゃないかと思えて

きます。

ああ、ミフィちゃんやめて下さい、僕の首をはむはむしないで下さい。

二人が去って行ってしまったので、ミフィちゃんと二人だけで中庭でお弁当を食べる事になりました。

僕がしょぼりしながら、背中にこびりつけているミフィちゃんに餌付けしていると、僕が一人（ぶらす一匹）でいる事は珍しいので女子達がこぞって寄ってきます。

きゃあきゃあ小鳥が囀るように嬉しげにしている彼女達を見ていると癒されますねえ。

しかし、そんな僕の癒しの時間はそう長くは続きませんでした。

「ワピコーー！」

どーん！と背後からKYメラ君が抱きついてきました。

この際、癒しの時間がどうか、衝撃で落としてしまったタコさんウインナーがどうかとは置いてあげましょう。しかし。

メラ君が抱きついた事により潰れてしまったミフィちゃんから出るホラーじみた殺気をどうしてくれるのか。今日は夜中に一人でトイレに行けそうもありません。

「ん？ああ、何だお前ミフィだっけ？ちっこいから見えなかったよ！ごめんごめん！それよりさ〜」

お嬢さん方が逃げ出してしまう程の殺気を「それよりさ〜」で流してしまつメラ君は勇者なのか、それともただのKYなのか。

「オレ、『救護隊』に参加しようと思うんだけど、ワピコも一緒に行くこつぜ〜！！！」

「え…？なんですか、それ？」

「え？知らねえの？正面玄関の所にドーンと貼り出されてんじゃん！」

「なんだか嫌な予感がしたので、お昼ご飯もそこそこにして正面玄関に急いで向かいました。」

「そこには大きな貼り紙。学院の生徒の有志による『救護隊員』の募集の貼り紙がありました。」

「これは、困りました。討伐が無理なら、せめて避難させてあげようと思う気持ちは理解できますが、危険な場所に赴く事には変わりありません。無駄に正義感の強いメラ君なんかが行ってしまった日には、突っ走って魔物を倒そうとしたり、誰かを庇って重傷を負ってしまいそうです。」

「……メラ君。僕はちよつと学院長室に行ってきます。ミフィちゃんをお願ひしますね」

「え…？あ…う、うわぁ！や、やめろー！！！」

「ベリツとミフィちゃんをはがして、メラ君に渡しました。何やら断末魔が聞こえた気がしましたが、僕は聞こえないフリをして学院長室に向かいます。」

「トントン、と扉を叩くと、「どうぞ」と学院長の声が聞こえました。中へ入ると、学院長が背を向けて外の景色を眺めています。」

「ワピコさんね…来ると思っていたわ」

学院長はこちらに向きもせず、呟くように言いました。

「学院長…『救護隊』は…どういったお考えですか？」

「…私には神の真意など分からない…聞かされたとしても、理解できないでしょう。いいえ、理解などしたくないの。でも……」

そう言つて、振り向いた彼女の瞳には、揺るがない決意が宿っています。

「どんな事しても、魔物を、闇を、倒す事ができないと言つのなら。せめて、それから逃げる人々を守りたいのよ」

その逃げる人々の中に排除対象がいたならば、その想いは結局無駄になってしまうでしょう。けれど、それまで言つてしまえば、それこそ彼女は絶望に囚われて抜け出せなくなってしまいかもしれません。

「……僕には、貴女の行動を制限する資格はありません。ただ、一つ覚えておいて欲しい事があります。僕は、何もしません。どれだけ沢山の人間がいなくなろうと、僕は、僕の周りの人間しか守りません。ですので、僕に助けを求めても無駄だという事を覚えておいて下さい」

「分かつたわ……神は…無慈悲ね……」

僕は神様じゃありません。神様じゃないからこそ、抗えない世界の理ことわりがあると知ってしまったからこそ、周りの人間しか守る事ができないのです。

例えばどんな言葉で罵られようと、僕は心揺さぶられる場所に身を

置けません。

傍観者である為に。力を失わない為に

最後のその時に、ポコ君が生き残れる可能性を少しでも高くする為に。

そして、僕の反対する言葉も虚しく、五大貴族のあの子達、それに生徒会からもローズ先輩とナデシコ先輩が救護隊に参加してしまいました。

二週間の訓練の後、国内の妖精族が住む森が襲われたとの情報が入り、救護隊は出発する事になりました。

「ジャック。あの子達と先輩達が死にそうになったりしたら、問答無用で連れ帰って来て下さい」

「にやっ（あのガキ共だけでいいの？）」

無言で頷く僕を見て、ジャックは夜の闇に溶けて行きました。

魔方陣もなく転移魔法が使えるのは優秀な中でも才能のある人だけ。複数人を一度に転移できるのは天才。それが一桁でなく、二桁三桁にまでなったら、それは神の御業。

心を揺さぶられてはいけない。力を奪われてはいけない。

『人間』として、できる事だけをしなければいけない。

だから、あの子達だけでいい。

そして、救護隊は出発して行ったのでした。

48 プレイ目『愛しき子よ、一時の安らぎの中眠れ』

救護隊が出発して、二日後。総勢百十二名いた隊員は、七十六名になって帰って来ました。

学院の校庭に、丁重に並べられた遺体を取り囲む親族の方や友人の方達の哀しみの声が響きます。

「なあ、ワピコ。これを見てなあ、お前は参加しないと云うのか？」

剣を扱う事においては天才的であるはずのローズ先輩が、身体中傷だらけにさせて言いました。

「ローズ先輩、言ったはずです。僕には為すべき事があり、それを為すためには動けないと」

「それは…私達には言えない理由なのか…？」

僕は沈黙で返します。

「私達は…私は！それ程頼りないか！？頼りない私には、お前の心を知る事すら許されないのか！？」

「ローズさん、落ち着いて！ワピコさんだって言えなくてきつと辛いよ！？」

激昂するローズ先輩を、ナデシコ先輩が抑えてくれました。

「……すみません…ただ、僕の気持ちを汲んで頂けるなら、できる

だけ、魔物からは逃げて下さい」

「そんな事ができるものか！目の前で消えていく命を見殺しにして！誇りを捨ててまで！逃げられるものか！！」

とても気高いローズ先輩ならそう言うと思いました。それでも、僕は逃げて欲しい。ローズ先輩が立ち向かおうとしているソレは、抗えない力なのだから。

でも、そんな事は言えなくて。僕はまだ叫んでいるローズ先輩に背を向けて立ち去りました。

救護に向かった森で、逃げて来た妖精族の中に、不幸にも知識者がいたようです。

逃げて、逃げて、追って来る魔物達。知識者を守ろうとする妖精族。それを守ろうとする救護隊。倒すどころか追い払おうとしても無駄な事で、魔物に完全に囲まれた時に魔法師団が助けに来てくれたそうです。

しかし、その時にはもう救護隊から何人もの犠牲者が出た後でした。そして、救護隊と魔法師団が奮戦する中、ついに知識者は魔物の餌食になります。それから急に、執拗に追って来ていた魔物達は嘘のように逃げて行き、近くの町で応急手当をした後、帰って来たようです。

五大貴族のあの子達も無事帰還したものの、皆心身共に憔悴しきっていて、今は自宅で療養中です。

皆を家に送り届けた時のお家の方達の様子からして、もう救護隊に参加させて貰えないだろうと予想して、それだけが僕の心を軽くさせました。

「ただいまー」

「あら、お帰りワピコ。お友達がいらっしゃったから、あなたのお部屋で待っていて貰ってるわよ？」

お母さんの言葉に首を傾げました。僕の家まで来るようなお友達は皆お家で療養中です。不思議に思いながら部屋に入りました。

そこには、僕のベッドで眠りこけているポコ君の姿。

ジャックが不機嫌に猫ぱんちを繰り返していますが、ビクともせずに眠りこけています。

よく見ると、能面は付けていませんがタキシード姿です。お仕事が終わってすぐにここに来たのでしょうか。

熟睡する程疲れているのに、そうまでして僕に会いたかったのか、と呆れる気持ちの他に、無防備に眠るその寝顔に何故か、心にじんわりとした温かいものが広がりました。

僕の心に広がる不思議な感情。この感情の名前を僕は知らない。知る気も無い。

でも…安心しきっているポコ君の寝顔を、もう少しだけ…眺めていたい、と思ってしまうました。

「ワピコ…？」

ポコ君がうつすらと瞳を開け、彼の頬に触れた僕の手を握りました。

あれ？なんだろうこの手。僕、何をしようとしてたんだろう？ああ、そうだ、ポコ君の身体を診ようとしてるんです。きつと、そうに違いありません。

「ポコ君、少し大人しくして下さいね？」

ポコ君は何故かポツと頬を赤らめ、何かを期待した様子で瞳を閉じています。それを見なかつた事にして、僕は彼の身体の中を確認しました。

「……ポコ君、一体どれだけ暴れ回っていたんです？」

僕は苦笑いをするしかありませんでした。ポコ君の身体は、前よりも幾分かはマシだったのですが、それでも、本当は身体を起こす事すら苦痛な程、ボロボロになっていたのです。

「また…二日程眠っていて貰わないといけません、大丈夫ですか？」

「もう少し…早くできないか？」

むむ、ポコ君が反抗期です。僕がこんな懇願するような目付きで言ってるのに、不満そうな顔をしています。

「どうしてですか？身体…とても辛いでしょう？どうして…そこまで頑張るんです？」

本当は、その時が来るまでじっとして欲しい。今、ポコ君が頑張ったとしても、その時が来るのが伸びるだけで、最終的に訪れる結末は変わらないのですから。

いつその事言ってしまうのか。言ってしまったら彼はどうするでしょう？人柱のような役割を与えられたと知ったら…彼はどうなつて…そして、知った彼を見て、僕はどうするのでしょうか。

「俺は正直、他の人間なんてどうだっていいんだ」

それなら尚の事、どうしてポコ君は闇と戦いに行くのでしょうか？

「俺は、この世界を…ワピコと出逢わせてくれた、この世界を、できるだけ壊したくない」

そう言って、僕の手を頬にすり寄せました。

また、僕ですか。どれだけポコ君の世界は僕中心に回っているのでしょうか。ああ、でも、そういう事ならば、きっとポコ君は何を言っても聞いてくれないのでしょうかね。

抗えない力があるなんて彼には知った事ではなくて、ただ、僕という信念の為に動くのですね。

全ては僕の為に…しかし、そこには僕の意志が無いとも気づかずに。

「いいでしょう。ポコ君がその気なら、僕にも考えがあります」

眉をしかめたポコ君を横目に、僕は白銀の錫杖を召喚しました。

「愛しき子よ、我が胎内で一時の癒しの眠りを」

錫杖から溢れた光がポコ君を閉じ込めました。繭状になったその中で、ポコ君は少し暴れてみせたものの、神様の力に勝てるはずもなく、深い眠りにつきました。

ふふふ、最初からこうすれば良かったのです。最後のその時が来るまでは大人しくして置いて貰いましょうか、ポコ君。

これならば、苦しむポコ君の顔を見なくても済むし、最後のその時に万全の体調で挑めて、事が終わった瞬間に身体の限界を超えていてポツクリ、なんて可能性も低くなります。まさに一石二鳥。僕って頭いいです。

さて、ポコ君を恐怖の館に送り届けましょうか。

ポコ君を連れてご機嫌に彼の部屋へ転移しました。するとどうでしょう、着くと同時にずっしりと背中が重くなるではありませんか。

「ミフィちゃん、ずっとポコ君の部屋にいたんですか？」

無表情で首をふるふるするミフィちゃん。そうですね、ポコ君の娘ですものね。僕には理解不能な勘が働いたのでしょう。

「ポコ…どうしたの…？」

光の繭の中で眠っているポコ君を見て、ミフィちゃんが無表情を崩して不安そうな顔をして聞いてきました。

「大丈夫。疲れて眠っているだけです。目を覚ますまでゆっくり寝かせてあげて下さいね？」

頷きはするものの、不満そうな顔をするミフィちゃん。パパにかまって貰えなくて寂しいのでしょうか？

「…こんなまるまるしてたら、一緒に寝れない…」

そうですね、くつつくのはまず無理でしょう。

……何やらガン見されていますね。何かを期待しているような目をしています。

……
……

「……しばらく…一緒に寝ますか…？」

嬉しそうに頷くミフィちゃん。根負けしました。整った顔の子に、間近で無表情でガン見されると恐ろしいものがあります。

そして、今日は留守のビーさんに置き手紙をして、ミフィちゃんをこびりつかせながらお家に帰ったのでした。

「お母さん、しばらくうちでこの子を預かってもいいですか？」

「あらあら、お人形さんみたいに可愛い子ねえ。こんな子ならお母さんは大歓迎ですよ」

「おお！それじゃあ、親睦も兼ねて今日は久しぶりに皆で風呂でも入るとするか！」

お母さんに鞭でお仕置きされながら悦んでいるお父さんを無視して、二人だけでお風呂に向かいました。

うちのお風呂は無駄に広く、浴槽スペースだけでも十畳程あります。そんなお風呂は見た事が無かったのでしょうか。ミフィちゃんは嬉しそうに付けてけて寄って行きます。

「こら、ミフィちゃん。お風呂入る時はちゃんとお洋服脱ごうね？」

僕がそう言うと、脱がして、とばかり両手を広げました。むむ、甘えん坊さんですね。ポコ君にもこんな風に脱がせて貰っていたのでしょうか？

ちょっともやっとなりましたが、ポコ君はどうせ美少女戦士人形の服も脱がせて遊んでいるだろうと思い、気にしない事にしました。

人の服を脱がせるなんて始めての事なので、四苦八苦してやっと脱がせたと思っけてひと息ついた僕の目に、ミフィちゃんの肌が映ります。

生気を感じさせない程の白すぎる肌。その鎖骨の下から、お腹まで、そして背中を覆うように刻まれた、黒い刺青。

僕は思わず、息を飲んでしまいました。

この刺青、以前にも見た事があります。あの三つ編み男の身体にも、この、禍々しい黒い刺青があったのです。そう言えば、ミフィちゃんはブリーフ教団に捕まっていたと言っていましたね…その時にもやられたのでしょうか…

それにしても、あの三つ編み男の刺青：服が裂けた所からチラッとだけしか見えなかったのですが、確か闇を吸収しやすくする類のものだったはず……だけど、ミフィちゃんの刺青は少し違うようです。

ミフィちゃんに少し大人しくして貰って、注意深く古代語でできた黒い文字を読んでいきます。

背中には闇を招く、受け入れる、といった文字。

お腹には闇を孕む、そして、まだ小さい乳房の真ん中に

魔王、召喚の魔方陣…

これは、ミフィちゃんを『器』に、魔王を復活させる……ものです。

「ワピコ…?」

呆然としてしまった僕を心配したのでしょうか。ミフィちゃんが瞳を揺らがせています。

「これ…ポコにも見せた事ないんだよ…?ワピコだから…見せたの…」

「……ミフィ…ちゃん…それ、何の魔方陣か、知っていますか…？」
震えてしまいそうな声をどうにか堪えて、冷静を装って聞く僕に、
ミフィちゃんはふるふると首を横に振りました。

「でも…何だか、怖いものだって事は分かる…」

僕は「そっか…」とだけ呟いて、それからその文字を見なかった
かのように振る舞って、ミフィちゃんとお風呂に入りました。

深夜、すやすやと眠るミフィちゃんの寝顔を見て、無防備な寝顔
をしたポコ君を思い出しました。

特別な力を持った主人公。命を懸けて戦う主人公の前には幾つもの
苦難が待ち受けていて、その中にはヒロインが敵の手に落ちてしま
うという物語をもう幾つ見た事でしょうか。ミフィちゃんがもう
一度ブリーフ教団の手に落ちれば、きっと彼女は魔王になってしま
い、世界に未曾有の厄災をもたらした後に、ポコ君の手によって倒
されてしまうのでしょうか。

ミフィちゃんに向けられるポコ君の優しい眼差し。ポコ君に向け
られるミフィちゃんの親愛の眼差し。それが脳裏をよぎる度に、僕
の心は揺れ動いてしまいます。

ただ、目的を果たした後に闇を倒すのが役割だと言うのなら、何
故それまで穏やかに過ごさせてくれないのか。主人公には苦難が必
要なんだ、とか、そんなテンプレはいららないのです。

幼少期に酷い仕打ちを受けなければならぬ理由も無い。自分が
助け出して大切にしている少女が魔王にならなければならぬ理由
も無い。

どうして、ポコ君に辛い思いをさせるのですか？ねえ、どうしてですか、神様？

『私は何もしていませんよ』

淡々とした声が僕の頭の中に響きます。

『ただ役割を与えてその世界に送り出しただけ。虐待をしたのは親の利己的な意志。魔王となるべきその子と出会い、慈しんだのは彼の意志。人と人の縁、そして心までは私の知るところではありません』

神は…残酷ね……

学院長の言葉が脳裏に浮かびました。

残酷… そうなのかもしれませんね。けれど、それを責めるのは人のエゴ。神様は全世界を管理し、調和しなければいけないのです。

一人一人の縁や心まで管理してしまつたら、それこそただの神様のオモチャでしかありません。

与えられた心という自由の中で、心を持つが故に人の世が作り出した不条理を嘆く。それを、神様のせいだと責めるのは人のエゴ。

「……神様も大変ですね……」

『ぼちぼちでんなあ』

言葉の使いどころを間違っている神様に若干イラツとしつつ、僕はミフィちゃんを守るように抱きながら聞きました。

「この子は…絶対に魔王にならないといけないのですか？」

『いけない事は無いですが、その分混乱は長引きますよ?』

それでもいい。神様の力のせいでこの混乱を収める為の干渉は僕にはできないけれど。それでも、やっぱり僕は人間だから。エゴの塊だから、僕は僕の周りの人間が無事ならそれでいい。それだけでも守りたいんだ。

気持ち良さげに眠っているミフィちゃんを強くギュツとしたら、苦しかったのか嫌そうな顔をして手で押されました。

そんな様子に頬を緩めながら、今度は優しく抱き寄せて目を閉じます。

この子を必ず守ろうと、そう決意して。

49 プレイ目『闇に咲く花の歌声』

ポコ君を眠らせて三週間。世界中が混乱する中、いよいよ僕の住む王都も慌ただしくなってきました。

王都の中心に、聖なる獣の血をより濃く引く王族、ラビト王子が在る限りは、城の地下にある守護魔方阵が発動して魔物は寄りつかません。しかし、生身の人間であるブリーフ教団の人間達が最近頻繁に小規模のテロ行為を繰り返しています。混乱させて、その隙にでもラビト王子の命を奪うつもりなのでしょう。

そう、僕にいつも優しい気に微笑んでくれていたあのラビト王子が、ブリーフ教団に狙われているのです。

しかし、神様の目的は守護魔方阵、それに関する知識を持つ人間を失わせる事であって、まだ年若いラビト王子はまだ知識を得ていないので、彼は命を失う必要は無いのです。

という訳で、密かにラビト王子を遠くから見守っている僕ですが、そんな事情を知らない人達はいる訳で。

「なあ、頼むよワピコ！いい加減ポコを起こしてくれよ！」

「だが、断る」

最近王都の警備に、ブリーフ教団の調査に、王族や貴族達によるポココールの対応にげっそりしているビーさんに泣きつかれました。僕の足にすがり付いているものだから、背中にこびりついているミフィちゃんに蹴られています。

「だから、理由を言えと言っているだろう！？」

「何度も言っているでしょうペコちゃん？ポコ君の身体を治す為で

す

「そんな魔法は聞いた事が無いと僕だって何度も言っているはずで
す。もう三週間、何も食べる事も飲む事もせず、消耗こそすれ何故
回復なんてできるんです」

「それは、ポコ君がそういう体質だからですよヒュー君」

そんな理由で「ポコなら有り得るかも…」と口ごもらせてしまう
ポコ君の偉大さを痛感します。

今、ブリーフ教団のせいで学院は休校中で、暇な五大貴族の子達
が集まって揃いも揃って僕を責め立てています。家族の方に救護隊
に参加するのを固く禁じられてしまったストレスを発散しているの
もあるのかもしれませんが。

「大体、最近おかしいわよワピコ?」

「ハニーの言う通りだぜ!最近、アレはダメ、コレもダメ!理由を
聞いてもいつつもはぐらかしてさ!」

「ワピコちゃん。なんで私達に何も教えてくれないの?」

ミスホちゃんが「何か隠してるのはお見通しなのよ」とばかりに
詰め寄って来ました。そんな潤んだ目で見たって、早く言えよ!と
イラだっているのは分かっているのですよ。

「…………ごめんなさい…………どうしても言えないんです…………どうしても
言えって言うのなら、僕は首を吊るしかありません…………」

「えっ!?!ちよっ!?!?」

「ワピコーー！！」

「やめてー！もう聞かないからやめてー！」

悲壮感むんむんに漂わせながら、どこからともなく取り出した紐を自分の首に巻き付けてぐいぐい横に引っ張る僕を見て、皆が青ざめながら止めます。あつちよつ、ミフィちゃん、これは紐を引っ張る遊びじゃありませんよ。ご機嫌に引っ張ってたら僕ポックリ逝っちゃいます。

軽くお花畑が見えて来た頃にようやく皆に解放されて、どうにか話を終わらせる事ができました。

僕は実際に死んでも言うつもりはありませんよ。守りたいもの、守れないもの、葛藤をし、苦しむ必要は君達には無いのです。いっその事、この子達も眠らせてしまおうかな…と思いついた時、しーんとしてしまった僕達に気を使ったビーさんが頑張って口を開きました。

「そ、そう言やさ！今夜、城でやる『アイル』のリサイタルお前ら行くのか！？」

今までの流れを全く無視した話でビーさんは盛り上げようとしています。皆は世界の歌姫アイルが来ると言うのが嬉しかったようで、意外と盛り上がりました。僕ももう一度間近であのジヨニー心を掻き立てられる美女にお会いしたいのですが…

「残念ながら僕はお呼ばれされていないので行けません」

今回のリサイタルは、王族と一部上流貴族、そしてビーさんのような特権階級の人などしか呼ばれていないのです。

「それなら俺の連れとして行けばいいじゃねえか」

「ビーさん、ずりい！ワピコ！オレと行くっ！」

「黙りなさいメラ。ワピコは僕と行くのです」

「お前こそ黙れむっつり眼鏡。ワピコちゃん、私と一緒に行くよねー？」

「ワ、ワピコと一緒にいきたいって言うなら、僕が連れてってやってもいいぞー！」

「皆…ちよつと落ち着いて」

ハニーちゃん以外、興奮しています。ハニーちゃんはマーク先輩がいない時に限り常識人で助かります。

僕は結局、ミフィちゃんを背中に装着させておかないといけないので、彼女の養父であるビーさんのお供として行く事になりました。

一応高貴な方達が集まる場所なので、少しおめかしをしました。

膝から裾がヒラヒラと流れて後ろに長くなっていくラベンダー色のマーメイドドレスをチョイスしました。髪の毛は耳の後ろで一つに纏めて、くるくる巻いて垂らしています。うむ、僕立派な淑女です。

お城に入ると、庭園に案内されました。夜の庭園は可憐に咲き誇るお花達をメインに照らしていて、夜の闇の中お花が自ら光を放っているかのような光景は思わず見惚れてしまう美しさです。今はもう真冬だというのに温かくお花が咲き誇っているのは、お城を包む快適空調魔法のおかげ。この便利すぎる文明のせいで、今この世界は混乱に陥っているというのだから皮肉な話です。

「ワピコー！」

立食パーティー的になっていたので、料理をせつせと取ってはミフィちゃんに与えていると、王子様ーズがやって来ました。

「ワピコさん、今日は会えて嬉しいよ」

「今日はちゃんと俺の為にめかしこんで来たみたいだな」

オラオラ節をきかせるハクト君の横にいたら、ラビット王子様の紳士ぶりが際立ちますねえ。お妃様は現在妊娠中の為、ブーリフ教団の活動がマシな田舎へ避難されています。お妃様がいないせいか、僕を見つめるラビット王子様の熱視線が容赦ありません。初恋を忘れられないおセンチな気持ちは分かりますが、不倫はいけませんよ王子様。

王子様―ズが去った後、五大貴族の子達が集まって来て他愛ない話をしていたら、庭園を照らしていた照明が薄暗くなり、主役がお花からステージに立つ妖艶な美女へと移りました。

「皆様、こんばんは。今日はお集まり頂きありがとうございます。世界が闇に覆われようとしている中、私のささやかな歌で皆様の不安を少しでも取り除く事ができれば幸いです」

庭園のどんな花よりも匂い立つような色香を放つ歌姫。桃色の波打つ髪が揺れば思わず視線がいつてしまい、蠱惑的な瞳がこちらを向けば欲望を曝け出してしまいそうになります。

そんな歌姫に会場内の誰もが見惚れている中、僕の背中だけは違っていました。アイルさんが出てきてから、ミフィちゃんの様子がおかしいのです。小さく震えて、まるでアイルさんに怯えているよう。

ふと、ポコ君に初めて会った時の事を思い出しました。

僕の腕の中で微かに微笑んだポコ君。しかし、それはある人物が現れて恐怖の色へと変わりました。あの時もこんな風に怯えていなかった？誰が現れたから？何をされたから？

それは彼の父親。彼を、傷付けた人。

ポコ君と同じ理由なら、今、ミフィちゃんが怯えているのも、彼

女を傷付けた人が目の前にいるから？彼女を、傷付けた人は誰？

彼女が…彼女が、傷付けられた場所は、どこ？

「……あの人、嫌……」

消えてしまいそうな声を聞いた瞬間に、僕は出口へと走り出しました。

ここから離れなければ。あの人から、アイルから、ミフィちゃんを逃がさなければ。それだけが頭の中を占拠していて、周りの人間さえも目に入らず色んな人にぶつかってしまいました。それさえも気づかずにもうすぐ出口という所で、慣れないヒールが祟り躓いて身体が傾いてしまいます。転ぶ　そう思った時、懐かしく優しい腕が僕を支えてくれました。

「大丈夫？そんなに急いでどうしたんだい？」

真紅の瞳を優しく気に細めて微笑むラビト王子様。その優しい気な瞳に少し心が落ち着いた時、アイルの歌声が庭園に広がりました。

低音から、高音へと変わっていくその歌声は、闇の底から狂気が這い上がってくるようで、僕の肌をぞわりと粟立たせます。

この歌、何かおかしい。そう感じて原因を探る為脳を働かせようとする前に、僕の腕を掴んでいた優しい腕が、強く荒々しいものへと変わりました。

「ラビト殿下…？」

王子様の顔を覗きこむと、いつもの優しい瞳が狂気を孕んだものになっている事に気づきました。

「僕は…僕は…君が欲しい…ずっと…子供の頃から、ずっと、ずっ

とずっとずっと！！君が欲しかったんだ！！」

この歌……！？アイルの歌の旋律は、人の欲望を狂気へと変える呪詛だったのですね……

そう気づいた時にはもう庭園にいた人間全てが、アイルの歌声に狂ってしまった後でした。情欲に任せて女性に襲いかかる男。憎悪、金銭欲、出世欲で人を傷付ける人。美しい庭園に不釣合な醜い光景がこの場を支配します。

どうする？こんな大勢の前では大っぴらに神様の力は使えません。「人」の力では、一人ずつ解呪するしかありません。しかし、解呪しても歌を止めなければまた狂気に支配されてしまうでしょう。

まず、アイルを止めなくては。その為には、ラビト王子に離して貰わなければ。

「正気に、戻れ」

何て事は無い、声に神力を込めたただけの言葉でラビト王子の意識を取り戻させます。彼の瞳に自我の色が戻った事を確認すると、また狂ってしまう前にすかさず光の結界魔法で彼を覆いました。

「ワピコさん……？僕は一体……？それに……彼らはどうしてしまったんだ……！？」

庭園内の惨状を見て、ラビト王子は青ざめます。僕は事情を話そうと思つて口を開きかけた時、背中に感じていた重みが軽くなるのを感じました。

ふらりとミフィちゃんが僕の横に立ち、僕達の前に座り込んでいるラビト王子を虚ろな瞳で見つめています。

「『聖なる獣』……」

一瞬、頭がついていなくて。僕が手を伸ばした時には、既に彼女の瞳は闇で染められて、小さい口はラビト王子の首から出る血で濡れていました。

「ああ！あああああ！！」

「風の精霊よ纏え！！“風王の盾”！！！」

ラビト王子が傷口から広がっていく闇に苦痛の声を上げ、僕は咄嗟に彼を守ると同時に、彼の前に巻き起こった突風の風圧でミフィちゃんを弾き飛ばしてしまいます。十メートル程離れた場所へ背中から落ち、そこから更に地面を転がって、そして、花びらのように緩やかに落ちてきた腕に止められました。

気がつけば、いつの間にか狂気を運ぶ歌声はやみ、人々の怒号と悲鳴が、庭園を満たしています。

『聖なる獣』の血を啜り、その身から闇を産みつつあるミフィちゃんを抱き上げる女性、アイルが官能的な唇から溢れる甘い声を僕に向けました。

「この子を、あの忌々しい坊やから引き離してくれてありがとう、お嬢さん」

陶醉してしまうような甘い声は、僕にとって今はただ後悔と自分の浅はかさを知らしめる為の声でしかなく、闇に溶けて消えて行く彼女達を『人間』として止める術もなく。

狂気が渦巻く庭園の中、僕の頭の中はただ、ポコ君とミフィちゃんの微笑み合う姿だけが、浮かんでは消えていくのでした。

50プレイ目『誰にどんな風に思われようとも僕は…』(前書き)

注意

軽い残酷描写と性描写が入ります。

本当に軽めですが苦手な方はご注意ください。

50 プレイ目 『誰にどんな風に思われようとも僕は…』

ミフィちゃんが魔王にならなくても目的は果たせるのにどうして、だとか。

ポコ君がどうして大切にしていた子を自分の手で葬らないといけないのか、だとか。

人の世の不条理を、あまつさえ自分の失態を神のせいにするのは、人のエゴ。けれど、呪わずにいられない。誰かのせいにしないと、哀しみに押し潰されてしまいそうだから。

なんて、僕が言えた義理じゃない。今まで学院長を、ローズ先輩達を、五大貴族のあの子達のそんな気持ちを見捨ててきたのだから。だけど、この胸をもたげる痛みが苦しい。いや、ダメだ。苦しんではいけない。心を揺さぶってはいけない。哀しみに任せて『力』を奮ってはいけない。

ポコ君を守る術を失ってはいけない。

その為には、誰がいなくなるかと、誰が嘆き哀しもうと、心を揺さぶってはいけない。

それに対して誰にどんな言葉で罵られようと、蔑んだ目で見られようとも構わない。

それが例え、ポコ君から向けられるものだとしても。

僕は物語を読んでいるだけののように、淡々と物事を進めるだけ。

スツ、と頭が冷えていく音が聞こえた気がしました。

僕の目の前には、ミフィちゃんに噛まれた首から、闇が広がって苦しむラビット王子がいます。

「光の精霊よ、其の穢れなき唇で闇を払い清めよ“聖女の口付け”」

「人」が使う魔法の中でも最上級の浄化魔法を彼にかけました。それから狂った人間が彼に近づかないように土の障壁で隔離します。ラビト王子の安全を確保した後、人々の怒号や悲鳴、そして血の臭いが庭園を満たしつつある中、ビーさんを探します。彼は踏んずけられようともし、どんな魔法の余波を受けようともし、ビクともせず眠っていました。最近殆ど眠っていなかったようですから、睡眠欲が掻き立てられたのでしょうか。

「起きろ」

神力を込めた声でビーさんを起こします。彼は周りを見渡しますが、起きたばかりの頭では現状についていけないのでしょうか、ただ混乱しています。

「ビーさん、アイルはブリーフ教団の人間だったんです。彼女の歌は人を狂わせるもので、今この場には僕とラビト殿下とビーさんしか正気の人間はいません。ラビト殿下は闇に侵され僕が浄化魔法をかけましたが、完全回復には数日かかるでしょう。すぐに殿下を安全な場所へお連れして下さい。僕は五大貴族の子達を連れて行きま

す」
「あつ…！おい！この状況を収める為に協力してくれないのか！？」

今までもブリーフ教団関連の協力を断ってきた僕ですが、さすがに目の前の惨状を放っておけないと思っただけでしょう。ですが、

「僕には、関係ありません」

今、事を収めたとしても、どの道この場にいる知識者や技術者が

生きている限り、同じ事が繰り返されるのです。僕の返答に困惑しているビーさんを置いて、僕はあの子達を探しに行きました。

庭園には百人弱しかおらず、通常ならすぐに見つけ出せるはずなのに、狂ってしまった人達の加減のきかない大きな魔法が僕の視界を遮り、傷付き倒れている人や、そこかしこに飛び散っている血が足元を滑らせ、更には僕の美貌に情欲に駆られ襲い来る人のせいで思うように探せません。

ドゴーン！！

一際大きい音がして、そちらの方へ目をやると、ヒュー君とメラ君が争っている姿が見えました。

「ははははは！死になさいメラ！お前が死んで！皆死んで！この僕が主役になるのです！！」

「お前が魔王だったんだな！？世界を滅ぼすものはこのオレが許さねえ！お前を倒してオレは勇者になるんだー！！」

引きました。鉄の意志を持つと決意した直後ですが、ヒュー君そのネタまだ引きずっているのか、というのと、メラ君の成長の無さ具合に、別の意味で気持ち冷めるといっつか、なんといっつか。

魔法による轟音で遠くからでは声が届かない為、まずはヒュー君の背後から忍び寄り、大きな火魔法を連発してくるメラ君の攻撃を防ぐ為水の障壁を張って、神力を込めた声でヒュー君を正気に戻します。それが終わると、次は自分に結界を張りつつメラ君に駆け寄って正気に戻しました。

正気に戻った二人は庭園を見渡し、ビーさん同様混乱していましたが、僕が簡潔に説明をし、二人に即刻避難するように言っと、やはりと言っべきかメラ君は駄々をこねました。

「こんな状態なのに放って置いて、オレらだけ尻尾巻いて逃げれる

「かよー！」

「じゃあメラ君は、狂っている人達を正気に戻せる術を持っているんですか？」

攻撃系の魔法しか知らないメラ君は、僕のその言葉にくつと言葉を詰まらせます。

「メラ、今はワピコの言う通り逃げましょう。僕達がここでやれる事は何も無い」

眼鏡がひび割れていながらもヒュー君は冷静に言います。彼は自分ともう一人だけなら転移できるので、まだ愚図るメラ君を無理矢理引っ張り、転移して行きました。

それを見届けた後、花の陰に隠れて動くものが目に映りました。あれは確か今日ハニーちゃんが履いていた靴です。おそらく寝転がっている状態で、一定のリズムで前後に動くその足に嫌な予感を覚え、急いで駆け寄りました。

「は…あん、せんぱあ…い」

ダーリンとめくるめく大人の世界です。ねハニーちゃん。変なオッサンとかじゃなくて良かったです。しかし自重して欲しいものです。狂っている状態だから無理かと思いつつ、花に隠れて見えない状態で正気に戻してあげると、混乱状態のまま続けていました。

なんだか居たたまれないのと、隠れている状態なので誰にも見られていないのを確認して、そのまま二人をハニーちゃんのお家に転移してあげました。

後、二人。ミズホちゃんとペコちゃんはどこでしょう？ああ、ドレスのヒラヒラが邪魔です。どうして女性はこんな動きにくい服を

好むのでしょうか。

「ペコ！あなた母親に逆らう気！？」

聞きなれた名前を呼ぶ声が耳につき、誰かの魔法に当たらないように気をつけながらそちらの方へ向かいました。

「うるさいうるさい！兄さんを傷付けた罪を償え！！」

激昂するペコちゃんの手には、光魔法で作られた光の剣が持たれています。彼女の前には、見た事のある冷たい感じのする金髪美女、ペコちゃんの母親が腕に深い斬り傷を負って座りこんでいます。そして母親を庇うようにして壮年の男性がいました。ポコ君に似たキツめの瞳が、彼が父親だというのを分からせます。

「子供をどう扱おうと親の勝手だ！！」

まるで子供は親の所有物だと言う風に彼は言い捨てました。ポコ君と初めて会った夜に、彼に対して湧いた殺意が今は少しも湧き起こりません。彼のような元から狂った人間のせいで、心が乱される必要も価値も無いのです。

しかしペコちゃんにとっては、その言葉は酷く心を乱されるもので。瞳に宿る狂気がより強くなりました。

「うあ、あああああああ！！」

光の剣が輝きを増し、ペコちゃんはそれを躊躇いなく振り上げました。

「“正気に戻れ”！」

剣が振り下ろされたその瞬間に、僕はペコちゃんと彼女の両親の間に滑り込み、彼女の腕を掴んで叫びました。

狂気から、今の状況に対する焦りと後悔で顔色を青くさせるペコちゃん。

「あ……僕……こんな…傷付けるつもりなんて……」

「大丈夫よ、お母様達は気にしてないわ…」

正気を取り戻した母親は、腕の傷の痛みを押し殺している感じで、ペコちゃんを見つめる瞳は我が子を心から慈しみ察じている母親の瞳でした。けれどそんな母親の腕の傷を見た彼女は、小さく声を漏らして後退ります。

「ペコ……こつちへおいで」

父親も我が子を優しくあやすような声で、手を差し出しました。しかしペコちゃんは、その手に怯えたように肩を跳ねさせて、何も見たくないと言わんばかりに目をぎゅっと瞑って走り去ってしまいました。

「魂の盟約により我が声に応えいでよ、ジャック」

「にゃー、と猫の鳴き声が聞こえ、夜の闇から音もなく隻眼の黒猫が現れました。

「ジャック、ペコちゃんに危険が無いように見張っていて下さい」

ジャックはひと鳴きして、ペコちゃんの後を追って行きます。僕

は後ろでまだ呆然としているペコちゃんとポコ君の両親に向かって
言いました。

「あなた方がどうなろうと僕には関係ありませんが、命が惜しくば
早々にここから逃げる事ですね」

冷え切っている感情を隠す事もせず言い捨てて、僕は彼らに背
を向け、まだ残っているはずのミズホちゃんを探しに行きました。

もう庭園にいた人間は半分くらいにまで減っているでしょうか。
息絶えてしまった人達がぐちゃぐちゃになった庭園の地に倒れてい
ます。生で死体を見るのは初めてなのに、僕の心は心が乱れる事を
許さずに、ただそれらを通り過ぎるだけ。

……いない……もしかして、もう、ミズホちゃんは狂気の犠牲に
なってしまった後でしょうか。いや、まだ彼女らしき遺体は見えてい
ません。隠れられる場所で神様の力を使って探してみましよう。

庭園の奥に行き、更にアーチを越えた先の花園に入り込みました。
そこは迷路のような作りになっていて、人の目を遮るのには最適な
場所です。魔力を感知されないように擬似魔力を出すピアスを外し、
白銀の錫杖を喚び出そうとした時でした。

血に濡れた赤い手が、僕の首の後ろから伸びてきて、巻き付いて
きました。

「ワピコちゃん、見つけた」

耳元でクスクスと笑う声はミズホちゃんのものです。まだ滴る赤
い液が付いた手が、僕の白い肌を赤い跡を残しながらなぞってい
ます。

「ねえ、ワピコちゃん褒めて？私、お父様を越えたの」

「…それは、殺した、という事ですか？」

「あー、うん？そういう事になっちゃうかなあ？」

楽しいゲームに勝ったかのように嬉しそうに笑うミスホちゃん。
このまま正気に戻しても、自分がやってしまった行為にまた狂ってしまうかもしれない。眠らせた後で記憶を操作しようか。

「水の精霊よ、其の唇から広がる波紋で安らぎの眠りに誘え“水眠の囁き”」

「慈悲深き大いなる水の精霊よ、其の眷属を還せ“母なる水の聖域”」

魔法を発動させる為に喚んだ水の精霊が、ミスホちゃんが喚んだ大精霊に還っていつてしまいました。ミスホちゃんに水魔法は効きませんか…強敵に育ちましたね。さすが魔法技部で鍛えているだけあって咄嗟の判断力がいいです。

「ねえ、そんな事よりさ。イイ事…しよ？」

僕の正面に回ったミスホちゃんの瞳は情欲に満ちていて、その妖艶さに僕は思わず息を飲んでしまいました。鉄の意志を持つとうと決意した直後ですが、やはり健全な男子の性さがと言いますか。近付いてくるミスホちゃんの瑞々しい唇を避けなくて、つい、受け入れてしまいました。

重なった彼女の唇はとても柔らかくて、男の子とはまた違った、甘い味がします。唇を僅かに開いた時に舌が入り込み僕の舌に絡み付いてきて、その肉感的な感触に身体が疼いてきてしまいました。もう一度言い訳させて頂きますが、健全な男子ならこの状況に置か

れれば理性などあって無いようなものなのです。

彼女のなまめかしく動く手が、僕のラベンダー色のドレスのチャックに触れ、抵抗する気があるような無いような間に、ドレスが地面にぱさり、と落ちて、僕は下着だけの格好になってしまいました。恥ずかしいとか、こんな状況なのに、とか、そんな事を考える余裕もなくて、本能のままに貪り合うようにキスを続けてしまいます。ドレスだったのでブラジャーを付けておらず、そのままあらわになった僕の胸を、ミスホちゃんの手が触れた時。

ぬるっ

赤い液体の感触が僕を我に返させ、ミスホちゃんの腕を掴んで僕から遠ざけました。

さすがの僕でも、血に濡れた女の子とそういう行為をするエログロチックな事は遠慮したいです。

「なんで…？ねえ、なんでワピコちゃんは私の方を向いてくれないの！？」

叫ぶミスホちゃんの瞳は見開かれていて、狂気の色を強くさせています。

「……慈悲深き大いなる水の精霊よ…其の心を拒み、仇為す者を…」

マズいです、僕を殺す気です。自分のものにならないのだったら死んでしまえって感じですか？恐ろしいです。

ミスホちゃん以外誰もいないし、大丈夫だろうと判断して錫杖を喚び寄せました。そして、眠りに誘う力を行使しようと口を開きかけた時。

パンッ！

何かが破れる音がして、その後に耳元でピー！ピー！と鳴る警報音がしました。

51 プレイ目 『僕、家では裸族なんですよね』

耳元で鳴るのは、ペコちゃんの危機を報せる為の僕が作ったピアスです。

「ワピコ…コちゃん…？」

ミズホちゃんが正気に戻ってしまいました。僕が皆に配ったピアスは、寝ていても起きるようにだとか、どんな魔法にかかってもすぐに動けるようにだとか、色々な解除魔法を付けていたのです。正気に戻った彼女は、赤く染まった自分の手を見て呆然としています。しかし、今は彼女に気を取られている場合ではありません。

「ジャック」

僕が呼ぶと、夜の闇から静かに人型のジャックがよるめきながら現れました。様子がおかしい彼の瞳を覗き込んでみると、金色に輝く月のような瞳が、不吉なものを予感をさせる赤い月のように染まっています。

「ワピコ…早く、浄化…してくれ…！」

「其は清らかなる乙女の祈り」

穢されているのだと気づき、僕は錫杖を掲げ急いでジャックに浄化の力を使いました。錫杖から響く清らかな旋律の音の一粒がジャックに落ちて、苦痛に息を荒くしていた彼の息が徐々に整っていき、瞳はいつもの金色に戻りました。

「ジャック…？あなたがやられるなんて、一体何があつたのですか…？」

「すまねえ、ワピコ。城を出た所で『聖女教』の奴らにペコを攫われた」

「『聖女教』ですって？何故、今……それにジャック、君を穢すなんて…本当に『聖女教』だったんですか？」

「確かに以前聖女教を見張っていた時に見た事のある人間だった。でも、前はあんな闇の力は持っていなかったな。ただの弱い人間だった」

予想できるのは、聖女教を操ってブーリフ教団がペコちゃんを攫った…と考えるのが妥当でしょうが、何故ペコちゃんを攫う必要があるのか。

ふと、ミフィちゃんがラビト王子に向かって言った言葉を思い出しました。『聖なる獣』。王子という敬称ではなく、聖なる獣と言ってその血を啜ったミフィちゃん。何故、聖なる獣の血を求めたのか……もし、もしも、ミフィちゃんが『魔王』になる為に必要なものが『聖なるもの』を生け贄にする事だったとしたら？

そう、そうだ。ミフィちゃんは以前ペコちゃんを写真で見た事があると言っていました。いつから彼女はブーリフ教団に囚われていたのかは知りませんが、あの黒い刺青の肌への馴染み具合を考えたら数カ月程度では無い事が分かります。確実にペコちゃんが聖女と呼ばれ出す前から、ミフィちゃんはブーリフ教団に囚われていたのです。

それならばブーリフ教団に『聖女』の写真を見せられたという事。何の為に？決まっています。生け贄にする『聖女』の顔を確認させる為です。

しかし、ペコちゃんは元々女だったので、神の御業で女になった『聖女』なんかでは無いのです。つまり、万が一にもペコちゃん救出に間に合わなくても、『聖なるもの』では無い彼女は生け贄の役割を果たさない。生け贄を捧げなければ『魔王』が復活しないと言ふのなら……

まだ、ミフイちゃんを救い出せる……！！

勿論、だからと言ってペコちゃんを見捨てる訳ではありません。ペコちゃんに渡したピアスには発信器としての機能もあるので、ピアスから出る魔力を携帯に繋げさせて、現在位置を画面に表示させます。

「ここは、聖女教が本部として使っている建物ですね。ジャック、ミズホちゃんを送り届けてから彼女の精神安定につとめて下さい。僕はサツと行ってサツと連れ戻して来ますから」

「待って…私も行く」

いつの間にか水の魔法で血を洗い流してビショビショになっているミズホちゃんが言いました。血でまみれていた手を、どれ程の力で擦ったのでしょうか。血が出そうな程真っ赤になっています。

「ミズホちゃん……君は少しゆっくりしていた方がいいですよ」

「やってしまった事にウジウジ悩んだって仕方無いの。そんなどうしようもない事のせいで、友達を見殺しになんてできない。舐めないで」

ミズホちゃんの瞳には強い信念が宿っていました。けれど、僕の腕を掴む手は小刻みに震えていて、力を入れすぎて僕の腕も、彼女

の指先も赤くなつてしまつています。

ミズホちゃんがどんなに強かつたつて、父親を自分の手にかけてという事実は僕なんかが想像もつかない程、心に押し掛かるものは大きいはず。

「……君の強さは本物です。だけど、今ぐらいは弱くなつていたつていいんですよ？必ず僕がペコちゃんを連れ戻して来ますから」

僕の腕を掴む手の力が余計に強くなり、爪が喰い込んで僕の腕から血が滲み出しました。ミズホちゃんは僕を睨みながらも、その瞳からは大きな涙の粒が零れ落ちていきます。

「ずるい…ずるいよ、ワピコちゃんは…私の気持ちを受け入れる気も無いクセに、そんなに優しくしないでよ」

むむ、気持ちを落ち着けようとして優しく言ったのが逆効果になつてしまいました。女心は難しいですね。

「その話は、帰つて来てからまたゆっくり話しましょう？」

彼女の口が震えながら、また何かを言おうとしたその前に、僕は白銀の錫杖を彼女に向けました。

「我が歌は眠れる愛しい子の為に」

錫杖が震えて、眠りに誘う振動がミズホちゃんを包みます。全身の力が抜けて、彼女が崩れるように倒れそうになつたのを受け止め、ジャックに渡しました。

「ジャック。ミズホちゃんを頼みますね。後、ヒュー君とメラ君と

ハニーちゃんが動こうとしていたら止めて下さい」

「ああ、気をつけるよ……？」

僕を殺せるのは神様だけです。心配症な猫さんを安心させる為に微笑んでから、僕は聖女教本部へと転移しました。

王都のはずれにあるその建物は、四角い三階建てのポロポロの小ビルでした。木でできたヨレヨレの看板に手書きで『聖女教』と書かれており、コーティングしていなかったのでしょう、雨とかに字が流されておどろおどろしい文字になっています。ここまでみずばらしいと憐れになってきますね。

小さいガラスの扉を押して入ると、数人の人間が倒れていました。何があつたのでしょうか……？

倒れている人間の一人に近付いて記憶の中を覗いてみたら、能面が見えました。

……色々なものを解除する機能付きペコちゃん危機感知ピアス……
そういえばポコ君も付けていましたね……ああ、また自分で自分の首を締めてしまいました……

仕方ありません。これが終わったらまた眠って貰いましょう。

開き直って人が倒れている方を辿って行くと、突き当たりで壁に隠れて向こうを窺っている黄緑と赤い髪の二人組の背中が見えました。

ヒュー君とメラ君……ジャックが確認する前にここに来ちゃってたんですね。

「ヒュー君。メラ君」

「あ、ワピコ……」

「ワピ……ぶ……」

ヒュー君の眼鏡が盛大に割れて、メラ君の鼻からはおびただしい血が噴き出してきました。何でしょうその反応？人を見てその反応、失礼極まりませんね。しかし、僕をジロジロと見る目付きにはどことなく同じ人種の匂いを感じるというか、なんというか…

「お前ら……何、してるんだ……」

「あだだだだ！！」

「ゴ、誤解ですポコ！！」

どこからともなく現れた能面が、二人をアイアンクローで持ち上げました。んん、なんだかこの展開軽くデジャヴを感じますね？あれは、確かバレンタインの時メラ君と大人の階段を上ってしまいうだった時ですかね…でも、今は別に服ははだけていないし………あ……あ。

僕。パンツー丁じゃん。

僕の形の良いDカップが丸見えでした。いけないいけない、家は裸族な僕は服を着ていないのに慣れていて、ミズホちゃんに脱がされてから何の違和感もなくそのまま来てしまいました。

ふあさり、と背中から黒いものがかけられました。気づくと二人を沈め終わったポコ君がタキシードの上着をかけてくれて、ご丁寧

にボタンまでかけてくれています。能面を付けているのでどんな顔をしているのかは分かりませんが、能面の下から血が滝のように流れていて、ばふおばふおと能面を浮かす程の凄まじい勢いの息づかいが彼の興奮度を物語っています。

「ポコ君……！血が……！？どうしたの？どこか怪我したの……！？」

「あ、いや……大丈夫だから……」

顔を見られまいと必死に能面を押さえるポコ君。鼻血ですよね、分かります。あんまり興奮してるものだからついイジメたくなっちゃいました。

ああ、いけません。彼がいつも通りすぎたので気が緩んでしまいました。僕は彼に謝らないといけなかったのです。

「ポコ君、ごめんなさい…ミフィちゃんがブリーフ教団に連れて行かれてしまいました…」

ポコ君は何も言わず、僕の頭に手を置き、優しい手付きで撫でます。なんだかそれが、お前のせいじゃない、と言われているようで、僕の罪悪感を更に掻き立てます。僕の頭から手をどけたポコ君が背を向けて言いました。

「ペコは俺が助け出すから、ワピコはソイツらを連れて帰っている」

「それは、聞けません。ポコ君こそ家で大人しくして下さい」

振り返ったポコ君からはイラ立ちが感じられ、僕も引く気の無い彼にイラ立ちを感じます。分かっています。僕に危険な事はして欲しく無いんですよ？そんな事、僕だって同じなんですよ。

少し睨み合いが続いた後、僕はノビているヒュー君とメラ君を目を覚ましてもすぐに動けないように縄でぐるぐる巻きにして、それぞれの家に転移させました。

「ポコ君、こんな所で言い争っている場合ではありません。僕も我慢しますから、君も我慢して先を急ぎましょう」

ポコ君は返事もせず背を向けて歩き出しました。だけど、イラ立

ちながらも僕の歩調に合わせて歩くその背中を見て、ミフィちゃん
の事とか、初めて会った時の事とか、再開した時の事とか、ポコ君
が役割を果たす時の事とか、なんだか色々な思いが押し寄せてきて、
目に渗む液体のせいで視界が歪んだ時、神様の声が聞こえてきまし
た。

52 プレイ目 『そんなバナナ…』

『君は本当にポコ君の事になると混乱しやすいですね』

僕は混乱していませんよ神様。ちょっとおセンチになっちゃっただけです。それよりも何のご用ですか？今は忙しいので後にして欲しいのですが。

『私は言いましたよね？ポコ君の戦いについて行けば『力』を奪うと』

しかし神様、こつも言いました。僕の周辺の人間を守るくらいならば目を瞑ると。

『やれやれ、最近の若者はああ言えばこう言うのですから。この先には事を為すのに必要な人物がいるのですよ。その人物が時をかけて事を為すか、ミフィさんが魔王になるか、どちらかなのです。あなたが混乱してその人物を殺してしまったら、ミフィさんは必ず魔王にならなければいけませんよ？』

分かりました。僕はこの先で誰も傷付けないと約束しましょう。

『……いいでしょう。今回だけですよ』

うむ、神様は何も心配せずに泥船に乗ったつもりでノンビリして下さい。

『分かりました。いつも通りバナナをいただいております』

「ワピコ…？どうした？」

おっと、バナナ野郎に気を取られていたら階段から足を滑らせていました。ポコ君、ナイスキャッチです。腰に手を回して支えて貰っているという状態は乙女なら一度は経験したいときめきイベントですね。しかしタキシードの上しか羽織っていないので、少し乱れて乳房のてっぺんの日の丸がこんにちはしています。

能面をばふおばふお浮かさないで下さいポコ君。

「上、三階は全部見た。後はこの地下だけだ。気をつけるよ？」

ポコ君が何事も無かったかのように地下室に続く扉の前で言いました。人間には僕に傷一つつけれないので、空気を呼んで僕は神妙な顔で頷きました。そして、ポコくんが扉を開こうとノブに置いた手に力を入れ……たと思っただらうとこちらを向きました。ポコ君の手が僕の額に触れ、そこから透明の膜が僕を覆う感覚が広がります。

パシッ！

思わず手を叩き落としてしまいました。

「僕にはそんなもの必要ありません」

ポコ君は、『想像』の力を使って、僕に害のある魔力を全て無効にする結界を張ったのです。なんて事を。その力はポコ君の身体を壊していくというのに。

そんなもの無かったって、僕は神様の半分スペックなんです。ポコ君のような人外魔法以外なら無詠唱で張った結界で防げるし、万が一傷を負ってしまったって腕が落ちたくらいじゃすぐにくつつくし、毒や麻痺なんて効かないんです。そんな僕を自分の身を削ってまで

守る必要は無いんですよ。

そんな哀しそうな顔したってダメです。君は僕を守りたいんです。僕が、僕だつて君を守りたいんです。君の負担を減らす為に神様の言い分を無視してここにいると言つのに、僕が、なんで、君の負担にならなければいけないのか。

「ポコ君、今日は特殊属性絶対禁止令を出します。破った場合、絶交ですからね？」

「絶交…」と呟いた声は世界の終わりを嘆くような声です。よしよし、これなら大丈夫でしょう。

まだ「絶交…」と呟いているポコ君を置いて扉を開けます。それと同時に僕の顔をめがけて短剣が投げつけられてきました。僕はそれを難なく柄の部分を抑んで止め、投げってきた人間の背後に瞬時に回りこみ、ソイツが僕に気づく間もなく僕はソイツの頭を指で、ツン、と押ししました。するとソイツは崩れるように倒れてしまいました。急所を押したのです。死んでませんよ、軽い脳震盪です。これが北斗 拳の世界だったら、ひでぶーです。そうじゃなくて良かったですね三つ編み男。

おっと、僕を襲ってきたのは分かりやすい悪役の三つ編み男でしたか。神様が言っていた重要人物とはコイツの事でしょうか？

ひとまず三つ編み男は置いておいて、部屋を見渡します。ああえつらえ向きな真つ暗な部屋。全身黒づくめのポコ君は能面しか浮かび上がっておらず軽くホラーなのは置いておいて、これまたああえつらえ向きな蝋燭が周りに置かれている祭壇の前にペコちゃんが裸で寝かされていました。

ヒュー君やメラ君のようにジロジロ見てしまいそうになったのを、ペコちゃんの側に立つ美女の手に握られていたモノを見た時に我に返ります。

蝋燭のほのかな灯りにゆらゆらと照らされて、桃色の波打つ髪の毛が僕達に向かって微笑みかけます。

「ふふ、少し遅かったわね？」

妖艶に微笑む歌姫、アイルがその手に持つ黒い短剣を躊躇いなく、ペコちゃんの心臓めがけて振り下ろしました。

「ペコ！！」

ポコ君が力を使おうとしたのを一瞬の躊躇いの後にやめて、ペコちゃんの方へ走り出します。その少しの躊躇いが無ければ間に合うはずでした。ポコ君の伸ばした手は届く事なく、ペコちゃんに振り下ろされた短剣は、僕によって止められました。

ペコちゃんにグツサリいく展開を望んでた方ごめんなさい。だって僕、光より速く動けるものですから。

僕に腕を掴まれたアイルは苦々し気に顔を歪ませて、歌を歌い始めます。また変な呪詛付きの歌ですね。

「“ 黙れ ”」

声に神力を込めた言葉で黙らせました。パツと見、僕の霸氣的なものにビビって黙った感じがします。まあ今は僕を崇めそうもない敵さんと、なんだかんだで僕の人外能力を知っているポコ君しかないのです、錫杖を喚び寄せても神様から何も言われなと思います

アイルはまた苦々し気な顔をして、僕から距離を取りました。そこへポコ君が詠唱を始めます。

「光の精霊よ！其の光は罪人を裁く腕！“ 断罪の ”だめー！ー！ー！

「！！！」

僕の叫びにアイルもポコ君もビックリしている様子です。ごめんなさい、だって、三つ編み男かアイルかどっちが重要人物か分からないんです。そんな近距離で殺傷能力の高い魔法なんて放ってポツクリ逝っちゃったらどうしてくれるんですか。

「僕……誰かが傷つくところなんて見たくないんです……だって……おけらだって、ミジンコだって、みんなみんな生きています……みんな友達……そうでしょ？」

誤魔化そうと思ったたらよく分からなくなってきたので、フェロモンを過剰に出して微笑んでみました。よし、僕のフェロモン付き説得に二人共涙ぐんでいますね。

「さあ、ポコ君、ペコちゃんを連れて帰りましょう。アイル、ペコちゃんは元々女で『聖女』なんかじゃないので、もう狙わないで下さいね？」

ええ？そうなの？っていう顔をしたアイルを横目に、ポコ君からマントを剥ぎ取りペコちゃんを包んで抱き上げました。そして転移をしようとしたその時、背中にずしりと重みがかかります。この、懐かしい感触は……

「ミフィちゃん！」

良かった、ここにいたんですね。黒くて分かりませんでした。ペコちゃんも無事取り戻せて、ミフィちゃんも見つけられて大漁ですね。ポコ君も能面で表情は見えませんが、きつと安心している事でしょう。

「ミフィ！こっちに来い！」

いつの間にか復活した三つ編み男が偉そうに命令してきます。誰が渡すもんですか、あなたはチマチマと役割を果たしていればいいんです。

「さあ、ミフィちゃん、あんなおじさんは放っておいて、一緒に帰ろうね？」

「ワピコ…私…ワピコが欲しい…」

え？ミフィちゃん、まだアイルの歌の効果が続いてるんですか？よく見ればぞわぞわと闇を産み出していますね。先に浄化してしまいませんか…って、痛ーーーーー！！

「ミフィ！何をしてるんだ!？」

慌ててポコ君が僕からミフィちゃんを引き離してくれました。僕は、ラビト王子のように噛まれてしまった首を押さえながら自身に浄化の力を行使します。すぐに傷は塞がったのですが、それまでに出了血が僕の腕を伝って下に落ちていきます。

ぼたり。

床に届いたその瞬間、暗い部屋の中でも分かる程、とても暗い闇が地面からぞわりと湧き出しました。

その闇は気味の悪い音を立てながら、ゆっくりと円を作っていく、更に円の中で古代語で書かれた文字を浮かび上がらせませます。

え……？何、これ？闇が、魔方陣を作ってる？いや、魔方陣は元

々あつたけど、暗すぎて見えなかっただけ？それよりも、この魔法陣ヤバいです。生け贄に捧げた聖なるものの血を、ミフィちゃんの身体にある刺青へと繋げさせるものです。そして、それに反応した刺青は、ミフィちゃんを『魔王』へと変える。

「おお！魔王様が復活なされる！」

え？なんで復活するの？なんで魔法陣は反応したの？どこに聖なるものが？え？もしかしてペコちゃん本当に聖女だったんですか？いや、でも、ペコちゃんは無傷です。むしろこの場では僕以外無傷です。

え……？僕……？

神様の半分スペック〓神様のなもの〓神様って神聖〓聖なるもの……？

そんな……バナナ……

ショックのあまり自分でもイラツとくる事を言ってしまった。闇の中にあつてもなお暗く蠢く闇が魔法陣を完成させ、普通の人間ならば狂ってしまいそうなおぞましい音を立てて、闇が部屋を満たしました。

「其は清らかなる乙女の祈り！祈りは我が元へ、我は祈りを光へ！」

僕は白銀に輝く錫杖を掲げ叫びました。錫杖から溢れる浄化の光は部屋中を満たし、闇を溶かしていきます。しかし、その中でも消える気配の無いミフィちゃんを包む闇の塊。

ああ、間に合わなかった。もう、ミフィちゃんの身体の魔方陣は完成されてしまった後だ……

浄化の光の中でも消えない闇。こうなってしまうては、もう僕に

は元に戻してあげる事はできない。これ以上やってしまったてはミフィちゃんは完全に消滅してしまうでしょう。ごめんね……ミフィちゃん。

「ミフィ！」

「ポコ君行つては駄目です！もう……ミフィちゃんは、『魔王』になつたんです！！」

おぞましい闇を産み続けるミフィちゃんに駆け寄ろうとするポコ君の腕を掴んで僕は叫びました。まだ能面を付けているポコ君の表情はやつぱり分からないけれど、でも膝から崩れ落ちて力無くミフィちゃんを眺める様子は見ている僕の方がなんだかいたたまれなくて。

ペコちゃんを抱き上げたまま、呼んでも反応しないポコ君の腕を掴んで、僕はミフィちゃんの苦しむ声を聞こえないフリをして、三つ編み男とアイルの歓喜の音が響く聖女教本部を後にしました。

53 プレイ目『爆弾発言ですよ』

アイルのリサイタルが終わってから、聖女教に乗り込み、ペコちゃんを家に送り届けて自分の家に帰って来たのは、もう明け方でした。

まだ放心状態のまま動かないポコ君を僕のベッドに寝かせてあげると、虚ろな漆黒の瞳から、つう、と一筋の涙が零れ落ちて艶やかな黒髪を濡らします。僕はそれを拭い、そして彼の髪をとかすように撫でました。

結局、僕はポコ君を…ポコ君の心を守れなかった。生きてさえいてくれればいいと思っていたけど、心が死んでしまったら、結局生きていたとは言わないんじゃないだろうか。

ねえ、ポコ君。僕は君に一体何をしてあげらるかな？僕はもう、君が大切に使っていたミフィちゃんを助けてあげる事ができない。時が来るまで君が悲しまないように眠らせる事もできるけど、起きた途端にミフィちゃんを殺せ、だなんて言われてもできないよね？

君が望むのなら、僕はなんだつてするよ。この世界にいられなくなつて、新しい歪みができるのだとしても、僕が代わりにミフィちゃんを倒したつていい。ねえ、だからポコ君、生きて。今は哀しんでもいいから、乗り越えて。お願いだから心を殺さないで。

どれくらいの間、ポコ君の髪を撫で続けていたでしょうか。カーテンをひいていても部屋を薄明るくする程の陽射しの中、彼の口から掠れた声が漏れました。

「ワピコ……俺の事、好きか……？」

んん？人がおセンチになつていくというのに、ポコ君は結局ソツチ方面の事を考えているんですね。いつものようにサラリと躲しましようか。んー…でも、なんだかとぼけられる雰囲気ではありません

んね。

返事に困っていると、ポコ君が僕の腕を引っ張り、寝転ぶ自分の上にくるように僕を抱き締めました。

「お願いだから…好きと言ってくれ…！そしたら俺は、頑張れるから…！何だってできるから…！」

声は小さかったけど、悲痛な叫びのようなその掠れた声は、僕の脳に届いた後に、心を支配してしまいました。

好きだって…？そんな事、言える訳ないよ。だって、やっぱり僕の心は男で、可愛い女の子が大好きで、君を想う度に心が乱れてしまつのは、きつと子供の頃から抱いている君に対する罪悪感だとか、君があまりにも僕の事を慕うから独占欲が生まれたりとかしたただけなんだ。

ポコ君が好きだなんて…そんな事、認められないよ。

「ポコ君…頑張らなくていいよ。僕が全て終わらせてあげるから。その事で、また新しい問題ができるかもしれないけど…それでも、僕がミフィちゃんを楽にしてきてあげるから…だから、君はもう、頑張らなくていい」

「それで、お前は俺の前から…この世界からいなくなると言うのか？」

「…は？何を言って…いや、ポコ君は何を知っているんでしょ
うか？」

「何も知らないと思っていたのか？全部知ってるよ。ワピコが創世神と同じ力を持っている事も、俺の力が俺の身体を破壊する事も、

今この世界に起こっている混乱の理由も、時が来た時に俺がそれを終わらせる役割だって事も」

え？何で知って……？でも、だって、知っていたなら、どうしてポコ君は自分の身を削ってまで、ブーリフ教団と戦っていたんですか？まさか、本当に僕と出逢えた世界をできるだけ壊したくなかったからって理由ですか？それだけの為に？僕だけの為に……いや、僕のせいで……？

「ブーリフ教団の動きが活発になる前に、バナナを食べようと皮を剥いたら、バナナから創世神が現れて全て教えてくれた。正直、役目だとかそんな事どうでも良かった。俺はワピコさえいてくれれば良かったんだ」

あのバナナ野郎、本当に何してくれてるんですか。今度会ったら本気でバナナをケツに突っ込んでやりましょうか。

「でも、俺は必要以上に人が死なないように、この世界が必要以上に壊れないようにしたかった。そのせいで例え俺の身体が壊れようとも、俺はお前の心を守りたかったんだ」

「は……？え……？どうして、僕の心が出てくるんですか……？」

「お前は本当に鈍感だな。人の気持ちに対してじゃなく、自分の気持ちに対して」

失敬な！僕の心も身体もベスト・おぶ・敏感ですよ！
それなのにポコ君はそんな僕におかまいなしに、抱き締める手を緩めて、片手を僕の頬に当てて顔を覗きこんできます。

「知ってるか…？ワピコがどんな目で俺を見つめているか」

鼻と鼻がくっついてしまいそんな距離で、覗き込んでくる瞼の中の黒い太陽が揺らめき、それを見た瞬間、僕の心が焼きつくされてしまいそうでした。

「どんなって…普通…至って普通です…よ…」

何故か震えてくる声を振り絞って言いました。

黒い太陽の熱にやられて僕の身体も熱を持ち、彼の唇から漏れる吐息が僕の唇にかかります。僕の吐息も彼にかかっているのかと思うとなんだか恥ずかしくて、息を止めようとしても何故かドクドクと波打つ胸が苦しくて、逆に呼吸が荒くなってしまいました。

「そんな顔で言われても説得力がない」

手で頭をぐっと押され、ポコ君の唇が無理矢理僕の唇を塞ぎました。

「やめ……っ！んぐっ」

唇から逃れようとしたけれど、震えてうまく動かない身体では逃げられなくて、また僕とポコ君の唇が重なります。そして僕の身体をぐるんと反転させて、ポコ君が僕に覆いかぶさりました。態勢を変えてなお彼は僕の唇を貪るように吸い付きます。ヌメヌメとした感触が僕の口の中を這い、自分の唾液なのかポコ君の唾液なのか分からないものが唇からこぼれて僕の頬を濡らしました。

恥ずかしくて、でも気持ち良くて、何も考えられなくなった時に、やっとポコ君の唇から解放され、代わりに息苦しくなるほどに強く抱き締められました。

「俺を見るその目がたまらないんだよ！いつまでたっても俺に罪悪感を抱いてるような感じで、いつも俺の心配ばかりして、俺に何かあることにお前まで傷ついて！」

「考え…すぎだよ…僕はいつだって、自分の事しか考えていないんです…」

「嘘つけよ！水の都が壊滅した時からずっと黒猫を俺の近くにいさせてただろ！？」

そうですね、その何が悪いんですか？僕は心を乱されない為に行けるだけ距離をとりたかった。でも、それでもやっぱり心配で、ジャックに見張っていてもらったんですよ。心配で、心配で、たまらなかつたんですよ。

「なん…だよ…気づいていたんなら…：…僕が心配してるって分かってたんなら、なんで戦いに行ったりしたんだよ！？」

「お前の悲しんでる顔なんて見たくないからだよ！！」

何…？僕が一体、何に対して悲しんでいたと言っのでしょうか？

「無関心なフリしてても、俺じゃなくっても誰かが傷ついたり、どこかが破壊されたと聞けば辛そうな顔して！まるで自分一人が罪を全て背負ってるような顔して！お前のせいじゃないんだよ！」

僕はそんな顔していません。誰かが死んだり、街が破壊されたりするのは仕方無い事なのです。仕方無い事にどうして悲しまなければいけないのですか。

僕の胸の痛みは、全て更年期障害のせいです。今、僕の目から出ているのはただの汁です。

「お前がそんな顔するのが分かっていたから！俺はお前がブリーフ教団や、俺の身体に気づく事の無いようにしていたっていうのに！結局気づかれた挙げて寝らされて、ミフィを奪われて！それすらもお前は自分のせいにして！クソ！！」

ポコ君の腕が、僕をより強く抱き締めます。僕の肩に顔を埋めているポコ君がどんな顔をしているのかは分かりません。だけど、小さく震えて何かを食いしばっている様子は、泣いているのかな……と感じます。

「俺は情けないよ……！俺はお前のそんな顔が見たかったんじゃないんだ。俺は……俺は！お前の心を守りたかっただけなのに……！！結局守れなかった！お前に結局辛い思いをさせてしまった自分が情けないよ……！！」

「何……それ……？結局、ポコ君は、どんな怪我をしたって、どんなに身体の中が破壊されたって、僕の為に辛い思いしていたって事じゃないか……」

僕の中から不思議な汁がとめどなく溢れてきます。僕はポコ君の背中に回した手でぎゅっと服を掴んで、何故か震える唇を精一杯開いて叫びました。

「そんな事誰も望んでないんだよ！僕はポコ君に辛い思いなんてしてほしくない！それなのに……！それなのに、なんでそんな事するんだよ……！」

「お前の事が好きだからに決まってるだろ!？」

「僕だって好きなんだよ!!！」

あ…

僕の爆弾発言にポコ君は目を見開いて僕をガン見してきました。

「ぼ……ポコ君……今のは、なんていうか、ほら、売り言葉に、買言葉？的なの？やつで…あの、その、さっきのは、無しにし「嫌だ」ですよね」

本当に嬉しそうですね…ポコ君…僕は何やら色んな気持ちで胸イッパイで軽く死ねそうですね。

んん…？何故頬を赤らめつつ視線が下へ………ですよ、僕まだタキシードの上着しか羽織ってなかったんですもんね。君に抱き締められたりしたせいでボタンが外れて、僕のふるんとした胸がご開帳ですよ。

なんですか、その目付きは？好きだって言ったんだから、いいよな？って目付きをしてる気がしますね。

「ポコ君……さっきの話のつづ…んんっ!!！」

発情されています。人の話を聞かずにまたキスしてきました。

「ふ…っんん!？」

ポコ君のひんやりとした指先が、僕の胸をなぞってきました。思わずビクンビクンしてしまった僕を見て、ポコ君は調子に乗って唇

を顎へ、そして首筋へと落とし、ぺろっとなりました。

「ちょ……っ待って待ってポコ君！健全なお付き合いをしましょう
！」

「健全な男子として行動してるんだが」

ですよ、その気持ちは痛いほどよく分かります。そう言われて
しまっってはぐうの音も出ないじゃないですか。

ポコ君の舌がついにはその下まで落ちていき、ああ、もう僕お嬢
に行けない……と色々な事を諦めた時。

「ワピコー……！」

バーン！と扉が勢いよく開いて、赤いツンツンした髪の毛が目
映りました。

おお……勇者よ……

「メラ……覚悟はできてるだろうな……？」

「え？え？何してたんだ？え？」

邪魔されて絶好調に不機嫌なポコ君は異常なまでの殺気を放って
いるのに、KYメラ君はそれに気づかず僕とポコ君をニコニコと
見比べています。

憐れメラ君はポコ君の拳の餌食になり、僕はその隙に服を着てそ
そくさと家族の元へと避難したのです。

メラ君……君のその勇姿は忘れません……合掌。

54 プレイ目『実に不本意ではありませんが』

ミフィちゃんが『魔王』となつてしまつて一ヶ月。

『魔王』が現れた都市は全て一夜で壊滅し、女子供であろうと老人であろうと無差別に殺すという恐ろしい情報に世界中が恐怖と絶望に陥っています。

実際には、不幸にも破壊された建物などに巻き込まれてしまった人はいるものの、無差別には殺さずに知識者、技術者とその周辺しか殺していないらしく、命からがら生き延びた人は情報があまり流通しない田舎などに疎開している為、生存者の確認がうまく行っていないのです。

無差別に殺していない、というのがミフィちゃんは『魔王』になつていても、自我があるんじゃないだろうか、と思つてしまいます。世界中が混乱し、ほんのり切ない想像をしているそんな中……

「はいポコ君、あーん」

「もぐもぐ」

「僕の作ったバナナソースかけオムライス美味しい？」

「ウマイが、ワピコの方がもつとウマイ」

僕とポコ君はバカカップルをしていました。

誤解して頂きたく無いのは、僕は非常に不本意だと言う事です。

僕はポコ君に辛い思いをしてほしくない。ポコ君は僕に辛い思い

をしてほしくない。僕は、俺は、僕は、俺は……と目くそ鼻くその的な言い合いの結果……

ポコ君は最後に役割を果たす時までには戦いに行かない事と、特殊属性を使わない事を約束させる代わりに、イチヤイチャさせる……とポコ君が条件を出してきたのです。

おう、それならばやってやろうじゃないか、とヤケクソになった結果、バカップルと化してしまいました。

「お前ら…そんな事してないで少しは手伝ってくれよ…」

ポコ君の膝に座って僕が食べさせている現場を目撃した徹夜明けでげっそりしているビーさんが、泣きそうな顔をして言いました。

「俺の至福の時を邪魔するなら、親父でも許さんからな」

「ポコ〜！頼むよ〜！色んなところから避難民が流れて来てるんだからさ〜、せめて治安の為の見回りくらいはさ〜」

現在、各国の首都はことごとく壊滅状態に追いやられていて、正常に機能している大都市は僕達の住む王都だけです。

その為、各国の人間が逃げこんで来ているので、衣食住の問題とか、不安に駆られた人間達による犯罪行為だとかで、とつても慌ただしそうです。

「ワピコがいいって言うならいいぞ」

「え〜？ポコ君と一秒も離れたくないから、い〜や〜だ〜」

顔は笑って心で泣いてな僕に気づかずに、ポコ君は無表情ながらも満足げです。

この王都で、どこでブリーフ教団と鉢合つか分からないというのに、ポコ君をブラブラさせられません。全て終わったら手伝ってあげてもいいですが、過保護と言われようとなんと言われようと、駄目なものは駄目です！

げっそりヨボヨボと寝室へと去って行く背中がなんだかあまりにも可哀想だったので、十分で一時間の睡眠効果が得られる魔法をビィさんにかけてあげてから、また居間で待っていたポコ君の膝の上へと横乗りでライドオンしました。

ポコ君は僕が戻って来たというのに反応せずに、虚ろな目でテレビを見ています。

『ラジャ国の首都が魔王の手により壊滅してから一週間がたちました。依然として街には魔物が徘徊し、復旧の目処はたっており、また王族の安否も確認されていない状況で』

ラジャ国は、パイス君の母国です。王族の安否が分からないというのは、王子であるパイス君の安否が分からないと言う事です。

ポコ君はきつと、ミフィちゃんの事と、彼女が殺してしまったかもしれないパイス君の事に心を痛めているのでしょうか。

僕がポコ君の首に手を回し、頭を抱きよせてヨシヨシすると、あるうことが僕のDカップに思い切り顔を埋めてきました。そして流れるような手つきでブラジャーのホックを外し、服の中へと侵入してきます。

「ポコ君：僕、まだ心の準備が…お願い…待って…」

泣きそうな顔をしながら上目遣いで懇願しました。ポコ君は滅多に崩さない無表情を、身体がポロポロになっていた時よりも辛そうに歪めて、ブラジャーのホックをかけ直した後にご丁寧服の乱れ

も直してくれました。

ドンマイ！ポコ君！

それでもミニスカ（ポコ君指定）から覗く僕の美脚を、セクハラ親父のように撫で回しながら言います。

「俺の事好きか？」

ぐっ、と返事に詰まる僕に、ポコ君はとても不満そうなオーラを出します。

「親父の仕事でも手伝「ポコ君だーいすき！！」

くそー、一体一日に何回言わせれば気が済むんでしょうかこんなくしょうめ。

そんな事を思いながら僕も、きっとポコ君も、こんなバカみたいな事をして、心を誤魔化しているんでしょう。

「随分と…楽しそうだね…？」

おっと、不法侵入者です。五人の不法侵入者が僕達を冷ややかな視線で見えています。ハニーちゃん、君にだけはそんな目で見られるのは心外です。

「僕達は親の反対を押し切ってラジャ国へ救護隊として行く事になりました。ワピコ達はどうするんですか？」

ヒュー君が苛立ちを隠しきれず、眼鏡を激しくくいくいさせながらため息をつきました。メラ君でさえイライラしています。まあ、そうでしょうね。友達が生きてるのかどうか分からない状況で、こんなバカみたいにきゃっきゃ、きゃっきゃとしているのを見れば普

通の神経を持つ人なら、何してるんだ、不謹慎じゃないのか、とイライラしますよね。

「僕達は行きませんよ。そんなまだ魔物がウロウロしているような所、危なくて行けません。ね？ポコ君？」

「ワピコをそんな危ない場所へは行かせられんな。お前らもやめとけ」

ドンツ！と壁を殴る音がしました。ミズホちゃんが感情をあらわにポコ家の壁にヒビを入れていきます。あわわわ、お父さんの件があつてから猫かぶりをやめたのはいいですが、さすがにそこまで激しくされるとガクブルしちゃいます。

「こんな時によくそんなヘラヘラしてられるね？二人して何考えてるのか知らないけど、見損なつたよ」

他の四人もさすがにミズホちゃんのキレ具合に驚いていましたが、それでも皆彼女と同じ気持ちらしく、「皆、行こう」と彼女が促すと、ペコちゃんだけはポコ君を気にしながら出て行きましたが、他はそのまま無言で去って行きました。

知らず、ポコ君の服をぎゅっと掴んでいたようで、ポコ君は心配するような目で僕を見つめます。

「大丈夫。今だけだから。全部終わって、お前が俺の事から解放されて、自由に動くようになったら、アイツらはきつとまたお前を受け入れてくれる」

別にいいんです。誰に何と思われようが、僕は構いません。ポコ君の命を守るのなら、どんな風に思われたって構わないんです。

「……何言ってるんですか？僕はポコ君がいてくれればいーんですよー！」

「そうか、ならさっきの続きをしようか」

「さすがの僕でもその流れには不可解なものを感じますね」

最近毎日幾度となく繰り広げられる僕の貞操をかけた攻防戦は、僕も本気で徹底防戦をするのでこの時だけは他の事など考えずに済み、それを知ってか知らずかポコ君もなんだか嬉しそうで、世界が混乱する中、僕達の周りの時間だけは緩やかに流れて……

……いつまでも、この緩やかな時間が続いて欲しいと、そう願ってしまおうでした。

「じゃあ僕、お風呂に入って来ますね」

夜、お風呂に行こうとする僕に、当たり前のようについて来ようとするポコ君を見なかったフリをして、僕は自分の家に轉移しました。

「ワーピーコーー！！！」

玄関に着いた途端、お父さんに号泣されながら頼ずりされました。おヒゲが痛いですお父さん。しかしなされるがままの僕。

最近、お風呂とトイレの時以外は、寝ても覚めてもポコ君とバカツプルをしてないといけないので、お父さんは愛しさと切なさど悔しさで僕が帰る度にすがりついてきます。こんな情勢ですからね、心配する気持ちもあるでしょうから、可哀想なので好きにさせてい

ます。

「ワピコ…最近、外は危ないのだから、あまり外に出ないで欲しいのだけど…」

「大丈夫ですよ、お母さん。僕が強いのは知っていますでしょう？それよりもお父さん、お母さん、そろそろ自然と共に生きる、そんな田舎情緒溢れる土地に引越して欲しいのですが…」

「ワピコ！いくらお前の頼みだからと言ってそれは無理だな！」

そうですね、お父さんは戦いに行く人達の為に武具を作らないといけないんですもんね。信念を捨ててもいいほどの理由がないと動きませんよね。

まあ、いざとなったら無理矢理引っ張って行けばいいかと思いつつ、僕はお風呂に向かいました。

僕の家のお風呂は無駄に広くて、僕もよく一人で八つ墓村だとか、水中探検ごっこだとかやっていましたが、はたから見たらこんなホラーなものだとは思いませんでした。

なんでここにいるの？とか、魔王になったんじゃないの？とか、そんな疑問よりも、ミフィちゃんが黒い髪の毛を放射線状に揺らがせて、無表情の白い顔だけを浮かせているホラー具合に僕は、ごくり、と息を飲んでしまいました。

「…！？ワピコ…！」

僕に気づいたミフィちゃんは、前と何も変わらない様子で僕に抱きついてきました。ミフィちゃんが魔王になったのは勘違いだったのかな？と感じてしまうほど、本当に何も変わっていません。

とりあえず裸でつつ立っているのは寒いので、首を傾げながらミ
ファイちゃんをこびり付かせて湯船へとインします。

相変わらず僕の首をはむはむするミファイちゃん。そういえば、聖
女教本部の地下でミファイちゃんに甘噛みじゃなくて思いつきり噛み
つかれたなー、なんて他人事のようにのほほんと思いながらも、は
むはむしてたのは魔王的な勘で僕の血を欲しがってたのかなー、と
思ったらやっぱりミファイちゃんは魔王になってしまったんだと実
感します。

「ミファイちゃん、魔王になっても自我があるんですね？」

「…うん…街を襲ってある程度破壊したら意識を神様が戻してくれ
るの…」

なんだと、あのビッチ野郎。そんな事ができるのならば別にポコ
君に倒して貰わなくても、ミファイちゃんの自我を戻して隠遁生活を
送って貰えばいいじゃないですか。

「…でもね、苦しいの。中で気持ち悪いモノがウゴウゴしてて、凄
く苦しいの」

ミファイちゃんは僕にぎゅっ、としがみ付きました。それが僕に助
けを求めているようで、だけど僕にはミファイちゃんの魂を神様の元
へ還す事くらいしかできなくて、何も言えずに黙ってしまいます。

「神様が言ってたの。明日王都を破壊したら、解放してあげるから
ね…って。でも、それって、ポコと戦わないといけないでしょ？
私、ポコと戦いたくないよ…だって、絶対にポコ死んじやうもの
………」

「え……絶対って……そんな事、まだ、分からないじゃないですか……」

明日。急に訪れた緩やかな時間の崩壊は、ポコ君の『死』という単語で僕の頭を更に混乱させます。

「だって……ワピコの血が強力すぎて、『魔王』じゃなくて、『魔神』にレベルアップしちゃったんだもん……」

そりゃ、駄目ですね。确实ポコ君の身体の限界超えちゃいますね。だって魔神だもの。魔王が蟻さんだとしたら、魔神はぞうさんです。それくらいレベル差があるんです。しかも、僕の血が原因だなんて泣けますよね。

事が終わったら、ポコ君は、确实に、死ぬ。

「ねえ、私ポコを苦しめたくないよ……どうしたらいい……?」

僕も、ミフィちゃんと同じ気持ちですよ。

今までポコ君の生存確立を上げる為に、力を奪われないように、人の気持ちも、自分の気持ちさえも無視してきたというのに、全て無駄になりました。

他でも無い、僕自身のせいだ……

とんだ道化ですね。情なさすぎて涙すら出てきません。

「……ねえ、ミフィちゃん。僕が明日、君を解放してあげます。それから、一緒に神様のお尻にバナナ突っ込みに行こう?」

「……ワピコと一緒に……?」

ミフィちゃんの髪の毛を撫でながら、僕は短く「うん」と返しま

した。

「ワピコ…ワピコと一緒になら、いいよ。ワピコと一緒になら…怖くない…」

あ、笑った。ミフィちゃん、ちゃんと笑えるんですね。とても可愛らしいです。やっぱり女の子は笑った方が可愛いですね。

そして僕達は無駄に長湯してしまい、気づいた時には二時間は経っていて、僕もミフィちゃんもフラフラになりながら、それぞれの場所へ転移して別れたのでした。

55 プレイ目『お願いだから』

お風呂から出て、そのままポコ君の部屋へと転移したら、ポコ君は濡れた髪をゴシゴシ拭いているところでした。真っ裸で。

ああ、お風呂入ってたんですね？別に毎日裸で出て来るから見慣れたものですが、何故、ご立派なソレをニヨキニヨキと盛り上げさせているのか。軽く引きつつ、無表情ながらも頬を赤らめて発情している目を見て気づきました。

あ、僕も真っ裸じゃん。

ゆらり、とポコ君がこちらに一步踏み出すのを見て、僕は瞬時に自分の部屋へ転移しました。

危ない、危ない。ノボせてばーっとしてたからそのまま行っちゃいました。

パジャマを着てもう一度ポコ君の部屋へ戻ると、絶好調に不機嫌になっているポコ君がまだ真っ裸のままいます。

「早く服着ないと風邪ひいちゃいますよ？」

世話女房もしくは母親よろしく、むっすりしたままのポコ君にパジャマを着させてあげて、ベッドに寝かせ布団をかけてポンポンとした後、照明を消して僕もさっさと寝るべくポコ君と同じ布団へ潜り込みました。

ふう、さて寝ましょうか。

「……やっと、その気になったのかと思ったのに……」

ポコ君、男が過ぎ去った事をいつまでもウジウジ言うものじゃありませんよ！

それでもポコ君は名残惜しそうに僕のパジャマの中へ手を入れ、お腹と胸の下までをさわさわさわと行ったり来たりしています。うひゃひゃひゃ、やめて下さい。くすぐったいです、うひゃひゃひゃひゃー。

僕が堪らず笑い転げていると、ポコ君がその隙を逃がさんとはかりに僕の唇に貪り付いてきました。寝る前の一仕事、って感じてまた僕の貞操をかけての攻防戦の始まりですね。

でも、今日は負けてあげてもいいかな……

だって、今日でもう、ポコ君と一緒に寝るのは最後ですもんね。

明日で、お別れですもんね……

力を抜いて、しばらくポコ君の手を好きにさせてあげていると、その手がピタッと止まりました。

「ポコ君……？」

「なんで…抵抗しないんだ…？」

おやおや、ポコ君は僕の嫌がる姿を見ながら無理矢理したいっていう性癖の持ち主でしたか。それはすみません、頑張って演技します。

「俺は……！……そんな、諦めた感じの顔をさせてまでしたくないんだよ。俺は、ちゃんと受け入れて欲しいんだ」

むむ、今まで散々発情しときながら、そんな事言われても納得できませんね。

「ポコ君、違……」

「寝る」

ポコ君は僕に背を向けて布団に潜り込んでしまいました。その背中が僕を拒絶してるようで、伸ばしかけた手を引っ込めて、僕もポコ君に背を向けて寝ます。

……違うのに。僕は、ただ、明日でお別れだから、最後にポコ君を感じたか……

はっ。今、僕、危険思考をしてましたね。女体でいた時間が長すぎて、心まで女性寄りになってしまったんでしょうか……恐ろしい

……

恐ろしさに身を震わしていたら、何を勘違いしたのかポコ君が背後から抱き締めてきました。

「泣くな」

「泣い…っな…っ」

いつの間にやら目から流れていた汁のせいで、うまく喋れません。ポコ君は僕の不可解な汁を拭くと、僕の脛にそっと口付けをして、ぎゅっと強く抱き寄せます。

「俺は絶対に死なないから。だから、死んでしまう俺の為にとか、そんな同情じゃなくて、いつかちゃんと俺を受け入れてくれるまで…待つから…」

本当に違うのに。同情なんかじゃないのに。僕はちゃんと心から……

伝えたいのに、伝えたい事がいっぱいありすぎて、うまく言葉にできなくて、僕の口から出るのは嗚咽だけです。

僕を抱き締めるポコ君の体温が、僕の背中を優しくさするポコ君の手があまりにも温かくて、ぐちゃぐちゃした思考はいつしか安堵感へと変わって、いつの間にか僕は眠りについてしまったのでした。

ふわふわした感覚の中、急に意識がはっきりとして、気がつけば僕は何も無い真っ白な空間にいました。

「キングヨ君」

「いつまで僕をその名で呼ぶのですか神様」

真っ白な空間の中では目に痛いほどの黄色の果物を貪りながら金髪碧眼のイケメンが立っています。夢の中まで侵入してくるなんて、睡眠妨害も甚だしいです。

「明日、あなたは本当に、いいのですか？」

「僕の決意は変わりません。僕の考えた方法なら、神様も文句ありませんよね？」

「それはいいのですが、いくらあなたの身体が人間離れしてようと、所詮は人間です。あなたが考えている方法では、使う力が大きすぎてあなたの身体を壊してしまいますよ？」

「構いません。僕は自己中なので、誰かが死んで悲しむより、自分がさつさと死んでしまった方が楽なのです」

僕の言葉を受けて、神様はしばらくもぐもぐとバナナを貪って、それが三本目にさしかかろうとした時に、やっと口を開きました。

「いいでしょう。くれぐれも失敗はしないように」

黙って頷くと、意識が段々ふわふわとした感覚に戻っていき、僕は微睡みの中へと身を委ねたのでした。

ドー……ッーン!!

どこからか大きな轟音が響いて、僕は目を覚ましました。眠る前は確かに感じていたはずの体温がなくて、空っぽの布団を見てすぐに飛び起きます。

「ポコ君……!?!」

扉の方を向くと、タキシード姿のポコ君が立っていました。

「起きてしまったか……大丈夫。すぐに終わらせて戻って来るから」
ミシミシと家が音をたてて揺れる中、ポコ君は無表情ながらも優しく、愛し気に、僕の髪の毛を撫でて、額に口付けを落としました。

「脱力しろ」

ポコ君の耳元で、神力を込めた言葉で彼の身体の力を奪いました。膝から崩れ落ちた彼の身体を受け止めて、ベッドに横たえます。

「なん…っの…っもりだ…っ!?!」

気力を振り絞り、肘で支えるようにして少し起こした身体を僕に向けて、苦々し気に声を振り絞っているポコ君。それを突き放すように押して、また寝かせました。

それでも起き上がるうとする彼の肩をベッドに押し付けて、僕は荒々しく彼の唇に自分の唇を押し付けます。

ゆっくりと唇を離していき、僕の好きだった吸い込まれてしまいそうな黒い瞳を、見下すように見ました。

そして僕は、感情のこもっていない声で言います。

「僕、この世界にもう飽きちゃったんですよね」

僕は認めるよ。

「皆が皆、バカみたいに僕の事が好きで、誰も僕の力にはどんなに頑張っても及ばなくて、張り合いが無いんですよ」

僕は確かに君が好きだった。

「だから、僕はこの世界を捨てます」

最初はただの同情という名の自己満足だった。

「君の事はまあまあ好きだったから、最後のプレゼントとして僕がミフィちゃんを連れてってあげますね」

だけど、成長した君の黒い太陽のような瞳が僕を貫いた時。

「ウマイ事やってあげますから、終わった後ちゃんと話を合わせて下さいね？」

きつとあの時から、僕は君の事が好きだったんだ。

「待…て…！ワピ…コ…っ…！」

だから、死なないで。

「我が歌は眠れる愛しい子の為に、愛しい子よ時が其の目を開かせるまで幸福な夢を」

僕を恨んでもいいから、お願いだから、生きて。

白銀の錫杖から眠りに誘う振動が広がって、ポコ君の意識を夢の中へと誘いました。

ポコ君が完全に眠ったのを確認してから、僕は神様の力を行使してポコ君と瓜二つの姿へとこの身を変えました。そしてクローゼットに並ぶタキシードの一つを取り、それを着ます。最後に、先ほどポコ君が床に落とした能面を拾い上げ、きつと情けない顔をしているであろう顔を隠すように付けました。

僕は行ってきます。もう、会う事は無いでしょう。

さようなら、ポコ君。

君の瞳に映るこの世界が、いつまでも美しいものでありますように。

56 プレイ目『俺の名はタキシード能面』

俺は“タキシード能面”。ギルド最年少で最高ギルドランクになった人間最強の男だぜ！この能面センサーが、この王都に『魔王』が侵攻して来ていると告げてきた！愛と勇気だけが友達な俺は黙っちゃいらねえって訳で、今からちよっくら行ってくつか！

……むむ？なりきって行こうとしたんですが、何か違いますね。普段彼は何を考えていたんでしょうか？彼の思考だけはいまだに読めませんね。

はてさて、ウジウジした考えが巡り巡ってなんだか変なテンションになってきた僕は、現在絶好調に“タキシード能面”として王都を飛び回っています。

『魔王』のおぞましい闇が冬の太陽を覆い隠し、まるで夜のようになくなった王都に底冷えする冬風と共に凶悪な魔物達が雪崩込んで来て、僕はソイツらが必要以上に人を殺さないように追い払っています。時々わざと攻撃を受けて、一生懸命戦ってるフリをするのは忘れません。

「散らばるな！一人で倒せるヤツじゃないぞ！」

勇ましい女性の声が聞こえてきました。高層ビルの屋上からゴッドライで確認してみると、気高く美しいローズ先輩が生徒会メンバーを引き連れて魔物を討伐しようとしています。

「ナデシコさん、援護をお願いしますの！」

「ダメ！結界を保つのに精一杯なの！」

「ローズちゃん！ここは一旦退こうよ！」

「馬鹿を言えヒマワリ！コイツらに王都を好きにさせるつもりか！？」

彼女らの周りには、この異常事態に奮起したのであるう生徒が他にも数十人いますが、いくら優秀であろうとまだ学生の彼女達が闇で強化された魔物に勝てる訳がありません。

赤い目が全身に幾つもあり、薄気味悪く不定形に蠢くねちよねちよしたソイツが彼女らを覆い尽くそうとした時、シュツと飛んできた一輪の赤い薔薇が、魔物と彼女らの間に割って入りました。

「な、何だ！？どこから薔薇が……」

「ふははははは」

「だ、誰だ！？」

「私は闇を切り咲く一輪の薔薇……“タキシード能面”！！」

黒いマントを靡かせて、薔薇を持って構える僕。キマった……僕、かっこいい。

まだ戸惑う彼女達を守る為、僕はポコ君っぽい魔法でシュシュッと魔物を片付けました。そして、能面を取って胸にさしていた赤い薔薇をスツ、とローズ先輩に差し出します。

「薔薇の名を持つ気高き君よ。君には戦いの中よりも花の中に在る方が相応しい……さあ！皆と共に花が咲き乱れる土地へと向かうがいー！！」

つまりは、疎開して下さいって事です。ついでに僕がいなくなっても寂しくないように、ポコ君のハーレム形成の手助けとしてフェ

ロモンむんむんにして言いました。

「ポコ……まさかお前が“タキシード能面”だったとは……分かった、ここはお前に任せて皆を連れて避難しよう」

目論見通り頬を蒸気させる女子の皆さんに結界を張ってあげて、僕は「アデュー！」と高笑いをして去って行くのでした。

イケメソって何をしても許されるんだな！。

ここ王都は、国の中心だけあって重要なものが集まっており、ちよつと破壊して終了って訳にはいきません。城の破壊は勿論の事、最新医療技術施設だとか、色んな研究施設だとか、それに繋がる企業とかも破壊対象になっています。ぶっちゃけ住宅街以外はほぼ破壊対象です。

それに伴い死人も勿論増える訳で……

煙りを上げながら崩れ行く高層ビル。瓦礫に埋もれてしまう人達。逃げる人達の怒号や悲鳴。その中の知識者や技術者を喰う魔物。あまりにも凄惨な光景で、僕の身体は知らず震えてきてしまいます。

助けたい、でも助けたいけない。そんな自分の無力さもさる事ながら、僕の為にポコ君は今までこういう場所に身を置いていたのかと思うと、胸が、キシキシ、と音を上げます。

だから。だからこそ僕は、今度こそポコ君を守る為に、震えている場合では無いのです。

できるだけ死人を出さないように力を行使して、でも不自然にはならないようにまた力を使って、どれだけの時間が経ったでしょうか。

気付けば太陽は沈んでいて、空を埋めつくさんばかりの高層ビル郡だった王都の中心は今では空を遮るものは何も無くなって、崩壊、そんな言葉がピッタリとくる光景になっていました。

そんな瓦礫の街の中で不自然に白く浮かぶお城。聖なる獣の存在で作用する守護結界が、魔王……いや、魔神の闇からお城をなんとか守っています。

しかし、それも長くは持たないでしょう。人間には見えないけれど、僕のこの神様な目には結界に亀裂が入っているのが映っています。

お城にいるであろう王子様達を守るべく、僕はラビト王子の魔力を辿って転移をしました。

お城の中に着いた途端、僕の身体の中が、ミシ、と嫌な音を立てました。

できるだけ死人を出さないように広範囲で見る事も感じる事もできない守護結界を張って、助かった事を不自然に思わないように記憶操作手前の強い幻覚魔法をこれまた広範囲に渡って朝からずっと使い続けていました。

どちらも人間には使えない力です。それを一人ならず大勢の人に使いつつ、ポコ君の姿でいる事を維持していたのですから、結構な負担がかかっていたようです。

「魔法師団からの連絡はどうした!？」

「駄目です!闇に遮られて外との連絡は一切取れません!」

「治療班!怪我人の手当は後にして守護結界の強化に回れ!」

僕の出た場所は、兵士の訓練所のような所でした。そこには穢れに侵された人や怪我人が地面いっぱい寝かされており、騎士や治療師、それにお偉いさんみたいな人もいて怒鳴りながら指示を出しています。

穢れに侵された人達を、王族の何人かが聖なる獣の力を行使し浄化していました。その中にお優しいラビト王子のみならず、なんとあのオラオラハクト君まで汗を流しながら人を助ける為に頑張っ

います。

よく見ればビーさんが傷だらけになりながらもギルドの人達を叱咤していたり、僕のお父さんが次々と武具を運び込んで来ていたり、それどころかラジャ国へ行っていたはずの五大貴族の子達も治療班に混ざって必死に手当てしており、なんと僕のお母さんまでいるじゃないですか。

母国の人達を助けたいという気持ちは分かりますが、今世界で一番危険な場所にいるなんて…と、僕としては複雑な心境です。

ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”

聞くだけで絶望に囚われてしまう程おぞましい声が、訓練所から見える闇に覆われた空から聞こえると同時に、パキン、という何かが壊れる音がしました。

「ラビト殿下！ 守護結界が！？」

「僕は魔方陣の元へ行く！ それまで皆耐えろ！」

ラビト王子は、魔方陣に直接力を流し込んでまた守護結界を作り出すつもりでしょう。額に汗を滲ませながら僕の横を通りすぎようとした時、僕はその腕を掴んで彼を止めました。

「君……！？ 確か、“タキシード能面”？ 急いでるんだ、離してくれないか？」

いつも優し気だった瞳は今は焦りと苛立ちが映っています。しかし僕は彼の言葉を聞かずに、白銀の錫杖を喚び出しました。

「其が覗くは夢と現の狭間うつつ」

リリリ……ン、と錫杖から妖しげな音が響き、それは訓練所を、そして王都中に広がって、僕の身体がまた、メキメキ、と嫌な音を立てます。

今使ったのは催眠状態にする力です。あれだけ騒々しかった訓練所内が、虚ろな目の人間ばかりの奇妙な静寂に包まれます。

「糸は其を絡め、我が意のままに」

見えない糸が人間達を絡め、僕の意志に従う傀儡となりました。

ピシ、ミシミシ ……

一瞬、目の前が真っ暗になり、僕は思わず地面に手をついてしまいます。

痛い……全身が小さな刃で切り刻まれているよう……人の心を操る力は、とても大きな力が必要だったようです。

嫌な汗が流れるのもそのままに、僕は雪崩込んで来た魔物から城内の人間を守る為、死亡対象となっている人間以外に守護結界を張りました。

闇が城中を覆い、魔物が城内を荒らしています。しかし僕に操られている人達は叫ぶ事すらなく、聞こえてくるのは魔神のおぞましい声と、魔物の猛り狂う声だけ。

さて、ここからが正念場です。僕は『人間』のポコ君として、魔神と戦わねばなりません。それは到底一人でできるものではなく、聖なる獣の力を借りつつ、力強い仲間達と共に立ち向かうのです。それを王都にいる人達は見ていて、絶対的な力を持つ者を崇めるのではなく、苦難の末に魔神を倒した英雄として少しばかり誉め讃えられる……というシナリオです。

皆を傀儡にしたのは余計な混乱を防ぐ為。ラビト王子、そして城内の人達は必ず守護魔方陣と、魔物に殺されようとする人達を守るうとするでしょう。そうなれば僕の守護結界に守られた彼らは倒れ

る事はなく、いつまでたつても決着はつきません。守護結界をなくしてしまえば死ななくていい人達まで死んでしまいます。

だから、催眠状態にしてうつすら意識を保たせつつ、操られている事に気づかずに自分の意志で動いた結果だと思わせるようにしたのです。

「こんな所にいたのね、坊や」

声が出て、そちらの方へ向くと、桃色の髪の妖艶な美女アイルと、
いまだ名前を知らない三つ編み男がニヤニヤしながら立っていました。

まだ生きていたんですね。魔王復活の時に、「ああ！何故我らまで魔王様〜」とか言いながら闇に喰われていれば良かったのに。

いいでしょう。ミフィちゃんを巻き込んだ君達の罪を、この僕が
引導を渡してあげましょう。

さあ！楽しいショータイムの始まりだZE！

57 プレイ目『言わせてみました』

まず僕はアイルの声をポコ君的な力で『破壊』しました。彼女の唇が紡ぐ歌は人の心を狂わせるのです。まあ、この場にいる人間達は全員僕の支配下にありますから効かないのですが、効かなかったら僕の力から解放された時に、あれ？何で効かなかったの？と疑問に思われたら困るのです。

「ゴー！親父！」

「がおー！」とビーさんが獣のように、いやむしる獣らしくアイルに襲いかかりました。彼の二つ名は“蒼い稲妻”。両手に青白い雷を纏わせて、その巨体に似合わないスピードでアイルになんの捻りもないストレートパンチを繰り出します。

捻りはないけれど、ジャックと同じくらいの速さのそれをアイルは避けきれず手で防ぐも、凄まじい破壊力のそれを受け止めきれずにそのまま吹っ飛び後ろの壁に衝突しました。

「ん？そういうえばジャックはどうしたんでしょう？お父さんとお母さんを守るように言っていたのですが、今は二人共ここにいますし。おーい、ジャックやーい。」

「何だ？お前…クソムカつく姿してるが…ワピコか…？」

「オーイエー。ジャック、今日は君の出番はありません。そしてこの戦いが終わったら僕はこの世界から消えます。なので使い魔契約を解除しましょう」

三つ編み男の投げってくる短剣を避けながら、人型になっているジャックに告げました。するとジャックは憤りもあらわに元々釣り上

がっている目をもつと釣り上げて怒鳴ってきました。

「っざけんな！そんな話聞いてねえよ！説明しろよ！」

今は悠長に説明している暇は無いですよね。なので僕は三つ編み男の鳩尾に蹴りを入れてから、強制的に契約解除しました。

すると、魂で繋がっていただけに、何とも言えない喪失感が僕達を襲います。

「ジャック……今までありがとう……」

ジャックは泣きそうにも見える顔を悔しげに歪ませて、黒猫の姿へと身を変えてお母さんの元へ寄って行きました。

「ぶにゃー！（俺様がどこにしよう俺様の勝手だからな！）」

負け猫の遠吠えですね。猫の姿だけにとっても愛くるしいです。そんな彼の姿に僕は頬を緩め、まだまだ倒れそうもない三つ編み男へと向かって行きました。

「其は闇の淵よりも暗く…其は世界の黄昏よりも昏く…」

「させるか」

同じ轍は踏みませんよ。魔神の力を借りようとする三つ編み男の詠唱を防ぐ為、僕は奴の声を『破壊』しました。ポコ君的魔法は基本詠唱はいらぬ便利魔法で、その分使用者の負担も大きく、さすがの僕でも連発していたら胃もたれくらいの障害が出てきます。

声を『破壊』された三つ編み男は苛立ちながらその身に闇を纏わせてこちらに突っ込んできました。それを聖なる獣の加護を受けた

騎士達の剣が防ぎます。

舌打ちをしながら後ろに跳び退く三つ編み男。二対多勢では分が悪いと思ったのか、おびただしい数の魔物を呼び寄せました。

僕は騎士やギルドの人達を操って、悪いと思いつながらも多少の傷を負わせながらそれらに当たらせませす。

僕もそろそろダメージ受けておいた方がいいかな…と思った時、都合良くアイルが僕の背後を取りました。彼女の指から黒い茨が生えてきて、僕はなされるがまま巻き付けられます。何このトゲトゲ、ガチで痛いです。いつもお母さんの茨に巻き付けられて悦んでいるお父さんの気持ちがよく分かりませす。

そうこうしている間に茨から黒い薔薇が咲き、花弁から黒い霧のようになつた『穢れ』が僕の全身を覆います。

「あああああ！」

僕の苦痛の叫び（演技）にアイルは官能的な唇を愉快そうに歪めました。そんな可哀想なタキシード能面を助ける為に、聖なる獣の血をひくハクト君が黒い霧と共に僕に巻き付く茨を斬り裂きます。

「これは貸しだぜ」

虚ろな目で言うハクト君。なんとなく彼が言いそうだなー、って事を僕が言わせました。

そんな風にちょっと遊びながら、魔物も徐々に少なくなってきた。再びアイルと三つ編み男の形勢が悪くなっていきます。そして二人が逃げようとした時

ズズ…ン！！

城が大きく揺れ、あちらこちらでガラガラと城が崩れていく音が

聞こえました。おお、そろそろ脱出しないとヤバいですね。

テテレッテレー。団体転移魔方陣〜。

心の中で猫型ロボットのマネをしながら、持って来ていた大きな紙を広げました。一度に三十人は転移できる魔方陣の上へと城にいた人達を誘導します。

虚ろな目に無言でぞろぞろと転移していく人達を奇妙な目で見ている悪役二人。

「急げ！崩れるぞ！」

「城内にもう人はいないか！？」

「まだ数人の反応があります！」

焦るように指示を出したら、いきなり叫び出した人達の声にビクツと肩を震わせていました。ちょっと笑ってしまったのは秘密です。逃げて行く人達を見て、チャンスと思ったのでしょうか。二人はここぞとばかりに攻撃を再開してきました。逃げる人の背後を襲うなんてさすが悪役、とても卑怯です。

その対応はビーさんを筆頭にギルドの高ランク保持者達任せ、僕は魔方陣への誘導を優先させます。今、城内に残っているのは城の守護魔方陣の知識を持つ人間だけ。その中に王子様達の父親、この国の国王がいて、王子様達が哀しむだろうな…と思いつつも、痛む胸を無視して、僕は見捨てました。

城内の助けられる人間を全て城の外へ転移したのを確認して、最後にビーさん達ギルドの人を転移させて、そして城内には僅かな魔物と悪役二人、そして僕だけになりました。

彼らは声を出せないかわりに目で「タキシード能面：貴様だけは逃がさんぞ…」的な視線を投げつけてきます。

それは、こっちの台詞です。

僕は白銀に輝く錫杖を手の中へ喚び出しました。リンツ、と鈴を

鳴らせば、錫杖は白銀からドス黒く不吉な色へと変わっていきます。

「君達がこの世界を恨んでいるのは、それ相応の理由があつての事なのでしよう。だからと言って、君達のした行為は僕には到底許せるものではありません。自分が酷い目に合わされたからと言って、他にもいい、なんて事理由にはならないんですよ。ミフィちゃんとかポコ君が受けた心の痛み…償って貰いますよ…？」

錫杖から湧き出る魔神よりも暗く深い闇に、二人は恐怖に身をすくめて動けないようです。そんな二人を見ても僕の心は何も感じません。ただ冷えきつたものが僕の心を支配しています。

「咎人よ、其の魂を掴むは何よりも深き闇」

二人の地面が渦巻く闇へと変わりました。彼らは震える身体をなんとか動かそうとするものの、湧き上がってきた黒い手に掴まれて動けません。声を奪っているので叫ぶ事もできず、抗う事のできなない絶対的な闇の恐怖に心を支配されて、絶望を通り越した狂気に顔を歪ませて…そして、二人は闇の深淵に堕ちて行きました。

これで彼らは神様の赦しを得ない限り、絶対的な闇の中で狂いながら未来永劫生き続ける事になるでしょう。

さすがに未来永劫というのは可哀想なので、そこらへんは神様に丸投げしましょう。彼らも世界の為に神様に利用されたに過ぎませんからね。ちゃんと責任は取って下さいねー。

『ちゃんとアフターケアはするので大丈夫ですよー』

軽いノリに若干の不安を感じつつ、僕は崩れいく城を後にしたのでした。

58 プレイ目『さようなら、魔法世界』

城にいた人達を転移させたのは、破壊対象ではない住宅街の外れでした。多少巻き添えをくってしまった家はあるけれど、大体は綺麗に残っています。

そこから城は肉眼では確認できないのですが、城を覆う闇は遠く離れた場所からでも見える程に巨大で、おぞましく蠢いていました。魔法科学文明の栄華を極めた王都の姿はそこにはもうなく、瓦礫の地が虚しく広がるだけ。最後の破壊対象である城ももう破壊されました。もう、この世界で行う調和は、終わったのです。

ミフィちゃん、今から君を苦しみから解放してあげるからね。そして、一緒に神様の所へ還ろう。

重傷者と治療師以外の非戦闘員は置いて、ギルドの人達、王子様―ズ含む城の人達、そして多分意識があるならばついて来るだろうと予想される五大貴族の子達を連れて、僕達は事を終わらせる為に魔神の元へと向かいました。

まず、ポコ君的『創造』の力で、聖なる獣の力を増幅させる魔方陣を創り、生き残った王族の人達の中で力を解放させ、夜空を貫く光となりました。それは一瞬の煌めきの後、形を変えて聖なる獣の姿になります。

その巨体は穢れなど知らない白。そのまるまるとした巨体を包むふさふさとした毛。真紅の瞳は邪悪な闇を見据え、長いお耳はピクピク動いています。

ウサギさんです。そう、聖なる獣とは巨大なウサギさんなのです。巨大ウサギさんは、魔神に向かってぴょこんと勇ましく跳びつき、お口を高速で動かしながら闇をかじっていきます。魔神は苦しげな声を上げ、ウサギさんに抵抗するかのよう闇を蠢かせ、ウサ

ギさんを覆っていきます。

『痛い、痛い』と人語を喋りながら、それでも闇をかじり続けるウサギさん。頑張れウサギさん！闇をかじり尽くせウサギさん！

しかし、ウサギさんの健闘も虚しく、少しの闇を残してウサギさんは闇に飲み込まれていってしまいました……ああ、ウサギさん……ちくしょう！僕が仇をとってあげますからね！

しかし、ウサギさんのおかげで闇は人サイズにまで縮み、闇の中の魔神：ミファイちゃんの姿をあらわにしました。

その瞳は狂気に渦巻いていて、生気を感じられなかった白い肌はより白く、その白い全身を覆うように浮かぶのは、この世界の全てを呪うかのような黒い古代文字です。

その痛々しい姿は見えていられないけれど、自我を戻してあげたらもっと苦しむだろうと思ひ、心の中で彼女に謝って、攻撃を開始しました。

ビーさん始め、肉体派の人達を突っ込ませます。しかし魔神には一つとして攻撃は届きません。そこへ聖なる獣の加護を受けた騎士達が特攻します。魔神の身体に傷はつけられないけれど、苦しげに顔を歪ませながら少しづつ後退ります。僕はそんな魔神の背後からポコ君的魔法を放ちました。

『創造』と『破壊』の力を合わせ、混沌を生み出す魔法です。

グギアアアアアアア！

魔神はその身を襲う痛みに叫び声を上げました。僕の手の周りに現れた混沌は全ての存在を混じり合わせ、存在そのものを不確かなものへと変えるもの。それは魔神を包む闇を、そしてミファイちゃんの身体を飲み込み、彼女の身体に穴を開けます。

ですがそれはすぐに塞がって、僕が飛び退く前に魔神の闇を纏っ

た手が僕の顔を掴み、僕の身体を穢していきます。それを助ける為、王族の中で武闘派のハクト君が浄化の力を剣に纏わせて魔神の手に斬りかかり、僕は解放されました。急いで魔神から離れ、治療班に浄化して貰います。

わざとやられるのってストレスが溜まりますね…普通に痛いし、僕涙目です。

そうこうしている間に、後衛陣の高威力合同魔法の詠唱が終わったようです。一旦、肉体派達を下がらせ、魔神への道が開けると同時に合同魔法を放ちます。

一発目に、地が割れ、二発目に何トンもの重みがかかる風圧が魔神を地の底に落とし、三発目にどんな金属も溶かしてしまう炎が地の底から噴き出しました。

そんな魔法を放ったから、ただでさえポロポロだった王都が更にポロポロです。裂けた地へ瓦礫が轟音を上げながら落ちていき、炎のせいで周りの可燃物がごうごうと燃えて、熱気でゆらゆらと景色が歪んでいます。

自分でやっつきながら、やりすぎたかな…と思うも、地の底から魔神がピンピンした様子で出て来ました。魔神ですもんね。人間の攻撃なんて鼻毛を抜いた時よりも痛くないですよ。

そして魔神の瞳が揺らめいたと同時に、視線上のものが黒い炎に包まれました。目から怪光線ですね。そんな軽く言う程可愛らしいものじゃありませんがね。

戦いが終わって、全員無傷なのも可笑しいので、守護結界をちょっとゆるめておいたんですが……ちょっと……僕の口からは言うのを躊躇ってしまうようなグロテスクな光景が……サラっと言っちゃうと、火傷が酷いって事です。

阿鼻叫喚の中、僕は絶対防御の魔法をポコ君的な『創造』魔法で

広範囲に展開します。

ミシミシ…！ビキ…ッ！

「ぐ…！？げほ…っ！！」

なんと。僕、吐血してしまいました。ポコ君的力のせいではなく、長時間沢山の人達を操っている力の反動です。

おお、なんだか視力も落ちてきて、身体感覚も鈍くなってきた気がしますね。まあ、苦しみながら戦ってるポコ君を演出できるのでよしとしましょう。

火傷を負った人達は、普通なら死んでしまう程のものでしたが、そこは僕の守護結界のおかげで死者は出ていません。苦しませちゃってごめんね、とは思うものの、魔神が簡単に倒せてしまつたらおかしいですからね。そこらへんは我慢して下さい、ごめんなさい。

そんなこんなで適当に攻撃して、適当に攻撃を受けて、僕の身体も結構ボロボロになりつつ、操られていてさえもその顔に苦痛の色を浮かべながら全員が満身創痍になって、そして

瓦礫すら残っていない焦土と化した大地を朝陽が照らし始めた頃。

離れた場所で何時間もかけて召喚の儀を行っていた五大貴族の子達がついに召喚に成功しました。

火の大貴族メラ君が火の精霊神を喚び、風の大貴族ヒュー君が風の精霊神を喚び、地の大貴族ハニーちゃんが地の精霊神を喚び、水の大貴族ミズホちゃんが水の精霊神を喚び、光の大貴族ペコちゃんが光の精霊神を喚び出しました。

正直、存在を完璧に忘れていたんですが、ずっと僕に背後霊のようにつき纏っていた精霊神達です。

今は可愛らしいキャラの皮を被った姿ではなく、美男美女の神と呼ぶのに相応しい神々しい姿で五大貴族の子達の周りに浮いています。

大貴族の子達に指示を出し、精霊神達を僕の元へと集結させました。

『創造』の力はこの世界の始まりの力。森羅万象を創り出し、そして全てのものを森羅万象へと還すもの。ただ、ポコ君の扱える力は神様の半分の力の僕の百分の一に及ばないものです。

だから、ポコ君的に精霊神の力を借りて、世界創造の力までは及ばないものの、この世界に在るもの全てを還す力を得るのです。

精霊神達が僕の身体へと入ってきます。おお、なんだか心地良いですね。立っている事すら実感が無いまでにボロボロになった身体の痛みが気持ち和らいだ気がします。

そして、僕は精霊神の力を自分の中で巡らせて『創造』の力を解放しました。

ポコ君の黒々としていた髪の毛は白銀になり、ボロボロになったタキシードから覗く身体からは光が溢れ、神々しいオーラに包まれます。

見た目を変えたのはただの演出です。

皆をさがらせて、ポコ君の姿をした僕は皆の愛と希望と夢と…後、何か色々なものを背負った気になって、魔神に『創造』の力を叩きつけます。

ヴオアア ……！！

『創造』の力と、魔神の闇がぶつかり合います。

魔神は、その名に神と付いてあるだけあって手強いです。しばらく拮抗したぶつかり合いが続き、魔神の顔に焦りが浮かび始めます。

何やら口をパクパクさせてますね。魔法の音で聞こえませんが、読唇術で解読を試みてみましょう。何々？

われの、ちから、こえられるものなら、こえて、みせるがいー…

ふむ、倒される前の悪役の台詞ですね。もう一押しでしょうか。ちよつと僕の力も上乘せしましょう。えいつ。

愚かな人間共…我を倒しても…第二、第三の我が現れ、いつかお前達を、滅ぼすだろう…ふはは…はーはっはっはっはっは…

昔のRPGのラスボスのような事を言つて、そして魔神は光に包まれていったのでした。ふう、やっと終わりましたね。

気を抜いた瞬間、視界が真っ暗になり、身体の間も無いままに崩れ落ちました。

わお、僕オワタ。さすがに二十四時間ぶつ続けの広範囲の人心操作は無理がありましたか。このまま僕はご臨終ですかね。いやいや、僕はまだもう一つやらなければいけない事があるのです。せめて、ポコ君の姿から自分の姿に戻って負担を減らしましょうかね。

パシン…

自分の姿へと戻った直後、この世界の『時間』が止まりました。

「キンギョ君」

霞む視界に映ったのは、魔神を消滅させた光の中から現れた神様でした。その腕の中では安らかな顔でミフィちゃんが眠っています。

「か…みさま…ミフィちゃん…は、生き…てい…すか？」

声を振り絞つて神様に問いかけます。

「いいえ、この子は魂となった姿です」

そうですね……そんな都合良く生きていく訳無いですよ……

「キングヨ君。あなたも肉体から解放してあげましょう」

「少し、待つ……下さ……。もう、一つ……して、おかなければ……なら
な……事、が……ある……です」

僕は、ちゃんとしているのかも分からない腕を気合で動かして、
倒れているまま白銀に輝く錫杖を喚び出しました。

今から、皆に僕の事を忘れて貰います。

忘れると言っても、リスクが大きい記憶からの完全な抹消ではなく、
僕の存在を希薄にさせるのです。

昔話で絶対に名前が上がる事なく、同窓会に行っても、あれ？こ
んなヤツいたっけ？と思われる可哀想な存在になります。お父さん
とお母さんは、家に僕の物が沢山あるから多少の混乱はあるでしょ
うが、きつと誰かを居候させてんだ、くらいに思われるはずですよ。
少し、寂しいけれど、でも皆が大好きな僕が急にいなくなったら
大騒動が起こりそうですね。寂しいのは我慢します。

「其の……瞳に映……るは……水面に映る……我が……幻……」

錫杖から、水面に広がる波紋のような音が響きました。

皆、今までありがとう。さようなら……

鈴の音が徐々に小さくなっていき、術の終了を実感した時でした。

「ワピコー……！……」

霞んでいた視界があまりにも衝撃で超絶クリアになりました。え？え？あれ？ポコ君？鬼の形相で走って来てますけど…え？確か、僕がいなくなるまで目が覚めないようにしていたのに。いや、それよりも、神様が時間を止めているこの空間で、何故、動けるのか。

「己の持つ力を全開にして、気合で色々なものを無効にしているのでしょうね」

いやいや、神様、そんな冷静な解説結構ですよ。

え、でも、そんな事したら、ポコ君の身体ビシバシに壊れるんじゃないですか？

「もう死ぬ寸前ですね」

え、何それ、僕の苦労まるで水の泡じゃないですか。

鬼の形相で走って来たポコ君が、僕の倒れている姿を見て泣きそうな顔になりました。そして、僕の身体を抱き起こし、彼は酷く哀しげに言葉を紡ぎます。

「俺から…逃げられると、思うなよ…！」

それ、なんて言うストーリーカー？

ポコ君の瞳から零れた涙が僕の頬に落ちて、その言葉を最後に、僕の意識は途切れたのでした。

59 プレイ目『で？っていつ』

気がつけば、そこは焦土と化した王都ではなく、金髪碧眼のイケメンがポツンといるだけの真っ白な空間でした。

「お疲れ様でした。キンギョ君」

「えー……っと……僕、死んだんですよね？」

「はい」

最後に見た光景があまりにもショックすぎて、ちよつと混乱しています。あれは…僕の願望が生んだ幻…？いや、あんな恐ろしい幻は嫌です……あれが現実だったとしたなら、ポコ君瀕死ですよね？

「えっと…神様、ポコ君はどうなったか分かりますか？」

「あなたの後を追うようにポツクリ逝きましたね」

な　ん　だ　と

まさか……僕が死んでもどこまでも追っつきそうだな、と考えた事はありますが……まさか、本当に、後を追ってくるとは……ストーカーにも程がある。いや、それよりも、僕が死ぬ程頑張った意味無いですよ？

なんか……哀しいって言うより、悔しいような、それでもやっぱり哀しいような……なんだか、色々な感情がこみ上げてきて、魂だ

けの存在なのに、身体が震えて涙がこみ上げてきます。

「安心して下さい。結局最後はあなたが終わらせてしまいました。彼にも世界が不必要に壊されないように頑張つて貰いましたからね。ちゃんと満足して貰えるようなアフターケアはしました」

そう……そうなんだ……どうしようもない虚脱感はあるけれど……ポコ君が哀しむ事なく満足したんなら、いい……のかなあ？

うん、きつと、いいんですね。生きて欲しいと願ったのは、結局ポコ君の気持ちを無視した僕のワガママみたいなものでしたもんね。

いいとしましょう。じゃないと僕がただのバカみたいです。

「まあまあ、過ぎた事をいつまでも言っても仕方ありませんよ。それよりも、魔法世界はどうでした？楽しめましたか？」

「はあ……そうですね……ぶっちゃけ、味気なかったですね」

「その心は？」

「ブリーフ教団に手を出すなど言われてからはもどかしい思いはしていました。それまでは大体が僕の思うように動いていて、勉強しなくても知識があるので知識欲も湧かず、特に理由もなくやたらと人に好かれるものだから好かれようとする努力の気持ちも湧かず……これはゲームじゃないと思っただけ、やはりシミュレーションゲームをしているかのようでした」

「そう言う割りには、ポコ君に振り回されていましたね？」

そう、彼だけが本当に僕の思うように動かなかった。いつもいつ

も僕の予想遙か斜め上をいく行動をして、他の事柄が上手くいかな
い時は大体彼が絡んでいて……だからかもしれない。

だから、僕は彼に惹かれたのかもしれない。
理想通りにいかない現実。彼だけが、僕の中の現実だった。

「まあ、ともかく、チートを実際に体験してみると最初はいいです
が、すぐ飽きちゃいますね。目指すべき目標が無いという事がこん
なにつまらないものだとは思いませんでした」

「ふむ、それは残念です」

「ご期待に添えず申し訳ありません。そう言えば神様、お聞きした
い事があつたんです」

わざわざ呼び出す気も起きず、次会ったら聞こうと思ってたんで
すが、いつもバナナに気をとられて忘れるんですよね。

神様が「なんですか？」と言ったのを受けて僕は疑問をぶつけま
す。

「神様の力が世界を混乱させるのだったら、何故わざわざそんな危
険な力を僕に与えたのですか？」

「ふむ…何から話しましょうか…」

神様はバナナの皮を剥く手を止めてしばし考えた後、不可解な事
を言いました。

「私は隠居したいんです」

「その心は？」

「私の代わりに全世界を管理する後継者を探していたのです」

で？っていう。いや…なんていうか…で？っていう。

「私の力はご存知の通り全知全能ですからね。心のまま力を奮ってしまえば、瞬く間に全世界は滅びてしまうでしょう」

まあ…確かに、そうですね…で？っていう。

「いや、キングヨ君はもうちょっとでしたね。赤ん坊の頃は少しばかりはしゃいではいましたが、学院に入る前にはもう自制していませんでしたね。」

無駄に自分の力を示す訳でもなく、逆に臆病になりすぎる訳でもなく、私が世界の理を打ち明けた時もすんなり受け入れて、『傍観者』である事を選んだ」

「……つまり、僕は試されていた、という訳ですね？」

「そうですね。しかし、今回は不合格です。結局一人の為だけに強大な力を行使してしまいましたからね。要、修業です」

「その話、慎んでお断り致します」

要修業って事は、僕を後継者として育てようって事ですよ。何を勝手に。

「ふむ、思い通りにいかないものに心惹かれるキングヨ君の気持が少し分かります」

「その話も慎んでお断り致します」

「なんと、つれない人ですね」

「黙れこのバナナ野郎が。おっと、いけないつい本音が。ともかく、僕は力がなくとも心のままにみつともなくもがく、そんな人間でありたいので、神様のご期待に添える事はできません」

そう宣言すると、いつも無表情で淡々としている神様が、ふわっ、と笑いました。なんでしょう？軽く薄気味悪いです。けなされて笑うなんてマゾヒストの気でもあるのでしょうか。

「私はそのような性癖は持ち合わせていませんよ。さて、断る人に無理矢理押し付ける性癖も持ち合わせていないので、キンギョ君を後継者にする事は諦めましょう。更に頑張ったで賞としてあなたの望みを叶えてあげます」

おお、なんと太っ腹な。しかし、よくよく考えてみると、僕は神様のバナナのせいで一回死んで、その後も僕の断りもなく後継者テストなんて腹立たしい事もされた訳ですから、当然の権利ですね。

願いか……僕の願いつてなんでしよう？

ふわっと脳裏に浮かぶのは、ポコ君の事。それから ……

いやいや、それは無理な話ですよ。そんな事、もう十五年前に諦めていたはずなのに。

「いいですよ」

「は？」

「揺り籠に揺れる愛しい子よ、微睡みの終わりは暁と共に訪れる」

リリリリン…と、神様の持つ白銀の錫杖が震えました。

僕は何の事だか理解できなくて、その鈴の音を聞くうちに、ふわとした感覚になって…僕は微睡みの中へと身を委ねたのでした。

60 プレイ目『バナナ野郎め』

ふわふわ、ゆらゆらとした微睡みの中。

暗い夜を照らす朝日のような光を感じて、僕の意識がはっきりしました。

プア ……ン

酷く懐かしい、電気で動く乗り物の音が聞こえました。

オレンジ色の夕日の光が土手を照らし、川の上を走る鉄道がガタン、ゴトン、と通り過ぎて行きます。

犬と一緒に土手を散歩している人は、魔法世界のような中世ヨーロッパに地球の近代ファッションが入り交じったような服装ではなく、平凡なパーカーとジーンズ。

十五年間、遠い夢の話だと、思い出す度に心を締め付けていた風景が、そこにはありません。

「え…？なんで…？」

漏れた声は花の蜜のような甘い響きはなく、どこにでもいそうな少し低い男の声。自然に震えてきた手を見ると、白く透き通った綺麗な手ではなく、ゲームダコができている無骨な手。

「キングヨ君」

いつまでたっても僕を地球時代の名前で呼ぶ神様が相変わらずバナナを貪っています。

「神様…これは、一体どういう事でしょう？」

「あなたを、元ある場所へと帰してあげました」

え…？だから、なんで…？生き返ったって事…？いや、だって、元の世界で生き返るのって無理なんじゃ…？

「それもよくあるテンプレ設定ですね。誰もそんな事言ってますよ？少しテンプレ話を見過ぎですね。まあ、生き返らせたというのは語弊がありますが」

「…：…もうちょっと詳しく教えて頂けますか？」

「まず、あなたは元々死んでなかったのです。話を進めやすくする為に幻を見せました。なので、『転生』と言うより、『魂の旅』と言った方が正しいですね」

つまり、後継者テストをする為に僕が死んだ幻を見せて、魂だけ抜き取って『ワピコ』の身体に入れて、結局僕が後継者の話を断ったからしょうがなく元の身体に戻した…：…と？

「仕方なくではありませんよ。あなたが望むのならばどんな世界にでも肉体を用意してあげました」

「勝手に人の思考読んでんじゃねーよこのバナナ野郎ー！！！」

今までの積みも積もった不満が、力の限りのパンチになって神様の顔面にのめり込んだ。

「ふざけんな！僕が一体どんな気持ちであつちの世界に行つたと思つてるんだ！？死んでしまつた現実を受け入れられなくて、こつちの世界の事を思い出す度に辛くて、できるだけ思い出さないようにして、自分はもう仲良金魚じゃないんだつて無理矢理言い聞かせて、自分を押し殺して、『ワピコ』としてのキャラを無理矢理作つて！」

止めようとしても、抑えきれない感情が目からとめどなく溢れてくる。

「大体僕は超絶ツッコミ体質なんだよー！ー！ー！ー！」

神様が僕のパンチにビクともせず、で？つていう顔をしながらバナナを貪っているのがより気に食わない。

「自分を忘れる為に、自分を殺す為に、不可解な事もツッコまずに流してたんだよ！」

「その割りにはちよこちよこツッコんでた気がしますが」

「黙れこのバナナ野郎が！！足りないんだよ！この僕の内に秘めたるツッコミ魂はちよつとやそつとのツッコミじゃ足りないんだよ！」

道行く人が若干引きながら通り過ぎるけど、そんな事どうだっていい。

僕は！今までの鬱憤を！晴らすんだ！！

「何でメラ君はあんなにKYなんだよ！？何でヒュー君は目も悪く

ないのにいつまでも眼鏡付けてんだ！？何でハニーちゃんはあるな酷いバカップルになったんだ！？何でペコちゃんはある腐女子になっただんだよ！嬉しそうに同人誌の話してくんなよ！ミスホちゃん最初とキャラ変わり過ぎだろ！？なんだよあのヤンデレ引くよ！！ポコ君だっけそうだよ！ストーカーにも程があるだろ！？何でポツクリ逝ってんだ！僕の心労をどうしてくれるんだ！？」

「ツツコミたい割には何の捻りも無いツツコミですね」

「誰が喋っていいって言った？クソバナナ野郎！いつもいつもいつもバナナばかり食いやがって！バナナの一体何がそんなにお前を駆り立てるんだ！」

「バナナの素晴らしさを理解できないなんて、やはりキングヨ君はまだまだですね。私の後継者への道は遠いですよ」

「だからならないって言うてんだろ！？人の気持ち無視して勝手に試しやがって！そんな事誰も望んでないんだよ！！何で人が傷つくのを、死んでいくのを黙って眺めとかなきゃいけないんだ！？助けられるのに助けられない力なんて意味無いんだよ！そんな力、いらさないんだよ！！」

ワンワン！グルルルル…散歩中の犬が僕の叫びに驚いて威嚇してきた。「ミルクちゃん、ダメよ！」と一生懸命僕から離れようとしている飼い主さんでさえ今は腹立たしく感じる。

「そうですね、私もいません」

は？何言っただこのバナナ野郎？

「まあ、無理には言っていないじゃありませんか。しかし、気が向いたらいつでも言ってお下さい」

「叶わない望みは捨てる」

気分的には唾を吐き捨てたい気分だけど、そんなマナーの悪い事基本イイ子の僕はしない。

そんなイライラマックスの僕に構わずに、神様は相変わらず淡々とバナナを貪っていて、今持っているバナナの最後の一口を口に放りこんだ後、ゆっくりと口を開いた。

「ふぉへへふぁ」

「食い終わってから喋れ」

「それでは、キングヨ君にすっぱりフラれた事ですし、私はそろそろおいとましますね。もう、会う事は無いでしょう」

帰れ帰れ！そのバナナ面二度と見せるんじゃないぞ！

「さようなら、キングヨ君。あなたにバナナのご加護があらん事を」

そんなものいらねーよ！って言おうとしたのに、瞬きをしている間に神様の姿はもうそこにはなくて、夕日が土手を赤く染めている光景が、なんだか寂しい景色に見えた。

「……なんだよ……なんで寂しそうな顔してたんだよ……後味、悪いじゃないか……」

そう呟いた僕の声は、宙を彷徨い、小バエにしか届かなかった。

十五年、通っていないかった学校からの帰り道。ちゃんと家に辿りつけるか不安だったけど、そこらへんはバナナ力と言うべきか、くつきりはつきり色んな事を覚えていて、迷わずに家に辿りつけた。

なんの変哲も無い庭付き一戸建て（三十年ローン）の扉を開けると、懐かしい匂いが鼻をつく。

ああ、僕、帰って来たんだ。

なんだかまだ実感が湧かなくて、まだ夢を見ているかのようにふわふわとリビングに向かうと、キッチンから顔を覗かせた母親が怪訝な顔して言った。

「あんた……何で頭にバナナの皮のつけてんの？」

おい、バナナ野郎、今すぐ出て来い。

最終プレイ『もう一度』

昨日の晩ご飯は白ご飯と味噌汁とトンカツとサラダだった。

食文化はご都合主義的な感じで向こうも変わらなかったけど、だ
けど久しぶりに飲む母親の味噌汁の味がそのまま目へと直結して、
ポロリと汁を出してしまった。

家族に気味悪がられながらもベタベタしてしまったり、シャンプー
した時に髪の毛が短いつてなんて楽なんだと感動したり、モン
ンの集会所クエストを、一人じゃキツいつてー、とか言いながらひ
たすらしていたり、気がつけば午前五時だった。

やってしまった。久しぶりの地球生活にはしゃぎすぎてしまった。
今から寝てしまったら起きる自信は全くない。だが、反省はしてい
るが後悔はしていない。

ゲームやらネットやらで行使しすぎて霞む目をグリグリしながら、
シャッキリする為に朝風呂へと向かう。ふと、浴室の鏡に映る自分
の身体を見て、不思議な気分になった。

柔らかかそうな女の子の身体ではなくて、細めだけど筋肉のついた
固そうな男の身体。キラキラと天使のような銀色の髪の毛ではなく
て、自分で染めて少しまだらになった茶色い髪の毛。人外な美貌で
はなく、どこにでもいそうな純東洋人の顔。

……神様にイケメソにして貰えば良かったかな、なんてちよつと
思ってしまったのは秘密だ。

学校への登校中、ぼんやりと歩きながら魔法世界の事を考えた。

確かに張り合いはなかったものの、あそこで出会った人達は好き
だった。頭のネジ一本どころか一体何本飛んでんだって思うような
人達だったけど、それでも、僕があの世界で生きていけたのはあの
人達のおかげだった。僕の不安や辛い気持ちを和らげてくれたのは

確かにあの人達だったんだ。

皆はもう僕の事を思い出さないと思ったら少し寂しいけれど、僕は皆の事を忘れないでおこうと思う。

何よりもポコ君の事を。

完全な男の身体に戻ってしまったから、今彼に会ったとしても恋愛感情なんて湧かないだろうし、むしろ男相手にそんな感情気持ち悪い。

だけど、彼を大切に思う気持ちは変わらない。

親友に対するものだったり、家族に対して持つような、そんな感情。

最後に彼が神様に何を望んだのかは分からないけれど、どうか、幸せであって欲しいと思う。

……しまった。久しぶりの学校に胸踊らされすぎて、めっちゃくちや早く着いてしまった。七時……張り切りすぎだろ僕。軽くスキップしながら来た事を誰にも見られてませんように。

教室を覗くと、なんと先客がいた。こんな早く来るなんて凄いな。何してるんだ？んん、本読んでるのか。インテリジェンスですね。

うほっ、あれは僕の心のマドンナじゃないですか。幼なじみだけれど、可愛すぎて喋りかける事すら烏滸がましく感じてしまって遠くで見ている事しかできない。密かに右手に彼女の名前をつけて一人ジョニー遊びをしていた事は秘密だ。

「お……おおおはっ……ようっ！」

勇気を出して挨拶してみたら、声が裏返ってしまった。ああ、何こいつ気持ち悪い、とか思われたらどうしよう。自害ものだ……

そんな気持ち悪い僕の挨拶を受けて、彼女は本に向けていた顔をゆっくりと上げる。

艶々とした長い黒髪がサラリと流れ、少しキツめの大きな瞳がこちらに向いた瞬間

黒い太陽の眼差しが僕を貫いた。

……え？何これ何これ。

ゆらり、と立ち上がった彼女は、僕をねっとりとした目付きで見ている。

ヤバイ。

喰われる

エマーゼンシー！エマーゼンシー！

あれは捕食者の目です！僕を捕食対象として認識したようです！

僕は力の限り逃げた。動物的本能がアレは危険だと告げている。

アレは野を越え、山を越え、地獄の果てまでも喰らい付いてきそうなアレだ。

僕は結構足が速いはずなのに、彼女はピッタリついて来る。いや、むしろ徐々に距離を縮められているじゃないか。何その無表情。僕がこんなに汗水垂らしてヒヒハ息を乱しているというのに、何その無表情。本気で恐ろしい。

死にもものぐるいで廊下を走り、窓を跨いで陸上部に混じりグラウンドを十周ほど走って、体育館の裏に回った。

そして、外界へ逃げる為にフェンスをよじ登っている時、ついに、僕は彼女の手に乗まえられた。

「うわわわ！」

制服の後ろを掴まれて、僕は背中から落ちてしまった。ぎゅっと

目を瞑つて来るべき衝撃に備えていたけど、ふわっ、とした感覚がただけで、僕の背中には痛まない。

おそろおそろ目を開けてみると、なんと、彼女は華奢な身体で僕をガツシリと支えているではないか。何これ、華奢な女の子に支えて貰っているとか、僕男としてどうなの？いや、そもそも何その怪力。

「あ…ありがと…う？」

彼女に引つ張られたせいで落ちたのだから疑問系になつてしまった。彼女の手の力が緩んだので、首を捻らせて背後にいる彼女を見る。

その、僕の好きだった黒い太陽のような瞳が、僕の瞳を覗きこんだ時、彼女はペコちゃんにどことなく似た花が咲いたような微笑みで、僕に言った。

「やっと、見つけてくれた」

ああ、君はずっと側にいたんだね。

僕が君に気付くのをどれだけの時間を、どんな気持ちで待っていたんだろう。

僕はもう、どこにでもいる平凡な顔をしていて、皆が憧れる容姿をしていないし。

なんの力も持たない平凡な男子で。

君に到底釣り合うような男じゃないけれど、でも

もう一度、君に恋をしたいと思いますか？

最終プレイ『もう一度』（後書き）

ここまで読んで下さった皆様、お疲れ様でした。そしてありがとうございます。ございました。

いやはや、まさかこんな乙女チックな終わり方をするなんて連載開始直後は考えていませんでした。

ただ、『恋人（右手）と愛人（左手）』が僕を取り合って、結果三人で乱れた行為をするというお気に入り妄想ジョニープレイができないじゃないか』という下ネタが書きたくて勢いだけで始めた『僕、バナナで転生』ですが、そもそも転生ではなかったという、なんとも読者の皆様にゴミを投げられてしまいそうなラストで大変申し訳ございません（；；、）

このような拙作ですが、それでもお気に入り登録をして下さった方、感想を下さった方、あまつさえポイントを入れて下さった方々のおかげで最後まで書き終える事ができました。

本当に、本当にありがとうございますm（　）m

後、あまけみたいなのをちよろつと書こうと思っておりますが、本編はここで終了です。

皆様、ここまで読んで頂きありがとうございます（、、*）

おまけバナナ1

僕の名前は仲良金魚^{なかよしきんぎょ}。高身長の細マッチョというスタイルだけが自慢の、顔も頭も運動神経も中の中のいたって普通の男子高校生だ。そんな普通な僕だけど、僕の彼女はともよくできている女の子。

彼女 不二峰子^{ふじほし}は、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群というスーパー彼女である。学校のみならず、こちら辺一体にファンクラブがあるらしい。

そんなスーパー彼女だが、唯一性格に少々難がある。

「どうしたのキンギョ?」

「どうもこうも無いよ、このストーカーが」

今、僕は憧れの『彼女の部屋にご招待』というイベントに心躍らせていたのを後悔している。何故なら

部屋中の壁という壁に僕の写真が貼られていて、彼女の手作りだろうと思われる僕人形が大小に渡って幾つも並べられ、拳げ句にどこから入手してきたのか不明な僕グッズが棚に綺麗に並べられているという、立派なストーカーの部屋だった。

……あ。あれ、小学生の時に失くなったと思っていたりコーダーじゃないか。イジメだと思って枕を涙で濡らしていたのが懐かしい。今日は別の意味で枕を濡らしそうだ。

ふう。落ち着け僕。こんなの魔法世界で慣れていたはずじゃないか……

「ストーカーじゃない。私はキンギョを見守っていたただけだ」

「ストーカーって自覚がないってよく言うよね。」

むっとしている彼女に気づかれないうちに小さくため息をつきつつ、僕は気を取り直して『彼女の子供の頃を見て和む』というイベントをこなす為（幼なじみだから知ってはいるが）、本棚にあったアルバムを開いてみた。

「うわー、ホウコちゃん可愛いなー。」

「なんて言えるか!!！」

恐怖で思わず床に投げつけてしまった。

アルバムには、三歳くらいの僕、小学生時代の僕、中学生時代の僕、僕、僕、僕…… 勿論視線はレンズの方を向いていない明らかに隠し撮り写真だ。僕の知らない所ですつと見張られていたのかと思うとゾツとした。

「『ワピコ』の時ならともかく……こんな平凡な顔見て何が楽しいの?」

「むしろ今の方が私は好きだけだな。愛嬌があるというか、愛着心が湧くというか」

美人は三日で飽きるけど、ブサイクは三日で慣れるというアレです。ね。分かります。

「……片付けなさい」

何を? って感じで可愛らしく首を傾げるので僕の心はグラついてしまったけど、さすがにこれは譲れない。

「壁に貼ってある写真全部はがして、僕グッズは全て没収する!」

んな360度自分に見られているような部屋で落ち着けるか!」

世界の終わりのような顔をしているホウコちゃん。無表情ながらも顔を青ざめてプルプル震えている。同情はしないぞ! 僕 of 精神衛生環境を良くする事の方が最優先事項だ!

彼女の動向を探っていると、しばらくプルプルしていた後に、ポロツ、と大粒の涙をこぼした。

え……ええー!? なんで、なんでー!?

「キングヨが生まれた時から……側にいたかっただけなのに……! たとえ私に気づかなくても……せめて……見守るくらいはしていたくて……せつかく……創世神に、頼んでっ、そういう事ができるようにっ、転生させて貰ったのに……っ!」

本当に彼女はあのポコ君だろうか? 前のポコ君なら、何も言わずに存在が消えそうになるまで弱っても我慢していたというのに。

そんな彼女のポロポロと涙を流す姿に戸惑って、女の子に泣かれた事の無い僕は更に混乱して、つつい叫んでしまう。

「ちよっ……! な、泣かないでホウコちゃん! 分かった! 分かったから! もう片付けるなんて言わないからー!」

「……本当に?」

「ウ、ウン! 本当だよ!」

「……これからも、写真撮ったり、キングヨグッズ集めたりしていい?」

「イイヨ!」

彼女がニヤッと笑った気がした。

……なんと。彼女は女の武器を使って僕を操ったのか。すっかり『女』として馴染んでいる彼女を、尊敬と畏怖の念を込めてじっとり見てみる。

しかし、そんな僕の視線なんて知った風ではない彼女は、嬉しそうに僕に抱きついてきた。

「キングヨ、大好き」

そう言っただけのように微笑んだ彼女に、僕は何も言えなくなった。……くそう、可愛いじゃないかこんちくしょうめ。

きつと、これからもこんな風に彼女に振り回されるのだろう。

それも悪くないかな、と思っただけだった僕は真性のマゾだと思っ

それでも、彼女の幸せそうな顔を見て、僕も幸せな気分になってしまったんだ。

おまけバナナ2

僕の名前は仲良金魚。体型だけが自慢の平々凡々な男子校生だ。

そんな僕の彼女、不二峰子ちゃんは、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、ファンクラブまで存在しているスーパー彼女。

そんな学園ラブコメでよく見るカップリングを成立してしまった僕達。

学園ラブコメ的にファンクラブとかから嫌がらせされるのかなー、嫌だなー、なんて思っていた僕に待ち構えていたのは、嫌がらせの方がまだマシだったかもと思える展開だった。

「…！キンギョ！」

僕を確認すると、途端にこびりついてくるお人形さんのような小さい女の子。

「……………美冬…離れる…」

「やだ…ホウコ、嫌い…」

お人形さんに対して苛立たしげな感情を隠そうともしないホウコちゃん。

軽くデジャヴを感じる展開……………それもそのはず、僕にこびりついているお人形さん、美冬ちゃんは、魔法世界で魔神になってしまったミフィちゃん、なんと彼女もこちらの世界に転生させて貰っていたのだ。

最近、独占欲を發揮しているホウコちゃんは、美冬ちゃんであるうと僕にベタベタするのが気にくわないらしい。だがしかし、それ

だけならまだいい。

「キングヨおはよ〜」

「ねえねえキングヨ君、こっち来て〜」

「キングヨ！今日どっか行かない？二人で」

こちらの世界に帰ってきてから僕はモテモテです。

魔法世界にて、つついフラグを立ててしまうクセが抜けず、美少女転校生と最初険悪なムードになった後にイイ所見せて見直させてみたり、勝ち気な風紀委員長に追いかけて回されたり、ホウコちゃんに勝手なライバル心を燃やしている小悪魔系を懐柔してみたり…等々。

うほっハーレムじゃん。

なんて、浮かれてはいけない。

僕の彼女はホウコちゃん。そして、ホウコちゃんの前世はポコ君だ。

あの、ポコ君だ。

僕に迫りくる男をアイアンクローのみで気絶させたり、自分の養父さえも血祭りに上げた、あの、ポコ君なのだ。

今回は女の子相手なので、肉体的な攻撃は軽くしかしていない。

（軽くはしている）

だが、ホウコちゃんの家は世界有数のお金持ちらしく、権力を駆使して社会的に脅してみたり、弱みを握って脅してみたりと、なんとも陰湿な攻撃をしているのだ。

それでも負けじと寄って来る肉食系女子達。そんな彼女達に脅しを実行しようとするホウコちゃん。それを泣きながら止める僕。

僕の心労ゲージはとくに破壊されていて、今では胃薬が主食になっている。

「キンギョ〜私今日おニユーの下着なんだ〜ねえ見た…うつ！」

懲りもせず寄って来た小悪魔系の鳩尾に、ホウコちゃんの拳が食い込んで気絶する小悪魔系。

「悪鬼成敗」

拳を天に掲げ、勝利に浸るホウコちゃんに、ぱちぱちとやる気なさげに拍手する美冬ちゃん。

今日は軽く肉体的攻撃ですね。お願いですから、穏便にすませて下さいよ。

そんなこんなで今日も僕の胃が破壊されていくのだった。

「帰れバナナ野郎」

「おやおや、つれない人ですね」

我が家のリビングで我が物顔で居座るバナナ野郎。母さんもイケメンにデレデレしながらバナナジュース作ってんじゃないよ。

この世界に帰って来てから三ヶ月。三日と開けずに神様がやって来る。もう会わないんじゃないのかと小一時間問いつめたい。

「…これ、キンギョの子供の頃の写真？」

僕にこびりついていた美冬ちゃんが離れて、神様が見ていたアルバムを興味津々に覗いた。

「私も見たい」

いやいやホウコちゃん、君はわざわざ見なくとも毎日家で見てるだろう。

それでも、嬉しそうな顔をする彼女を見て、僕まで嬉しくなってくるんだから僕も重症だ。

皆も楽しそうにしている事だし、僕も空気を読んで混じるとするか。

「…キングヨ、変な顔」

何て事を美冬ちゃん。この僕の芸術的なまでの青っぱなの垂らし方はまさに奇跡じゃないか。

「いやいや、キングヨ君とホウコさんは本当に仲が良いですねえ」

「キングヨの側には私。それが世界の真理だからな」

んん？一体何の話を……

……ん？んんん？？？

よく見れば、こっちも、そっちも、小さくはあるけど、ホウコちゃんが見てる？しかもカメラ目線だし。

うわ！家族旅行の時の写真にまで写ってる！カメラ目線で！

「ホウコちゃんのストーカー加減にはホント戦慄するよ」

「そんな…！？私は、ただ、キングヨとの思い出が欲しかっただけなのに…！」

「そんな風に泣いたってもう騙されないぞ！」

「キングヨ君、泣いている女性にそのような暴言は男性としてあるまじき行為ですよ」

「…ホウコ…可哀想…」

話を面倒臭くするんじゃないよバナナ野郎！美冬ちゃんまで乗るんじゃないません！ほら、皆がホウコちゃんの味方になってるからホウコちゃん満足げな顔してるじゃないか！全然悲しんでませんよー！？

「キングヨ、例え世界中の人間がキングヨの敵になろうとも、私だけはキングヨの味方だからな」

「ホウコちゃんが追い込んだクセにドヤ顔するな…！」

そんな学園ドタバタラブコメを繰り広げながら、今日も僕の一日は終わっていく。

騒がしいし、胃薬が手放せないし、落ち着かない日々ではあるけれど、僕は皆が笑っているこの日常を気に入っている。

そんな騒がしくはあるけど心満たされる日々が、ずっと続いて欲しいと、そう願ってしまうのだった。

「善処しましょう」

お前に頼んでねーよバナナ野郎！

おまけバナナ2 (後書き)

これで本当に終了です。

ここまでお付き合い下さった皆様ありがとうございました。

またどこかでお会いできれば嬉しいです)*、(、)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1781s/>

僕、バナナで転生

2011年7月14日09時47分発行